令和６年度　教育研究助成事業
（学校対象）

研究・実践成果報告集13

1　学校課題研究助成
2　環境教育支援
3　国際理解教育支援
4　キャリア教育支援
5　防災教育支援
6　ICT 活用教育支援

2025年（令和７年）３月

公益財団法人 日本教育公務員弘済会埼玉支部

令和６年度　教育研究助成事業
（学校対象）

研究・実践成果報告集13

1　学校課題研究助成
2　環境教育支援
3　国際理解教育支援
4　キャリア教育支援
5　防災教育支援
6　ICT 活用教育支援

2025年（令和７年）３月

公益財団法人 日本教育公務員弘済会埼玉支部

「柔軟な教育課程の在り方」についての諮問に接して

公益財団法人 日本教育公務員弘済会 埼玉支部
支部長　細　田　宏

令和６年12月25日、次期学習指導要領の改訂に向けての諮問が中央教育審議会へされました。その検討課題の一つに、生成ＡＩなどのデジタル技術が急速に発達する一方で、不登校の子どもたちが増え続ける現状において、未来を担う子どもたちの教育が画一的とならない「柔軟な教育課程の在り方」がありました。

諮問の中では、複雑で予測が困難な時代の中でも、子どもたち一人ひとりが変化に主体的に向き合い、多様な他者と協働しながらよりよい社会と幸福な人生を切り拓き、未来の創り手となるための力の育成が求められていました。そのために具体的に、授業時間の短縮などの工夫や子どもたちの理解度に応じた授業の実現などが想定されていました。

現行の学習指導要領では、小学校５・６年生で英語を正式な教科としたほか、主体的に学ぶ力を育てる「アクティブ・ラーニング」という学習方法が新たに取り入れられていますが、変化の激しい時代を生き抜くため、引き続き、こうした能力を育む必要があるとの考え方によるものと思われます。

一方、今年度も学校現場では After コロナの視点に加えて、様々な感染症等に対応した教育活動を展開することが求められました。そして、現在もまだまだ気を抜くことなく生命と健康を守る取組等を第一優先にすることが続いています。

このような中、当支部が各学校の教育研究や実践を支援しています教育研究助成事業においては、一昨年度に新設しました「学校課題研究助成」事業に今年度も多くの学校から申請をいただきました。各学校ではこれまで本県で蓄積された素晴らしい研究・実践の成果について学び合い、自校の課題等に応じた教育実践に作り替えてともに高め合おうとしている姿勢が伺えます。このことは当支部が相互扶助の精神に基づく「安心・安全・助け合い」の輪を広げてきたことと軌を一にするとともに、まさに「各学校の主体的・対話的で深い学び」が実現したものと考えます。

本報告集には、この「学校課題研究助成」をはじめ、「環境教育」、「国際理解教育」、「キャリア教育」、「防災教育」及び「ICT 活用教育」の６つの分野における優れた研究・実践の成果を、小・中・高・特別支援学校すべての学校種から81編を掲載いたしました。これらは学校ごとに研究の主題、ねらい、取組内容とその成果、今後の課題・まとめ等で構成されていますので、各学校が同様の研究に取り組む際に、他校の実践を基にして、さらに進んだ段階から教育実践に入り易くできるものと考えます。

結びに、「最終受益者は子どもたち」の理念のもと、本県教育の振興に寄与することを目的として様々な事業を展開し、来年９月には創立70周年を迎える当支部としては、本報告集が既刊の「報告集１～12」とともに、各学校で一層活用され、より多くの教育実践に役立つよう願っています。

令和６年度　教育研究助成事業
（学 校 対 象）
助成学校数等一覧

助　成　分　野	学　校　種　別	校　数
１．学校課題研究助成	小学校	647
	中学校	326
	高等学校・特別支援学校・幼稚園	66
	計	1,039
２．環境教育支援	小学校	322
	中学校	113
	高等学校・特別支援学校・幼稚園等	23
	計	458
３．国際理解教育支援	小学校	32
	中学校	17
	高等学校・特別支援学校	20
	計	69
４．キャリア教育支援	小学校	35
	中学校	72
	高等学校・特別支援学校・幼稚園	24
	計	131
５．防災教育支援	小学校	79
	中学校	52
	高等学校・特別支援学校・幼稚園	3
	計	134
６．ICT 活用教育支援	小学校	198
	中学校	107
	高等学校・特別支援学校・幼稚園	17
	計	322
合　計		2,153

目　　次

「柔軟な教育課程の在り方」についての諮問に接して

公益財団法人　日本教育公務員弘済会埼玉支部　支部長　細　田　　宏…… 1

令和６年度　教育研究助成事業（学校対象）助成学校数等一覧…… 2

１　学校課題研究助成…… 5

２　環境教育支援…… 63

３　国際理解教育支援…… 97

４　キャリア教育支援……115

５　防災教育支援……143

６　ICT 活用教育支援　……161

令和６年度　教育研究助成事業（学校対象）募集要項……179

後記

1　学校課題研究助成

小学校

1　児童の資質・能力を伸ばす「協働的な学び」の研究
　～自ら考える子、協働的に学び合う子の育成～……さいたま市立北浦和小学校…… 6
2　Well-being を実感する児童の育成～非認知能力の向上～ ……さいたま市立指扇小学校…… 8
3　知徳体の調和のとれた児童の育成
　～教科担任制による指導・支援がもたらす、誰一人取り残さない教育の実現～……川口市立朝日東小学校……10
4　対話的に学び合う児童の育成～児童も教師も楽しい道徳教育を目指して～……北本市立西小学校……12
5　持続可能な未来をつくる SDGs の実現に向けた教育実践
　～2030年への挑戦　自ら考え、主体的に行動を起こす今っ子の育成～ ……上尾市立今泉小学校……14
6　メンタルヘルスリテラシー研究～豊かな人間性を育む学校づくり～……川越市立霞ケ関小学校……16
7　山と川に囲まれた小さな学校のしなやかな挑戦
　～地域・保護者・学校による PR 活動～……飯能市立名栗小学校……18
8　地域コミュニティの中心となる学校づくり
　～義務教育学校開校1年目の取り組みを通して～ …… 日高市立高根小中学校（前期課程）……20
9　主体的・対話的な学びを通して、考え、深め合い、実践する子の育成
　～全教育活動を通した非認知能力を伸ばす指導～……行田市立太田小学校……22
10「問題を発見し、解決できる」を目指し、主体的に学び続けるみなみっ子の育成
　～複線型の学習を基盤として～……久喜市立栗橋南小学校……24
11　主体的にコミュニケーションを図り、仲間とともに学びを深めようとする児童の育成
　～伝え合い、受け止め合う活動を通して、次の学びにつなげる授業の創造（国語科を軸に）～……宮代町立須賀小学校……26

中学校

1　生徒の『エージェンシー』を育む教育の研究
　～主体的に「自助」「共助」でき、地域の中心となって活躍できる生徒の育成～ ……さいたま市立川通中学校……28
2　探求と協同の学びの創造～デザイン→実践→リフレクションへの授業改善～……川口市立北中学校……30
3　探求と協働の学びへ～学びの質の向上をめざして～……新座市立第三中学校……32
4　地域と共に育む城南プライド～城南地区に愛着と誇りを持たせるボランティア活動の推進～……川越市立城南中学校……34
5　互いの個性や多様性を認め合い、希望をもってよりよく生きようとする生徒の育成
　～「考え、議論する道徳」の実践を通して～……ふじみ野市立葦原中学校……36
6　学び合う集団の育成～地域を支え、地域に貢献する次世代の育成～……皆野町立皆野中学校……38
7　一人一人を大切にした人権教育の推進について
　～様々な人権問題を正しく理解し、差別をなくしていこうとする実践的態度を育てる～……深谷市立明戸中学校……40
8　多様な学びを通して、自己の生活に生かせる資質と能力の育成
　～書くことで考えを整理し、伝え合うことで学びを深める教育実践を通して～……越谷市立南中学校……42
9　学力・体力の向上と豊かな心を育成する小中一貫教育の推進
　～「特別の教科道徳」の「深める」授業展開と実践～……八潮市立八條中学校……44

高等学校

1　高校生の盆栽体験～地元が世界に誇る日本文化の良さや美しさを体感し、伝えよう～……埼玉県立浦和北高等学校……46
2　福祉支援に向けた課題解決における取り組み～ ALS 患者向けコールスイッチの開発～ ……埼玉県立大宮工業高等学校……48
3　小学校と高等学校の異校種間の交流～交通安全を祈願した「無事カエル」から広がる輪～……埼玉県立新座柳瀬高等学校……50
4　地域に愛されるコア・サイエンス・ハイスクールの構築 ……埼玉県立坂戸高等学校……52
5　GPS 計測システムの開発
　～手作り車両の走行データをクラウドを利用してリアルタイムで取得する～……埼玉県立秩父農工科学高等学校……54
6　地元マスメディアでの生徒による学校の魅力発信及び広報活動 ……埼玉県立小鹿野高等学校……56
7　地域と連携した教育活動の確保・充実
　～生徒・教員数減を地域の支援とともに乗り越えることを目指して～……埼玉県立皆野高等学校……58

特別支援学校

1　自立活動の学びをつなげる環境づくり～校内教材の充実と共有システムの整備～……埼玉県立春日部特別支援学校……60

児童の資質・能力を伸ばす「協働的な学び」の研究
～自ら考える子、協働的に学び合う子の育成～

さいたま市立北浦和小学校
校長　永　井　有　司

１　はじめに

本校は昭和22年に開校し、本年度で創立78年を迎える学校である。「進んで学び　高め合う　北小の子」を学校教育目標、「伝統と創造、日本の若い力を育てる学校」を目指す学校像として教育活動を進めてきた。さいたま市浦和区のほぼ中心、京浜東北線北浦和駅の東側に位置し児童数は年々増加しており、今年度は児童数829名、学級数28でスタートした。

終戦後間もなく開校した本校の校章にはハトがあしらわれている。これには、平和な時代を築いて行こう、そのための人材を育てていこうという願いが込められており、教職員一同が新たな時代の創り手となる『日本の若い力』を育むために日々尽力しているところである。

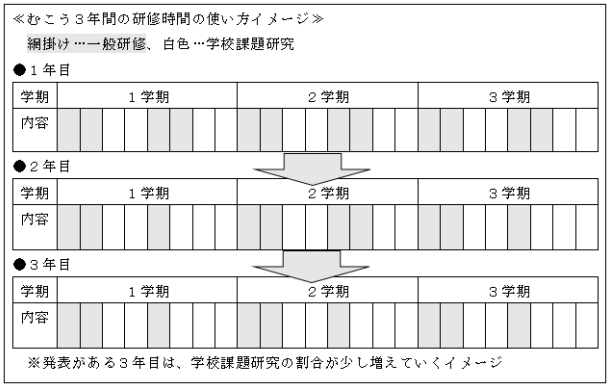
２　研究主題設定理由

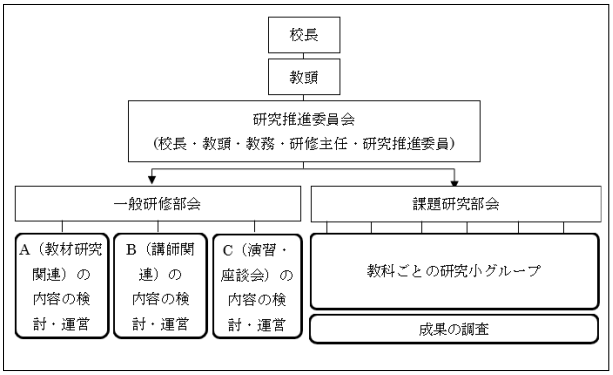
本校の児童は、全体的に学力（知識・技能）が高い。その一方で、学習に取り組む姿勢は「勉強を習う」こと、つまり受動的かつ個人で完結している傾向が見られる。このことは学校評価の児童アンケート「自分の意見や考えを説明したり書いたりすることが好き。」「他の見方や違う考え方はないかと考えるようにしている。」など協働的、発展的な学びに関する項目の肯定的回答が６～７割にとどまっていることにも表れている。

そこで、ＶＵＣＡ時代を力強く生き抜くために、習ったことをアウトプットする能力だけでなく、主体的、探究的、創造的な学びの姿勢が必要だと考えたことに加え、高い個の資質・能力が協働的な学びにより相乗効果を発揮し、発展的に高まることを期待して本研究題目を設定した。

３　研修計画と研修組織

本校の研修は「学校課題研究」に加え、教職員が強く必要と感じている内容について学ぶ「一般研修」を組み合わせている。３年後の研究発表に向けた「学校課題研究」と「一般研修」の割合と研究組織は次の通りである。





４　研究内容

（１）１年目の実践計画

①教科及び活動等を限定せず、どの教師も取り組むことができる広い研究テーマのもとスタートする。

②そのテーマに基づき、どの教科を軸に研究するか、各教師が選択し、教科ごとの小グループを作る。

③テーマに精通した講師の招聘や関連書籍から最新の知識を得る。

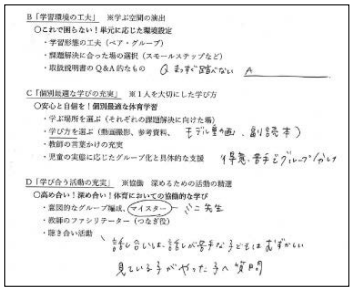
④講話内容及び書籍等をもとに研究推進委員会が、教科横断的な観点から有用な手立てを立案する。

※立案した手立てと選択した教科との親和性が低く、実践が難しい場合もある。そこで、５～６個程度の手立てを決め、小グループごとに取り組む手立てを２～３個に絞る等の方法が考えられる。または、小グループごとに手立てを決めてもよい。

⑤講話内容及び書籍等から得たものや手立てを基に、小グループごとに１年間の計画を立てて研究活動と実践を行う。（教材研究・手立ての具体案・協議・

授業への活用・指導案検討・研究授業等の実践・振り返り等）

※手立ての検証方法については研究授業等に限定しないが、成果と課題の取りまとめは必ず行い小グループの成果をクラウド上に蓄積、共有する。


B「学習環境の工夫」　※学ぶ空間の演出
○これで困らない！単元に応じた環境設定
・学習形態の工夫（ペア・グループ）
・課題解決に合った場の選択（スモールステップなど）
・環境説明書のQ&A的なもの　Q　A
C「個別最適な学びの充実」　※１人を大切にした学び方
○安心と自信を！個別最適な体育学習
・学ぶ場所を選ぶ（それぞれの課題解決に向けた場）
・学び方を選ぶ（動画撮影、参考資料、　）
・教師の言葉かけの充実
・児童の実態に応じたグループ化と具体的な支援
D「学び合う活動の充実」　※協働　深めるための活動の精選
○高め合い！深め合い！体育において の協働的な学び
・意図的なグループ編成（マイスター）　先生
・教師のファシリテーター（つなぎ役）
・聞き合い活動

⑥学期末や年度末のタイミングで実践内容を報告し、改めて全体共有を図る。

⑦年度が替わるときに再度教科を選択し、改めて小グループを作成。

（２）立案された手立て

※ICT 活用は大前提のため記載しない

①「カリキュラムデザインの工夫」
- 単元計画　（一斉、個別、協働）（課題設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現）
- 単元内自由進度学習
- 最適解を求める課題の設定
- 教科等横断的な学習

②「学習環境の工夫」
- 学習形態の工夫
（一人で、ペアで、グループで、先生と）
- 学習中の思考を活性化する教室掲示物
- 自己調整を促す掲示物
- 机配置の工夫　教室内の構成の工夫
- 学習の場の選択

③「個別最適な学びの充実」
- 豊富な選択肢の提示
（参考資料、思考ツール、視点、ペース、場所）
- 学びに必要な情報の開示
（学習時間、参考資料、習得目標）
- 自己調整の場面づくり
（振り返り、ルーブリックによる自己評価）
- 導入や振り返りの工夫
- 振り返りを元にした導入
- 個別最適な声掛け

④「学び合う活動の充実」
- 話合いや練り上げの工夫
- 多様なグループ活動やグループ構成
（助言の仕方や視点）

Topic: My summer

	1時間目	2時間目	3時間目	4時間
Goal	夏休みの思い出についていろいろな表現を駆使して、英語でたくさん質問をしてみよう！	夏休みの思い出について分かりやすく英語で話せるようになろう！	夏休みの思い出について、分かりやすく英語でまとめよう！	夏休みのについて すく英語 よう！
Good	How was your summer vacation?の質問を友だちに聞いたり、聞かれたことを英語で答えたりしている。	友だちのReally?やWhy?に対し、自分が行った場所や、やったことを英語で話している。	パワーポイントを使って、自分の夏休みの思い出を英語で伝えることができる。	夏休みの について 発表して
Nice	友だちの夏休みの思い出写真（もしくはイラスト）を	友だちの質問に対し、分かりやすく英語で答えてい	It was～、やI went toなどの表現を工夫して英	夏休みの について 分かりや

・異学年でグループ学習
・他者との関わり方を視点とした振り返り
・理解度別の関わり方（簡単すぎると感じる児童・難しくて問題に手が付けられない児童）

⑤「教材教具の開発」
- つまずきをフォローする教材選び、教具づくり、場の設定の検討
- モデル学習、ゴールイメージの共有や活用
- 地域資源、ゲストティーチャーの活用
- 思考ツールの活用
（ウェビングマップ、ベン図、座標軸）
- 情報収集や整理分析のためのコンテンツづくり
（ホワイトボードソフト、児童の成果物の共有化）

⑥「探究的な学びの充実」
- 単元の発展的内容の取扱い
- 探究的な課題の設定（思考錯誤が求められる課題、多様な価値観から捉える必要がある課題）

５　成果と課題（○成果　●課題）

○児童自ら話合いや共同入力シート（Ｅｘｃｅｌ）の使用を求めるようになってきた。

○個人が考えた解答や制作物について、提出前に他者と比較検討するなどしてより良い完成を目指す姿勢が見られるようになった。（協働的な学びの価値を実感し、主体的に実践するようになった。）

●教師主導の「どう教えるか（教え方）」から離れられない傾向が残っているので、学ぶ立場（児童）の視点に立った「どう学ぶか（学び方）」で授業をデザインできるようにしたい。

●児童が協働的な学びの価値に、教科等による差を感じているため、２年目は教科等に軽重をつけた研究を検討してみたい。

６　おわりに

本校の研修は、教師個人の主体的な取組姿勢を大切にしている。多忙な日々の業務の中、研修へのモチベーションを高く保つためには、研究主任だけでなく、経験豊富なベテラン教師や研究熱心な教師による支援が必要である。また、定期的かつ短いスパンで、教師自身が自己の成長をメタ認知することが、研修に対する意欲を向上させると考える。そこで、管理職や研究主任、先輩教師が他の教師の授業を参観し、肯定的な承認の声掛けを繰り返すことを大切にしていきたい。

Well-being を実感する児童の育成
～非認知能力の向上～

さいたま市立指扇小学校
校長　引　間　陽　子

１　はじめに

本校は、明治６年に、清河学校として清河寺に設置され、地域の教育の原点となり、今年で創立151年目を迎える伝統校である。西大宮地区の急速な発展の中でも、昔からの地域の温かさも色濃く残り、現在30学級、874名の児童が学んでいる。

学校教育目標は、「やり抜く子の育成～やさしく・かしこく・たくましく～」であり、目指す児童像として、「子どもたちの Well-being ～子どもたちがよりよい人生を歩むために～」とし、日々の教育活動にあたっている。

令和４年度には、市教委委嘱の「主体的・対話的で深い学び」等研究発表会を開催し、研究成果を学校外に発信した。そして、この研究での成果を、その後の授業実践に活かしながら、令和５年度には、「指扇プロジェクト2023」を掲げ、校内研究を推し進めた。これは、教育目標「やり抜く子の育成」の実現のため、総合的な学習の時間や各教科をカリキュラムマネジメントすることで、非認知能力を育成し、Well-being を児童が実感できるような取組を実践していくものである。本校では、この取組を発展させるため、市教委委嘱として３か年計画とし、自治的活動（話合い活動）の更なる充実を通して、非認知能力の育成及び認知能力（学力）の向上、また、取組によって児童の自己肯定感を上昇させ、児童の Well-being につながることをねらう研究に取り組むこととした。

２　研究主題設定理由

さいたま市「心と生活のアンケート」の結果や全国学力学習状況調査等の分析結果から、自己肯定感（自己信頼）の低さ等の課題が見られる。また、不登校傾向や登校渋りの児童、集団生活に上手に適応できない児童もおり、自己肯定感を高めながら、協調性、社会的スキルを身に付けさせることも課題である。

また、全国学力学習状況調査や市学力学習状況調査の正答率は市平均を下回っており、基礎的・基本的内容の習得にも課題が残る。

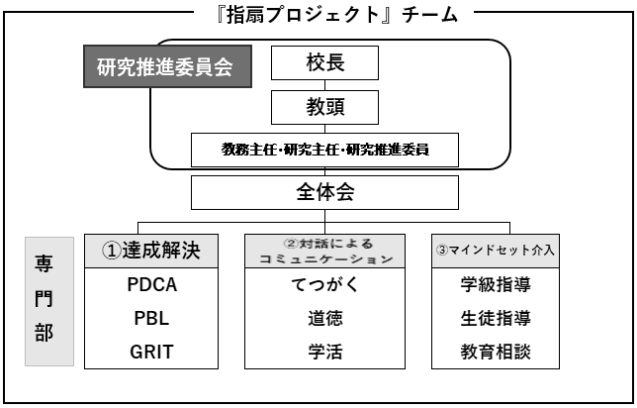
本研究の推進は、本校児童に係る課題解決の大きな糸口になると考え、本研究テーマを設定した。

３　研究仮説

本研究では、総合的な学習の時間及び教科横断的な取組を研究対象とし、以下のように研究仮説（目指す児童像）を設定して実践に取り組んだ。

＜ Well-being を実感する児童とは＞
○学校が楽しい、他者との関わりが楽しい、やればばできる
＜最近の教育動向＞
○認知能力を高めるためには、非認知能力が重要
＜育成する非認知能力とは＞
○自分と向き合う力
・忍耐力・自制心・回復力
○自分を高める力
・意欲好奇心・自信自尊感情・楽観性
○他者とつながる力
・共感性・協調性・社会性・コミュニケーション

４　研究内容（具体的な取組）



（1）各専門部の活動

研修を推進していくために、専門部を設置し役割を分担した。専門部は、「やり抜き部」「対話・コミュニケーション部」「マインドセット介入部」の３つで構成した。

①「やり抜き部」の活動及び手立て

・各教科ＰＤＣＡ、単元内自由進度学習の検討
・ＰＤＣＡの流れが分かる掲示物の検討・作成
・ＰＢＬ授業の検討
・課題の提示方法の工夫

②「対話・コミュニケーション部」の活動及び手立て

・人間関係を深める手立ての検討（さいころトーク班活動、今日のきらきらさん）
・聞く力を高める手立ての検討（テーマトーク、サイレントダイアローグ、対話的鑑賞）
・伝える力を高める手立ての検討（掲示物、辞書引きタイム、一行日記）
・自分の考えをもつための手立ての検討（てつがく、道徳、イメージクロッキー、マインドセットワーク）

③「マインドセット介入部」の活動及び手立て

・「７つの習慣」の検討
・リフレーミング、ハッピーチェンジの検討
・前向きワーク（朝の時間）の検討
・１日の振り返り（帰りの時間）の検討
・生徒指導、教育相談の仕方の検討

（2）授業研究会の開催

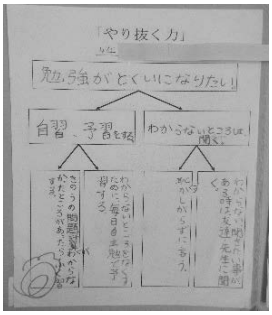
９月に「てつがく（総合的な学習の時間）」の授業研究会を開催した。「頭が良いって？」というテーマで４年生の授業を公開した。授業公開後は参観者による研究協議を行うとともに、外部から指導者を招聘して、授業展開の内容を中心に、効果的な指導や手立てについての共有化を図った。３学期にも外部の指導者を招聘した授業研究会を開催予定である。

（3）「総合的な学習の時間」の取組について

本校では、総合的な学習の時間の中で、「ＧＲＩＴ」及び「てつがく」を独自に計画して実践している。

①「ＧＲＩＴ（やり抜く力）」の取組

・児童全体が目標（夢）を決定し、中位目標や下位目標により具体的な方策を考え、目標に向かって日々やり抜く力を育んでいく取組である。また、グリットスケールを学期に１回実施し、変容を見るために、学年や学校の平均値を算出している。



	あてはまらない	あまりあてはまらない	すこしはあてはまる	かなりあてはまる	たくさんあてはまる
1、あたらしいものがでてくると、ついそちらに意をとられてしまう。	5	4	3	2	1
2、わたしはしっぱいしてもくじけない。かんたんにあきらめない。	1	2	3	4	5
3、もくひょう をつくっても、すぐにかえてしまうことがおおい。	5	4	3	2	1
4、わたしはがんばりや だ。	1	2	3	4	5
5、ながくやらないとじょうずにならないことに、ずっととりくむことができない。	5	4	3	2	1
6、いちどはじめたことは、かならずおわりまでやる。	1	2	3	4	5
7、すきなものがどんどんかわる。	5	4	3	2	1
8、わたしはねばりづよい。ぜったいにあきらめない。	1	2	3	4	5
9、なにかにわちゅうになっても、すぐにあきてしまうことがある。	5	4	3	2	1
10、しっぱいをのりこえ、せいこうさせたことがある。	1	2	3	4	5

②「てつがく」の授業について

・年間11時間計画し、先行実践等を参考にして独自に指導計画を作成している。本校では、てつがくの授業を「当たり前と思っていること」「答えのない問い」をテーマにして、他者との対話の中で「納得解」をもつことや「再定義」をすることと考えている。

（4）行動の記録（通知表）の評価視点の明確化

非認知能力の変容を評価する枠組や視点を再検討し、評価基準や児童の目標の明確化を目指し、継続的な指導に役立てていくこととした。各項目において「何が評価されているのか」を明らかにし、児童にもフィードバックすることで、児童、教師両面から非認知能力の意識化を図っていく。

５　成果と課題（○成果　●課題）

○専門部を含めた研究組織が構築され、各活動に対する共通理解と取組、また「てつがく」授業構成モデルを構築することができた。

●効果的な「てつがく」の時間の確保が難しく、短時間学習の時間等を含めた総合的な学習の時間の年間指導計画の再編成が必要である。

６　おわりに

研究委嘱３か年計画の１年目、主に研究組織の構築や取組内容の確認、授業モデルの検討を中心に研究に進めてきた。更に実践力を磨き、今後も教職員一丸となって研究を加速させていく所存である。

知徳体の調和のとれた児童の育成
～教科担任制による指導・支援がもたらす、誰一人取り残さない教育の実現～

川口市立朝日東小学校
校長　齊　藤　敦　史

１　はじめに

本校は川口市の南東部に位置し、校地東側に新芝川が流れている。隣接する東京都足立区から通学する児童もいる。開校56年目、各学年２学級、特別支援学級３学級の中小規模校である。学校教育目標「よく学ぶ子　心の豊かな子　じょうぶな子」、目指す学校像「子どもや職員が愛し、地域や保護者が誇りに思う学校」、目指す教師像「子どもに寄り添い、子どもを軸にして導く教師」の具現化に向け、教育活動を行っている。

本校の学区・地域は、学校・家庭・地域が連携して児童の健全育成を図ろうという気風が脈々と引き継がれており、「子は地域の宝」を合い言葉に、学校を核に、家庭・地域とも一枚岩となり、「ワンチーム」で朝東っ子の成長を支えている。

２　児童の実態及び研究主題設定の理由

本校は、明るく素直で元気な児童が多い。一方で、外国籍等文化の問題や家庭の事情等により、体験機会の乏しい児童が多く在籍しており、物事に消極的な面が見受けられ、学力も高い方ではない。加えて、教員も若年層が多く、過去コロナによる制限もあって、教科・行事共に指導経験が乏しい実態が見られた。

そこで、昨年度より試験的に教科担任制を導入し、担任以外にも多くの教員とふれあう機会を意図的に創出することで、児童一人一人が意欲的かつ安心して学校生活を送り、併せて、様々な教員と関わった経験による「心の成長」が図れることを願って、更には、教員の人財育成もねらいつつ、本研究題目を設定した。

３　研究仮説について

【仮説１】～確かな学力の向上～

『教科を絞った教材研究や、同範囲を精選しながら複数回授業を行うことで、指導する教師側の専門性が高まり、指導内容等の充実が図られ、結果として児童の学力が向上するであろう』

【仮説２】～生徒指導・教育相談の充実～

『担任以外の教師も学級に関わり、多くの視点で児童らを観察でき、気になる児童や要支援児童を早期発見、的確な支援を施すことで、児童一人一人に寄り添うことが可能となり、結果として児童が安心して過ごせる環境が整うであろう』

【仮説３】～教員の働き方改革・負担軽減～

『担当する教科領域を分担することで、教師一人当たりの持ち教科数を減らすことができ、負担軽減・働き方改革を実現し、その分、児童らと向き合う時間を確保できるであろう』

４　具体的な取組について

（１）理論を学び、実践に生かす

年間を通じて各界の第一人者を招聘し、教科担任制による効果や課題、教科担任制に資する**理論**や**手法**等を、教職員皆で学び合い、実践に繋げた。

月	研 修 名	講　師
4	生徒指導・いじめ×教科担任制	市教委指導主事
5	学力向上×教科担任制	大学教授
6	発達特性×教科担任制	市役所福祉職
6	愛着障害・虐待×教科担任制	病院長
8	教育相談・不登校×教科担任制	大学教授
8	特別支援教育×教科担任制	前教育センター主事
10	教育相談・児童理解×教科担任制	臨床心理士
2	研究１年目×教科担任制	大学教授

（２）教育課程を工夫する

これまで使用していた各学級の**時間割一覧表**を改め「教科担任制」仕様に変更した。これにより、○○教諭は、月曜日の１校時にどの学年学級で授業をしているのか一目で把握でき、空きの教員も分かる。

R6年度　各学級時間割一覧表　2学期　暫定v

	月曜日					火曜日					
年組／教員	1校時	2校時	3校時	4校時	5校時	1校時	2校時	3校時	4校時	5校時	6
A教諭	3－1国	3－2国		3－2総	3－1総	3－1国	3－2国	3－2図	3－2図	3－1図	3
B教諭	3－2算	3－1算	3－2社	3－1体	3－2体	3－2算	3－1算	3－1社	3－1道		3
C教諭	4－1算	4－2算	4－2社		4－1社	4－1算	4－2算	4－1総		4－1図	4
D教諭	4－2国		4－1国	4－2総		4－2国	4－1国	4－2体	4－1体	4－2総	4
算数専科	3-2(4-1)	3-1(4-2)				(3-2)4-1	(3-1)4-2				
E教諭	5－1総	5－1国	5－2国	6－1国	6－2国			5－2国	5－1国	6－1国	6
F教諭	5－2総	5－2体	6－1体	6－2体	5－1体	5－2家	5－2家			5－1家	5
G教諭	6－1総	6－1社	6－2社	5－1社	5－2社			6－2図	6－2図	6－2社	6
H教諭	6－2総	6－2算	5－1算	5－2算	6－1算	6－2算	6－1算	5－1算	5－2算		

また、各教員は複数の学年・学級の児童を指導することから、年間を通じて定期的に**児童理解を深める研修**を継続し、児童一人一人が抱える特性や置かれた環境等について、積極的に情報を交換・収集してきた。

（3）担任の肌感覚を改善の契機とする

教科担任制を進めていく中で、直接児童への指導・支援を行っているのは、他ならぬ本校の教員たちである。「実際やってみると…」「学年を越えてブロック内でやってみたら？」など、日々の研究実践から沸いた新たなアイディアは積極的に取り入れ、より良い教科担任制とするための改善の契機としてきた。

→高学年は、学年からブロックで分担する教科担任制へ
→低学年は、発達段階を踏まえ、学級担任制に戻す
→算数は、専科と共に習熟度別クラスでの実施が効果大
→教科担当が、教材発注、宿題、評価まで責任を持つ、等

５　成果と課題

【研究の成果】

（1）【仮説１】学力向上の視点より

学級担任が受け持つ教科を、道徳や特別活動の他に１～２つに絞り、残りを他学級の担任や専科教員が受け持つことで、以下のような成果が生まれた。

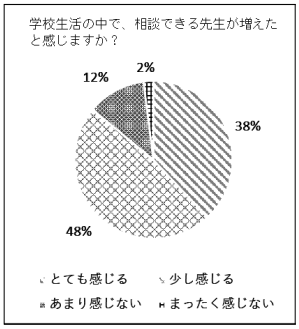
◎授業準備や教材研究の時間を十分にとり、同内容の授業を複数回行うことで、発問や展開、個別の支援に至るまで精選され、質の高い授業が実現できた。
◎個人差による理解の凹みを無くそうとする余裕も生まれ、一人一人に沿った支援が実現できた。
◎今年度の県学調において、教科担任制を実施した学年で、その半数以上が「高い学力の伸び」を示した。

（2）【仮説２】生徒指導・教育相談の視点より

児童にとって、学級担任と気が合うかどうかは、その年１年間の**意欲**を左右する大きなファクターである。そこで、教科担任制を展開し、様々な教員と接する機会を増やしたことで、**“その子にとって”**気の合う教員や相談できる教員が見つかり、ＳＯＳや気になる情報等がいち早く職員室に届くようになった。

加えて、個性豊かな本校児童への多面的な児童理解が促進され、問題が発生しても、その児童の特性に寄り添った丁寧な対応ができ、初期の段階で問題を解決・解消できる教育相談体制が一層整備される等、数多くの成果が生まれた。

◎担任以外の教員が、学級内の異変や児童のＳＯＳに気づくケースが多く見られた。→早期発見・即日対応、情報共有・行動連携
◎児童が、担任以外の教職員へ相談するケースが増加した。→相談先の増加・多様化が、学級の安定化に寄与
◎保護者から担任あての苦情・要望が減少した。



（3）【仮説３】教員の負担軽減の視点より

導入当初は、担任する学級を見れない不安や他の学級へ出向く負担等、職員の心理的負担感が増加傾向にあったが、進めていく中で徐々に慣れ、様々な工夫を施すことで、以下のような成果が生まれた。

◎持ち教科が限定されたことで、授業準備や教材研究が絞られ、更には空き時間も生まれる等、余裕を持って指導にあたることができた。
◎多くの教員の介入により、担任が自分の学級を一人で抱えることが無くなり、心理的安定が図られた。
→職員間の交流が活性化され、同僚性も高まった。
◎該当する教員の時間外在校時間が、月あたり約８時間縮減された（前年同月比）。

【ある日の６年１組】

【今後の課題】

実施から２年近くを経て、多くの成果が見られた一方、以下の課題も見えてきた。

△教科担任制用の時間割作成が難しい
△出張・休暇等による「補教」計画作成が難しい
△評価(通知表)作成に、これまで以上の時間を要する
△担当間での情報共有の時間が不足気味
△教員ごとに持ち時数に差が出てしまう、　等

しかし、これらの課題も、職員皆で力を合わせて工夫・努力を重ね、改善を図ることで、今後も、更に実施しやすく、全ての児童の「学びの質を保障する」教科担任制を検討し続けてまいりたい。

対話的に学び合う児童の育成
～児童も教師も楽しい道徳教育を目指して～

北本市立西小学校
校長　内　田　浩　子

１　はじめに

本校は、令和５・６年度、埼玉県教育委員会より「埼玉県道徳教育研究推進モデル校」の研究委嘱を受け、研究を推進してきた。令和６年11月22日、研究発表会を実施した。

（１）研究主題の設定理由

本校の児童は、話し合い活動を通して自分の考えを深め、広げることを苦手とする傾向にあるため、対話を重視した「考え、議論する道徳」の質的充実、教科等横断的な実践、学校・家庭・地域が総がかりで取り組む道徳教育を研究の柱とし、道徳科を要とした児童も教師も楽しい道徳教育の実現を目指し、本主題を設定した。

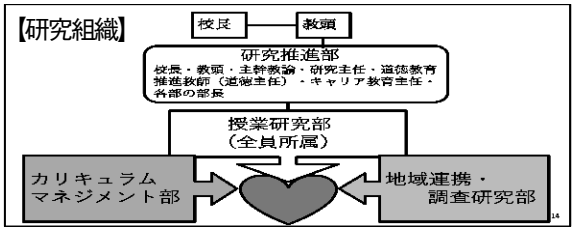
（２）研究の仮説

① 対話的に学び合う授業や他教科との関係を生かした授業を実践すれば、児童も教師も楽しいと感じる道徳教育を行うことができ、児童が道徳的価値について自分事として捉え、多面的・多角的に考えることができ、よりよい道徳性の育成につながるであろう。

② 家庭・地域社会との連携を生かした道徳教育を全教職員で推進すれば、地域総掛かりでの一貫した道徳教育を推進できるであろう。

（３）研究の手立て

研究推進委員会を中心に立案・推進した。授業研究部、カリキュラム・マネジメント部、地域連携・調査研究部を組織し、計画的に取り組んだ。



２　授業研究部の取組

（１）道徳教育用教材を活用した道徳教育の取組

「彩の国の道徳」や「彩の国の道徳　未来に生きる」の複数教材を年間指導計画に位置付け、研究授業を年２回以上実施

（２）全教職員による道徳教育への取組

① 全職員での教材吟味・校内授業研究会の実施

② 道徳科授業に関する理解と授業力の向上に向けた疑問点の共有・再協議

③ 道徳教育推進教師・道徳主任による「校内道徳ミニ講座」の開催

④ 参加型模擬授業形式による教材研究・授業の進め方に関する研修の実施

⑤ 教員対象「道徳だより」の発行（年11回）

⑥ 発達の段階に応じた道徳科授業に関するオリエンテーション資料の作成と活用

⑦ 相互授業参観やＩＣＴ機器を活用した板書の共有

（３）ねらいに迫るための工夫

① 授業づくりシートを活用した教材吟味

② 道徳科授業におけるティームティーチング

（４）特別支援学級における道徳科

① 聖徳大学名誉教授吉本恒幸氏による講義

【成果】○特別支援学級における道徳教育・道徳科に関する疑問点や悩みの解消
○通常学級に在籍する支援を要する児童への効果的な手立てへの理解

② 通常学級在籍の支援を要する児童への具体的な手立てを明記した指導案の作成

③ 全教職員での特別支援学級の教材研究・「おすすめの教材」のピックアップ

３　カリキュラム・マネジメント部の取組

（１）「重点目標別葉」の作成・練り直し

「重点目標」別葉　5年　R6

【「重点目標別葉　５年」の一部】

（2）「校内道徳啓発掲示物」増える掲示で見える化

① 重点目標の掲示

【西小の
大切にしたい
3つの心】

② 児童の実態や発達の段階に合わせた掲示

【○年生の
大切にしたい
3つの心】

③ 道徳教育を「見える化」した学年掲示の作成

【見つけた
大切なこと】

（3）道徳教育を意識した校長講話

「思いやりの心をもつ」をテーマにした弾き語りや講話等による道徳的価値の補充

（4）ゲストティーチャーの活用

① 活用する教材を指導計画に明記

② 動画の活用

③「夢と豊かな心をはぐくむ講演会事業」の実施

4 地域連携・調査研究部の取組

（1）全学級による道徳科授業の公開

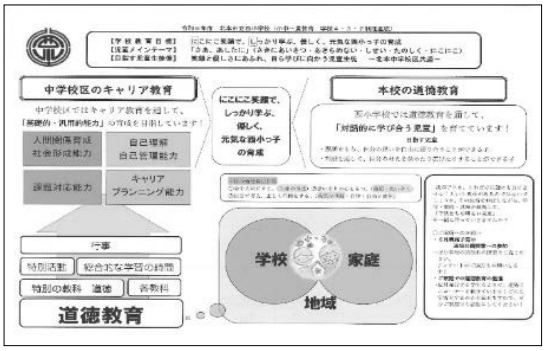
① 保護者への授業公開、感想の記入・活用

② 学校運営協議会委員への授業公開、感想の記入と活用

（2）家庭・地域への啓発

① 学年だよりに「道徳コーナー」の設置

② 道徳リーフレットの作成、懇談会等での配布



（3）各種調査の実施・考察

① 全校児童アンケート調査

「道徳の授業は楽しい」「道徳の授業は大切」について90％以上が肯定的に回答

②「規律ある態度」アンケート調査

多くの項目で、目標値80％以上を達成

③ hyper-QU 調査

ア ソーシャルスキルの配慮の尺度５項目において「いつもしている」と回答した児童が80％以上

イ「クラスは明るく楽しい感じがする」と回答した児童が80％

④ 教職員アンケート調査の結果

ア 道徳科の授業に自信がないという教員が多かったが、「道徳科の授業が楽しくなってきた。」「自分もやってみたいという気持ちが高まった。」と答える教員が増加

イ 各教科や日常生活と道徳科を関連付け発展・統合し、道徳性を養う指導を「よくしている」「している」と答えた教職員は、95.7％と向上

5 おわりに

（1）成果

① 対話的で深まりのある授業展開を通して、自分の考えを伝えられる児童が増えた。

② 道徳科の授業や教材吟味の進め方を全教職員で学び、ねらいに迫るための発問や構造的な板書など様々な手法について共通理解を深めたことで、教職員の意欲・指導力が向上した。

③ 支援を要する児童に対する道徳教育・道徳科について、全教職員の理解が深まった。

④ 保護者や地域と一体となった道徳教育の推進により保護者の意識に変容が見られた。

⑤「挨拶」「コミュニケーション」等で、児童の改善・変容が見られた。

（2）課題と今後の見通し

① 自分の考えや振り返りを上手く表現できない児童に対して個別の支援に力を入れていく。

② 道徳科について家で話題にすることが少ない児童に対して「学年だより」「ワークシート（保護者記入欄あり）」等を活用しながら、今後も保護者を巻き込む工夫を考え実践していく。

持続可能な未来をつくるＳＤＧｓの実現に向けた教育実践
～2030年への挑戦　自ら考え、主体的に行動を起こす今っ子の育成～

上尾市立今泉小学校
校長　小木曽　久美子

１　はじめに

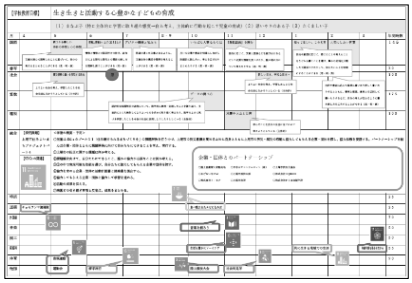
令和３年答申、教育課程部会における審議のまとめでは、探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要であると述べられている。

また、持続可能な社会の創り手になるためには、児童、教員、保護者・地域、近隣の企業・団体と連携した上で、SDGs の諸問題について「様々な課題を自分事として捉え、その解決に向けて自ら行動を起こす力を身に付けさせる教育」が推進される必要がある。本校は令和５年度から３年間、埼玉県 SDGs 教育推進事業のモデル校として研究を行っている。

研究主題『持続可能な未来をつくる SDGs の実現に向けた教育実践～2030年への挑戦　自ら考え、主体的に行動を起こす今っ子の育成～』に沿い、児童と保護者や地域、企業や団体との連携した取組を行い、児童の主体的な学びにつながる実践を行っている。本実践論文では、第６学年における総合的な学習の時間の防災に関する実践について紹介する。

２　実践内容

（１）生活科・総合的な学習の時間を核とした各教科領域との連携を明確にした年間単元配列表



【表１】〈年間単元配列表〉

総合的な学習の時間へ生かしたい他教科の資質・能力との関連を示した。

国語科「デジタル機器と私たち」は、提案文の構成を考え、実際に提案を行う単元である。総合的な学習の時間で児童が行いたい活動に協力をいただくため、提案文を作成し、企業や団体に直接プレゼンテーションの交渉を行う。承諾を得た企業や団体を相手に、国語の授業で作成した提案文を基にプレゼンテーションを行い、協力を依頼する。

【株式会社 NIJIBOX】
広告デザイン企業
配色や文字、デザインについて、指導・助言を依頼。

（２）教育人材の発掘・活用

①企業・団体との連携

児童は上尾市の防災意識向上のための課題と解決方法を考え、プロジェクトごとにチームで活動している。

ポスターチームは内閣府主催の防災ポスターコンクールに出展し、入賞以上を収めることで自分たちの思いやポスターの意図を伝えやすくなると考えた。児童は株式会社 NIJIBOX 様にアポイントメントを取り、実際に国語科で作成した提案文を活用して、プレゼンテーションを行った。その際、身の回りにある広告がどのように作られているか質問したり、実際に様々な企業の広告をデザインしている方々に自分たちの活動の意図を説明したりしながら、ポスターをデザインする際のポイント等を指導・助言いただけるよう、協力を依頼した。配色や字のバランスや意図を考えること、ポスターを見てもらいたい対象を決めることが重要であると教えていただいた。その指導・助言を生かした作品が以下の２点である。

【内閣府防災ポスターコンクール】
・近隣の施設や小中学校に掲示

②近隣小中学校、保護者や地域との連携

避難所運営に児童も関わるべきではないかと考えたチームの児童は、社会科で自衛隊が被災地で活躍している様子を学習したことで、陸上自衛隊大宮駐屯地の自衛隊の方々にアポイントメントをとり、実際の被災地の活動の様子や避難所の様子について講義を受けることができた。

また、実際に避難所運営の関わり方として、２年前に本校に設置されたマンホールトイレの設置方法を知っている人が校内で限りなく少ないことを知り、学校の様子を把握する６年生が設置することができれば、避難所開設・運営を行う際に割く人的リソースを他に回せるのではないかと考えた。上尾市上下水道課と上尾市防災士協会の協力を得て、マンホールトイレの設置方法を学んだ。その後、防災の輪を広げるためには、在校生や保護者、地域の方々に伝えていく必要があると気付き、保護者や地域の方々を招いて設置方法の伝達を行った。地域の防災意識の向上に貢献し、地域のつながりが大切であることに気付けた。

【陸上自衛隊大宮駐屯地】

・能登半島地震被災地の状況
・子供たちにできる避難所での活動
※防災白書に基づいた説明

【近隣中学校との連携】

昨年度の６年生からマンホールトイレの設置方法を詳しく聴くために、中学生を講師として招いた。

地域の自主防災組織や行政にも児童防災に関する活動が認知されたことで、上尾市と自主防災組織が本校の児童と合同で防災に関する訓練を開催し、地域の方々を招く計画を立てている。

（３）**児童教職員の実態調査と教育課程の評価改善**

①授業改善・教材開発

ア）教科等横断的な指導を行う上での視点を共有

イ）思考ツールを活用して、児童の思考を見える化

ウ）企業や団体との連携のデータベース化

②年間単元配列表の修正

ア）各学期に年間単元配列表の加筆修正

イ）学年ごとの取組をデータベース化

③児童、教員、保護者への意識調査

ア）児童への意識調査（年３回）

イ）教員の意識調査　（年２回）

ウ）保護者の意識調査（年１回）

３　実践における成果

（１）**上尾市学力調査における変容【学力向上の側面】**

上尾市学力調査	上尾市	全国	本校
文章を書く力	62.5%	69.1%	69.4%

生活科・総合的な学習の時間と国語を結び付けることで学習の関連に気付かせることができ、上尾市学力調査では、【文章を書く】すべての問題において、全国正答率が同等か上回った。これは、国語科の学習において、提案書づくりやインタビューなど、必要感や相手意識をもって学習に取り組むことができたことが要因と捉えている。

（２）**児童の主体的に学びに向かう姿勢を計る意識調査の変容**

年度	４月	２回目		変化
R5　6年生	79.8%	３月	90.6%	＋10.8ポイント
R6　6年生	79.7%	11月	92.5%	＋12.8%ポイント

５月に行った全国学力・学習状況調査における質問紙項目33番に基づいた意識調査を行い、その変容を調べたところ「授業では、課題解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいる」児童が増加。

（３）**外部からの評価**

①ぼうさい甲子園への参加

令和６年度小学校の部　優秀賞【全国２位】

②Ｒ６年防災ポスターコンクール　入賞

③毎日新聞社による記事掲載令和６年12月３日（火）朝刊

④NHK「明日を守るナビ」での取組紹介

総合的な学習の時間に取り組み、作成した成果物は、児童自らの意思で、それらが社会や地域でどのように評価されるかを知ったり、その後の活動に生かしたりするために積極的にコンクール等に参加したり、保護者や地域の方へ意見を求めたりした。

ぼうさい甲子園の全国２位という評価や、新聞記事に取組が紹介されたことをとおして、自身の取組の価値を理解し、更なる意欲向上につながった。また、ぼうさい甲子園の表彰式に参加することで、各地の優れた取組を知り、自分たちに足りない“地域との深い関わりをもつこと”と“取組を継続すること”という新しい課題を発見することができた。

メンタルヘルスリテラシー研究
～豊かな人間性を育む学校づくり～

川越市立霞ケ関小学校
校長　石　井　知　宏

１　はじめに

本校は、全校児童635名、学級数は24学級、５つの通級指導教室（難聴・言語障害、発達障害・情緒障害）を持つ大きな規模の学校である。明治36年に開校し122年目を迎えた地域の方々と伝統を継承し、共に歴史をつないできた学校である。霞ケ関地区の中心に位置し、校舎は市民センターとの複合施設となっており地域の拠点としてその役割を果たしてきた。

学校教育目標「心豊かでたくましい子の育成　かしこい子　すこやかな子　みりょくある子」の実現のために、目指す学校像を「人（児童、保護者、地域、教職員）を大切にし、笑顔あふれる学校」とし、教職員が一丸となり、日々の教育実践を大切にしながら教職員の資質向上に取り組んでいる。

本年度、メンタルヘルス研究推進校として埼玉県教育委員会から指定を受け、「学校におけるメンタルヘルスリテラシーの向上に向けた教育」を研究し、学校の課題解決に向けて具体的な実践を積み重ねている。

２　児童の実態について

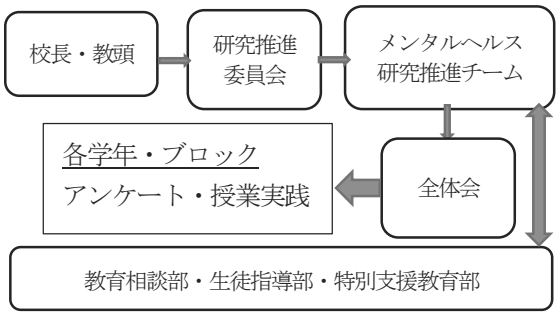
全国学調、県学調、入間地区学テ等の正答率において、国や県、市の平均を下回っており、基礎的・基本的な内容の習得が課題である。調査を見ると無答が多い傾向が見られ、考える力を育てるとともに学習意欲の醸成も課題である。

また、生徒指導上の配慮を要する児童も多く、問題行動の未然防止として児童の自己肯定感を高める取組を充実させることも課題である。

さらに、集団生活への不適応、愛着障害等など、多様な要因で不登校、登校渋りの児童が増加傾向にある。中には家庭環境に恵まれていない児童も少なくない。学校からの虐待通告も年々増えている現状がある。また、SNS における友人とのトラブルやゲーム依存における生活習慣の乱れから心身の不調を訴える児童も見られる。

以上のことから、児童の心身の不調の早期発見、早期対応はとても重要であり、本課題研究により、児童の笑顔があふれる学校づくりを進めていきたい。

３　研究組織について



※メンタルヘルス研究推進チームはメンタルヘルス対応養護教諭が中心となり企画・運営

４　具体的な取組

（１）メンタルヘルス対応養護教諭を含む、生徒指導部、教育相談部、特別支援教育部の連携による生徒指導・教育相談体制の整備

①小委員会の開催

管理職、関係部会主任、メンタルヘルス対応養護教諭が集まり情報交換、情報共有を行い児童の支援体制の確認や振り返りを実施し、方向性を検討する。

②定期的な生徒指導の全体共有

各学年からの要配慮児童の報告を週１回木曜日に実施し全体共有を行う。

③支援が必要な児童に係るケース会議の開催

小委員会で定まった方向性に従い、具体的な支援策を検討する。（関係機関も参加）

④個別支援体制の計画作成

特別支援教育コーディネーターが学習支援員や地域・学生ボランティアを計画的に活用しケース会議で検討した個々の支援を実施する。

⑤ SC、SSW、さわやか相談員への接続と連携

教育相談主任とメンタルヘルス対応養護教諭が児童及び保護者への適切な支援を行うために事案ごとに専門性のある職員につなぐ。

（２）メンタルヘルス研究推進チームによる児童に対する取組

①児童の健康相談や面談を実施

メンタルヘルス対応養護教諭と教育相談部で連携し、校内個別学習室（教室に入れない児童が学ぶ場）や保健室での児童の健康相談や面談を実施して心身の不調の早期発見、早期対応を行った。

②こころの健康アンケートの実施（全３回）

③メンタルヘルスリテラシ―授業の実施

メンタルヘルス対応養護教諭と高学年担任とで、学級活動の授業を通して心身不調時の対応について理解させ、具体的実践に結び付ける。

＜主な内容＞

・心の不調や病気は、思春期に増えること
・心の不調や病気は、誰にでも起きること
・心の不調や病気は、睡眠等の生活習慣が影響すること
・早めに相談することが大事であること

④「あのねタイム」「あのねポスト」実施

児童の心身不調の早期発見、早期対応のために教育相談部と連携して実施した。

（３）メンタルヘルス研究推進チームによる教職員に対する取組

①メンタルヘルス対応養護教諭による校内研修「メンタルヘルスリテラシーツールの活用」

県作成の DVD の視聴、心の不調の早期発見のための講話などを実施した。

★メンタルヘルスリテラシーツール★
・児童生徒向けメンタルヘルスリテラシー授業教材
・教職員用向け研修資料
・保護者向け啓発資料

②メンタルヘルスに視点を当てた夏季研修

SC を講師として児童心理、心身の不調時の対処法などを研修した。

③研修動画及び指導案検討

高学年担当とメンタルヘルス対応養護教諭が県教委作成の動画や指導案を確認し、授業実践を行った。

（４）メンタルヘルス研究推進チームによる保護者に対する取組

①県教委作成の啓発資料の配布

学校だよりや保健だより、啓発資料でメンタルヘルスリテラシ―の向上を啓発した。

②学校保健委員会による保護者・地域への発信

メンタルヘルス対応養護教諭と保健主事が連携し、メンタルヘルスに係る講演を立案、医師を講師として招き、小中合同委員会を実施。

③ SC、SSW、さわやか相談員への接続

教育相談主任とメンタルヘルス対応養護教諭が中心となり保護者と専門職をつなげ相談体制を整えた。

（５）中学校や関係機関との連携

①中学校の生徒指導部会に参加

管理職及びメンタルヘルス対応養護教諭（兼務発令）が参加し、情報交換及び研究の取組の共有、接続期にある児童の情報提供と支援を行った。

②関係機関を含めたケース会議の開催

生徒指導主任、教育相談主任、特別支援教育コーディネーター、メンタルヘルス対応養護教諭は各会議の構成員として具体的支援策等の協議をおこなった。

③心身不調の早期発見、早期対応にかかる連携強化

教育センター分室リベーラ、川越児童相談所、川越市こども家庭課等との連携強化のために情報共有の機会を多く設定した。

④さわやか相談員の来校

月に１回、中学校のさわやか相談員が来校し、主に高学年児童を対象に面談を行い、円滑な中学校への接続を期待している。

⑤教育委員会との連携

・生徒指導重点校･メンタルヘルス研究推進校連絡会議
・メンタルヘルス研究推進校　オンライン会議
・生徒指導重点校･メンタルヘルス研究推進校連絡会議
・児童生徒の自殺予防に関する普及啓発協議会
・こころの健康アンケートの報告

５　成果と課題

この取組を通して、児童の不登校や問題行動の際には一方的な見方でなく児童や保護者の話をよく聞くとともに、その背景について教職員同士で話し合う場面が増えている。その反面、時間の確保や教職員以外の話を聞ける大人の確保が必要である。

山と川に囲まれた小さな学校のしなやかな挑戦
～地域・保護者・学校によるＰＲ活動～

飯能市立名栗小学校
校長　松　尾　みのぶ

１　はじめに

名栗小学校は飯能市の山間部に位置する、全校児童36名の小さな学校である。山と川に囲まれて、豊かな自然に恵まれている。元から地元に住んでいる家庭、自然の中で伸び伸びと子どもを育てたいと移住してきた家庭、小規模特認校制度を利用して区域外から通学している家庭が混在している。教育に対する自身の価値観が多様で、学校に対する要望も様々なものがある。そのような中で、私たち教職員は、教育相談的な考えを大切にしながら、子どもや保護者の伴走者として教育活動に取り組んでいる。

また、ＰＴＡの活動が盛んで、学校へも大変協力的であり、地域と共に子どもを中心にした教育活動が展開できていることが本校の特徴である。

２　研究主題設定理由

令和３年度に学区内の中学校が廃校となり、本校は地域唯一の学校となった。地域の活性と教育活動の充実のため、移住者と小規模特認校制度を使った区域外からの転入者を増やしたいと考えている。

地域から学校が無くなることは、過疎化が進み、地域が衰退していくことを意味している。何より、『自分たちの学校』という想いを大切にしている名栗の方々は、学校の活性化を強く願っている。本年度は新入児童が１名であったが、「地域の宝のお祝いだ！」と多くの方が入学式に参列してくださった。

また、小規模特認校制度を利用して転入してくる児童の多くは、登校への不安などの課題を抱えていることが多い。小規模ならではのきめ細やかな関わりが、子ども達の心をそっと溶かしていくことを実感している。この緩やかな時間の流れと大自然を含めた地域の力が、本校の強みである。

一人一人が『あるがまま』でいられる学校を、多くの方に知っていただくことも私達が担う役割の一つであると受け止めている。そして、このＰＲ活動をきっかけに地域、保護者とともに学校を盛り上げていきたいと考えた。

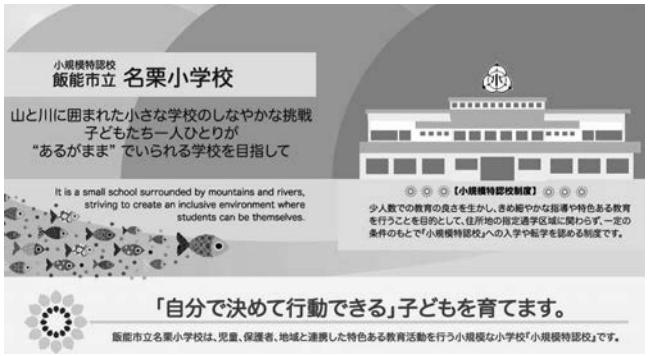
３　計画・予定

【４月～10月】

○地域：青少年健全育成の会による地域活性計画、名栗地区行政センターによる住居相談、ＰＴＡ自主制作ミュージカル動画参加者募集、報道依頼

○保護者：ＰＴＡウェブマガジンの充実、自主制作ミュージカル動画作成計画、演技レッスン、歌唱レッスン、ダンスレッスンの講師手配。

○学校：積極的ＰＲ（小規模特認校制度チラシの一新）、学校経営の充実（あるがままでいられる学校）、小規模特認校制度、移住希望者の見学、体験者受け入れ、校内研修による児童理解の徹底。



【11月以降】

○地域・保護者・学校：ＰＴＡ自主制作ミュージカル動画撮影開始、動画配信スタート

４　具体的な取組

本校においても、ホームページや学校便りによる情報発信には力を入れている。学校便りはあえて紙での発信とし、地域へは全戸配付を行っている。

学校のＰＲ活動で大切なことは以下の２点と考えている。①名栗地区以外へ発信力を高め、移住者・転入者を増やすこと。②名栗地区内において学校の取組をより多くの方に知っていただき理解者を増やすこと。双方のバランスをとりながら以下の取組を進めた。

（１）ＰＴＡ自主制作ミュージカル動画

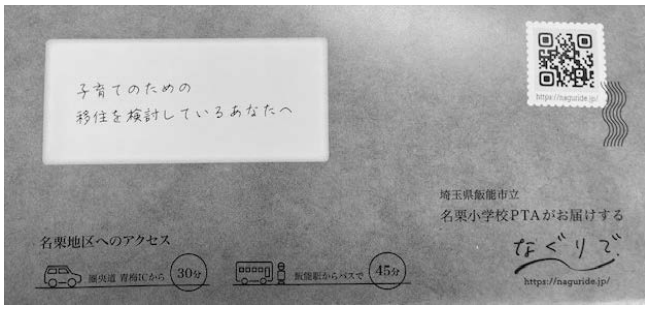
名栗小学校の保護者には多彩な人が多い。今回は、カメラマン、映画監督、脚本家、作曲家、ミュージカル俳優が中心となりＰＴＡで自主制作のミュージカル動画を作成することとした。出演者は本校児童、教員、保護者、地域住民である。

また、音楽の授業を活用し、ワークショップ形式でミュージカルのオリジナルの音楽制作に取り組んだ。ファシリテーターはミュージカル俳優とプロの作曲家である。自ら曲作りの一端を担い意欲的に参加する子ども達の姿が見られた。

地域の方々も、このミュージカル制作について関心が高く、新聞やマスメディアにも取り上げていただけるよう働きかけてくださり、制作過程の報道が予定されている。

（２）ＰＴＡウェブマガジン「なぐりで」

「入間川の源流が流れる緑豊かな環境は、子育てするには最適な場所。しかし、移住には勇気がいる。」とＰＴＡ広報部では考え、先輩移住者、先輩転入者が中心となり、ウェブマガジンで発信を行っている。ここには、名栗に暮らす人々のこと、子育てのこと、名栗小学校のこと等を掲載しており、名栗の空気感を届けたいという想いが詰まったものとなっている。



（３）学校への招待事業

地域の皆さんからのサポートは日々たくさん感じることができている。例えば、遅れて登校する子を見ると「おはよう！」と声をかけてくださる方、教室に入らず校庭を散策している子を見て「将来大物になるぞ。」と子どもを肯定してくださる方、運動会で一緒にノリノリで踊ってくださる方、「学校のためなら何でもするぞ。」と言ってくださる方、等々。有り難い限りである。そのような方々は勿論のこと、子育てが一段落し学校との距離が少しある地域の皆さんにも、学校に来て欲しいと願っている。そこで、本校では学校でのイベントに地域の方を招待し、学校の取組への理解と『地域の学校名栗小』を一人でも多くの人に感じていただきたいと考えている。

①芸術鑑賞会

学校便りを通し日々お伝えしている、名栗小学校の目指す「あるがままでいられる学校」を考えるきっかけとなる芸術鑑賞会を開催した。多くの方と時間を共有することができ、学校理解への一助となった。

②ピタゴラスイッチ

トイクリエーターを招致し、プロの技によるピタゴラスイッチ装置作りに参加していただいた。楽しいことが大好きな子ども達と楽しい時間を共有していただくことができ、大いに盛り上がることができた。

５　おわりに

私達教職員が目指すものは『子ども達の幸せ』である。この名栗では、地域の皆さんも同じ想いで子ども達を見守り育ててくださっている。

これからも学校が地域の中心として、また、地域の中で生かしてもらっている学校として、感謝の気持ちを持ち、保護者とともに学校・地域の活性化のＰＲを続けていきたいと考えている。

山と川に囲まれた小さな学校のしなやかな挑戦はまだまだ始まったばかりである。

地域コミュニティの中心となる学校づくり
～義務教育学校開校１年目の取り組みを通して～

日高市立高根小中学校
校長　三　芳　雅　彦

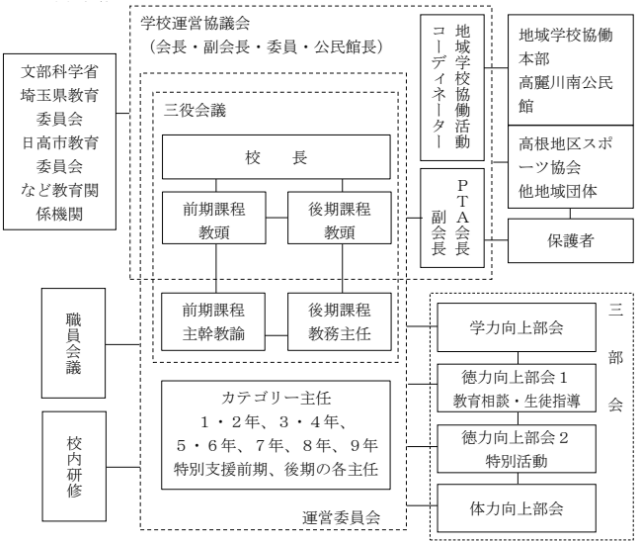
１　はじめに

本校は、令和６年度より高根小学校と高根中学校を統合し、新たに義務教育学校日高市立高根小中学校としてスタートした。本校は、日高市の教育の柱である「コミュニティ・スクールを基盤とした小中一貫教育」のもと、「学校運営協議会を中心に据えた地域に根差した学校経営」「地域学校協働本部協力のもと、地域コミュニティの中心となる学校づくり」「９学年間を見通した段階的な教育の展開」を目指している。児童・生徒主体の教育を地域とともに展開することで、15歳で社会的に自立できる児童・生徒を育成することが、今年度の指導の重点の第一である。

高根地区は、高齢化が進み、年々児童・生徒の数も減少している。また、自治会長など地域コミュニティの中心となる方も少なくなってきている。地域体育祭を企画しても、運営者や参加者が少なく、地域コミュニティの活性化のためには、児童・生徒が欠かせない状況にある。そこで、学校運営協議会の皆様の意見を取り入れながら、地域学校協働本部や高麗川南公民館など地域の方々と協力しながら学校行事を執り行うことで、地域コミュニティの中心となる学校づくりを目指した。ここでは、その一端を紹介する。

２　研究組織

令和６年度の研究組織は、以下の通りである。



３　具体的な取り組み

（１）学校運営協議会

高根地区の学校運営協議会は、校長１名・ＰＴＡより２名を含め11名で構成されている。原則は、年間５回（他にコミュニティスクール研修会等参加）開催し、今年度は以下の点について協議した（第４回以降は開催予定）

＜第１回＞　令和６年５月24日（金）
○令和６年度高根小中学校の経営方針の確認及びグランドデザインの承認
　※本来は前年３月の協議会で承認を得るが、今年度に限っては、校長が１名に減るため保留としてあり、５月に承認を得た。
○開校直後の学校の児童・生徒・教職員の状況
○学校・地域合同運動会・体育祭に向けての意見交換
＜第２回＞　令和６年７月10日（水）
○授業参観
○社会的自立に向けた取り組み（進捗状況）
○運動会・体育祭実施計画
＜第３回＞　令和６年７月29日（月）
○日高市コミュニティ・スクール研修会参加
＜第４回＞　令和６年11月13日（水）
○大運動会を終えて成果と課題
○音楽祭を終えて成果と課題
○学校評価の項目内容の検討と承認
○生徒指導案件の報告及び協力依頼
○授業参観
＜第５回＞　令和７年２月19日（水）予定
○授業参観
○義務教育学校の現状と課題
○令和６年度学校評価の報告及び依頼
＜第６回＞　令和７年３月５日（水）予定
○令和６年度高根小中学校における学校評価報告
○令和７年度高根小中学校の経営方針の承認

委員の方々は、学校にとても協力的で、毎回、建設的な話し合いが行われている。ここで得られる様々なアドバイスは、学校経営にとても役立っている。

（２）地域学校協働本部

一昨年度より、高麗川南公民館を中心に、本本部に登録していただける団体を募集、その長に参加していただき、説明会も開催した。また、昨年度には、地域学校協働活動コーディネーター（学校運営協議会委員より）も設置され、地域諸団体との太いパイプができた。特に高根地区スポーツ協会とつながることができ、このあとに説明する運動会が開催できたことは、大きな成果と言える。できれば、近い将来、公民館で行われている文化祭も、学校との協働ができないか、現在模索しているところである。

（３）高根小中学校・地区大運動会

10月５日（土）・７日（月）に、今まで別々に行われてきた高根小運動会・高根中体育祭・高根地区運動会を統合した形で、大運動会を実施した。計画では、５日に全てを行う予定であったが、雨天で校庭が使えない状況となり、５日は、体育館で地域と合同で行う予定だった内容を一部変更して実施し、７日に小中運動会を実施した。本当は、全て７日に順延したかったが、地域の役員の方には、お仕事をされている方もおり、運営が難しくなるとのことで、分散実施するしかなかったのが残念であった。

大運動会では、地域種目として「お宝探し」を行う予定であったが、体育館となったため、児童・生徒と保護者・地域の方を６色の団に分け、玉入れを行った。狭い体育館なので、１団ずつ一定時間で何個入れられるかを競った。地区運動会では、部活動の兼ね合いなどもあり、児童・生徒の参加も、あまり多くないが、学校行事として行っているため、とても活気のある状況での競技となった。（下写真）

その後、昼食前に参加者全員で踊る予定であった日高小唄を体育館で踊った。日高市長さんをはじめ、来賓の方々も一緒に踊っていただけた。地域学校協働活動コーディネーターの計らいで、地域の「藤よし会」の皆様に、児童・生徒・教職員への踊りの事前練習の指導をお願いし、当日も一緒に踊っていただいた。（下写真）児童・生徒からも「地域の人と踊れて楽しかった」「日高市の踊りを教えてもらって良かった」など賞賛の感想が９割以上をしめた。受付では代表者のみの記帳であったため正確には把握できなかったが、全校生徒269名を加えると600名前後の人が、体育館で活動できた。近年の地域体育祭では、ここまでの活気はなかったと聞いている。

４　成果と課題（○：成果　●：課題）

○義務教育学校開校にあたり、学校運営協議会や地域学校協働本部の方々には、大変お世話になった。特に新校の礎づくりや旧中学校からの引越し作業など様々な面で貴重なご意見をいただくことができ、滞りなく進められた大きな要因であった。

○地域に対し受け身になりがちな学校が、積極的に地域コミュニティの中心になるための方策として、運動会を実施できたことは、大きな一歩であった。

●大運動会が、天候に左右される行事であったため、仕方のない面はあるが、せっかくなので同一日にやりたかった。来年度は、平日に順延してもできるような形を模索したい。

５　おわりに

少子高齢化・地域に１つしかない学校、このことを考えた時、若い力のあふれる学校が、地域コミュニティの中心となることは、地域活性化のためにも必要不可欠と考える。地域に何をしてもらうかではなく、地域のために何ができるかを考えていかなければならない。何もかもが手探りの状況でのスタートだったが、さらに地域に根差した学校づくりを目指していきたい。

主体的・対話的な学びを通して、考え、深め合い、実践する子の育成
～全教育活動を通した非認知能力を伸ばす指導～

行田市立太田小学校
校長　松　本　敏　則

１　はじめに

本校は、行田市公立学校再編成計画により、令和５年４月に開校した。児童数240名、学級数10（通常学級８、特別支援学級２）、教職員数26名の中規模校である。

開校に当たり、学校教育目標を「知・徳・体の調和のとれた教育活動」から、「地域とともにある『あんしん　あったか　あかるい学校』づくり」とした。学校・保護者・地域が一体となり「互いに良い出会いであった」といえるよう、新たな教育活動の実践を進めている。

２　主題設定の理由

本校は、全国学調及び県学調において平均正答率が県平均を下回っており、自分の考えを書く設問においては、無解答が多い。特に、筋道を立てて自分の考えを記述したり、自分の考えを多様な方法で（文章記述、図示、口述など）で表現したり、友達に説明したりする力が不十分である。また、基礎学力の定着及び思考力・判断力・表現力の育成など、物事を論理的に考える力が乏しいことや家庭学習への主体的に取組む姿勢の未熟さが課題として挙げられる。

令和４年度には、学校再編に向け、太田東小学校、太田西小学校の両校で研究テーマを統一し、「主体的・対話的な学び」をキーワードに校内研修に取り組んだ。その際、算数科の授業を通して、非認知能力を育成することを目的とし、授業実践を行った。

今年度は、前年度まで算数科に焦点を当ててきた内容から、全教科に広げ、非認知能力の中でも「自己表現力」「自己調整力」「論理的思考力」の育成に向け、学び合いを通して、考える力や伝え合う力を伸ばす授業実践に取り組んでいる。新学習指導要領で示されている主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行い、学力の向上を図るため、教職員一丸となって進めている。その際、学習の中で、児童が自ら問題を見い出し、解決することで、思考力・判断力・表現力を向上させ、できる喜びを味わわせるような授業展開を行っていきたいと考え、本主題を設定した。

３　研究仮説と手立て

本研究では、以下のような研究仮説、具体的な手立てを設定して実践に取り組んでいる。

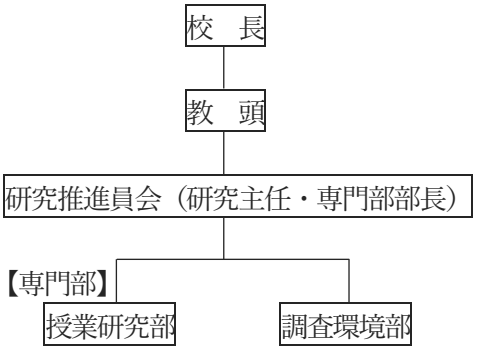
☆仮説１
思考力・判断力を働かせる学習活動を充実させれば、考え、深め合う楽しさを実感できる児童が育つだろう。

○具体的な手立て
- 学習過程（導入、自力解決、比較検討、まとめ）における工夫
- 学習形態の工夫
- 発表の仕方の工夫（話形）
- 学習ハンドサイン
- 「太田小　算数授業の進め方」
- 少人数指導の工夫
- ＩＣＴ活用の充実　など

☆仮説２
基礎的基本的事項を明確にして、系統的・反復的な学習を展開すれば、自分の力で問題解決でき、自信を高められる児童が育つであろう。

○具体的な手立て
- コバトンタイム（プリントの反復学習）の実施
- 導入における反復指導
- 本時を受けての練習問題
- 本時の内容における基礎・基本の提示
- 個に応じた発展的な問題
- 教師の自作問題による校内テストの実施　など

４　研究組織について



５　具体的な取組

（１）授業研究

指導法のモデル化や教材研究の仕方について研究を進めるとともに、児童の基礎学力の定着及びより高い思考力・判断力・表現力を育成することをねらいとする。

（２）専門部会

研究を推進していくため、専門部を設置し役割を分担した。専門部は、「授業研究部」と「調査環境部」の２つで構成した。

①授業研究部の活動

授業の流れや教材研究の仕方など主体的・対話的な学びをより効果的に進めるための授業の構造化を図る。

○指導案形式の検討、授業分析
○単元一覧表の作成
○指導、評価方法の研究（自己評価、相互評価）
○ＩＣＴの活用例

②学習環境部

学習環境を整え、主体的・対話的な学びをより効果的に行うことができる環境作りを行う。

○県学調、全国学調の資料分析・児童の実態調査
○校内環境整備
○アセスメントシートの見直し
○新聞学習（ＮＩＥ）への取組
　・新聞に関する実態調査アンケートの実施
　・教職員による、新聞記事掲示コーナーの作成
○家庭学習の充実（ぐんぐんノートの活用について）

（３）授業研究会の開催

年に３回の授業研究会を実施した。授業公開後は参観者による研究協議を行うとともに、外部から指導者を招聘して、研究仮説の内容を中心に、効果的な指導や手立てについての共有化を図った。

☆６月　５年算数　「小数の倍」
　　３年算数　「長い長さをはかって表わそう」
☆11月　２年図工　「見つけた！お気に入りのもよう」

【３年算数 グループ活動】

【２年図工 学び合い】

（４）新聞学習（ＮＩＥ）への取組

①新聞コーナーの設置

１階児童玄関に新聞コーナーを設置し、当日の新聞だけではなく、バックナンバーも常設し、誰でもいつでも手に取り読めるようにする。また、教職員が記事を紹介する「この記事、どう読む」を掲示し、読む視点を示すとともに、他者の意見を知ることで考えを深める取組を行っている。

【新聞コーナー】

【この記事、どう読む】

②自主学習での活用

６年生の教室内に新聞を常設し、常に手に取れるようにしている。また、５年生では、気になる記事を切り抜き、要約や感想・意見等を１ページにまとめて記録している。まとめ方や感想等に対して、担任がコメントを入れることで、児童の学習意欲の向上を図っている。

③新聞作成における参考資料

新聞を使い、見出し文字や記事枠の組み方などの工夫を学習させている。まとめ方について共有させたり、社説に注目させ、記事を書く際、表現の仕方を工夫したりするよう指導している。

（５）家庭学習（ぐんぐんノート）への取組

基礎基本の定着を図るため、全教職員が共通理解のもと、家庭学習（ぐんぐんノート）の指導に取り組んでいる。また、保護者に向けて、クラスごとに「家庭学習へのご協力のお願い」を配布し、朝学習の取組や児童の学力の実態について周知するとともに、学級ごとの取組について知らせることで、保護者の協力を得ながら家庭学習に取り組んでいる。

６　成果と課題（○成果　●課題）

○取組を通して、基礎基本の定着が進み、意欲的に学習に取り組む児童が増えた。
○グループ活動や学び合いを通して、自分や友達の考えのよさに気付き、自分の考えを積極的に伝えようとする意識が高まった。
●読解力に課題があるため、活字に慣れ、想像力を働かせる経験を積ませる必要がある。

「問題を発見し、解決できる」を目指し、主体的に学び続けるみなみっ子の育成

～複線型の学習を基盤として～

久喜市立栗橋南小学校
校長　柳　田　　薫

１　はじめに

本校では「考える子」「やさしい子」「たくましい子」を学校教育目標とし、目指す学校像に「自信と誇りと感動のある学校」を掲げ、知・徳・体の調和がとれ、「あたたかさと真剣さがみなぎる学校」で心豊かにたくましく生き抜く子供の育成を目指している。

教科における授業改善に取り組み、問題を自ら思考・表現し、自己内と他者とかかわっていきながら主体的に学びに向かう児童の育成を目指すことは、本校の教育目標の具現化につながるものと考える。

２　児童の実態について

全学調・県学調等の正答率において、特に非認知能力を指し示す「問題への粘り強さ」「興味・関心」「計画性」「見通し」「問題発見と解決」に通ずる児童質問紙項目で国、県、市平均をやや下回っており、「主体的に学習に取り組む態度」で課題が見られる。

そこで、今年度は教科の学習過程において「学習の見通し」「解決に向かうための学習活動の複線化」「学習の振り返り」の３つを重点にして授業改善を推進することとした。児童が自ら気づきや問い、見通しをもちながら課題を解決しようとする「主体的に学び続ける児童の育成」を目指したいと考え、本主題を設定した。

３　研究の目的と方法

主体的に学び続ける児童を育成するためには、教科学習の学習過程を工夫することが必要である。本研究では、児童の実態に応じた授業改善「複線型学習」を図ることが児童の主体的な学びにつながっているかを検討する。それをふまえて、授業実践から複線型学習が主体的に学び続ける児童を育成することを明らかにしていく。

〈育成のための３つの手立て〉

◯学習の見通しにおける手立て

・解決への意欲を高める単元設定

・課題解決の方法や過程

◯解決に向かうための学習活動における手立て

・目的を明確にした一人学び

・目的を明確にした学び合い

◯学習の振り返りにおける手立て

・学んだことを生かす問題

・視点を明確にした振り返り

〈評　価〉

◯本校独自作成の児童質問紙により

「主体性」尺度の変容を見取る。

1　課題発見、学習意欲

2　学習の見通し

3　自己表出

4　他者とのかかわり

5　学び方、自己決定

以上、５項目を発達段階に合わせて質問内容とし、４尺度で評価することとする。

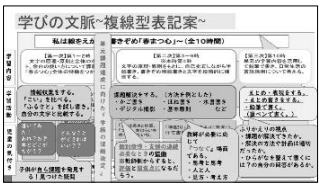
「よくできる」「できる」を肯定的評価、「あまりできなかった」「できなかった」を否定的評価とする。

4　実践

（1）主題・副題の共通理解研修

研究主任を中心に研究推進委員会・校内研修で「主体的に学ぶ児童の具体の姿」「本校の捉える複線型」について研究当初に共通理解を図った。

「複線化の視点と主体性」



「複線型授業構造」

（2）教科の見方・考え方を深める研修

教科の見方・考え方、本質を主体的・対話的で深い学びを深めるために日本授業 UD 学会の桂聖先生をお招きして国語科研修を行う。

「研修の様子」

「CAST/UDL ガイドライン」

（3）協働の授業実践

一人一授業をグループで授業観察・授業分析を行い成果と課題を蓄積する。

9月：算数、国語

10月：生活、算数、図工

11月：外国語、日本語、道徳、学級活動、社会

12月：国語、算数、理科、体育

課題設定・解決方法においてオプション（選択肢）を準備・提供し指導者は個別指導・支援を行う。

5　研究結果（有効回答数の割合（%）で小数点以下を切り捨て表記）

1　課題発見、学習意欲

	低学年	中学年	高学年
5月	91	94	**94**
11月	**92**	**94**	92

2　学習の見通し

	低学年	中学年	高学年
5月	**86**	76	72
11月	85	**83**	**80**

3　自己表出

	低学年	中学年	高学年
5月	77	77	72
11月	**84**	**84**	**80**

4　他者とのかかわり

	低学年	中学年	高学年
5月	**90**	**90**	84
11月	88	89	**88**

5　学び方、自己決定

	低学年	中学年	高学年
5月	83	87	84
11月	**86**	**92**	**85**

6　考察

複線型学習は「主体的に学び続ける児童の育成」に十分寄与した方法だといえる。課題の明確な自己決定、目標に向かうための見通し、目標を解決するための学び方を『オプション（選択肢）』として指導者が準備し提供したこと、振り返りを随時積み重ねたことで自己調整しながら学びに向かう児童が育ってきていることにつながっている。これは H31年文部科学省「児童生徒の学習評価の在り方」で『自らが目標をもち、進め方を見直しながら学習を進める、自己調整を行う姿』について言及していることと合致している。引き続き、自立した学習者を育てていく。

また、「他者とのかかわり」が大きく課題となった。目標や目的に合わせて学習に向かえていないことだと言い換えられる。「何のために」「なぜその解決方法をとるのか」など目的意識の醸成に努めたい。

最後に今回の研究は量的評価でのみ行ったものであり、質的評価を加味したものとなっていない。今後は質的評価を加味し経年変化での変容を見取っていくことに取り組んでいく。

主体的にコミュニケーションを図り、仲間とともに学びを深めようとする児童の育成
～伝え合い・受け止め合う活動を通して、次の学びにつなげる授業の創造（国語科を軸に）～

宮代町立須賀小学校
校長　金　野　泰　久

１　はじめに

本校は、令和３・４・５・６年度の４年間、宮代町教育委員会の研究委嘱を受け、研究主題を「主体的にコミュニケーションを図り、仲間とともに学びを深めようとする児童の育成～伝え合い・受け止め合う活動を通して、次の学びにつなげる授業の創造（国語科を軸に）～」とし、教職員一丸となって国語科の研究に取り組んできた。

特に、指導事項を押さえ、子供たちが試行錯誤を重ねられる授業づくりに主眼を置き、学習者用デジタル教科書をフル活用しながら、「個別最適な学び」と「協働的な学び」をバランスよく進められるような指導過程の工夫改善に努めてきた。

２　研究主題設定理由

本校の児童は、素直で、与えられた課題や言われたことについては最後まで粘り強く取り組めるようになってきている。一方で、課題に向かって自分から考えて工夫をしたり、よりよく生活するために新たな考えを提案したりすることを苦手とする児童が少なくない。

また、埼玉県学力・学習状況調査結果を分析すると、学年が上がるにつれて、「あいさつ」と「自己効力感」に係る、子供たちの肯定的な回答が低下傾向であることも見えてきた。学習を支える非認知能力にも視点を当てながら、児童のコミュニケーション力を高めていかなければならないことが分かった。

子供たちがこれからの予測困難な時代を切り拓いていくためには、他者との協働が欠かせないと考える。解き方があらかじめ定まった問題を効率的に解くだけでなく、仲間との関わりや双方向のやりとりの中から新たな考えを生み出したり、自分の考えをより深めたりすることが一層重要となる。

そこで、日々の学級経営を充実させると同時に、国語科の授業を軸として、伝え合い、受け止め合う活動を計画的に設定し、子供たちが主体的にコミュニケーションを図ることのよさを十分に味わわせたいと考え、本研究主題を設定した。

３　研究仮説

【仮説１】
様々な言葉や表現に触れる機会を設定すれば、言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養うことができ、思いや考えを適切に伝え合うことができるであろう。

【仮説１に迫るための手立て】

① 語彙力の向上、課題解決や自分の考えを広げることを目的とした情報収集のために、様々なツールの活用場面を設定する。
② 目的や意図に応じた様々な文章表現に触れる機会を充実させる。
（表現の仕方の工夫、筋道を立てて説明する力）
③ 豊かな表現に親しむ言語環境づくりを計画・実践する。

【仮説２】
相手意識や目的意識をもって伝え合う場の設定をすれば、言葉による見方・考え方を働かせ、仲間と共に学びを深めることができるであろう。

【仮説２への手立て】

① 単元毎に、児童に身につけさせたい力を系統的に整理し、魅力的な学習課題の設定の仕方を工夫する。
② 児童が伝え合うことを通して対話的な学びの有用性や楽しさを感じられるよう、学習形態の工夫を行う。
③ 単元や１単位時間の学習のめあてを意識させ、自己の学習について振り返り、次の学びへつなげようとする思いをもたせる。

４　研究内容（具体的な取組）

○自ら学びとる学習者の育成に向けた取組

（１）「プランニング方略」を高める単元計画づくり

「自ら学びとる学習者」を育成するためには、教師と児童との間での単元計画の共有が欠かせない。子供たち自身が見通しを持つことで、毎時間の学習がより主体的なものになる。そこで、指導事項を押さえながら、学習活動の具体的なゴールが見える単元計画づくりに力を注いだ。

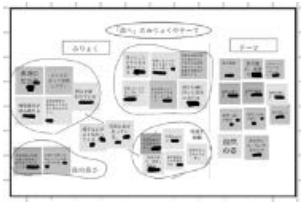
実践例（第４学年）

・単元名
　須賀小ミステリーフェア
　～ミステリー本を読んで､面白さをPOPにして発信しよう。～
・教材名　「友情の壁新聞」（光村図書）

実践例（第６学年）

・単元名
　日本文化のよさを伝える PR 動画を、５年生に送ろう
・教材名　「『鳥獣戯画』を読む」／「発見、日本文化のみりょく」（光村図書）

（２）伝え合い・受け止め合う活動を実現する多様なＩＣＴ活用



例）Jamboard による
ブレインストーミング

例）AI テキストマイニングによる初発の感想交流

例）Canva を活用した
学習成果物の作成

例）Padlet を活用した
意見交流や作品交流

特に積極的に活用したのが、学習者用デジタル教科書である。学習者用デジタル教科書は、本文に線を引いたり消したりすることが容易な点や、付属の「マイ黒板」機能があることから、自分の考えを整理・表現する、友達と考えを伝え合うなどの学習がしやすくなると考え、日常的に取り入れた。

（３）自ら学びとるための振り返りの充実

授業の終末に、何を学んだか（内容知）、どのように学んだか（方法知）を類別した振り返りに取り組ませてきた。

【低・中・高学年別　方法知に関する振り返りの型】

ブロック	認知的方略	人的リソース方略	作業方略	認知特性
低学年	～がたのしかったです。～をがんばりました。	～さんとじぶんのかんがえが（にている・…がちがう）ことがわかりました。		まえのべんきょうと～がにているとおもいました。
中学年		○○のために（一人で・△△さんと・グループで…）学びました。	○○のために（教科書・動画・資料…）をつかって学びました。	
高学年	私は○○が（好き・得意）なので、（音読・頭の中読んで…）をして学びました。	○○のために（一人で・△△さんと・グループで…）学びました。	○○のために（教科書・動画・資料…）をつかって学びました。	○○のために（前の時間に・他教科で）学んだことを使って学びました。

５　成果と課題（○成果　●課題）

○令和６年度埼玉県学力・学習状況調査結果から

・昨年度より学力を伸ばした児童の割合
　→５年：74.0％（県67.0％）
　　６年：51.1％（県46.8％）

・国語（読むこと）平均正答率
　→４年52.8％（県平均39.9％）
　　５年50.0％（県平均48.0％）
・児童質問紙調査における「柔軟的方略」と「プランニング方略」の数値の伸びが見られた。

○本校国語に関するアンケート調査結果から

・国語が好きであると回答した児童の割合
　→95％

○単元発想の国語科の授業づくりが定着してきた。（相手意識と目的意識の高まり）

○教師が、単元における指導事項（押さえる表現）を踏まえ、子供たちが試行錯誤を繰り返しながら習得すべき事項を見出せるようになってきた。

●すべての子供たちが互いの意見を交流し合える学習に意欲的に取り組めるように、今後も、学習者用デジタル教科書を始めとする様々な支援ツールを有効活用していく。

●振り返りの継続的な実施と改善を積み重ね、子供たちの次の学びにつなげる自己調整能力のさらなる向上を目指す。

生徒の『エージェンシー』を育む教育の研究
～主体的に「自助」「共助」でき、地域の中心となって活躍できる生徒の育成～

さいたま市立川通中学校
校長　鈴　木　　純

１　はじめに

令和５・６年度、さいたま市教育委員会及びさいたま市学校保健会から研究指定を受け、「学校安全」についての研究を行うこととなった。

本校は、生徒数約200人、学級数７クラスと小規模な学校である。また、学区が広いことや約99％の生徒が自転車通学をしていること、元荒川が近くを流れていることも特色である。祭りや地区運動会なども盛んで、地域と学校のかかわりが深く、中には３世代で川通中学校出身の家庭もあり、地域愛着の高さを感じられる。地域に根差したこの地で学ぶ本校の生徒たちは、地域の活性化に寄与し、地域の力となること、そして将来的に地域の中心となって活躍できる力を身に付けることが求められている。

２　生徒の実態

令和６年度６月、全校生徒を対象に生徒の交通安全及び災害安全に対する意識調査を行った。

６月時点でのヘルメット着用状況は、日常生活でも必ず着用している生徒は３割弱であり、通学時のみの生徒は2.5割～５割程度いる。また、学年が上がるにつれて着用率が下がっている。

避難場所の認知については、「知っている」と回答する生徒が５～６割いる反面、「なんとなく」や「わからない」といった不確かな回答をする生徒が３～４割いる。また、防災グッズの備えに関しては、どの学年でも「家族が用意している」「わからない」と答えた生徒が、全体の７～８割程度になっている。

「学んだことを他の場面で生かしているか」「人の役に立つ人になりたいと思うか」の質問に対して、約９割の生徒が肯定的な回答を示しており、非常に高い。一方で、「地域の行事に参加しているか」といった、「地域とのつながり」に関する質問については、「いつも参加している」「参加したことがある」と答えた生徒が全体の5.5割程度と低い。

生徒の実態調査を通して、以下の課題が分かった。

①交通・災害安全ともに意識を高めていく必要がある
②「安全」について、他人事ではなく自分事として捉え、主体的に行動できるようにする
③「学んだことを他の場面で生かす」「人の役に立ちたい」といった資質能力を、「学んだことを地域社会で生かす」「生活や世の中を少しでも変えようと考え行動する」といった『エージェンシー』として育む
④「地域とのつながり」を深め、地域の中心となって主体的に行動できるようにする

３　研究主題設定理由

本研究を通して、『エージェンシー』の育成と「自助・共助」といった学校安全を掛け合わせ、学校安全の学習を通して、自分の住む地域について考え、自分や家族を守り（自助）、地域を守る（共助）想いを醸成し、『エージェンシー』を育みたいと考えた。また、『エージェンシー』の定義を読み解くと、学校教育目標である「向学　自立　協働」とも近い意味であり、『エージェンシー』を育むことが学校教育目標の達成にも欠かせないと考え、本研究主題を設定した。

４　研究仮説

①「学校安全」に重点を置くことで、生徒の安全意識は高まるだろう。
②主体的に「自助」「共助」できる生徒を育む取組を行うことで、自己の安全意識の向上だけでなく、周囲の人の役に立つ・他者への意識も高まるだろう。
③多くの人と協働しながら学んでいくことで、学んだことを活かそうとする姿勢や現状をよりよくしようとする意識が増進するだろう。
④本研究を通して、地域のことを知り、地域の方々と関わることで愛着が増し、地域への関心や行事への参加率なども向上するだろう。

といった仮説を立て、研究を進めることとした。

５　研究内容（具体的な取組）

（１）授業実践での交通安全・災害安全の取組
（２）専門委員会・部活動での生活安全の取組
（３）教職員研修や地域との連携の取組

といった３つの柱を軸に、

①目標設定・振り返りを通して責任ある行動をする活動

②多くの他者との協働

③生活や世の中を少しでも変えようと考え、行動する活動

④学んだことを地域社会で生かす活動

といった４つのポイント・そしてその４つの関連やスパイラルを意識しながら各取組を行った。

【令和５年度】

【1年生】事前学習で様々な災害について調べ学習を行った。災害時の備えについてまとめた。フィールドワークを行い、川通中の近くにある避難所について調べ、公民館・区役所などを訪れ、災害時の役割について調べた。
【2年生】事前学習で「耐震・制震・免震」について理解を深めた。日本の自然災害について調べた。実際に厚紙で家を作る活動を通して、『災害に強い柱』について調べ、検証を行った。
【3年生】事前学習で災害対応シミュレーションゲーム「クロスロード」を実施した。また、HUG訓練を行い、近くを流れる「元荒川の氾濫」を想定して、避難所運営について検討した。
【4組】校外学習（さいたま市防災センター）の事前学習で、自然災害や防災について知識を深めた。校外学習では、様々な体験を通して、防災へのイメージをより深めた。

【令和６年度】

【交通安全部】１年生は、地域の自治会、日本交通安全教育普及協会の方々と連携し、「学区内の交通安全」に焦点を当てて活動した。フィールドワークやシミュレーターを活用したヒヤリ・ハット体験、スケアード・ストレイト教育技法による交通安全教室の参加等の体験学習を行った。他者と協働しながら調べた内容について、発表した。
【災害安全部】２年生は、防災アドバイザー、岩槻区役所総務課職員と連携し、「ＤＩＧ訓練（災害図上訓練）」を実施した。班で協働し、防災マップを作成した。３年生は、避難所運営を中心とした防災学習を行った。特別支援学級は、各自が調べ、まとめた内容をブースごとに展示し、防災イベントを開催した。生徒自身が大人に調べた内容を説明し、伝えた。各部活動は、「大規模地震の避難を想定して各部活動の約束事を決めよう！」と題し、夏休みの時間を使って「顧問不在時の活動中に大規模な地震が発生したら…」と想定して、緊急時の約束事を確認した。それぞれの活動に合わせた課題と改善策も考え、話し合った。
【生活安全部】生徒会本部と５つの専門委員会では、それぞれの役割に合わせた学校安全に関する取組を生徒主体で考え、実施した。生徒たちの目線で、学校生活のあらゆる場面での安全確保について考え、それぞれの取組を実施した。
【学校安全に関する教職員研修の実施】例年実施する傷病者発生時対応訓練や普通救命講習に加え市教委指導主事を招聘し、学校安全に関する教職員研修を実施した。「学校安全の体系」や「学校安全の三領域」等の基本的な内容や学校としての重要な役割などについて改めて理解し、学校安全への意識を高めた。
【PTA・地域との連携】２年連続で、11月にPTA主催の「防災フェア」を実施した。地震体験車や煙体験・消火器体験の実施、消防車の展示やＡＥＤ講習なども行った。

６　成果と課題（○成果　●課題）11月意識調査

○交通安全についての「自助」「共助」に関する質問では98％が肯定的な回答であり、学習が生徒たちの意識向上や自信につながった。

○災害安全について、避難場所の認知の質問では、全ての生徒が肯定的な回答を示した。

○地域の行事への参加について、76.6％の生徒が参加したと回答し、６月から大幅に上昇した。

○「共助」の意識が高い生徒ほど、「他者と生きる意識」や「他者への思いやり」が高い傾向にあることが分かった。「共助」の力が身につく「安全教育の推進」と「思いやり・集団意識の育成」や「自己有用感の向上」といった道徳教育の推進も関連があり、どちらも意識的に進めていく必要があると分かった。

○「学んだことを他の場面で生かしているか」「学んだことを基に自分の生活や環境を少しでも良くしようと考え発信・行動できたか」の質問に対して、どちらも86％の生徒が肯定的な回答を示し、他者との協働的な学びが『エージェンシー』の育成につながった。

○今回の取組を通して、「自分の住む地域を大事にしていこうと思うか」の質問では、肯定的な回答が99.3％を示した。地域と連携した取組や学習と関連させて地域の方々とのかかわりを持てたことが地域への愛着心を高めた。

●より実生活に根付き、継続・発展できるような取組の工夫が必要である。

●取組の時期により、生徒の意識が下がることも分かり、一度だけでなく、継続的・断続的に取組を続けていく必要がある。

●教職員研修の充実が不可欠である。

７　おわりに

本研究を通して、「自分の所属する場所をよりよくしようとする意識」と「将来の夢や目標を持つこと」に関連があることが分かり、本校の学校教育目標「向学・自立・協働」と近しい意味でもある『エージェンシー』の育成は、「キャリア教育」すなわち本校の校訓「夢を実現」に深く関わっていることが分かった。今後への新たな視点として、「キャリア教育」の視点も取り入れながら『エージェンシー』を育み、地域の中心となって活躍する生徒を育成するために、校訓「夢を実現」の体現も見据え取り組んでいきたい。

探求と協同の学びの創造
～デザイン→実践→リフレクションへの授業改善～

川口市立北中学校
校長　岡　安　孝　文

１　はじめに

本校は埼玉県川口市にある公立中学校である。川口市の北部にあり、周囲を豊かな自然に囲まれた環境で、保護者、地域、町会等の支援も厚い。

本校の本年度の重要課題は、「学力向上」「不登校対策」「命の指導」の３点である。その中でも学力向上は、喫緊の課題であり、その解決に向け、令和４年度より学びの共同体の構想と実践に全教職員が一枚岩となって取り組んでいる。

２　主題設定の理由

授業の主役は生徒であり、教師は伴走者として「ファシリテーター」や「コーディネーター」として、生徒主体の授業改善を進め、３年目となる。研究を実践する同志も増え、現在では、川口市の神根地区の小中学校９校で共同実践をするまでになった。

今年度は、「学校の公共的使命である『一人残らず子どもの学ぶ権利を実現し、その学びの質を高めること』と『民主主義の社会を準備すること』を実現するために『学びの共同体』のヴィジョンによって実践する」のもと、校内研修ヴィジョンとして「生徒一人ひとりを学びの主人公に育て、探求的で協同的な質の高い学びを追求する授業改革を推進することにより、他者と共に生きる生き方を学べる種をまき、生涯に向けて自らの考えを持って学びに向かう根を張らせること」を掲げ、「学びの共同体」の実践を積み重ね、生徒の学力の向上に繋げることとした。

なお、『学びの共同体』とは、東京大学名誉教授である佐藤学氏が考案・推奨する「子どもたちが学び育ち合う場所としての学校」「教師が専門家として学び、成長し合う場所としての学校」「親や地域の住民が教育活動に参加して互いに学び合う場所としての学校」をヴィジョンに掲げる学校改革である。

３　今年度の実践計画

今年度は、「学びの共同体」中長期的計画の３年目として『学びの共同体の充実・発信』と位置づけ、以下の４点を推進してきた。

①学びの共同体の日々の実践の蓄積
②学びの共同体公開授業研究会年３回実施
③神根地区小・中学校合同研修会年２回実施
④本校保護者・地域と共同した「学びのイノベーション研修会」の実施

また、以下の計画を立て、実践してきた。

期日	実施内容
４月	教職員への周知・研究構想図提示 第１回神根地区小・中学校合同研修会 （佐藤学先生招聘）
５・６月	学びの共同体の授業実践 近郊パイロットスクール視察
７月	第１回公開授業研究会（佐藤学先生招聘）
８月	第２回神根地区小・中学校合同研修会
９～11月	近郊パイロットスクール視察 指導力・学力向上月間・相互授業参観の実施
12月	第２回公開授業研究会（佐藤学先生招聘）
１月	実践の振り返りとまとめ
２月	第３回公開授業研究会兼国際シンポジウム （佐藤学先生・約20ヵ国の研究者招聘）
３月	次年度研究構想図提示

４　実践内容（神根学校区での共通実践）

【私たちのミッション】

「すべての子どもが自分の力で幸せになれるようにすること」

解説

・「私たち」とは。
　神根地区内小中学校の児童生徒・教職員・保護者・地域住民
・「自分の力で」とは。
　他者に依存できる。他者と協働できる。ひとりでできる

【ミッション遂行の基盤となる哲学】

（１）公共性

公教育という使命を持ち、内外に開かれていて、多様な考えを交流しながら協働し社会参加すること

（2）民主性

全ての子どもの学びが保障され、学びの主人公となって共通の目標に向かって仲間と協働すること

（3）卓越性

他との比較ではなく、自分のでき得る最高のもの、自己ベストを追求することに価値を見出すこと

【ミッション遂行のための共有ヴィジョン（神根学校区が目指す姿としての３つの場)】

（1）子どもたちがよりよい自分になるために　学び育ち合う場

（2）教師も教育の専門家としてでき得る最高の仕事を目指して同僚と共に学び合う場

（3）保護者や地域の住民が教育活動に参加して互いに学び合う場

【神根学校区における授業改善の三要素について】

（1）活動（一斉、個人）

・観察する、読み返す、考えをまとめる、確かめる、操作的な活動をする、反具体物による思考等の知的な活動をする。

・対象とじっくりかかわり、自分で何らかの考えを持つ活動をする。

（2）協同（小グループ活動）

・多様な考え方をすり合わせることによって、互いの差異を認める。(考えを一つにまとめる必要はない)

・生徒同士の関わりで分かった生徒が分からない生徒をケアし、集団のレベルアップに繋げる。

・学びの結果をさらに深めたり、未知の課題に協同したりして挑戦できる。(ジャンプの課題)

（3）表現の共有（一斉）

・他者の話を聴き、自分なりの考えを創る。

・他者の考えと自分の考えの差異を確かめる。

・他者と関わる中で、自分の考えを吟味し、反省したり、考えを補強したり、拡げたりする。

【教師の仕事は三つ「聴く・つなぐ・もどす」】

（1）聴く

・その生徒の発言が教材やテキストのどことつながっているか。

・他のどの生徒の発言とどうつながっているか。

・その生徒自身の前の発言とどうつながっているか。

（2）つなぐ

・生徒の考えをつなぐ。

・生徒の考えとテキストをつなぐ。

・板書と生徒をつなぐ。

・今日学んだことと前に学んだことをつなぐ。

・教室で学んだことと社会で学んだことをつなぐ。

（3）もどす

・走りすぎたときにテキストにもどす。

・難しくなったときに課題にもどす。

・行き詰まったらグループにもどす。

・グループで話し合ったことを全体にもどす。

5　変容

（1）生徒の変容

グループ活動を中心に据えることで、授業中に孤立している生徒や授業の内容についていけず途方に暮れている生徒がいなくなった。

ジャンプの課題が教師から出されると、子ども一人ひとりが多様な考えを出し合い、多角的に話し合うことで論理的思考ができるようになった。

令和６年度埼玉県学力学習状況調査において、伸び率は各学年・市内平均よりもほぼ全ての教科で上回る結果となっている。また、学力上位層・中位層・下位層ともに伸び率の上昇を示している教科が多い。

（2）教職員の変容

まず、ベテラン教員が実践をすることで、一気に全教職員で実践する意識が高まった。また、職員室で授業（ジャンプの課題）についての会話が増えた。また、職員室での会話には、多くの生徒の授業中の様子が話題にあがるようになった。

（3）保護者・地域の変容

学校だよりやホームページ等で本校の実践を積極的に周知することで、保護者・地域から本校の学びの共同体の成果を認知していただけるようになった。

家庭・地域を巻き込んだ学びのイノベーション研修会では、非認知能力をテーマにメンタルヘルスケアの講演会を実施し大好評であった。

6　今後の展望

今年度で研究も３年目となり、充実・発展期に入った。来年２月には、約20ヵ国の教育研究者を本校に招聘し国際シンポジウムという形にして公開授業研究会を行い、本校の学びの共同体の成果を発信する。

今後とも「すべての子どもが自分の力で幸せになれるようにすること」を達成するために、神根地区の小中学校が一丸となり、実践を積み重ねていく。

探求と協働の学びへ
～学びの質の向上をめざして～

新座市立第三中学校
校長　石　田　和　男

１　はじめに

本校は、新座市南東部に位置し、本年度開校52周年を迎える、生徒数766名（24学級、うち特別支援３学級）の中規模校である。校区は練馬区と朝霞市に隣接しており、校区内には４つの小学校と２つの高等学校がある。黒目川沿いの低地と武蔵野台地に囲まれた緑豊かな地区である。

本校は「自ら学ぶ・心豊かに・たくましく」の教育目標のもと、（１）生徒一人一人を大切に〈認める・ほめる・励ます〉（２）地域を大切にし、地域と連携〈コミュニティー〉（３）チーム三中として同僚性を高める〈リスペクト〉を基本方針として教育課程を編成し、教職員一丸となって日々、教育活動に取り組んでいる。学校緑化活動に力を入れ、校地には四季折々の花が植えられており、生徒の笑顔と活気と挨拶のあふれる学校である。目指す学校像を「生徒一人一人の力が伸びる学校」とし、生徒一人一人に注目し、子供が伸びを評価されることで、自己肯定感を高め、喜んで次の第一歩を踏み出すことを目指している。

２　研究主題設定の理由

本校の生徒は、教員の指導に対してとても素直であり、落ち着いた雰囲気の中で規律ある生活を送っている。授業中の態度も真面目であり、集中して学習に取り組むことができる。

一方で学びを通して自ら課題を見出したり、考えを深めたりしながら、自らの学習を主体的に振り返り、継続的・発展的に学習を継続していく力に課題がある。

本研究において目指す生徒像を「自ら課題を見出し、その課題に対して意欲的に取り組み、他者と協働して解決の方策を考えていける生徒」とした。さらに、高い自主性・協働意欲・参画意欲をもった生徒像として、以下、具体的に言語化した。

・課題に対して意欲的に取り組める生徒
・これまで学習（経験）してきたことをもとに、自分の考えがもてる生徒
・自分の考えを積極的に表現できる生徒
・自分たちで課題を見出し、解決のために必要な方策を立案・計画することができる生徒
・解決の過程を自分たちで振り返り、評価し、更なる課題を見つけ出すことができる生徒
・積極的に仲間と協力し、課題を解決しようとする生徒

上記を踏まえ、研究主題を「探求と協働の学びへ～学びの質の向上をめざして～」とし、令和５年度より研究を進めている。

３　研究仮説

（１）「学びの共同体」による授業改革により、生徒の自主性・参画意欲・協働意欲を一体的に育むことができるであろう。
（２）生徒は社会の一員であるという自覚を高めながら、自己有用感を高め、学習に主体的に取り組むようになり、継続的・発展的に学習を進めるようになるであろう。

※学びの共同体による授業改革とは

（ａ）一斉授業の廃止

授業は４人グループ（男女混合）での学習形態を採用。これにより授業参加への求心力が働き、誰もが「授業に参加しやすい」環境を作ることができる。また、分からなくなったらすぐに聴き合える環境が学び合いを活性化し、一斉授業では受け身の姿勢の生徒も意欲的に取り組む姿を見せるようになる。

（ｂ）ファシリテーターとしての教師

「教える教師」から「学びをデザインする教師」へ教師の意識を改革することで、教師の話す時間が大幅に削減され、生徒が考える時間が増える。それにより、生徒が粘り強く課題に取り組む機会が保障され、自分たちの力で課題を解決したり、新たな課題を発見したりすることができるようになる。

（ｃ）共有の課題とジャンプの課題

授業の前半は教科書レベルの問題を扱い、後半は教科書レベルを超えた応用問題を扱う。はじめから

４人班で学習していることが助けとなり、非常に難しいジャンプの課題でも「やってみよう」という姿勢を生徒は見せるようになる。ジャンプの課題に夢中になる中で、基礎的な知識・技能を身につけることに対する必要感も高まる。

（ｄ）子供の学びに目を向けた授業参観・協議

研究授業・公開授業時の参観では、教師の「指導法」ではなく「子供の学び」を注視することで、明確なゴールに向けて多彩な方法を包摂するぶれない授業をイメージすることができる。参観後の協議においては、「指導について」の議論ではなく「子供の学びについて」を議論し、より生徒目線に立った授業改善を行うことができる。

４　研究内容（具体的な取組）

（１）１年間の研究のあゆみ

今年度は全教員による公開授業と相互参観の実施及び研究協議の実施を柱とした授業研究の充実に重点を置き、本校の「学びの共同体」のブラッシュアップを進めてきた。

☆第１回（４月）研究概要及び重点の確認
☆第２回（５月）授業デザイン検討会
☆第３回（６月）第１回公開授業研究会
　３・４校時　公開授業　５時間目　焦点授業
　全体会　講師：佐藤学氏（東京大学名誉教授）

◇授業省察・記録の取り方

・生徒の学びが途切れないように、授業中は生徒に話しかけず省察に集中する。
※机間巡視は極力避け、定点で注視する。
・教師の教え方ではなく、生徒の学びの姿に着目する。
・どの場面で生徒が「学んでいたか」または「学んでいなかったか」を観察する。
※省察シート・座席表に具体的に記入する。
・生徒を学びに向かわせる教師の仕掛けに着目する。
・本時の目標が教科の本質を追求する課題になっているかという視点で考察する。

☆第４回（７月）研究の振り返り
☆第５回（８月）ジャンプの課題検討
☆第６回（12月）２学期の振り返り
☆第７回（１月）授業デザイン検討会
☆第８回（２月）第２回公開授業研究会
☆第９回（３月）１年間の振り返り

（２）生徒アンケート

「授業で、友達と共同して取り組むことに喜びを感じる。」「授業の学習内容について、ねばり強く取り組んでいる。」等９項目について自己評価したものを成果指標としている。

アンケート結果

（参考：Ｒ６年２月実施）

５　成果と課題（○成果　●課題）

○他者と関わりながら課題を解決することに対して積極的な生徒が増えた。
○課題解決の過程で自分がグループにとって必要な存在であるという認識を持つ生徒が増えた。
○学びの共同体により、自分たちで課題を解決し、新たな問いを発見していく力を身につける環境が整った。
●試行錯誤を積み重ねることの大切さを実感させる手立ての充実。
●教師のファシリテーションスキルの向上。
●非認知スキルを適切に評価する方法の研究。
●「できる人ができない人に教えているだけ」のグループ活動の改善。
●つまずきを感じた生徒が「教えられるのを待っている」状態からの脱却。

６　おわりに

今年度は３年間の委嘱研究の２年目として授業研究会による研修を柱として多くの授業実践を重ね、とりわけ「ジャンプの課題」を充実させることに重点をおいた。生徒アンケートにおいて、「夢中になって取り組んでいる」、「もっと考えたいと思う場面があった」という回答をさらに増やせるように、課題の質を高め、生徒の主体的な学びを実現する。

来年度は委嘱研究最終年度となる。多くの生徒と教師が共に試行錯誤しながら得られた貴重な経験を研究成果として結実させていく。

地域と共に育む城南プライド
～城南地区に愛着と誇りを持たせるボランティア活動の推進～

川越市立城南中学校
校長　山　原　伸　治

１．はじめに

本校は、国道16号線や県道川越所沢線が通り、交通の利便性も高い川越駅西口周辺からウエスタ川越を含む川越市中心部の市街地に位置している。

昭和22年に川越第四中学校として開校（のちに城南中学校と改名）し77年目、生徒数584名、特別支援学級を含めて18学級の市内では一番生徒数が多い中学校である。

校舎は台地の外れにあり、窓からは遠くスカイツリーや秩父山地、富士山も望むことができる。

「絆をつよめ　共に高め合う　心豊かな生徒」を学校教育目標に掲げ、「自立した　逞しい　クリエイティブな生徒」の育成を目指し、生徒たちは、「心・眼・体を向けて」をキャッチフレーズに日々の授業はもとより、学校行事や部活動にも活発に取り組んでいる。

２．研究主題設定の理由

令和４年度に川越市からの研究委嘱を受け「ふるさと学習」に市内で最初に取り組んだ。自分たちの住む川越市や学校周辺の地域（城南地区）の歴史や良さを探求的に学ぶ中で、ふるさとへの「愛着」と「誇り」を育む取組を始めた。

令和５年度からはコミュニティースクール（CS）として認可され、地域に開かれた学校づくりを進め、地域（城南地区）の学校として、地域に育てられ、地域に貢献できる生徒の育成を目指している。

地域の自治会との話し合いの中で、少子化や子供会への未加入者の増加により、地域の行事に子供が集まらなくなっていることや、中学生になると地域の行事にも参加しない傾向があり、高齢者ばかりの地域の行事になっている地域の実態を知り、自治会も困っていることが分かった。

中学校は、CS やふるさと学習の取組から、生徒に地域に愛着や誇りを持たせ、地域に育てられる機会を作りたいと考えていた。地域に生徒を派遣し、地域に貢献できるシステム並びに、地域で子供たちを認め伸ばすシステムが出来ないか考え、ボランティア活動を始めることにした。

地域の自治会の要請により、行事に中学生を派遣すれば、地域が活性化すると共に、参加した中学生は地域に対する愛着や誇りが生まれ、自尊感情や自己有用感が高まる効果が得られるのではないかと考えた。

３．研究の手立て（研究の柱）

（１）地域を大切にした学校づくりをする。

①ふるさと学習の推進

「地域を知る・地域に生きる・地域に貢献」をテーマに、３年間を通して総合的な学習の時間でふるさと川越について学ぶ。

１年生…川越の魅力や特色を知る。地域にある職種・業種を知る。

２年生…川越（小江戸川越）の歴史を学ぶ。

３年生…川越おすすめマップの作製

②学校運営協議会の活用

地域に開かれた、地域と共にある学校を目指し、「地域が生徒を育て、生徒が地域を活性化する。」をテーマに熟議を何度も行う。

③ふるさと会議（自治会長会議）の立ち上げ

地域へ毎回の学校運営協議会の決定事項を伝え協力を要請する。また、各自治会長から、中学生を活用した自治会の取組要請を募る。

・地域に在住のふるさと学習の講師の推薦。
・社会体験学習の事業所の斡旋。
・ボランティア生徒派遣申請書の提出

（２）ボランティア活動を新たな城南プライドに。

①家庭科部のボランティア活動への参加

城南中の代表として家庭科部を市内の催し物にボランティア活動として派遣する。

②生徒ボランティア部を立ち上げる。

全校生徒対象に、「城南中生徒ボランティア部」を創設。生徒が持つ端末（クロームブック）でボラン

ティア参加の申請ができるようにする。

③ボランティアカードとボランティア表彰

ボランティアカードを全校生徒に配布し、活動を記録、ポイント制にした。ポイントがたまると生徒朝会で表彰する。

（３）読書活動の推進

様々な読書活動を推進する中で、ボランティア活動と結び付けた読み聞かせ活動を推進

①紙芝居・絵本の読み聞かせ

地域の保育園、介護施設に派遣

４．具体的な取組（ボランティア活動の実際）

【家庭科部】

「リレー・フォー・ライフ川越」、「かわごえ国際交流フェスティバル」「ふれあい祭り」等に学校代表として参加

家庭科部のボランティア活動

【生徒ボランティア部】

春……「新緑の会」‥地区社会福祉協議会の要請で75歳以上の高齢者200名を集め、中学校の会場で親睦会＜生徒は、司会、接待、余興（出し物）、吹奏楽部の演奏で活躍＞

夏……各自治会の夏祭りの運営補助、ラジオ体操の運営補助、小学生の学習補助

新緑の会

夏祭りのボランティア

介護施設訪問

保育園読み聞かせ

秋……秋祭りの運営補助、収穫祭の手伝い

冬……餅つき大会の手伝い

通年…介護施設、子ども食堂、子供の遊び場へ手伝い

保育園で絵本・紙芝居の読み聞かせ

５．成果と課題

〇成果

学校づくりの柱の中に、ふるさと学習、CS（学校運営協議会）、ボランティア活動を取り入れ、城南中が大切にする伝統（城南プライド）として、新たに生徒や教職員が意識して取り組むようになった。

（１）地域貢献（地域ボランティア）をすることで、地域に城南中生徒の活動がＰＲできた。

（２）地域の大人たちや子供たち（異年齢集団）の交流をとおして、コミュニケーション能力を高めると共に、地域から頼られ、褒められることで、自己有用感や自尊感情が高まり、自己肯定感が高まった。また、地域の方との交流を通して、地域に対する愛着が生まれてきた。

（３）ボランティア活動を通して、授業では味わえない自主自立の経験や活動を通して工夫する力（クリエイティブな力）が高まった。

（４）地域と中学生の関わりが生まれ、地域の活動が盛り上がった。また、生徒が地域の様々な活動に参加することで自分たちの住む地域の良さに気づき、地域を誇りに思う気持ちも高まってきた。

（５）ふるさと会議や学校運営協議会を通じて、各自治会長とのパイプを強め、学校に対する信頼関係も強くなった。

（６）ボランティア活動には、不登校気味の生徒や問題行動のある自己肯定感が低い生徒もいたが、この取り組みを通じて、校内では見られない嬉々とした姿や責任感のある姿が見られ学校生活においても自信が出てきた。

●課題

（１）各自治体とのやり取りに当たる教頭の事務量がとても増えた。将来的には、コーディネーターに任せたい。

（２）生徒ボランティア部の活動の振り返りをボランティアカードに記入させているが、もう少し丁寧な振り返りが出来れば、更に効果が上がる。

互いの個性や多様性を認め合い、
希望をもってよりよく生きようとする生徒の育成
～「考え、議論する道徳」の実践を通して～

ふじみ野市立葦原中学校
校長　山　﨑　祐　一

１　主題設定の理由

本校は、『時を守り・場を清め・礼を尽くす温かな葦原中学校』を目指し、信頼関係を基盤とした指導で教育活動を行っている。「道徳の時間」から「特別の教科　道徳」となり、毎時間の授業を大切にして、実践を積み重ねている。多くの生徒は、学校生活に前向きに取り組み、日々充実感を覚えている。しかし、学年が上がるにつれて不登校生徒が増加する傾向にある。これは、ＳＮＳの普及やコロナ禍における人間関係の複雑化を背景とし、自分の考えあるいは生き方そのものを肯定できない生徒が増加しているからと考えられる。そこで、道徳科の授業を通じて「考え、議論する」ことで自他の考え方や生き方の違いに触れ、互いの個性や多様性を認め合う中で、よりよく生きようとする道徳的実践意欲を高めていこうとする生徒の育成をねらいとして本主題を設定した。

２　研究の仮設

（１）　自分との対話を通して自身の考えをまとめる機会を確保し、話合いの形態を工夫すれば、道徳的価値について考え、議論が深まっていくだろう。

（２）　話し合った多角的な見方や考え方を受け、振り返りの際に自他の共通点や相違を考えさせれば、互いの個性や多様性を認め合う態度が育つだろう。

３　研究計画

時　期	内　　容
令和６年	・道徳アンケートの実施、分析
５月	・各クラスでの授業実践、プレ発表
６月	・校内研修
７月	（１学期の授業実践を踏まえて行う）
８月	・道徳研究推進モデル校　本発表
11月	
令和７年	
１月	・道徳アンケートの実施、分析
２月	・研究のまとめ

４　研究内容

「彩の国の道徳」について、各学年で年間指導計画の中に位置づけて活用を図る。また、学校だよりなどを通じて、保護者や地域に対し「彩の国の道徳」を活用した授業について理解が深まるように情報を発信する。仮説に迫る手立てとして、ＩＣＴ機器やポジショニング機能を使った話合いを日々の実践に取り入れていく。また、振り返りの際に自他の考えの共通点や相異点について触れるよう授業構成を改善する。令和６年５月と令和７年１月に道徳アンケートを実施し、規律ある態度や非認知能力の育成を視野に入れ、埼玉県学力・学習状況調査に係る「私は、誰に対しても親切にするようにしている。私は、その人の気持ちをよく考える」や「私は、誰かが心を痛めていたり、落ち込んでいたり、嫌な思いをしているときなど、進んで助ける」という項目を中心に、生徒の意識がどのように変容したかを分析する。

５　研究の実践

（１）「考え・議論する」道徳について

「話合い活動」を充実させるために、以下の取組を実践した。

ア　発問の吟味をすることで、「何を」考えさせたいのか明確にする。

イ「○○とはどのようなことだろう。」「○○はなぜ大切なのだろう」という「道徳的価値の理解を深める発問」をする。

ウ「これまで、どうだったのか。」「これから、どうしたいのか。」という「道徳的価値の理解を基に自己を見つける発問」をする。

エ　話合い活動の形態を、４名もしくは６名とする。

（２）　学校全体で「特別の教科　道徳科」の工夫

ア　道徳科の時間の「ルール」の共通化

イ「ローテーション道徳」の実施

学校にいる全ての生徒と関係をつくることを目標とする。

ウ　TT（チームティーチング）の実施

教職員の「得意」「経験」を活かすことを目標とする。

（３）　家庭・地域社会との連携

「話合い活動」に、保護者や地域の方々、学校運営協会委員にも参加をしていただくことで、生徒だけでなく、様々な世代の視点や意見をもとに、「『考え・議論する』道徳」をより良いものにしようと試みた。

ア　実施に向けた事前準備

（ア）　事前に、学級通信等で案内

（イ）　15～20名程度が参加希望

（ウ）　各班に２～３名程度の保護者や地域の方々が入る。

（エ）「話合い活動」の際は、生徒→保護者・地域の方々の順で話し合う。

イ　生徒（○）・保護者等（◎）の感想

○　保護者や地域の方々の意見を聞き、そのような考え方もあるなと思いました。

○　生命の大切さについて、保護者の方の言葉が印象に残った。

◎　話合い活動に参加し、生徒の意見を聞き、私自身の「気づき」にもなりました。家に帰ってからも話の続きを食事の時にしました。

◎　いつも見かける中学生の考えがしっかりしていることに感心しました。

６　成果と今後の課題

こうした取組を行うことで、保護者による学校評価にも変容が見られた。

「学校は、一人ひとりの個性を伸ばす教育を目指している。」という質問項目に対して「そう思う」「だいたいそう思う」と回答した割合は、以下のとおりである。

R５．７月	R５.12月	R６．７月
85%	89%	94%

また、「学校は、保護者や地域とともに学校運営を支える体制を構築している。」という質問項目に対して「そう思う」「だいたいそう思う」と回答した割合は、以下のとおりである。（R5.12月より新設した項目）

R５．７月	R５.12月	R６．７月
―	92%	99%

さらに、11月19日（火）に埼玉県道徳教育研究推進モデル校研究発表を行い、参観者から次のような感想をいただいた。「生徒たちがよく考え、話し合い、授業に参加している姿がとても良いと思いました。」「学級の雰囲気が非常に温かく、生徒同士が活発に対話している様子が印象的でした。」

今後も教育実践を継続することで、「互いに個性や多様性を認め合い、希望をもってよりよく生きようとする生徒の育成」を図っていく。

学び合う集団の育成
～地域を支え、地域に貢献する次世代の育成～

皆野町立皆野中学校
校長　板　倉　邦　弘

１　はじめに

皆野中学校は、荒川右岸、河岸段丘上の縄文時代の遺跡の上にあり、町のほぼ中央に位置している。学区は山間地、平坦地を含めた町内全域に広がり、静かで豊かな自然環境の中にある。生徒は素直・純粋であり、積極的に学校生活に取り組んでいる。校歌に歌い継がれる校訓「剛き意志」「深き愛」「自由の胸」「純なるこころ」を土台に、保護者や地域とともに、多様な教育活動を協働して展開している。

２　研究主題の設定

○学習指導要領前文から

これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。

○皆野町の取組として

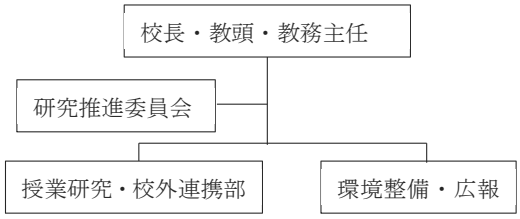
皆野町ではふるさと教育「みなの学」を推進し、郷土を愛する心の育成と様々な人とのつながりづくりに取り組んでいる。この取組を通して、児童生徒が、地域や企業など多様な人々とつながり、地域の課題解決に向けて、自ら考え主体的に行動することのできる力を育成したい。この取組を継続し、持続可能な社会（住み続けられる町）の創り手を育成していきたい。

以上の２つの観点から、本校では研究仮説を以下のように設定した。

○研究仮説

ＳＤＧｓについて考え、学び合う集団を育成すれば、「多様な視点から問題を解決する力」「互いの意見を尊重し、認め合う力」「能動的に行動する力」が向上し、地域の課題を自分事としてとらえ、地域に貢献する生徒を育成することができるであろう。

３　校内研究組織について



授業研究・校外連携部
・SDGs の視点を入れた年間計画等作成
・授業研究の計画・立案
・SDGs の取り組みに関わる校外との調整

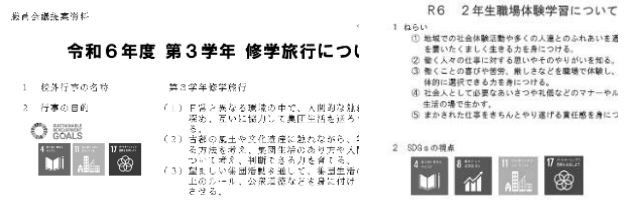
環境整備・広報部
・SDGs コーナーの整備
・SDGs の取組のまとめ・紹介

４　具体的な取り組み

○各研究部の取り組み

授業研究・校外連携部

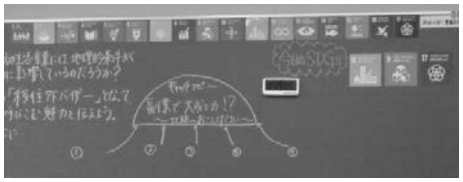
⑴ SDGs の視点を入れた年間計画等作成



すべての計画に SDGs の視点を入れ、提案・実施した。

⑵授業研究の計画・立案

各教科 SDGs の視点を入れた授業を立案・実施した。



←（社会科授業研究）

⑶ SDGs の取り組みに関わる校外との調整

←起業家講座
（こま塾 代表 玄間博己氏）

自らの体験から、学ぶことの楽しさや、地域と共にはぐくむことの大切さを語っていただいた。

環境学習応援隊→
（来ハトメ工業）

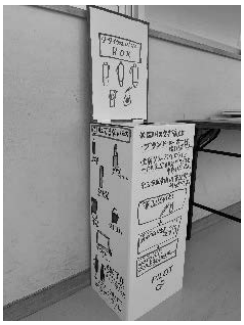
SDGs について学び、自分自身の目標がどのSDGs の目標と結びつくかを考えた。

←環境学習応援隊
（パイロットコーポレーション）

使用済みペンリサイクル活動の紹介。使用済み筆記具を集めてもらい、分解･分別･分析を体験した。

環境整備・広報部

⑷ SDGs コーナーの整備



SDGs にかかわる書籍を充実させ、教室前に置くことで SDGs を身近なものに感じられるようにした。また、手作りのリサイクルボックスを各階に設置した。

⑸ SDGs の取組のまとめ・紹介

SDGs コーナーを各階に設置し、本校で行った取組を紹介したり、SDGs について発信したりした。

○各学年の取り組み

⑴ 1 年　皆野町と他の町を比較しよう

～皆野町と他市町村を比較して住み続けられる町づくりを実現しよう～

皆野町の地形や人口、特産物などについて調べまとめたのち、校外学習で見学してきた町と比較することで、皆野町の良さを再発見した。

⑵ 2 年　地域の産業について知ろう

～地域の産業を知り、住み続けられる町づくりを実現しよう～

地域資源を活かした産業を行う会社にも協力していただき、職場体験学習を行った。

⑶ 3 年　皆野町の未来を創造しよう

～地域の課題を解決し、住み続けられる町づくりを実現しよう～

地域の人たちと共に皆野町の課題について考え、その解決策について話し合った。

5　生徒の振り返り

・補充用のインクがあると知り、SDGs で地球温暖化対策もできるので、使いたいと思いました。
・職場体験を通して、利用される側になってみると目には見えない工夫や優しさがあることを知りました。この経験を普段の生活にも活かしていきたいです。
・皆野町の人口減少の現状を知り、町の活性化のために自分のできることを考えたいと思いました。

6　成果と課題

・SDGs コーナーの設置や、各取組によって生徒にとって SDGs の取組は身近な物であると感じさせることができた。
・学年ごとに皆野町について調べたり、体験したりすることで、身近な課題に対して、自ら考え、主体的に行動を起こす力が高まった。
・一時的な取組ではなく、持続可能な取組になるよう仕組み作りに努めていきたい。
・皆野町がこれからも「住み続けられる街」になるよう、今後はこの取組から生徒の考えを町に提言できるようにしていきたい。

一人一人を大切にした人権教育の推進について

～様々な人権問題を正しく理解し、差別をなくしていこうとする実践的態度を育てる～

深谷市立明戸中学校
校長　相　川　至　宏

１　はじめに

本校は、新一万円札の肖像で「日本資本主義の父」と呼ばれる渋沢栄一翁生誕の地。本市の北東部に位置し、利根川や荒川によって形成された豊かな自然環境に恵まれている。

昭和22年に開校し本年度78周年を迎える。全校生徒は99名、通常学級４学級、特別支援学級２学級の小規模の学校である。目指す生徒像を「夢とこころざしをもち、まごころと思いやりのある明戸の子」とし、地域とともに生徒一人一人へのきめ細やかな指導・支援のもと確かな学力と自立する心をはぐくむ教育活動にあたっている。

２　研究主題設定理由

本校の教育目標は「自ら進んで学ぶ生徒」「思いやりのある生徒」「健康で粘り強い生徒」である。生徒は明るく素直で落ち着いた学校生活をおくっている。しかし、ここ数年、いじめ不登校など生徒指導に係る諸課題は増加傾向である。特にネットトラブルを含め生徒の内面に起因するものが後を絶たない。そこで、教育活動をとおして、他者の痛みを共有できる豊かな人間性の醸成を図り、人権課題に対する正しい理解と認識を培い、差別を解消しようとする意欲と実践的態度を育てるねらいから「人権教育の推進」を学校研究課題及び本研究主題として設定した。

３　研究仮説

本校での人権教育を推進する具体的な取組は、人権教育に係る研修会の実施と年間３回実施する人権旬間の取組である。生徒・教師が人権課題に対する正しい理解と認識を培い、解消への意欲と実践的態度を育てる。それにより、人権感覚を磨くことができれば真に思いやりのある生徒を育成できるであろうと考え研究仮説を設定した。

４　研究内容（具体的な取組）

（１）人権旬間の設定とその取組

①１学期「いじめ」問題を考える。全体指導、学級指導。「いじめ撲滅宣言」のクラス討議と生徒朝会でのクラスごとの宣言、まとめ

②２学期「性の多様性の理解について」市人権教育専門員を講師として招き、講義、事後指導として学級での振り返りとまとめ

③３学期　同和問題「部落差別を含めた差別問題の理解と解消に向けて」人権担当による全体学習、担任によるクラス学習、まとめ

④その他　人権旬間における生徒と職員が「心がけたいこと」メッセージの作成と生徒掲示、生徒人権ポスターの掲示

（２）教職員を対象にした研修会の実施

北部教育事務所の人権担当指導主事を講師に招き「差別問題への理解と生徒への指導について」と題した研修会の実施

・『同和問題　未来に向けて』のＤＶＤ視聴
・部落差別を含めた差別問題について
・学級での指導について
・質疑応答

（３）生徒への事前指導の内容

保護者あて通知の発出「教育計画に基づく人権学習の実施について」→　職員の研修内容、生徒への指導内容に及びアンケートの実施について

・生徒アンケートの内容

質問①差別に関わる人権問題について知っているものを書いてください。

質問②もし自分が差別を受けたらどうしますか

質問③友人や親しい人が差別をしていたらあなたはどうしますか。

（4）生徒を対象にした全体学習の内容

・全校朝会では人権担当による全体学習を実施。人権学習のねらいを説明し、資料をもとに「差別」について考え、同和問題は大きな社会問題であることを意識し、生徒とともに進めた。

・下図の生徒アンケートの結果から　男女差別人種差別等について知っている生徒は多い、部落差別についてはわずかであった。差別問題の根本にあるものは同じであり、その中でも部落差別について取り上げた。身近な人（親、友人など）による差別は解消できるのか問題提示した。

・活用した資料の１つ目は県民意識調査の結果から「お子さんの結婚相手」→25％は同和地区出身であるという理由で「避ける、関わらない」と回答
　２つ目は部落差別に関する報道記事（裁判中）について令和５年12月７日埼玉新聞
　３つ目は埼玉県の条例「部落差別の禁止を規定」→インターネットで差別的な書き込み

・『同和問題　未来に向けて』ＤＶＤ視聴

（5）道徳授業による学級での指導

・道徳科　差別や偏見のない社会　内容項目「公正・公平社会主義」として実施。道徳授業では発問→自分の考え→グループでの学び合い→グループの考え、意見交換、発表

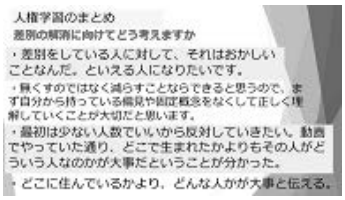
発問１「その土地に生まれたことで差別されることについて」どう考えるか。

発問２「将来、身近な人が同様の差別をしたらどうしますか」

発問３「差別を解消するにはどうしたらよいですか」

（6）事後指導の実施

まとめと振り返りは全校朝会において実施。校長講話の中で人権学習のまとめ「差別の解消に向けてどう考えますか」にふれ、学習における生徒の変容を含めた内容。学校だよりやホームページにも掲載。



５　成果と課題（○成果　●課題）

（1）教職員の変容

○中学高校で「同和問題」について学習した記憶が残っていた。今も「同和問題」と聞くと意識のスイッチが入り「差別をしない」指導がぶれずにできた。生徒にも正しく理解することを学ばせ、その生徒が増えれば必ず差別解消につながる。

○教師が正しい知識をもつ重要性を感じた。自分の言動に責任をもって生徒たちに接することができることを確認した。

○身近にある差別や偏見について教師の人権の感度を高めることで複雑化した人権課題にも対応できるのではないか。

（2）生徒の変容

○同和問題をテーマに人権作文を書く生徒が増えた。

○差別をしている人に対して、それはおかしいことだといえる人になりたい。

○無くすのではなく減らすことならできると思うので、まず自分が持っている偏見や固定概念をなくして正しく理解していくことが大切だと思います。最初は少ない人数でいいから反対していきたい。ＤＶＤの内容にあった様に、どこで生まれたかよりもその人がどういう人なのかが大事だということが分かった

（3）課題

●大人の意識に根強く残っている同和問題は、明戸地区全体で学び合い、公民館や保護者と連携した取組が必要である。

●教育活動を通して生徒に「人権尊重の精神」を育み、いじめや差別、偏見を見抜き、行動できる資質・能力を高めるには指導に当たるすべての教師の人権感覚を高める必要性がある。

多様な学びを通して、自己の生活に生かせる資質と能力の育成
～書くことで考えを整理し、伝え合うことで学びを深める教育実践を通して～

越谷市立南中学校
校長　武　藤　健　司

１　はじめに

本校は、昭和22年に開校し78年目を迎えた歴史と伝統をもつ学校である。学校教育目標を「豊かな人間性を持ち、自立して生きる生徒の育成」のもと、スローガンを「心からのあいさつ・清掃・合唱」として教育活動の実践に努めている。

また、令和９年４月に現在蒲生小学校の敷地内に建設中の新校舎の移転が控えている。そこから、蒲生小学校とは施設一体型小中一貫教育、蒲生南小学校とは施設分離型小中一貫教育を同時並行で進めていく学校となる。

２　研究主題設定理由

越谷市では、小中一貫教育の第２期を迎え、蒲生小学校が新たに加わり、南中学校区４校が新しい小中一貫教育を推進していくこととなった。今まで取り組んできた活動を継続していきながら、９年間を見通し系統性のある指導、学習と生活規律の徹底、言語活動等をさらに充実させ「思考力・判断力・表現力」の向上に向け、毎日の授業に「小中一貫共通の視点」を盛り込んで指導の統一性を図っていく。

令和４年度からは、蒲生小学校と蒲生第二小学校が合併し、新たに、蒲生小学校となった。令和９年度には、（仮称）蒲生学園として、新たな小中一貫校として出発することになる。この日に向けて、以下の視点で、研究を推進する必要があると考える。

○「授業における８つのポイント」を踏まえ、各教科の「見方・考え方」を活用する授業を全教科で実施する。

○小中一貫校における９年を通すカリキュラム実施のため、その核となる総合的な学習の時間について、防災学習を核としたカリキュラムを作成、実施する。

○新学習指導要領作成に向けて中央教育審議会で出された「資質・能力」の系統表、及び、単元配列表を活用して、全教科における小学校と中学校の系統性を意識した授業を実施する。

○新しい時代の教育に求められる個別最適な学習、ギガスクール構想に基づくＩＣＴを活用した教育活動を充実させる。

○不登校児童を減らし、個に応じた教育を一層推進するため、特別支援教育を核とする個に応じた生徒指導・教育相談体制を確立する。

３　研究仮説

授業や行事を通して、意図的・計画的に「書く場面」「話し合う場面」「発表するする場面」を設定し「活躍の場、ほめる場、称賛する場」を数多く取り入れ、自信をもたせ、自己肯定感の高揚を図る指導に取り組み、学力を向上させていく。

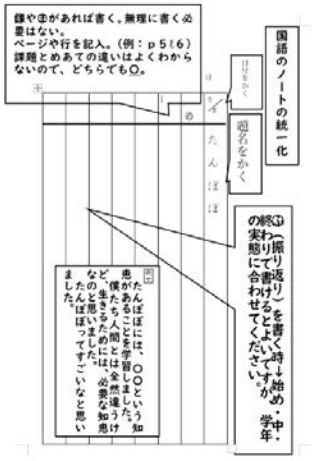
４　研究内容（具体的な取組）

（１）【書く】【話し合う】【発表する】の効果的な活用

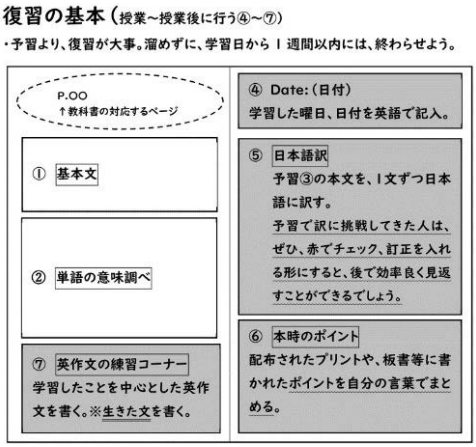
特に「書く力」については全教科を通じて育成し、どの教科でも以下のように同様に取り組んだ。

○５行作文（書き出し、本論、まとめ）から始め、原稿用紙200～400字をかける児童生徒を育成する。その後、児童・生徒同士の添削等通じて、量から質への転換をはかった。

国語のノートの基本

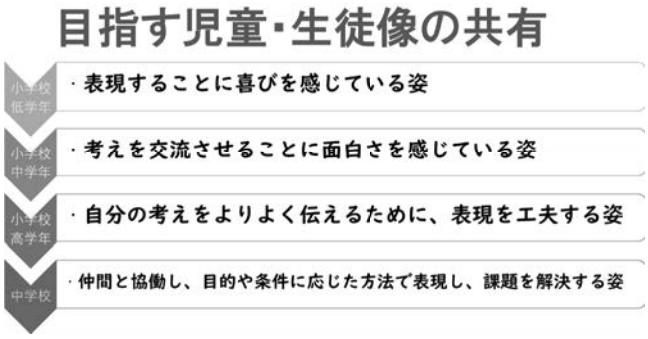


英語のノート
基本



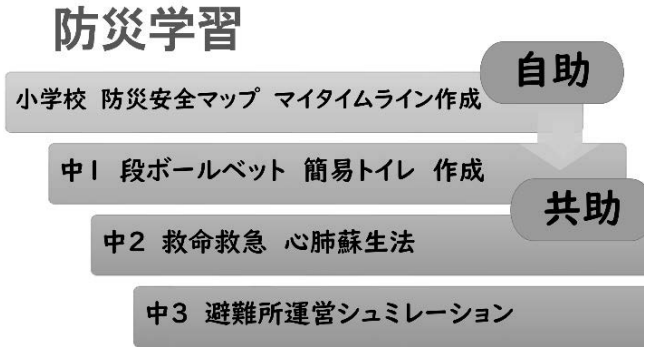
（２）発達段階に応じた発表する姿の共有化

○発達段階に応じた発表する姿を動画でまとめ共有化することで目指す生徒像を明確にした。



（３）総合的な学習の時間の充実（防災学習）

総合的な学習の時間において、防災学習を核にして発達段階に応じたカリキュラムを作成した。小学校段階では、自分の身は自分で守る（自助）を中心に学習し、中学校段階では、地域社会の中で災害の中どのような行動をとればいいかを考える（共助）学習を実施した。



特に中学２・３年生では、いろいろな価値観があることを理解し、その中で最適解を見出すカリキュラムを用意し体験することで、防災学習を通して「生きる力」を身につけられるように心がけた。

○みんなでわけよう

まもるいのちひろめるぼうさい（赤十字）

○避難所誘導に協力しよう

（一般社団法人防災教育普及協会）

５　成果と課題（○成果　●課題）

○工夫して書く活動ができるようになってきている。

○発達段階に応じた書く・発表する活動が共有できた。

●学習の成果を生活に生かすための具体的な手立てが不十分である。

６　終わりに

本研究を推進することによって、先行き不透明な時代の中で、身につけなければならない資質・能力が養われると考える。そのため今後も校区内小学校とともにさらなる研究を推進していきたい。

学力・体力の向上と豊かな心を育成する小中一貫教育の推進
～「特別の教科道徳」の「深める」授業展開と実践～

八潮市立八條中学校
校長　檜　田　勝　巳

１　はじめに

本校は、埼玉県南東部の八潮市北部に位置し、周囲は田園が広がり、緑豊かで静かな環境の中にある生徒数111名、通常の学級３、特別支援学級２、計５学級の小規模校である。今年度から八潮市立学校小規模特認校制度の適用を受け、市内学区域外から生徒２名が転入学している。

昭和52年に創立・開校し、学校教育目標『心豊かに共に伸びゆく生徒　―時を守り　場を清め　礼を正す―』を掲げ、今年度開校48年目となる。

《八潮市学校教育エイトプラン》に基づき、【重点Ⅰ：小中一貫教育の充実】を小中一貫教育研究委嘱指定校として連携小学校と共に推進している。【重点Ⅱ：いじめ防止及び不登校生徒を生まない指導体制の充実】を目標に、保護者、連携小学校、連携他機関、地域の方々のお力添えをいただきながら、子どもたちの確かな「学力」、たくましく生き抜く「体力」、豊かな「心」を育成している。

２　生徒の実態

本校の生徒は明るく穏やか且つ誠実で、規則正しい学校生活を送っている。多くの生徒が教師の指示やアドバイスを素直に受け止め行動することができる。９年間を見越した小中一貫教育の一つの成果である。授業や諸活動に、仲間たちと共に協力的な姿勢で臨み、その静謐な学校生活から学校外でも落ち着いて生活することができ、生徒指導上の問題は極めて少ない。

３　主題設定の理由

本校には、不登校生徒や表に見えにくい課題を抱えている生徒が、各学年に一定数存在している。また、本校生徒の多くには、学習に自ら進んで根気よく取り組むことが苦手な傾向が見られ、全国学力・学習状況調査や埼玉県学力・学習状況調査等において、全国平均・県平均を下回る。これらは、生徒の上級学校への進学はもちろん、将来のキャリア形成において根幹となる本校の大きな課題である。

そこで、本校では授業改善を課題解決の一丁目一番地と捉え、校内研修を推進してきた。これまで、学習指導要領が示す「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業モデル「八潮スタンダード」の「深める」展開について、各教科における授業改善を推進してきた。この研修成果の上に、昨年度から「特別の教科道徳」を研修教科とし、授業改善と合わせて、いじめ・不登校を生まない指導体制の充実に繋がる生徒の豊かな心の醸成を図る道徳実践について研究を行う。

４　具体的な取組の概要

（１）「特別の教科道徳」の授業改善

○「深める」を重点に「考え、議論する道徳」へ、工夫・改善を図る。

生徒による主体的な課題設定から教師は効果的な発問をし、生徒が一人で…ペアで…トリオで…グループで…全体で…考え議論する学習形態を工夫する。その際、教師がコーディネーターとなって効果的な補助発問や切り返しを随時行う。担任だけでなく、全教員がローテーションで道徳授業を実施し、ゲストティーチャーとのＴ．Ｔ．や管理職による授業も取り入れる等、授業をより豊かなものにするための柔軟な取組を行っている。

○様々な授業方法の研修を取り入れ、互いに授業を公開し、生徒の学びに最適解の方法を選択する。

八潮市教育委員会指導主事、東部教育事務所指導主事、他市町立中学校の校長先生、退職校長先生等を指導者として招聘し、道徳教育推進教師を中心に研修を実施している。模擬授業や講義を通じて、また、互いに授業を見合い参加する等して、教師も考え議論して道徳授業改善に取り組む。

○ ICT 機器を効果的に活用し、個別最適な学びと協働的な学びを実現させる。

GIGA スクール構想に伴う一人一台端末を活用し、授業支援クラウドによるアンケート機能や意見共有ソフト、心情グラフ等を効果

的に授業に取り入れている。50分の中で生徒同士の意見共有及び集計が瞬時にできる等の利点に加え、教師が事後、生徒の心の変容をしっかりと見取れる点に効果的なツールとしての可能性を実感している。

（２）小中一貫教育（八條中学校ブロック）の充実

○《小中合同大運動会》八條北小学校との小中合同大運動会は16回目を迎えた。中学生は自分が小学生だった時のことを振り返り、自分の成長を再確認するとともに、小学生へのあたたかい視線と手を差し伸べる心を醸成する。

○《ジョイント教室》連携小学校の６年生を対象とした活動。学期ごと全３回実施し、中学校施設探検、中学校教員による体験授業、中学生との交流授業、部活動体験、学校紹介等を実施。小学生は中学生になる不安を軽減し期待値を高め、中学生は学校を誇りに思う気構えを持ち後輩を迎える先輩としての良い準備の機会となっている。

○《田植え・稲刈り体験》毎年、地域の方のご厚意により連携小学校の５年生と本校１年生が合同で実施。周辺環境の利点を生かした貴重な農業体験であり地域の方との交流の絶好の機会となっている。収穫したお米は精米して自然体験教室の飯盒炊爨で使用する等、食育の一端を担っている。

○《交流授業・合同授業》連携小学校の外国語の授業に本校英語科教員がＴ．Ｔ．で参加したり、本校の体育授業に小学校の教員がＴ．Ｔ．で参加したり、児童生徒が互いの学校に出向き合同授業をしたりといった活動。児童生徒の交流はもちろん、積極的な教師間交流を推進している。

○《本の読み聞かせ》連携小学校へ有志生徒が出向き、本の読み聞かせを実施。自ら選書した絵本を読む自身に注がれる小学生の輝く瞳の光に、生徒は自信をもらい、皆胸を張って帰校する。

（３）本物に触れる体験活動・出前授業の充実

○《国際理解教育》在日大使館／オペラ／フランス文化歴史／フェンシング／太極拳／中国音楽／メキシコ文化歴史／韓国文化歴史／韓国語／アイルランド文化歴史／アイルランド音楽／インディアカ／ドイツ音楽／パデル／ JAICA 派遣教員　他

○《福祉教育》保育実習／ゴールボール／車いすバスケ／障がい者疑似体験（紙コップ・手話・白杖・点字）／認知症サポーター養成講座／モルック／卓球バレー／デフフットサル　他

○《環境教育》浄水場／八條キラリ／リサイクルプラザ／パーシクル／東京ガス／原子力財団　他

○《進路指導・キャリア教育》卒業生から学ぶ会／高校出前授業／進路学習会／職業体験３DAYS（大学経営学部マーケティング／看護師／大工／ｅスポーツ／美容師／新聞記者／旅行代理店／トリマー／料理人／カメラマン／司書／漫才師／マジシャン／アロマセラピスト／建築家／イラストレーター）／租税教室／模擬裁判／マナー講座　他

○《情報教育》デジタル・シティズンシップ教室／ネットモラル講座　他

○《特別の教科道徳》歌う道徳教育講演会　他

○《保健体育科》元プロ野球選手プロバスケットボール選手による体育実技講習会／部活動トレーニング講習会／全校球技大会「ボッチャ」／“熱中症予防＆中学生期に必要な栄養”講義／救命救急ストレッチ・筋トレ講座　他

○《技術・家庭科》箸作り／巣箱作り／本棚作り／出汁作り／食育講演会／食育指導／浴衣着付け　他

５　成果と課題

（１）成果

「考え、議論する道徳」の授業改善が、他教科・領域の授業改善にも繋がり、各学力・学習状況調査に見る生徒の基礎学力向上が顕著である。また、道徳を扇の要とした心の醸成は、あたたかい学級作りに繋がり、自他を大切にしながら節度を持ってより良い学校生活を送ろうと努める校風ができてきている。

（２）課題

形成されるコミュニティーの小ささから、外部に発信・表現する力や他者と競い合い粘り強く取り組む力、自己肯定感の低さ等が課題に挙げられる。真摯に課題を見つめ、日頃の授業の工夫・改善に加え、特別活動の充実等、他校・他機関との交流活動を推進する等、今後も小規模校の強みを模索・追求しながら、生徒の「未来に生きる力」を育む。

高校生の盆栽体験
～地元が世界に誇る日本文化の良さや美しさを体感し、伝えよう～

埼玉県立浦和北高等学校
校長　加　藤　友　作

１　はじめに

本校は、昭和53年に開校し、近くに荒川が流れる自然豊かで落ち着いた環境に立地している。平成８年度に県内普通科高校として初めて単位制を導入し、80を超える多様な選択講座から、生徒一人ひとりが、自分の興味・関心や進路希望に応じた時間割を作成することができる。３年次で美術履修者以外も選択可能な「美術総合」では、８年前から、盆栽を取り上げた授業を実施している。

２　研究主題設定理由

本校の生徒は非常に真面目で、何事にも熱心に取り組む。豊かな感性を持っており、打てば響く生徒である。美術担当教員は、美工研教員研修で訪れた「大宮盆栽美術館」で、盆栽は世界に誇る芸術であり、さいたま市にある大宮盆栽村は盆栽のメッカであること、盆器の上に風景を作るという体験がとても面白いということを知り、本校の生徒であれば、盆栽を授業で取り上げることが可能ではないかと考えた。そして、盆栽の素人である教員からよりも、生徒が専門家から直接教わることが理想であると、次のような授業を計画した。

①　盆器制作　……　４時間
②　学芸員による講義　……　１時間
③　企画を考える　……　１時間
④　ワークショップ　……　２時間
⑤　美術館での展示　……　６日間
⑥　盆栽×抽象画の写真撮影　…　１時間

３　研究概要

①　盆器制作　…　４時間

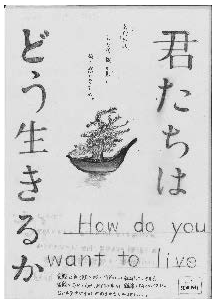
盆栽の定義は、「盆器に植え、整えた樹木」である。市販品の盆器を使うよりも、盆器から手作りした方が個性的で愛着も湧くと考えた。導入として盆栽を簡単に説明し、見本の苗の大きさに合わせた市販の鉢を見せ、土で盆器を制作する授業を行った。手ろくろもない環境なので、画用紙の上で制作させた。生徒のほとんどが陶芸初体験で、「土が冷たい」「懐かしい感触」など言いながら、一生懸命に成型していた。２時間で１つの盆器を制作し、２つのうち出来の良い方を残して、そうでない方は外のレンガの上に叩きつけて割って再利用の土とした。本校には陶器を焼く窯がないので、焼成は外注をした。１つ１つが、個性溢れる作品に仕上がった。

②　学芸員による講義　…　１時間

大宮盆栽美術館の学芸員（現さいたま市漫画会館学芸員）の方に「Where are you from? で気付いた埼玉の魅力　作る・感じる・伝えるについて」というテーマで、出前授業を行っていただいた。なぜ芸術を学ぶのか、自分を知ることの大切さ、盆栽や漫画などさいたま市の文化、現代アートの面白さ、視覚障がいのある人の鑑賞について、そして進路実現を間近に控えた生徒たちへのエールなど、盛りだくさんの内容であった。「盆栽は過去があり、今があり、未来がある唯一の芸術である」という言葉で、盆栽の魅力を伝えていただいた。

③　企画を考える　…　１時間

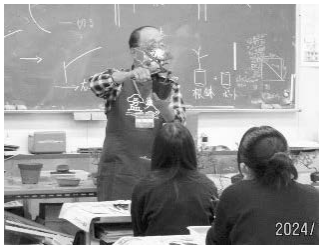
学芸員の方から出してもらった課題である「**あなたが盆栽美術館の学芸員だったら、どんな展示やワークショップを行うか**」について考え、イラストつきの企画書を作成させた。講義の中で、「あなたが経験して感じたことを、どのように伝えるかが大切」という話



をしていただいたので、そのことを踏まえて主体的に考えさせた。若い高校生ならではの発想が、大変面白かった。

④　ワークショップ　…　２時間

生徒が事前に制作した盆器に、苗木を植えて盆栽を作る授業を行った。盆栽インストラクターやボランティアの方を講師に、苗木（長寿梅）の見どころ探し、剪定、植え替え、水やりまで、直接指導していただいた。実演を交えながら、「盆栽は引き算の美である」「自ら風景を作る」「風の流れを意識する」など、とても分かりやすい授業をしていただいて、盆栽の魅力を肌で感じることができた。初めはためらっていた生徒



も、自分の木と盆器とのバランスを考えながら剪定作業を行っていた。目を輝かせながら夢中になって制作し、盆器の落ち着いた灰色、瑞々しい翠の苔と赤い花のコントラストが美しいミニ盆栽がたくさん出来上がった。授業の最後には、自分の作品と記念撮影を行った。

⑤　美術館での展示　…　６日間

10月25日から30日まで、大宮盆栽美術館のロビーに、生徒の盆栽48鉢と企画書８枚を展示させていただいた。ちょうど長寿梅の花がたくさん咲き、来場者の目を和ませてくれた。生徒は、自分の作品が展示されているのを見て喜び、美術館が所蔵する盆栽の名品の数々をじっくりと鑑賞することができて、良い経験となった。

また、外国人観光客が多く、盆栽が海外でも愛好されていることを実感し、地元の文化に誇りが持てたようであった。最後に、陶芸、講義、ワークショップについての感想のレポートと、盆栽美術館を訪れてのレポートの２枚を提出させた。レポートには、「たくさんの学びがあった」「貴重な体験が出来て本当に良かった」「盆栽は大切に育てていきたい」といったことが多く書かれていた。

⑥　盆栽×抽象画の写真撮影　…　１時間

１学期に制作していた抽象画と盆栽を組み合わせて写真を撮り、題名をつけて発表した。

４　おわりに

高い専門性を持った人に教えてもらうことで、生徒の興味や意欲、感性を何倍も伸ばすことができた。また、「若い人に盆栽の魅力を伝えたい」という相手側にもメリットがあり、外部と連携した授業は双方にとってWin-Winの関係にあるということが分かった。地域の文化である盆栽を体験してほしいという思いで始めた取組であったが、その中で「自分のルーツについて知ること」「作って、感じて、伝えることの大切さ」「自分の感性を活かす」「引き算の美がある」「美術館の良さ」など、様々なことを教えていただき、体験して実感することが出来た。教員以外の、複数の素敵な大人に関わってもらうことで得られる豊かさがあると感じた。新聞社やテレビ局の取材を受けるなど、本校をＰＲできる機会にもなっているので、今後も継続していきたいと考えている。

福祉支援に向けた課題解決における取り組み
～ALS 患者向けコールスイッチの開発～

埼玉県立大宮工業高等学校
校長　山　﨑　正　義

１．はじめに

今回の取り組みは、熊谷保健所からの依頼により、ALS 患者向けの意思伝達装置（コールスイッチ）の製作と装置の評価を行った。患者様の病状や意思伝達装置について理解するために外部と連携し、ALS 交流会の参加や意思伝達装置の技術や機能について学び、患者様の病状に合わせたコールスイッチの製作に取り組んだ。また患者より頂いたレビューから課題を見つけ、改善を重ね、コールスイッチの改善を行った結果について報告する。

２．熊谷保健所からの依頼

2023年６月に埼玉県熊谷保健所より、ALS 患者向けの意思伝達装置の製作依頼があった。依頼内容は、在宅ケアをする ALS 患者に対し装置の導入を検討するが、家族の高齢化や支援者が機械に不慣れな場合、装置の導入が難しい状況であり、患者の安心した生活の補助ができないのが現状である。

そこで、ものづくりを学ぶ本校の生徒に患者の病状にあわせた意思伝達装置の製作の依頼があった。昨年度に引き続き、３年の課題研究授業の中で生徒８名が福祉班として活動を行った。

３．目的

「福祉」をテーマに以下３つの目的を設定した。

（１）ALS について学び、福祉に興味を持つ。

（２）患者様に合わせた装置の開発に取り組む中で、生徒の資質・能力の向上を目指す。

（３）生徒の主体的に取り組む態度を養う。

これらの目的を達成できたか、生徒の変容をみるため、装置の製作とレビューを２回行った。第１弾の装置を製作後、ALS 患者より頂いたレビューから課題を見つけ第２弾を製作し改善を目指した。

４．ALS とは

ALS（筋萎縮性側索硬化症）は運動神経と感覚神経が変性され、筋肉に脳からの命令が上手く伝達できない病気である。脳では理解できているが、筋肉に脳からの命令が伝達されないため感情表現が上手くできない。筋肉が動かなくなると、会話ができなくなるため、意思伝達装置としてスイッチ等を使用しコミュニケーションを取る必要性がある。

５．外部との連携による学習

①熊谷保健所とのディスカッション

ALS の病状と意思伝達装置について理解を深めるため、熊谷保健所の担当者よりＡＬＳ患者の生活についてお話を伺った。患者によって症状の進行が異なること、進行状況によって意思伝達装置のスイッチの形状が変化することを学んだ。また、製作するスイッチを使う ALS 患者の病状や進行状況について意見交換を行った。

図１　ディスカッションの様子

②日本 ALS 協会埼玉支部総会での発表と交流

６月９日に開催された第23回日本 ALS 協会埼玉支部総会に参加し、本活動の発表と、実際の患者様やご家族の交流を行った。ALS 患者の生活や意思伝達の方法について学ぶことができた。

図２　スイッチについて発表している様子

６．スイッチを製作するにあたって

熊谷保健所より２名の患者様のコールスイッチの製作依頼があった。依頼内容は以下の通りである。

①Ａさん：空気圧タイプのスイッチをひざ裏で使用

②Ｂさん：右足のかかとでスイッチ押して使用

患者様の身体機能の状況に合わせたコールスイッチの製作に伴い、Ａさん用をふくらはぎスイッチ班、Ｂ

さん用をアクセル型スイッチ班として活動を行った。

7．スイッチの製作

（1）ふくらはぎ班のスイッチ

①構想と設計

スイッチ部分の設計にあたり、ひざ裏の筋肉の動きを圧力センサーによって感じ取ることはできないかと考えた。ひざ裏にセンサーを固定後、筋肉に力が入れるとセンサーが反応し、その信号によってブザーが鳴り家族に意思を伝える仕組みである。

図３　センサの圧力測定

図４　装置の加工

②第１弾スイッチのレビュー結果と課題の発見

第１弾のスイッチの製作後、患者様よりレビューいただき、以下のような課題が見えた。

・センサーを押さなくてもブザーが鳴り続ける。
・ブザーの音が小さく、音が高くて聞こえづらい。
・筋肉の力の調整が難しい。

③第２弾スイッチの改良点

第１弾で出た課題を解決すべく、第２弾スイッチには以下のような改良を行った。

・チャイムが鳴り続けないようにするため、圧力のリセットボタンを追加した。
・誰でも聞こえるようにするため、ブザーから市販品のチャイムを装置に組み込んだ。
・遠隔でも聞こえるようにするため、チャイムは無線型を採用した。

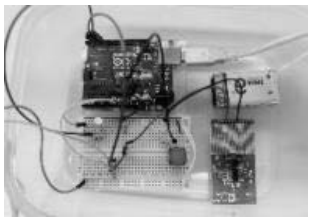


図５　ふくらはぎに巻いて実験している様子

（2）アクセル型のスイッチ班

①構想と設計

患者様より、スイッチとブザーが無線で繋がり、車のアクセルを踏むようにスイッチを押したいとの要望があった。生徒は、軽い力で簡単に押せるスイッチのボタン部分の製作と足で押したときに耐えられる台座について考えた。アクセルを踏むような動きを装置に再現することは難しいため、足首の角度にあった斜めの面がある台座にスイッチを固定し、足の母指球でスイッチを押す装置の製作に取り組んだ。

②第１弾スイッチのレビュー結果と課題の発見

アクセル型スイッチの課題は以下の通りである。

・スイッチを押したことがわかりづらい。
・導線が短く配線が抜けやすい。
・スイッチを押す部分の位置が合わない。
・スイッチがシーツの上だと滑りやすく押しづらい。

③第２弾スイッチの改良点

・患者様がスイッチを押したことがわかるように、スイッチを押すと LED ランプが光る装置を追加。
・装置の電気回路を再度設計し配線の固定。
・ボタンの位置を変えられるように、台座面にマジックテープを取り付けた。
・台座が滑らないように、底面に滑り止めシートを貼り付けた。

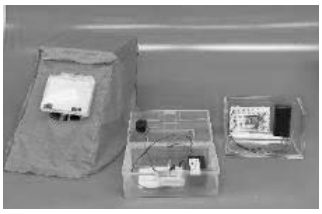


図６　アクセルスイッチの第１弾（左）と第二弾（右）

8．活動後の振り返りと生徒の変化

２学期の終わりに生徒に活動を振り返るアンケートを取った。「４月に比べて ALS について理解できたか？」に対し、全ての生徒が「よくできた」と回答した。また、「あなたのスキルの変化について教えてください。」の質問では、「電子回路の技術」「プログラミングの技術」「課題解決能力」に関して８割の生徒が「向上した」と回答した。

感想には「スイッチが完成したときの達成感はとてもありました」と達成感を感じる生徒が多く見受けられた。しかし、「０からの１を生み出す難しさを知りました。」「自分たちが学んだことが活かせる装置が作れたが、まだまだ技術不足なところもあった。」と課題解決の難しさを実感する感想もあった。

9．まとめ

ALS 患者に合わせたスイッチの製作を通じて、３つの目的を達成することができた。

今後も、福祉をテーマとした課題に対し、相手の気持ちを考え課題解決や主体的に取り組める生徒の育成をしたいと考える。

小学校と高等学校の異校種間の交流
～交通安全を祈願した「無事カエル」から広がる輪～

埼玉県立新座柳瀬高等学校
校長　伊　藤　孝　人

１　はじめに

本校は、平成20年（2008年）４月に新座北高校と所沢東高校が再編整備され、単位制普通科高校として開校しました。学校の北側を柳瀬川が清らかに流れ、周辺には武蔵野の豊かな自然の中で、現在15学級、567名の生徒が学んでいます。

本校は、「人と社会と未来に繋がり、次世代を生き抜く力を育成する学校」を目指す学校像とし、生徒一人一人が充実した高校生活を送りながら、将来、社会で有為な人材として貢献できる資質や能力の育成に取り組んでいます。

今年度（令和６年度）、文部科学省の『高等学校ＤＸ加速化推進事業（ＤＸハイスクール）』に採択され、最先端の設備等を導入し、データサイエンスやＡＩの活用を軸とした実践的な教育プログラムを提供することで、これからのデジタル社会を牽引する人材育成を目指しています。また、令和６・７年度には『埼玉県道徳教育研究推進モデル校』に指定され、生徒のウェルビーイングを高めるための道徳教育研究を進め、講演会などの様々な取組を通じて、心豊かな人材育成に努めています。

２　生徒の実態

生徒の約30％が新座市内に住んでおり、約72％の生徒が自転車で通学しています。素直で穏やかな生徒が多く、学校全体として落ちつきのある規律正しい学校生活が送れる雰囲気が醸成されています。

卒業後の進路は、大学・短大が約35％、専門学校が約48％、就職・公務員が約12％、進学準備・その他が５％となっています。生徒一人一人に応じたきめ細かな指導により、生徒は自らの個性を伸ばすため、日々の生活に真剣に向き合っています。一方、自らの力を十分に発揮できず伸び悩んでいる生徒もおり、こうした生徒の力を伸ばすことが今後の課題となっています。

３　研究仮説

小学校との異校種間交流を行い、生徒が児童とふれあうことで、豊かな人間性や社会性を育むため、以下のとおり仮説を立てました。

・活躍の場の提供
　小学校との異校種交流によって、普段は控えめで目立たない生徒が活躍し、自信を付け、自己肯定感が高まる。

・学校家庭クラブ活動の充実
　家庭科の授業で学んだ知識や技術を生かして「無事カエル」のマスコット作りを行うことで、作成した成果が目に見え、部員の意欲向上につながる。

・小学生の交通安全祈願
　生徒が作成した「無事カエル」をもらうことで、児童はこれまで以上に交通安全に留意し、交通事故がなくなる。

４　具体的な取組

⑴　小学生との交流

令和６年10月22日（金）に新座市立新座小学校に訪問し、小学１年生の児童を対象に「無事カエル」をプレゼントしました。

作成した生徒から児童一人一人に「無事カエル」を手渡しました。

「無事カエル」をプレゼントされ、児童はとても喜んでくれました。

児童に交通ルールを守り、絶対に交通事故に遭わないよう呼びかけました。

⑵　分校との交流

「無事カエル」の作成に当たり、所沢おおぞら特別支援学校新座柳瀬分校とのコラボ作成を行いました。

ハンドメイド部員が分校１年生の授業に入り、分校生徒に作成方法などを教えました。

ハンドメイド部員が、分校生徒２名を教えながら一緒に作成しました。

裁縫が苦手な生徒にも、根気強く丁寧に指導し、一人一人のペースに合わせて楽しく取り組めるよう工夫しました。

５　成果と課題

生徒から次のような感想が寄せられました。

・小学生は「無事カエル」のマスコットを手にすると、目を輝かせて「カエル、かわいい」と喜んでくれました。

・分校生も積極的に取り組んでくれ、とても嬉しかったです。分校の先生からも教え方が上手だと褒めてもらいました。

【成果】

・近隣小学校に「無事カエル」のマスコットをプレゼントしたことで、児童との親睦が深まり、地域全体が一つの輪で結ばれました。

・普段、あまり発言しない生徒が、児童に分かりやすく説明する工夫を重ねた結果、発表に対する自信を深めたようでした。

・児童に交通マナーを教えることで、生徒の交通安全に対する意識も高まったようです。

【課題】

・作成できる個数に限りがあるため、近隣の２校には隔年で配布することとし、今年度は新座小学校に配布した。

地域に愛されるコア・サイエンス・ハイスクールの構築

埼玉県立坂戸高等学校
校長　秋　谷　美　保

１　はじめに

本校は、昭和46年に開校し、今年度で創立54周年を迎える。「文武に秀で、地域に愛され、国際感覚を持つ社会のリーダーを育てる学校」を目指す学校像に掲げ、日々の教育活動に取り組んでいる。

本校はこれまで県の事業である「科学技術立県を支える次世代人材育成プロジェクト」（H29～Ｒ１）と、その継続事業である「世界をリードする科学技術人材育成事業」（Ｒ２～４）の化学分野拠点校に指定され、本校科学部を中心として理数探究に精力的に取り組んできた。また、令和５年度からは「県立高校学際的な学び推進事業」の指定校となり、総合的な探究の時間（以下、総探）等を通して、未知の課題に果敢に挑戦し、創造的な未来を築いていく力の育成を目指してきた。

２　研究主題設定について

本校は、普通科と外国語科併設の共学校として地域から一定の評価を得てきたが、本校が位置する比企地区は、少子高齢化により中学生数が減少傾向にあり、地域に開かれた魅力ある学校づくりの推進・発信の充実が求められている。

総合的な探究の時間を通した探究活動でも学校全体あるいは学年単位での地域連携をさらに充実させ、進展させる段階にある。そこで、本校科学部でのこれまでの実践を発展・拡充させつつ、総合的な探究の時間における地域連携のためのプラットフォームを構築するとともに、地域連携に加え高大連携を通して地域の理科教育の中核を目指し、本主題を設定した。

３　令和６年度の主な取り組み

総合的な探究の時間の一環で実施される課外活動を通じ、様々な地域連携を企画し、活動を展開していった。事項では以下に示す主な取り組みを紹介する。

（１）麦ストロウプロジェクトとの連携
（２）生徒をアシスタントとする実験教室
（３）プロフェッショナル講話を通じた高大連携

（１）麦ストロウプロジェクトとの連携

６月18日、ときがわ町の有機農家「晴耕雨読」と越生町のカフェ「オクムサ・マルシェ」と連携して、「畑のストロウプロジェクト～収穫加工イベント～」を開催した。実際に鎌を使ってライ麦を収穫し、ライ麦畑の横に設営したテントの下で、ストローを加工する体験を行った（図１）。

図１

また、６月20日の総探の授業において、「麦ストロウプロジェクト」の武藤氏、新井氏、浅見氏、橋本氏を講演者として招き、麦ストローやSDGsについて講演していただいた。その日の放課後には、講演会で興味を持った生徒を対象に、化学室にて頂いたライ麦をストローに加工する体験を行った（図２）。

図２

また、講演会では、ライ麦を用いたヒンメリ（フィンランドで生まれた藁を使った伝統的な造形品）について、ヒンメリ作家である新井氏と浅見氏から紹介いただき、それに興味を持った生徒の要望を受け、７月21日に、御二方を講師に招き、化学室にてヒンメリワークショップを実施した（図３）。

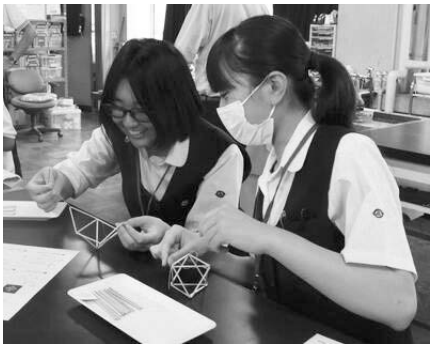


図３

（2）生徒をアシスタントとする実験教室

夏季休業中の８月８日に、県立学校等公開講座において小中学生を対象とした実験教室を開催した。小中学生と保護者を含め39名が参加し、液体窒素の実験や草木染めの実験などを行った。実験班ごとに本校生徒をティーチング・アシスタント（TA）として配置して、小中学生・保護者と本校生徒とが交流しながら学びを深める場となった（図４）。

図４

地域コミュニティとも積極的に連携をはかり、８月10日には、北坂戸駅近くの溝端公園で開催された「第７回坂戸CCC」に参加した。坂　戸 CCC（Cleanup & Coffee　Club）は、キッチンカー「縁が輪」が提供するコーヒーを飲みながら、坂戸市内の公園の清掃活動を通した様々な人と交流を図る地域コミュニティで、当日は地域住民とともに公園のごみ拾いを行い、その後、科学部で栽培した藍を用いて、生徒がTAとして生葉による叩き染め体験を実施した（図５）。

図５

８月23日には、坂戸市の子ども食堂「子ども食堂やまちゃん」と連携し、弁当配布の際に訪れた小中学生を対象に実験教室を実施した。ブラックライトで蛍光する人工イクラをつくる実験を行い、その企画・準備・実行までを生徒が行った（図６）。

図６

12月以降も坂戸市立片柳小学校や東坂戸団地、埼玉県立坂戸ろう学園において本校生徒をTAとする実験教室を予定している。

（3）プロフェッショナル講話を通じた高大連携

１学年の総探の授業において、「プロフェッショナル講話」と称して、全４回で延べ12名の各分野のプロフェッショナルを招き、人生の選択をするときに大切にしているものについて講演をしていただいた。理系分野では、東京理科大学の鈴木助教と埼玉医科大学の奥村准教授に講師を依頼した。鈴木助教には探究活動の面白さを最新の実験も交えてお話していただき、また奥村准教授には、現代医療を支える臨床工学技士の魅力を人工心肺の実習を通して教えていただいた（図７）。

図７

４　成果

地域の人々と生徒との間で交流を深めることができ、地域連携を推進し、さらに地域の理科教育を発展・拡充させた。また、実験教室では、小中学生との交流を通して、生徒は上級生としての意識を高めるとともに、どうすれば参加者に喜んでもらえるかを考え、話し方・伝え方などを工夫するなど、ホスピタリティと表現力の向上につなげることができた。

子ども食堂での実験教室にTAとして参加した科学部の生徒は、子ども食堂を支援したいという思いから、個人探究のテーマとして「坂高発、地域経世済民プロジェクト」を立ち上げ、取り組んだ。このプロジェクトでは、文化祭収益で、地元にある「こすもす作業所」から野菜を購入し、それを子ども食堂に寄贈することで、地域活性化への貢献につなげた。また、生徒の地域課題への関心を高めた。本実践は、日本薬科大学にて12月26日に開催される県教委主催の探究活動生徒発表会で発表を予定している（図８　生徒の発表資料）。

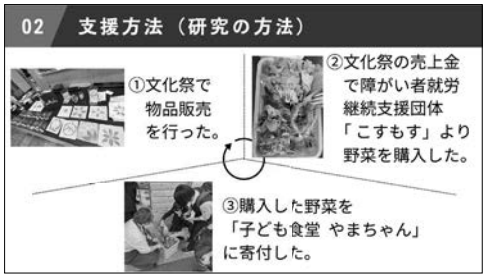


図８

GPS 計測システムの開発
～手作り車両の走行データをクラウドを利用してリアルタイムで取得する～

埼玉県立秩父農工科学高等学校
校長　服　部　　修

１　はじめに

本校は、1900年（明治33年）の創立以来124年の歴史と伝統を誇り、これまでに２万５千人を超える優秀な人材を送り出してきた、地域に愛される高校である。目指す学校像には「秩父地域の産業と未来を支えるスペシャリストを育成する学校」を掲げる。農業部（農業・森林科学・食品化学）、工業部（電気システム・機械システム）・家庭部（ライフデザイン・フードデザイン）の３部７学科を有し、定時制も併設する県下有数の総合専門高校である。

２　電気システム科とは

デジタル人材育成に力を入れており、本年度の DX 加速化推進事業に工業部として採択された。環境やエネルギー問題などの時代が抱える課題に向き合い、自ら解決できる力が身に付くよう、ICT 機器を取り入れた実践や生徒端末の活用を積極的に進める。

生徒は２学年より二つのコースに分かれる。電力技術や情報、製作実習など“ものづくり”の経験を蓄積し、３学年の課題研究で興味に基づいた５つのテーマで総合的な学びを深めていく。

第二種電気工事士の資格取得は県下有数の合格率を誇り、文武両道に励む生徒が多いのも特徴である。

３　研究の構想

EV 班は毎年 Ene-1（もてぎ大会）に挑戦している。生徒が代々改良を加えた手作りの車両で広大なサーキットを舞台に単３充電池40本のエネルギーマネジメントを競う夢のあるイベントである。特に今年はこれまでの平坦なコースから高低差30m の国際コースへと競技方法が改訂され、日程が大幅に前倒しになったため、活動の的を「走行データの収集・登坂の攻略」に絞った。改良のため車のフレーム（中身）も作り直す必要があった。

年度	主なテーマ	競技コース
2015	ブラシレスモータ結線、倍電圧駆動、ボディー製作など	オーバル
2016	内装8段ギア組込、アナログメータ、FRPボディー製作	
2017	後輪操舵、ギアドライブ、木製フレーム、競技用タイヤ導入	
2018	オス型・メス型作り、モーター効率検討開始	
2019	モーター特性の測定	
2020	大会中止（2人乗り車両の製作）、ホイール強度向上	
2021	型を活かしたボディー製作（バキューム成型）、GPS検討	西コース
2022	運転技術の向上、細部補強、ラテックスチューブ開発	
2023	データの可視化サービスを利用	
2024	**新コースのデータ収集、登坂攻略（可変界磁モーター開発）**	**ロードコース**

表１　これまでの主なテーマと競技コース

本テーマは電気エネルギーを効率よく駆動力に変えるために走行中のデータを把握し、車両開発に活かすためにある。レースに挑むため電気、機械、情報技術を結集させ、最終的には安全に走行できる車を完成させなければならない。

（１）GPS 計測システムの開発

2021年から GPS モジュールを使って実験的に計測器の開発を進めてきたが安定性や実用度に欠けていた。本年は Google for education を活用したクラウド環境を整え、センサによる計測と ESP32マイコンを使用した制御システムにより、リアルタイムデータの収集を実用的なものにすることに成功した。

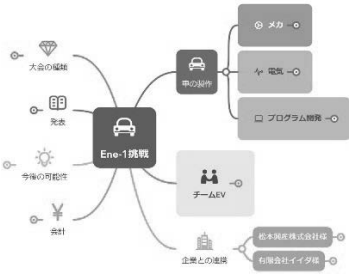


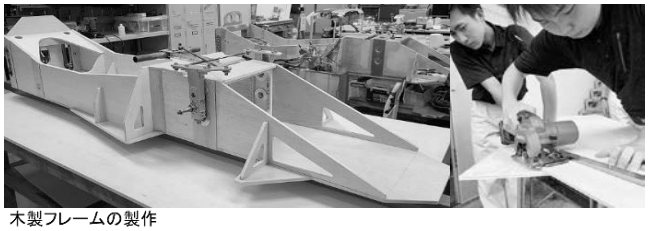
図１　EV 班活動マップ
（MindMeister）

（２）ブラシレスモーターの可変界磁システムの開発

大会規定のサーキットブレーカを設置しなければならないため、電流の上限値が制限される。そのエネルギーで登坂を走行できるようなトルク設定が必要である。しかし、軽いギア比では平地で速度が上がらない。可変界磁とは巻線コアを機械的にスライドさせ永久磁石との距離を変化させることでモーターの回転数を上げる仕組みである。計測器の目的はこのモーターを効率よく制御するためにあり、得られた情報をもとに改良を加えコース攻略に役立てる。車両開発に欠かせない様子を写真で紹介する。

【企業連携】松本興産株式会社様　可変界磁機構の共同開発（切削加工と技術支援、素材提供）

【校内連携】機械システム科　マシニングセンタ加工、フライス盤・旋盤加工（後輪操舵ユニット制作等）



木製フレームの製作
可変界磁モーター取付けのため新フレームで外装（ボディーは流用）に干渉しないよう70mm前方に取り付る

その他、電圧降下を低減するために、理想ダイオード回路や組電池を製作するスポット溶接など省エネルギー化を徹底する。

４　具体的な取組

（１）計測システムの概要

過去の経験をもとに実験を重ねGPSユニットから位置（緯度・経度）、速度、時刻、高度を取得することができた。同時に車両からセンサを用いて電流、電圧、リミッター信号、電池の接続状況を取得し、計算した電力、積算電力とともに図２のような仕組みで※スプレッドシートに記録する。ピットやメカニックはインターネット環境を整えることでリアルタイムに車両の走行データを確認することができる。

※Google Apps Script（GAS）で10秒ごとにデータを記録している

図２　車両「BLOOM ZERO」のデータ通信マップと開発中の様子

（２）プログラム構成

開発環境はArduino　IDEを利用。Wi-Fi通信が可能なESP32マイコンでマルチタスクを活用しデータを処理している。

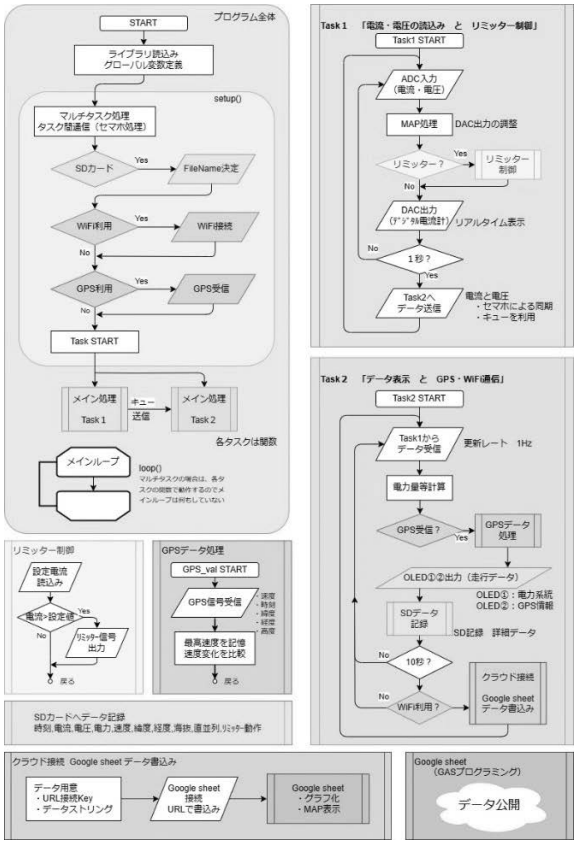


図３　フローチャート　（draw.io）

（３）夏の試走会での検証

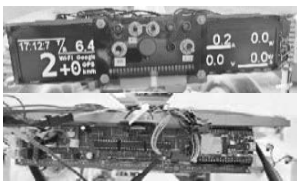


図４　計測器の外観

急遽開催された夏の試走会で搭載した試作品は、Wi-Fiの受信が安定しないトラブルに見舞われた。車の試走も多くの問題が発生したため、得られたデータは予定とは程遠いものだったが、登坂の電力量や車の状態、そしてリアルタイムマッピングシステムは実用的なものであることが確認できた。

（４）大会での有効活用

図５　Wi-Fiルーター（KD-249）

万一のためにSDカード記録を実装（１秒ごとの詳細データ）し大会に備えた。前日の練習走行会で当初から導入予定のWi-Fiルーターの通信が安定することを確認。現地で本システムが完成したといってもおかしくないスケジュールであった。

図６　リアルタイムマッピング画面（スプレッドシート）

５　成果と課題

位置情報がわかることによってドライバーの負担を少なくできた。また、使用できる電力の２分の１程度しか使い切れていないこともわかり、今後の車両開発に有効活用できる。本研究に限らず、クラウドへのデータ記録は様々な可能性を秘めている。

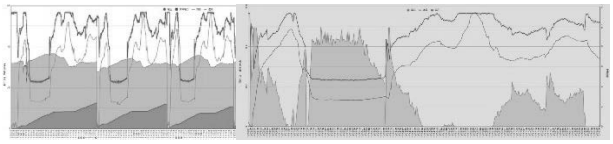


図７　リアルタイムグラフとSDカード詳細データの例（スプレッドシート）

導入予定だったクランプ型の直流電流センサは既存の直列接続タイプからのプログラム変更が間に合わず現在も調整中である。省エネルギー効果が期待できるため次年度の実用化を目指す。

６　おわりに

ものづくりにはPDCAサイクルが欠かせない。常に新しい技術に挑戦する中でセンサ活用の有効性も感じる。ICTとデジタル機器、AIを駆使して新しい価値を生み出すこともできる。教育のDX化で学習過程にも変化を求められる時代だが、生徒達がものづくりという総合的な学びの中で多くの失敗と成功体験を得ることは変わらないと信じたい。何を大切にするべきか、10年後の活躍を期待して目の前にある壁をともに乗り越えていきたい。

車両製作にご支援ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

地元マスメディアでの生徒による学校の魅力発信及び広報活動

埼玉県立小鹿野高等学校
校長　植　田　雅　浩

１　はじめに

本校は、創立70年を超える学校で、平成15年度に単位制・総合学科に改編された。西秩父地域唯一の高校として地域との連携を密にし、様々な取組を行っており、令和元年度に県立学校としては初のコミュニティ・スクールとなった。また、秩父郡市１市４町における「ちちぶ定住自立圏」の枠組における『高校と連携した地域振興』としての取組や、小鹿野町との包括連携協定を踏まえ、地域との協働を更に促進し、教育活動の充実を図っている。平成24年度から試行している山村留学制度は県内唯一のものであり、１割程度の生徒がこの制度で通っている。一昨年度入学生から、科目選択の系列を再編し、福祉生活系列、地域観光系列、文理総合系列、文化教養系列に変更し、多様な学びを提供している。

２　生徒の概況

本校の生徒は、多様な特性を持って入学してくる生徒が多い。そのような中で、生徒が高校生活を充実させ、自分の可能性を高めてもらうために、様々な県や国からの事業、地域と協働した教育活動を行っている。

○令和６年度の県や国からの委嘱事業

・高等学校ＤＸ加速化推進事業（文部科学省）

・県立高校通級指導研究事業（高校教育指導課）

・ＩＣＴを活用した遠隔教育導入・展開実証事業
（高校教育指導課）

・地域等と連携した中途退学防止事業（生徒指導課）

・スクールカウンセラー配置事業（生徒指導課）

・共生社会の形成に向けた特別支援教育推進事業
（特別支援教育課）

○地域と協働した教育活動

・総合的な探究の時間

「小鹿野町バスフィールドワーク」（２年次）
（小鹿野町役場総合政策課）

「小鹿野町ウォーキングラリー」（２年次）
（小鹿野町役場総合政策課）

「生徒による地域向け公開講座」（３年次）
（小鹿野町役場総合政策課）

「総合的な探究の時間・成果発表会」
（小鹿野町・小鹿野町文化センター）

・竹あかりの展示・ワークショップ　（小鹿野町）

「総合的な探究の時間・成果発表会の様子」

３　本校の課題

上記のように、地域との協働や様々な支援、県や国からの事業など積極的な取組を行っているが、生徒数は、年々減少傾向にある。外部的な要因としては、県北地域の中学３年生の数が年々減少していることや、学区内の縛りがなくなり、地域の生徒が県南の学校に通学するといった傾向がある。山村留学制度により、県北以外の地域から入学する生徒も増加しているが、全体的には、生徒募集が課題といえる。

４　具体的な取組

学校運営協議会でも、委員から学校の取組について、もっと効果的に情報発信すべきではないかという意見があった。そこで、生徒を主体とした広報活動を行うために、「地元マスメディアでの生徒による学校の魅力発信及び広報活動」と題して、地元のラジオ局「ちちぶエフエム」に依頼し、令和２年３月に「小鹿野高校・わらじからじお」を開始した。「わらじか」とは、本校のオリジナルマスコットキャラクターの名称である。

「わらじか」

「わらじか」は小鹿野高校の授業の中で誕生した、オリジナルキャラクター。小鹿野名物「わらじかつ」をイメージしてデザインされた。

初年度は、３月の土曜日16時から55分間の枠をもらい、合計４回、生放送を行った（現在は17時に移動）。内容に関しては、生徒自身の学校での取組、教育課程や課外活動など、生徒が主体的に話せる内容にした。ここ最近では、小鹿野町の多くの方に、「総合的な探究の時間」に関わってもらっているので、その授業での取組や発表会の様子などを伝えている。

「わらじからじおの様子」

令和２年10月からは、「きらきらハイスクールライフ（提供：秩父定住自立圏）」の放送が始まった。これは、秩父管内の４つの高校（小鹿野高校・秩父高校・皆野高校・秩父農工科学高校）の生徒が順番に出演し、各学校の魅力を語るという趣旨の事業である。秩父管内の中学校では、昼休みにこの番組を流している。この番組が始まり、多くの中学生に学校の取組を発信できる機会が増えた。しかしながら、「きらきらハイスクールライフ」は、時間の枠が15分程度の番組であり、生徒の取組を発表するにあたり、生徒の頑張りや苦労話、達成感など内容を伝えきれないところもある。そこで、前述の内容を確実に聴取者（リスナー）に伝えるため、３月のオリジナル番組「小鹿野高校・わらじからじお」を継続して行っている。

「きらきらハイスクールライフの様子」

５　成果と課題

令和５年度の３年次生が、「総合的な探究の時間」において、秩父管内でアンケートを実施した。その結果、小鹿野高校が総合学科の高校であるとか、何が学べるのか、実際には広く知られていないことがわかった。そのため、秩父管内の方々により深く知ってもらうために、出演する生徒の出身中学が極端に偏らないようにすること、地域の方と連携した取組を放送で取り上げるなど、聴取者（リスナー）を意識した放送を心掛ける必要があると感じた。

出演後の生徒からは、放送を聞いていた中学生や地元の人から、「ラジオに出てたね」、「ラジオ聴いたよ」と声をかけられたといった報告があり、生徒なりに達成感や満足感を得ているようであった。

「きらきらハイスクールライフ」や「わらじからじお」など地元マスメディアでの生徒による学校の魅力発信及び広報活動を継続的に行ってきたが、今後は、学校ホームページでの積極的な情報発信、小鹿野町役場や地域のイベント等でのデジタルサイネージによる学校紹介動画の発信、SNS を活用した情報発信など、組織的かつ戦略的な広報活動を行っていきたい。

地域と連携した教育活動の確保・充実
～生徒・教員数減を地域の支援とともに乗り越えることを目指して～

埼玉県立皆野高等学校
校長　浅　見　和　義

１　はじめに

本校は創立59年を迎えた秩父地域唯一の商業高校である。商業科・情報処理科の２学科が設置され、入学時には学科を選択しない「くくり募集」を実施している。「校訓（誠実・勤勉・協力・奉仕）の理念の下、地域の活性化に寄与し、地域社会と産業を支える人材を育成する」を目指す学校像として掲げ、教育活動を通じた地域交流からキャリア意識を高め、社会の即戦力となる人材育成を目指している。現在、本校は２・３年生各２クラスの全４クラスで編制され、少人数の利点を生かした指導により、多くの生徒が入学後に学習意欲が向上して実力を伸ばし、個々に応じた進路を実現している。

本校ではこれまで、地域企業と連携した商品開発や地域の清掃活動、ボランティア参加等、地域貢献に向けた教育活動を積極的に実施してきた。さらに、令和４年度からはコミュニティ・スクールとして、こうした地域との連携を一層加速させ、地域と連携しながら地域を支える人材育成に取り組んでいる。

２　主題設定の理由

本校は、令和８年度に秩父高校と統合し、秩父・皆野新校（仮称）へと生まれ変わる。令和５年度入学生を最後に生徒募集が停止され、本年度、来年度と年々生徒・教職員の数が減少していく。そうした状況の中で、学校教育の根幹である「人と人との関わり合いを通じた学び」の機会を維持するために、どのようにして地域との連携を強めながら教育機会を確保していくかが大きな課題となった。

そこで令和５年度に、最終年度までの地域連携に関する基本となる姿勢・目標を策定し、職員間でのビジョンの共有を行った。令和６年度の目標を「“人数が少なくてできない”をなくす」、令和７年度の目標を「“人数が少ないからこそできる”に挑戦する」に設定し、最終年度に向けて「統合」という特殊な状況をチャンスと捉えた教育活動を目指した。

令和６年２月には、学校運営協議会や地域の協力を得ながら「人数減少」「教育機会の確保」という課題の解決方法を見つけるため、学校、町役場、ＰＴＡ・後援会、地元企業、地域住民が集まり、「み（ん）なの高校会議」を実施した。会議では、学校行事の規模を縮小せずに実施していく方法をはじめ、生徒が考えた学校行事のアイデアを実現させる方法についても話し合い、生徒・職員数が減る中でも充実した学校生活を送るために学校と地域が連携していく土台を作った。

皆野高校地域連携イメージ図（皆高ＨＰに掲載）

３　具体的な取組

（１）地域人材を活用した在り方生き方教育

生徒数・教員数が減少する中でも、生徒が様々な価値観や生き方に触れ、自分自身を見つめる活動を確保するため、地域人材を活用した在り方生き方教育などの機会を設けている。

①４月９日㈫　生徒が自らのキャリアを形成する意識を高めることを目的として、本校同窓会長でもあるオフィスプラス株式会社 代表取締役 出浦洋介 様を講師にお招きした。講義では、経営者の視点から働き方の多様化が進む将来を生き抜いていくために、自分のフィールドを決めて自分自身でキャリアを作っていくことが重要だというお話を頂いた。

②９月24日㈫　生徒が前向きにチャレンジする姿勢を醸成することを目的として、世界103か国を旅した一般社団法人世界一周学校 代表理事 中村雅人 様を講師にお迎えした。講義では、旅に出た経緯、世界中

を旅しながら感じたこと、チャレンジすることの楽しさについてお話を頂いた。

出浦 様による講義　　中村 様による講義

これ以外にも、地域人材を活用した講義を積極的に実施した。受講後の生徒アンケートには、生徒たちが大きな刺激を受けている事が感じとれた。こうした機会を通じて生徒が直接触れる方の人数や考え方を増やし、自分自身を見つめる重要な役割を果たすキッカケとさせることができた。また、中村様による講義は学校運営協議会委員の紹介により実現した経緯があり、学校課題を地域と共有し、学校のビジョンを共有することの大切さを再認識することができた。

（２）体育祭・文化祭の実施

生徒・教員数の減少に伴う行事の縮小を最小限に抑えるため、地元企業、ＰＴＡ・後援会をはじめとする学校支援者と協力して体育祭・文化祭等の行事運営を行った。さらに、来年度の行事運営を見据え、支援者との連携体制の土台を構築することを目指した。

①体育祭

６月３日㈪　体育祭を実施。本来、本校生徒だけでの実施だが、本年度は本校生徒に加え皆野町立三沢小学校児童（８名）、国神小学校児童（51名）をゲストに招いた。さらに、同窓生にも呼びかけ22名の参加もあった。競技内容についても、大玉運びなど小学生と一緒にできる競技や、ワープロ早打ちリレーなど一見体育祭らしくない競技も加えて、同窓生が参加しやすいようにして実施するなど、参加者それぞれが楽しめる体育祭とした。また、本校３年生「課題研究」の授業において、参加してくれた児童全員に個々の名前を入れた木札を制作し競技の中でプレゼントした。

生徒・児童・同窓生による競技　　プレゼントした木札

②文化祭

11月２日㈮・３日㈯　本校文化祭「秋桜祭」を実施。生徒・職員の人数減少による受付等の業務分担の人員確保、企画数の充実という課題解決のため、同窓生、ＰＴＡ・後援会をはじめ、地域の方々のご協力を頂き実施した。新たな取組として同窓生によるバザー、皆野町地域おこし協力隊・世界一周大学によるカーニバル、FIND Chichibu の AI・ロボット研究分科会によるロボット体験コーナーなども実施した。さらに昨年度から引き続き、地域の方々の作品展示、幼稚園・保育園児による塗り絵展など地域を巻き込んだ様々な企画を、より充実させ実施した。また、同日に本校体育館で小学生対象バスケットボール公開講座を実施、約100名の小学生等が来校し、さらに秋桜祭が賑わった。

これらの取組の成果として、企画数19件（令和５年度17件）、来場者数500名（令和５年度250名※どちらも概算）となり、これまでに本校が培ってきた地域との繋がりが存分に発揮され、秋桜祭は規模を縮小することなく大成功となった。

生徒による企画　　ミニステージで屋台囃子を披露する生徒

同窓生による駐車場係への協力　　地域の方の作品展示

４　おわりに

本年度は、目標として掲げた「“人数が少なくてできない”をなくす」に対して、十分な成果を挙げることができた。

来年度は今年度よりも、さらに生徒・教員数が減少する。その中でも生徒が、人と人との関わり合いの中で学ぶ教育活動の質を維持していくには、多くの地域支援者の協力が不可欠である。今年度に支援をいただいた方々との繋がりを発揮させ、最終年度の目標である「“人数が少ないからこそできる”に挑戦する」を実現していきたい。これまで、地域を舞台に地域を支える人材を育成し続けてきた本校らしい最終年度とするように、教育活動を地域と一体となり続けていく。

自立活動の学びをつなげる環境づくり
～校内教材の充実と共有システムの整備～

埼玉県立春日部特別支援学校
校長　四　阿　久　修

１　はじめに

本校は昭和53年４月に開校し、今年で開校47年目を迎える、春日部市・宮代町・杉戸町を学区とする知的障害のある児童生徒が通う特別支援学校である。小学部117名、中学部49名、高等部100名、全校266名（R6.10.1現在）の児童生徒が在籍している。

学校教育目標を「すすんで向かい、みんなと学ぶ」「豊かな心と健やかな身体」「社会とともに確かな自立」とし、学校・地域・社会が連携し共生社会の実現に向けて寄与することを目指して日々の教育活動に取り組んでいる。

２　本校の自立活動について

本校では平成28年度から自立活動部を設置し、自立活動の指導の充実を図ってきた。令和５年度からは、担任外として自立活動専任教員（以下、専任）も配置し、より一層の指導の充実を目指している。

具体的には、専任を中心とした各学部の自立活動の授業支援及び相談業務、自立活動関連の研修の企画・運営、外部専門家訪問指導のコーディネート、教材教具の管理・情報提供等である。

自立活動に関する情報発信としては、校内職員向け研修、保護者向け研修を開催している他、特別支援学校におけるセンター的機能の一環として、学区内の特別支援学級担当教員を対象とした自立活動学習会を開催している。

３　研究題目の設定理由

自立活動部では、校内アンケートをとり、「自立活動の指導を行う上で難しいと思うこと」について、情報収集を行っている。その中で、「教材準備」は常に上位に挙がる項目である。その背景として、児童生徒個々の障害の状態や課題に応じた教材を準備するためのスキルが必要なことや、教材用の予算が限られているため、個人的な教材研究に頼る状況があること、などが考えられる。加えて、個人で制作した教材については、担任が替わると学びをつなげてていくことが難しい場合もある。

そこで、誰でも使える校内教材を充実させるとともに、教材のねらいや指導への活用方法を教員間で共有できるシステムを作ることで、自立活動の学びをつなげていける環境を整えたいと考えた。

単に、教材を整えるという物理的な面だけではなく、教材を通して何を学べるのか、どんな力が身に付けられるのか、について教員が考え、理解を深めていける共有システムの構築を目指していきたい。

４　実践計画

５月～８月
- 教員のニーズの集約
- 教材研究と調査
- 情報発信、共有方法の検討
- 教材等の購入と整備

９月～12月
- 教材情報の発信と共有方法の周知
- 準備した教材を用いた授業の実践及び評価

12月～２月
- 授業のふりかえり（教材はどうだったか？　児童生徒の変容はあったか？）
- 教材情報のデータ化と共有方法の評価
- 取組の評価とまとめ

５　実践紹介

（１）校内教材の充実

①教材の選定について

専任を中心に、現在自立活動部で所有している教材を整理し、不足していると思われる分野の教材をリストアップすることと併せて、自立活動の授業支援の際に、情報収集を行った。その結果、机上の学習で使用する教材が少ないこと、「目と手を使って具体物を操作すること」の教材へのニーズが高いことが把握できた。また、初期段階の発達を促す教材・学習への教員の困り感が強いことが窺えた。そこから、机上学習で

使用する、「初期の発達を支える教材」を充実させていく方向性を立てた。

②購入・製作教材について（抜粋紹介）

〈タッチングセット〉

100円ショップで色々な素材を集めてセットにした教材。触覚を整えたり、手への意識を高めたりするための学習に使用。

〈輪抜き〉

木材と塩ビパイプを購入して製作した教材。輪を持ち棒から抜いてかごに入れるまで、感覚のフィードバックがある為、手の動きに視線を向けることを促しやすい。

〈コロコロチャイム〉

市販のおもちゃを教材として活用。ボールを手に持ち穴に入れると音のフィードバックがあり、目と手の協応や因果関係の理解を促しやすい。

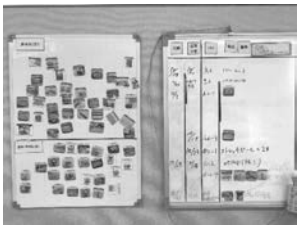
（2）共有システムの整備

①教材紹介カードについて

購入した教材は校内HPでアナウンスすると共に、「教材紹介カード」を作成して情報発信を行った。【ねらい】の欄には、教材を通してどのような力を伸ばせるか、【使い方】の欄には、教材の提示の仕方やポイント、ステップアップの方法などを記載している。また、【こんな児童生徒に】という欄を設け、児童生徒の困り感と教材をつなげて考えられるようにしている。

②貸出し方法について

教材は自立活動室に保管し、誰でもいつでも借りられるようになっている。教員間で共有がしやすいように、以前から整えていた写真カードとホワイトボードを用いた貸出し方法を活用して教材の貸出しを行った。教員はカードの一覧の中から借りたい教材を探し、ボードに貸出し期間と名前を記入する。写真カードを使うことで、すぐに教材を探すことができ、誰が何を借りているかもすぐに確認することができる。

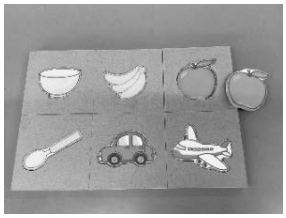


（3）授業での活用

①授業のねらい

見比べる活動を通して、見て分かる・見て行動する力を高める学習。（創作かたはめ）

②授業の様子



③授業での成果

これまで使用していたイラストカードのマッチングでは、終点が分かりにくく、手元のカードをすべて渡してしまっていた。型はめを用いることで、感覚のフィードバックが加わり、見本と手元の型を見比べて同じものを選ぼうとする姿が見られるようになってきた。

６　成果と今後の展望

今回は助成金を活用することで、学校予算では購入できない、100円ショップやネットショップで教材を準備することができた。教材の選択肢が増え、よりニーズに合った教材を購入・製作することができた。

今後の展望として、毎年同様の流れで教材を増やしていき、校内で共有できる教材を充実させていきたい。様々な課題に応じた教材等を充実させて、地域の特別支援学級等への教材の貸出しや困り感のある児童生徒の学習支援等の情報提供も行うことで、センター的機能の充実も図っていきたい。

2　環境教育支援

小学校

1　自ら学び　心豊かで　たくましく　自律した子どもの育成……さいたま市立木崎小学校……64

2　豊かな心を育成する「盆栽教育」の推進

～大宮盆栽村開村100周年に向けて～ ……さいたま市立植竹小学校……66

3　環境を考え、地域とともに環境を守り、伝える児童の育成

～地域の宝　学校の宝　さくら草を守り、育てる活動を通して～……さいたま市立栄小学校……68

4　身近な環境に関心をもち、主体的に行動できる慈林っ子の育成

～地域・学校協働活動をとおして～……川口市立慈林小学校……70

5　SDGs を視点とした総合的な学習の時間や生活科での取組や委員会活動を通した

持続可能な環境教育の研究……新座市立片山小学校……72

6　郷土・自然を愛し、豊かな心を育てる環境教育の推進

～閉校に向け、より深い地域連携を重視した栽培・体験活動の実践～……鴻巣市立小谷小学校……74

7　豊かな体験活動により学びを広げる環境教育の実践Ⅲ

～循環型の栽培活動の取組みとＳＤＧｓの推進～……坂戸市立三芳野小学校……76

8　ビオトープを活用した環境保全意識の醸成

～地域・家庭と連携した自然体験活動を通して～……三芳町立三芳小学校……78

9　世界にはばたく人財が育つＳＤＧｓの実現に向けた教育の在り方

～未来像を予測して計画を立てる力の育成～……川島町立つばさ北小学校……80

10　持続可能な社会のための環境教育の実践

～学校・家庭・地域の連携による心豊かな青小っ子の育成を目指して～……神川町立青柳小学校……82

11　地域とともに歩む杉戸町ふるさと学習

～地域の自然と人々の交流活動を通して～……杉戸町立高野台小学校……84

中学校

1　地域と共にある学校

～学校・保護者・地域が手を携えて残す安行の自然～ ……川口市立安行中学校……86

2　ＳＤＧｓの17の目標を理解し、学校生活に繋げて、生かしていこう

～生徒会活動を核とした、主体的な生徒の育成を目指して～……熊谷市立富士見中学校……88

3　自然体験活動による豊かな心の育成

～福島県南会津町との３年間の継続した交流と様々な自然体験活動を通して～……松伏町立松伏中学校……90

高等学校

1　「大地再生農業」の実践

～無農薬・無化学肥料・協生農法で土壌を修復し自然環境の回復を目指す～……埼玉県立熊谷農業高等学校……92

特別支援学校

1　学校で栽培しているにんにくを使った「味噌にんにく」への加工に挑戦！

～規格外農産物の活用（食品ロスへの取組）～……埼玉県立特別支援学校羽生ふじ高等学園……94

自ら学び　心豊かで　たくましく　自律した子どもの育成

さいたま市立木崎小学校
校長　石　川　顕　一

１　はじめに

本校は、今年度創立150周年を迎えた。文教都市を象徴する学校として、地域の方々に愛され、地域とともに歩み歴史を重ねてきた。一方で、施設等の老朽化や環境整備といった課題も抱えている。この課題を解決し、学校をよりよい学びの場とするため、PTA ボランティアと連携・協働して、花壇の新設や除草作業、側溝清掃、季節に応じた掲示物の作成等に取り組む。学校は、体験活動が効果的に行われるように、子どもたちの発達段階に応じた活動を計画的に実施するようにする。また、豊かな心をはぐくむために、どのようなことを学ばせるのかの「ねらい」をしっかり定め、他の教育課程とも関連を深めながら、総合的な学びを進めていくようにする。これらの活動を通して、子どもたちが豊かな心をはぐくみ、自律的に考え行動できる力を身に付けることを目指した。

２　研究主題設定理由

花や樹木等を育てたり世話したりすることを通じて、互いに協力し合い、相手の立場を考える態度を培い、そして、生命の尊さを学びながら豊かな心をはぐくみ、優しさと思いやりの心を体得させたいと考え、上記研究主題を設定した。

３　研究内容（具体的な取組）

（１）子どもたちが植物を育てる体験活動

①生活科１年「きれいにさいてね」

「植物を継続的に栽培する活動を通して、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけ、それらは生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付け、植物に親しみをもち、大切にしようとすることができるようにする。」をねらいとし、アサガオを育てた。児童は、成長を楽しみにし、毎日水やりを行う姿が見られた。また、自分が水やりを行うことでアサガオが成長するかのように、自分の働きかけにアサガオがそれに応えてくれると捉えたり、アサガオの成長と自分の成長を重ねたりする姿が見られた。

②生活科２年「ぐんぐんそだて　わたしの野さい」

「植物を継続的に栽培する活動を通して、これまでの経験を基に予測しながら、それらの変化や成長の様子に関心をもって働きかけ、植物が生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、生き物に親しみをもち、大切にしようとすることができるようにする。」をねらいとし、自分で選んだ野菜を育てた。児童は、自分が育てている野菜の収穫を楽しみにしながら、日々の水やり等の世話を行っていた。また、色・形・大きさに着目して、国語「かんさつ発見カード」の学びを活かしたり、学校図書館で借りた図鑑等で野菜の育て方を調べたりして、大切に育てていた。

③人権の花運動

児童が花を育てることを通じて、互いに協力し合い、相手の立場を考える態度を培い、生命の尊さを学びながら豊かな心を育み、やさしさと思いやりの心を体得することを目的として行った。

園芸委員会の児童が参加し、その後の水やり等いっそう植物を大事に育てるようになった。

④150周年記念桜植樹

創立150周年を祝うイベントを通じて、児童・保護者や地域コミュニティとの絆を強め、共に未来をはぐくんでいく意識を共有するために実施した。PTA 本部、職員、代表委員が参加して行った。

⑤レッズローズ植栽

浦和レッズのレッズローズ植栽プロジェクトの協力を得て、園芸委員会の子どもたちが参加し、バラを正門前に植栽した。学校の顔である正門付近が鮮やかに明るくなった。

（2）PTA 環境ボランティアとの連携

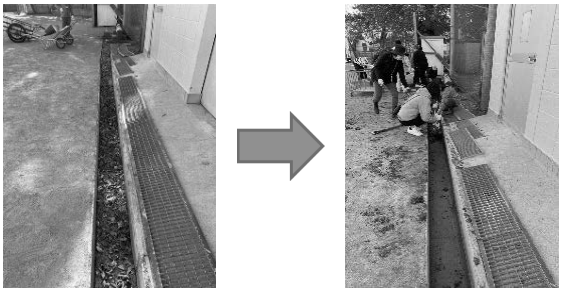
①花壇の新設

昨年度、校庭の端にあった劣化した丸太ステップを再利用し、花壇を新設した。作業中、休み時間になると、子どもたちが寄って来て、一緒に活動を行った。また、完成した花壇に感動している様子が見られた。

秋になると、培養土を追加し、手入れを行い、季節ごとの美しい花々が彩る環境を整えた。

②側溝清掃

６月と11月の２回実施した。溜まっていた大量の土砂を取り除くことができた。



③草取り作業

夏の間に伸びてしまった校庭の草を除草した。運動会に向けて、環境を整えることができた。

④落ち葉清掃

PTA 環境ボランティアの協力を得て、落葉樹の落ち葉掃きを行った。

⑤季節に応じた掲示物の作成

今年度から、PTA 本部からボランティアを募っていただき、正門近くの掲示板の掲示物を作成していただいた。毎月、行事やその月に見られる植物等の掲示物を考えてくださり、季節の変化を感じたり行事を楽しみにしていたりする子どもの姿が見られた。

（3）職員作業

①Ｐタイル、階段の手すり補修

夏季休業中に、職員で協力して３・４階廊下のＰタイル貼り替え修繕を行った。また、安全点検等で階段の手すりでささくれやとげが確認されたので、ニス塗りを行った。職員作業を行い、子どもたちが安心して学校生活を送ることができるように取り組み、安全性を向上させた。

４　成果と課題（○成果　●課題）

○花壇の整備により、地域の方々から好評を得るとともに、活動への自主的な参加が見られた。

○今年度から新たな取組として、PTA の方からボランティアを募集し、花壇の整備、側溝清掃、草取り作業、落ち葉掃き、掲示物の作成など協働し、環境整備が進んだ。

○児童の植物への関心が高まり、水やりなどを自主的に行う姿が見られるようになった。

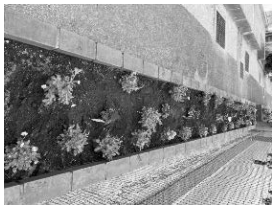
○側溝清掃や掲示物の作成など、これまで職員作業等で行っていたが、PTA の方などに協力していただくことで、職員作業が減り、教師が子どもに向き合う時間を確保することができた。

●季節ごとの花々を植えるための費用負担が大きい。

●保護者や地域ボランティアの継続的な協力が必要である。

５　おわりに

今年度、新たに PTA 環境ボランティアとの連携を強化し、環境整備を進めた。これにより、子どもたちの安全で豊かな学校生活が実現し、教員の働き方改革にも寄与した。今後もこの取組を継続発展させ、環境教育を軸にした子どもたちの心の成長を支えていきたいと考える。



豊かな心を育成する「盆栽教育」の推進
～大宮盆栽村開村100周年に向けて～

さいたま市立植竹小学校
校長　佐　野　嘉　則

１　はじめに

本校は、昭和26年の創立以来、保護者、地域に支えられ、73年目を迎える学校である。さいたま市北区に位置し、児童数約700名の中規模校であり、周辺は、プラザノースや警察学校などの公共施設をはじめとして、盆栽美術館、漫画会館、鉄道博物館などの文化・教育施設にも恵まれている。

学校教育目標は、「すすんでまなぶ子（知）たすけあう子（徳）げんきな子（体）」であり、「人とのかかわりを大切にできる児童の育成」を重点目標に、わ「輪（つながり）話（対話）和（なごみ）」を重点ワードとして、日々の教育活動を推進している。

本校の「盆栽教育」は、第５、６学年の「総合的な学習の時間」に教育活動として位置付けて実施をしている。５年生になると「Ｍｙ盆栽」をつくり、６年生では、剪定を体験し、卒業まで大切に育てていく。平成23年には開校60周年記念事業の一環として、盆栽庭園が校内に完成し、平成27年には学校盆栽支援ボランティアが発足。平成29年には世界盆栽大会の開催に際し、６年生全員が開会式に招待され、盆栽に対する自分の思いを紹介した。本校の盆栽教育は、地域の盆栽家（清香園、盆栽美術館等）と市民団体（「ぼんさい遊々」「盆栽バレー」）、保護者（盆栽ボランティア）、学校（盆栽委員会、児童）の協力により成り立っており、本校特有の取組となっている。

２　研究主題設定理由

上記の背景をもとに、本校の児童が「Ｍｙ盆栽」を育てる活動を通して、生命の大切さや盆栽の魅力を感じる心をはぐくむとともに、日本文化への理解を深め、地域の文化に対する誇りを育てることを目的として本課題を設定した。

５年生は、総合的な学習の時間「日本の文化を知ろう」において、盆栽づくりに携わる人々の話を聞き、「Ｍｙ盆栽」づくりを体験する。その後、盆栽について理解を深めていく。

６年生は、「見つめよう日本」をテーマに日本のよさに気付き、伝統文化として「Ｍｙ盆栽」を見つめていく。これらの取組を通して、日本文化への理解や地域の文化に対する誇りを育てていきたい。

３　研究仮説

本研究では以下の実践計画を基に研究に取り組むことで、研究主題「豊かな心を育成する『盆栽教育』の推進」を具現化できるのではないかと考えた。

①地域の盆栽ボランティア「ぼんさい遊々」や「盆栽バレー」、「盆栽ボランティア」の方々との連携のもと、盆栽教育活動を充実させていく。

②第５、６学年の「盆栽委員会」の児童が中心となり、盆栽について調べ学習を行い、全校への紹介等を常時行う。

③清香園の盆栽家を講師に迎え、以下の実践を行う。

【第５学年】
・一人一鉢の盆栽の作成
・苗植え後、学校の盆栽庭園にて水やり、肥料やりの継続的な活動
・盆栽美術館と学区内の盆栽園の見学
・総合的な学習の時間での盆栽についての調べ学習

【第６学年】
・地域の「大盆栽まつり」に、一人一鉢を出展
・芽摘み、施肥、剪定、鑑賞についての学習
・卒業式において式場での盆栽展示及び式後、自宅への持ち帰り

４　研究内容（具体的な取組）

（１）地域との連携による盆栽教育活動の充実

５月３日～５日にかけて盆栽村で実施される「大盆栽まつり」に６年生の「Ｍｙ盆栽」を展示している。当日は、さいたま市長をはじめとして、多くの観光客で賑わい、本校卒業生が集う場となるとともに、本校

職員や盆栽ボランティアの方々が児童の「Ｍｙ盆栽」について地域へと広める機会となっている。

大盆栽まつり展示

（２）盆栽委員会児童による全校への紹介

盆栽庭園での盆栽を育てる補助（夏の水やりの強化・悪天候時の取込）や学校行事（盆栽教室、大盆栽まつり、盆栽園見学等）や地域イベントの際の搬出入、盆栽教室準備や庭園掃除等、主体的な活動に取り組んでいる。校内掲示としてパネルを作成し、盆栽の魅力を伝える活動にも取り組み、本校Ｗｅｂページへの掲載を行っている。

盆栽庭園での活動

（３）「盆栽教室」の実施【第５学年】

５年生は10月下旬に「盆栽教室」を実施し、「Ｍｙ盆栽」づくりに取り組む。盆栽委員会の児童が司会、進行を行い、地域の盆栽園や盆栽家等、多くの御協力のもと、盆栽について知り、盆栽の剪定、植え込み、苔貼り等の活動を行う。令和６年度は、さいたま市北区コミュニティ課長が来校され、児童と共に「Ｍｙ盆栽」づくりを体験された。できた「Ｍｙ盆栽」を盆栽庭園に並べ、卒業までの月日を「Ｍｙ盆栽」と共に過ごしていく。

「Ｍｙ盆栽」づくり

（４）盆栽教室の実施【第６学年】

６年生は、６月、10月の年間２回「盆栽教室」を実施している。５年生時につくった「Ｍｙ盆栽」と向き合い、剪定や芽摘み、施肥等を行った後、鑑賞を行う。10月は卒業後のことにも触れ、10年後、20年後に思いを馳せる機会となる。令和６年度は、昨年度「Ｍｙ盆栽」をつくられたさいたま市北区長が「Ｍｙ盆栽」を持って来校され、子どもたちと共に「Ｍｙ盆栽」を鑑賞された。

盆栽家による授業

５　成果と課題（○成果　●課題）

○「盆栽教室」後に行ったアンケート「将来の夢や自分の役割について考え、それを実現させるためには努力が必要だと感じることができた」において、肯定的な回答が99％（そう思う83％、どちらかといえばそう思う16％）、「さいたま市（地域や郷土）に愛着をもつことができた」において、肯定的な回答が96％（そう思う61％、どちらかといえばそう思う35％）であった。児童の感想からも意欲的に参加した様子が伺える。

●児童が「Ｍｙ盆栽」を育てることを通じて、自分自身に自信をもつとともに、学校に対する愛校心や一体感をより高めていく。

●卒業生が「盆栽ジュニア」として地域で活躍し、その輪を広げている実態から、学校としてもできる限り協力を行っていく。

●本校の伝統である「Ｍｙ盆栽」を含めた多くの取組を持続可能な活動にしていくため、費用の負担等、検討していく必要がある。

６　おわりに

令和７年度は、大宮盆栽村開村100周年を迎える大切な年となる。引き続き、上記の取組を通して、日本文化への理解や地域の文化に対する誇りを子どもたちの心の中に育てていきたい。また、盆栽庭園の維持をはじめとして、中庭にある観察池や野鳥の森、校庭東側にある学校ビオトープ等、豊かな自然環境を維持、発展させ、環境教育の推進を図っていきたい。

環境を考え、地域とともに環境を守り、伝える児童の育成
～地域の宝　学校の宝　さくら草を守り、育てる活動を通して～

さいたま市立栄小学校
校長　安　島　俊　之

１　はじめに

本校は、さいたま市の西部に位置し、昭和48年に、佐知川地区・指扇地区及び馬宮地区の３つの地域の境目に立地することから、「境目　栄える　小学校」の願いを込められ開校した。西側には荒川が流れ、豊かな自然の中で、現在22学級、618名の児童が学んでいる。東日本大震災の際には、校舎の一部が損壊するなどの被害を受けた。仮設校舎や近隣校へのバス通学などを乗り越え平成26年、本校舎が完成した。

「愛があふれる教育の推進」を合言葉に、「健康でたくましい子・進んでかかわる子・思いやりのある子」の学校教育目標の具現化に向け、日々の教育活動にあたっている。

２　栄小とさくら草

本校が位置する馬宮地区の荒川河川敷には、かつて、さくら草が自生し、昭和９年には、国の天然記念物に指定されていた。しかし、戦後の食糧難の折に開墾され、サクラソウはその後、地元の農家の人々の自宅で育てられてきた。平成６年には、錦乃原櫻草保存会が結成され、それと同時に本校もさくら草栽培活動に取り組み始め、地域の方たちと協力して、「自生地をさくら草でいっぱいにしよう」と活動を進めている。

【市の花　県の花　さくら草】

３　研究テーマ設定の理由

本校は、さくら草の自生地「錦乃原」に近く、地域のさくら草ボランティアの方々とともに、さくら草の育成・自生地の復活に取り組んできた。これらの活動を通して、子どもたちが地域の特色を知り、地域への愛着を高め、地域の一員としての誇りを育むこと、また、地域の自然を守っていくこと、自然環境の大切さについて考えていくことを目指し、本主題を設定した。

４　具体的な取り組み

（1）「さくら草を知り、育て、伝える活動」の教育課程への位置づけ

教育活動として、意図的・計画的、そして持続的な活動にしていくためには、年間指導計画に組み込み位置づけていくことが重要である。本校では、第３学年及び第４学年の総合的な学習の時間に、それぞれ「受け継ごう！地域の人々の思い」「自生地のさくら草を守ろう」のさくら草に関わる学習単元を設定している。主に第４学年で、さくら草について知り、調べ、各自の課題を追究する。そして、調べたことを３年生に伝え学習をつなげていく。

4年　総合的な学習の時間　年間指導計画「自生地のさくら草を守ろう」２３時間

【目標】
○さくら草の栽培活動を通して、錦ヶ原のさくら草の自生地に関心をもつことができる。
○さくら草がある地域の環境に目を向け、この環境を守るために自分なりの考えをもって働きかけようとする態度を養う。

【評価規準】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・さくら草の栽培活動をもとに自分の課題をもって、追究している。 ・「錦乃原櫻草保存会」や地域の方とかかわりながら、自生地のさくら草への理解を深めている	・集めた情報をもとに考えを整理し、わかりやすくまとめている。 ・自分の思いや伝えたいことをわかりやすく工夫して表現している。	・さくら草を守っていくためのよりよい生き方を考えている。 ・活動を通して、身に付いた力を発見し、自分の成長を振り返っている。

【指導計画】

月	○学習活動	・学習内容	会評価【観点】（方法） ○支援　○留意点	円滑な接続への留意事項
	さくら草を知ろう　◎　（1学期）			（課題設定） 第１期（小３～４） ・問題状況の中から動機や実感と関連をして問題を発見し、設定する。 第２期（小５～中１）
	○自分のさくら草を育てる。 ・水やり　・剪定　・鉢植え		○年間のテーマ「自生地のさくら草を守ろう」を設定し、そのために、まず大事なこととして1学期	・問題状況の中から自ら問題を発
	・追肥やり・草むしり・増し土			

【「さくら草を守ろう」を位置付けた総合的な学習の時間の年間指導計画】

（2）「さくら草を楽しむ会」の開催

本校では、４年生が一人一鉢で育てている錦乃原さくら草と地域の方にもお世話していただいているいろいろな種類のさくら草がある。

【ボランティアの方の説明を受けながら】

毎年４月上旬に「さくら草を楽しむ会」を開催し、子どもたちはもとより地域にも開放したくさんの人に楽しんでいただいている。さくら草を全児童が、本校の特色であると知ること、また地域一丸となり大切にしている活動であることを実感するよい機会にしている。

【近隣の幼稚園児たちも】

（３）「さくら草を育てる活動」の実践

①一人一鉢運動

総合的な学習の時間と関連し、４年生では、一人一鉢運動を行っている。児童たちは、鉢植え、ポット植え、その後の観察や水やりという一連の栽培学習を、４年生から引き継ぎ３年生の３学期から４年生の３学期にかけて体験していく。

【地域の方に教わって】

【さくら草の芽分け】

【さくら草の観察】

【自生地への植え付け】

②栽培委員会による活動

委員会活動は、主に４年生の栽培活動の補助的な活動や補完的な活動が中心となっている。例えば、日照条件に応じてプランターを移動したり、栽培に必要な土作りを行ったりしている。

（４）「さくら草の栽培活動」を支える地域ボランティア等との協働

地域のさくら草ボランティアの方々には、児童へのさくら草栽培の指導をはじめ、日常的な管理、見守りの世話、栽培への助言等多岐にわたりご協力をいただいている。また、栽培活動を児童だけでなくPTAにも投げかけ、さらに多くの栄小に関わる人に広げている。さくら草栽培を中心として、学校・家庭・地域が連携して取り組んでいる。

【ボランティアの日常活動】

【PTAの方々のお手伝い】

５　成果と課題

子どもたちは、さくら草栽培を通して、さくら草栽培に込められた地域の思いや願いを実感し、地域の一員としての自覚を高めることができた。また、自分たちの育てたさくら草を自生地に移植することで、これからもこの地にさくら草を守っていきたいという思いを強めていた。全国学力・学習状況調査の質問紙調査「今住んでいる地域の行事に参加していますか」では、本校の児童は、全国平均に比べて肯定的な割合が高く、地域へのつながり、愛着を大切にしていることがうかがえる結果となった。

一方で、毎年自生地への移植を進めているが、全体としての割合は減っている現状を踏まえると、昨今の気候変動はここにも及んでいると考えられる。そのような現状を踏まえ、地域、学校でできることをさらに工夫、改善していかなければならない。また、栽培活動においては地域のボランティアの多大なる協力があるが、ボランティアの方が高齢化しており、後継者の確保が課題である。これらの活動を持続可能なものにするために、地域との連携、協働体制及び効果的な教育課程を見直し・検討していくことも必要である。

６　おわりに

サクラソウの栽培活動を継続していくために、改めて教育的価値、目指す子どもの姿を明確にして学校、家庭、地域で共有を図り推進していく。

身近な環境に関心をもち、主体的に行動できる慈林っ子の育成
～地域・学校協働活動をとおして～

川口市立慈林小学校
校長　鈴　木　真由美

１　はじめに

本校は、昭和52年４月に創立され、48年目を迎える、児童656名の大規模校である。学校教育目標を「かしこく　あかるく　たくましく」とし、目指す学校像「児童一人ひとりを確実に伸ばす慈林小学校～あいさついっぱい　元気いっぱい　やさしさいっぱい　学びいっぱい～」の実現に向け、教職員や地域・保護者と協働しながら「チーム慈林小」を合言葉に創意工夫のある教育活動に邁進している。

学校は、川口市の北西部に位置し、世界に誇る植木の里安行の自然豊かな環境に囲まれている。学区内には首都高速道路や埼玉高速鉄道がとおり、近年は交通の便のよさから新しく住まいを構えた共稼ぎ世帯の増加が著しい。三世代で古くから居住する家庭も多く、落ち着いた地域である。保護者や地域住民は総じて学校への関心が高く、学習支援・環境整備などで多くの理解と協力を得られている。

２　研究主題設定の理由

本校の児童は、素直で明るく、何事にも一生懸命に取り組むことができる。特に、全校で実施している黙働清掃に対して、協力しながら真剣に取り組む児童が多く、勤労意欲が高い。

一方で、全国学力学習状況調査の質問紙調査によると、「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」という質問に対し、肯定的な回答をした児童の割合は、県や全国平均よりも、やや低いことが分かった。

そこで、創立50周年の記念事業の一環として、児童が楽しく学習に取り組むことができるような環境づくりに協力したいという保護者・地域からの声をきっかけに、学校ビオトープ整備や敷地内の樹木板整備を計画した。児童を中心としながら、地域や保護者と協働した学校の環境づくりをとおして、自分たちが住む地域に誇りを持ち、地域や学校のために、一人ひとりができることを考え、主体的に行動できる児童を育成したいという思いから、本研究主題を設定した。

３　実践内容

（１）学校ビオトープの整備

①学校応援団「ＪＳＳ」・ＰＴＡとの協働

本校は、学校応援団「慈林小サポートスタッフ」略して「ＪＳＳ」を組織し、授業支援や環境整備など、様々な支援をいただいている。

また、本校のＰＴＡ活動は、加入が任意であることを明確にし、「できる人ができる時にできることを」をキャッチフレーズにしながら、ボランティアとして主体的な取組を行っている。

今回、ビオトープ整備の呼びかけに対して、休日にも関わらず、多くの保護者・地域住民にご協力いただき、何度も学校に足を運びながら、池の清掃や樹木伐採などをしていただいた。一緒に参加した児童もビオトープ整備を手伝いながら、同時にメダカやエビなどの採集活動に夢中で取り組んでいた。このように、学校と保護者・地域が協働し、楽しみながら自分たちの学校を自分たちで創っていくという方向性を共有して意欲的に取り組んでいる。

②民間団体との協働

公益財団法人三菱ＵＦＪ環境財団及び公益財団法人埼玉県生態系保護協会が実施している「学校ビオトープづくり支援事業」に応募し、今年度、学校ビオトープ整備に係るご支援をいただけることになった。大型の雨水タンクを設置したり、新たな植物を購入したりするなど、より自然に近い生態系を目指し、本格的なビオトープづくりを進めることができている。

③川口市環境アドバイザーとの協働

今回、学校ビオトープを整備するにあたり、専門家の知見を借りることができた。本市には、ビオトープづくりをはじめ、様々な植物や昆虫に精通している環境アドバイザーを招聘できる制度があり、幸運にも協力を得ることができた。

PTA 環境リーダーにも参加してもらい、どのようなビオトープをイメージし、どのような学習に繋げていきたいのかという意見交換をしながら、専門的なアドバイスをいただくことができた。

（２）学校敷地内の自然観察

①樹木板設置（はなもく散歩）の取組

本年度より、NPO 法人リトカルと提携し、樹木板設置事業「はなもく散歩」を導入した。樹木板には、QR コードが明記されており、GIGA 端末タブレットで読み込むと、対象の樹木情報が音声で流れるシステムとなっている。敷地内の樹木が一覧になっている学校樹木マップを参考にしながら、樹木板を栽培委員会の児童が分担し、主体的に楽しく取り付けることができた。

②授業や委員会活動における野菜作り

学校敷地内には、学年や委員会に割り振られた小さな畑があり、季節に応じた野菜づくりを種植えから収穫まで分担して協力しながら行っている。収穫した野菜は調理実習で活用し、食育に活かしている。

③ＩＣＴを活用した授業実践

埼玉県学力学習状況調査の質問紙調査を分析した結果、「授業においてタブレットを使った」と回答した児童が、県平均を大幅に上回っていたことが分かった。敷地内の自然観察については、特に３年理科「昆虫の観察」や４年理科「植物の様子」の学習において、観察したい動植物をタブレットで撮影し、新聞づくりや交流活動に活かしている。

（３）学校周辺地域の自然観察

前述のとおり、学校がある安行慈林地区は、自然が豊かで、近隣公園では、様々な動植物を観察することができる。低学年の生活科郊外学習では、江川グラウンドやイイナパークに行き、具体的な活動や体験を通して、自らの生活を豊かにしていくための資質や能力を育成している。

４　成果と課題

普段、何気なく見ている学校敷地内について、詳しく調べた結果、50種類以上の樹木があることが分かった。児童は、身近な環境において様々な動植物がいることに気づき、それらについて、主体的に調べようとする機運が、全体的に高まってきた。

今後は、授業を中心に身近な自然観察を継続しながら、引き続き自分たちでより良い環境をつくろうとする主体的な態度を育成する中で、具体的な活動にどのように繋げていくのか、ということが課題である。

ＳＤＧｓを視点とした総合的な学習の時間や生活科での取組や委員会活動を通した持続可能な環境教育の研究

新座市立片山小学校
校長　戸　髙　正　弘

１　はじめに

明治７年開校以来、本年度、記念すべき150年を迎え、記念行事を保護者や地域の方の協力を得て、盛大に執り行った。地域の温かい支援と期待を受けて片山っ子の児童像　か＝かしこく　た＝たのしく　や＝やさしく　ま＝まけない心　を掲げ、伝統を大切にしながら教職員が情熱をもって創造的な教育活動を展開している。SDGs の視点で目標を設定し、学びに向かう児童の育成を目指し、チーム片山小で取り組んでいる。

令和４・５・６年に新座市教育委員会の委嘱を受け、研究主題を「学びに向かう力の涵養　～質の高い教育サスティナブルな社会をめざして～」とし、カリキュラム・マネジメントを意識した主体的・対話的で深い学びによる学力向上の研究に力を入れてきた。初年度は学力向上を最重要課題に取り組んだ。２年目は、①カリキュラム・マネジメント② GIGA スクール構想③個別最適な学びの３本を柱にして基礎学力の向上を推し進めた。３年目となる今年度は、ユネスコスクールとして、ユネスコの学習の４本柱と SDGs をかけ合わせた授業づくりを研究してきた。各教科等の各単元で身につけた資質・能力が一層汎用的な力として磨かれていくように、単元間や学年間、教科間といった縦横のつながりを意識した指導計画の立案・更新を図ってきた。そこで、本校では、この事業と学校研究を一体化させ、総合的な学習の時間と生活科を中心に「持続可能」をキーワードにして、児童が話し合う良さを実感できる授業展開、アウトプットする力の向上、学習効果を高める ICT の活用と環境教育を掛け合わせ、研究に取り組むこととした。

２　設定の理由

環境問題が深刻化される中で、子供たちに持続可能な社会づくりに関心をもたせ、身近な自然環境や自然のよさを見つめ、自然を愛し、大切にする児童の育成を目的とした。SDGs を視点とした総合的な学習の時間や生活科での取組や委員会活動を実践するため、本研究テーマを設定した。

３　具体的な取組

（１）６年生　総合的な学習の時間

「地域を創る」～片山ビオトープを創ろう～

一昨年度の６年生が計画したビオトープづくりを昨年度の６年生が場の整備をし、今年度の６年生が本格的に作り始めた。

①課題づくり
・昨年度までの学習を振り返り、地域での取組と SDGs についての関連性について考える。
・どのようにビオトープを作るか考える。

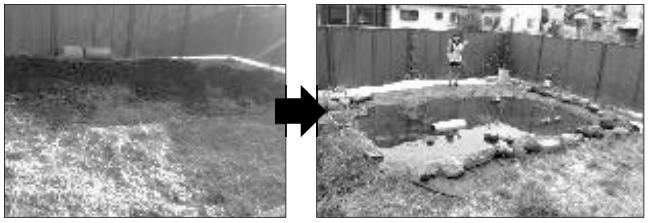
②実践する
・地域や自治体の力を借りながら、ビオトープ作りに必要な物を考え、作る。

③まとめる
・創り出したビオトープをどのように持続するかを考え、次年度につなげる。

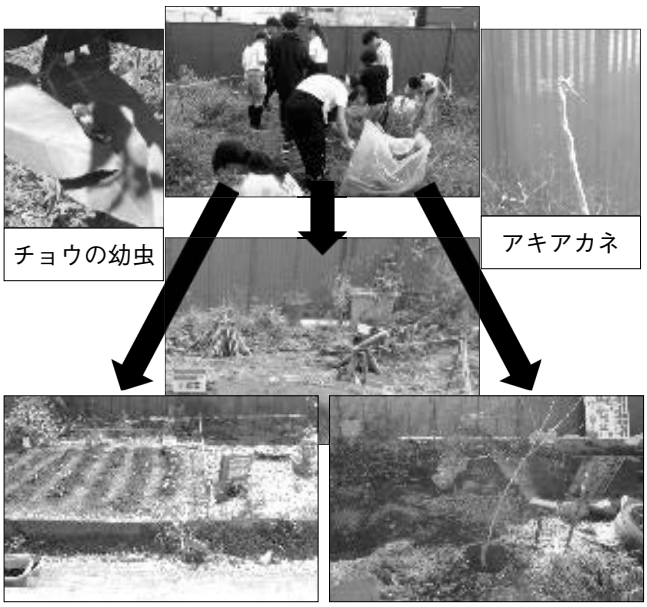
④地域に発信する
・現状、対策、結果をサイクルとして見届けまで行う。
・活動を振り返って、どのような力がついたか考える。

ビオトープ作りに際して、「水の中」「畑」「虫」「植物」「環境」など、子供たちが自ら興味のあるもの、探究したいものを課題にし、それぞれが活動を進めた。企業でビオトープを研究している清水建設に質問をし、助言をいただき、植物が育ち、生き物が集まるビオトープ作りを目指した。

「水の中」や「環境」グループが池作りに取り組んだ。赤土を撒き、生き物の隠れ場所となるような大きな石などを校内から探してきて設置した。水草を栽培し、酸素の供給、二酸化炭素を吸収することで水質を改善させ、魚や他の水生生物に適した環境を作った。



「畑」「虫」「植物」グループが雑草を抜き、土を耕し野菜を育てるために土づくりをし、虫が隠れたり住んだりできるように枝を重ね、学校敷地内にある苗木をビオトープに移動させた。



（２）４年生　総合的な学習の時間

「片山のみりょく UP 大作戦～いきいき生き物～」

昨年度の４年生が作った箱舟ビオトープを今年度の４年生が引継ぎ、「動植物を育て、増やし、自然いっぱいの魅力ある片山小にする」を目標に取り組んだ。

①課題をつくる

・片山の自然環境に興味をもつ。（生物多様性、環境保全とのつながり）

②考える

・調べる方法（インターネット･本･インタビュー観察）

③まとめる

・調べたことをまとめる。（リーフレット、スライド）

④発表する

・発表会をし、活動を振り返ってまとめをする。

各児童が片山小の魅力をアップさせるために様々な課題を設定し、探究活動を行った。その中の一つである「自然チーム」が箱舟ビオトープを引き継ぎ、環境をきれいにし、メダカやヤゴを新たな住まいに移し替えた。

（３）ネイチャー委員会（環境美化委員会）

今年度、開校150周年記念行事の一環で、校内の中庭に学校の花でもあるコスモスを並べ、コスモスロードを作った。数多くのコスモスを栽培することは学校の敷地では難しく、地域の方の畑をお借りしてコスモスを育てた。全校児童で種まきをし、ネイチャー委員会の子供たちが現地を見に行き、新聞を作成し、生育状況を全校に報告した。間引きや畑からプランターへの植替えを保護者の皆様に協力いただき、記念式典当日にはきれいなコスモスが来賓、子供たちを迎え入れた。並べられたコスモスの水やりはネイチャー委員会の児童が担当し、世話をした。さらに、学校敷地内に植替えを行うために土を耕し環境を整えた。枯れたコスモスから種がこぼれ、来年その場所で花開くことを期待している。

コスモスロード

４　成果

○片山ビオトープを開園させることができた。

○持続可能な組織づくり、学習計画づくりをし、次年度の学年へ引き継ぐことができた。

○豊かな感性を育む栽培活動ができた。

○子供たち一人一人が自然体験をとおして、環境への親しみや栽培の喜びを味わうことができた。

○育てる大変さを実感し、環境保持の大切さを理解することができた。

○保護者や地域の方々の協力に感謝し、絆を深めることができた。

郷土・自然を愛し、豊かな心を育てる環境教育の推進
～閉校に向け、より深い地域連携を重視した栽培・体験活動の実践～

鴻巣市立小谷小学校
校長　棚　澤　大　輔

１　はじめに

本校は、鴻巣市の北西部に位置し、開校118年目を迎えた、児童数90名、学級数６、県費教職員13名の小規模校である。児童は明るく素直で、のびのびと生活している子が多い。保護者や地域は、学校に対して協力的であり、教育活動への理解と支援をいただいている。豊かな自然に囲まれ、田園が広がる環境に位置している本校では、アイガモ農法による米づくりや野菜づくりなどを体験したり、外部講師を招聘し多様な生き方や考え方を学んだりするなど、教育課程の中に勤労生産的学習、体験学習等を位置づけ、豊かな心の育成に努めている。

２　研究主題設定の理由

郷土・自然を愛し、豊かな心を育てる環境教育の推進をめざし、中でも、より深い地域連携を重視した栽培・体験活動の実践を重点として、これまでの環境教育を見直し、更に発展させるべく本主題を設定するに至った。

本校の大きな特色の一つとして地域人材と連携した体験学習が挙げられる。保護者・学校応援団等、地域の学習支援ボランティアとの連携をより深め、総合的な学習の時間及び生活科で、学校ファームを活用した農業体験（アイガモ農法による米づくり、サツマイモ栽培、夏野菜の栽培）等を継続的に実施することで、自然や生き物への興味・関心を高めるとともに、生命を尊重する気持ちを育む。また、活動を通して、他者との交流から学び、自分の考えを広げ深める学習へつなげる。

３　体験活動の計画

本校が長年に渡り積み上げてきた農業体験を主体とした勤労生産学習に取り組む。

○　さつまいも苗植え体験（５月）１～４年生
○　野菜の苗植え（５月）２・４年生
○　田植え体験（６月）５・６年生
○　アイガモ農法体験（７月）５・６年生
○　さつまいも掘り体験（10月）１～４年生
○　稲刈り体験（10月）５・６年生

４　研究実践の内容

（１）１～４年生　生産体験活動

○「さつまいも苗植え」（５月24日）

毎年１～４年生がさつまいもの苗植えを実施している。今年も地域の方が快く畑を貸してくださり、実施することができた。活動では、４年生がリーダーとなって下学年に苗の植え方を教え、縦割り班で協力して植えることができた。待ちに待ったさつまいもの苗植えであったが、実際に体験することで、机の上では学習できない貴重な学習の場となった。学校応援団の皆様にご協力をいただき、無事に苗植えを終えることができた。

○「さつまいも堀り」（10月10日）

１～４年生で、さつまいも掘りを実施した。大きく育ったさつまいもをたくさん収穫することができ、子どもたちは大変嬉しそうであった。この豊かに実ったさつまいもは11月に実施した校内音楽会のお昼に、PTA とおやじの会の協力により、焼き芋にして皆で食した。栽培から実際に食すまでの一貫した体験を通して、作物を生産することの大変さや喜びに触れ、豊かな学びに繋がった。また、地域の方々や同学年・異学年との協働作業により得た体験や学びを表現する活動にも取り組み、学びを深めた。

（2）２・４年生　栽培体験活動

○「野菜の苗植え」（５月14日）

生活科・総合的な学習の時間に、児童が自分で育てる野菜の種類を選び栽培活動を行った。

地域の方にご指導いただいて、苗の植え付けに取り組んだ。栽培体験では、苗植えの方法から丁寧に教わり、水やり等懸命に世話する様子が見られた。自分で育てたい品種を選択して取り組んだ活動であり、夏を迎え、豊かに逞しく実ったオクラ、きゅうり等に感動しながら、収穫の喜びをかみしめていた。自然の恵みと食物の大切さについての学びを深めることができた。

（3）５・６年生　農業体験活動

○「田植え体験」（６月24日）

地域の農家の方にご支援ご協力いただき、５・６年生が参加しての田植え体験を実施した。本校では40年ほど続いている歴史ある体験学習となっている。十五条ほど手植えしたあとに田植え機が登場。６年生は社会の歴史学習、５年生は社会の農業生産や総合の学習に関するよい学びを、体験を通して得ることができた。

○「アイガモ農法体験」（５月24日）

田植えを行った田んぼで、地域の方に有機農法の一つであるアイガモ農法についてご指導いただき、体験を通して理解を深めた。食物連鎖のことや植物の生育に必要なこと、農薬や化学肥料を使わずに作物を育てる有機農業のよさについて学んだあと、アイガモの放鳥を体験させていただいた。また、アイガモの心臓の音を聴くこともでき、子どもたちは命のぬくもり、大切さを実感することができた。

○「稲刈り体験」（10月22日）

収穫の時期である10月を迎えると豊かに実った黄金色に輝く稲の収穫体験学習を行った。収穫後のまとめの会では、学校のリーダーである５・６年生が、今年度本校が閉校となることからこれまでの感謝の気持ちを、学校を代表してお伝えした。作物が大きく育ち、食べ物として食卓に運ばれてくる前の段階について体験を通して知ることで、食の喜びや収穫するまでの苦労、食べ物への感謝や作物を育ててくださっている方々への感謝の気持ちなどが子どもたちの心に伝わり、貴重な学びの機会となった。

５　研究の成果と課題

それぞれの学びを整理・表現し、新たな課題につなげることで、「活動あって学びなし」とならぬよう学習活動を進めてきた。本校の特色である「地域との連携・協働」を最大限に生かした学習活動の展開を目指し、体験活動の学習過程上の位置づけを明確にするなど、従来まで取り入れてきた多様な学習活動を意図的・計画的に展開できた。また、「体験活動年間スケジュール一覧表」の作成や、年間指導計画の工夫・改善、学習支援ボランティアの方々との「事前ミーティング」の時間の確保など本年度の重点として研究を進めることができた。

今後、本研究の集大成として、季節に応じた花植え活動や閉校記念樹の植樹体験を通し、更なる心豊かな学びに繋げ締め括りとしたい。

豊かな体験活動により学びを広げる環境教育の実践Ⅲ
～循環型の栽培活動の取組みとＳＤＧｓの推進～

坂戸市立三芳野小学校
校長　佐　藤　毅一郎

１　はじめに

本校は、坂戸市街地の東部に位置し、大川平三郎翁ゆかりの地に開校し、151年の歴史と伝統に恵まれた学校である。

学区の北から東に越辺川が流れ、東部には水田地域、北から南にかけては、畑や住宅地が広がり、近年、学区内に圏央道坂戸インターが開通し、新興住宅地も増えている。かつては、純農村地帯で、今でも、自然に恵まれた環境の中で、12学級220名の児童が学んでいる。

学校ファームを充実させ、各学年・委員会が、中心となり、栽培活動を取り入れた環境教育に取り組んでいる。

２　研究題目の設定理由

昨年度、栽培活動を中心とした環境教育に取り組み、多様な体験活動を工夫することにより、児童一人一人の自然への関心・意欲の高まりとともに、学びの広がりも実感することができた。今年度は、これまでの栽培活動を継続し、学校ファームや学年園での野菜栽培をさらに、充実させ、多種多様に整備を進め、どの児童も学びがいがあり、より一層、身近な環境への興味関心が高まる実践をめざして本主題を設定した。

３　実践計画について

（１）　年間栽培計画と準備作業

①循環型栽培に欠かせない無農薬農法

学校ファームの整備にあたり、除草剤を使わないこと、自作コンポストの落ち葉堆肥を使って整備することにしている。このような主旨のもと、本校では、10年以上に渡って循環型の栽培活動を取り入れ、学校ファームを整備している。

循環型の栽培活動では、食物連鎖を生かしていくため、それぞれの生き物に害の生じる除草剤等の使用を制限している。

②循環型栽培計画と土づくりの取り組み

自作の落ち葉堆肥を学校ファームの土に混ぜ込み、苦土石灰で土の酸性土壌を中和している。落ち葉堆肥では足りない分を、埼玉県緑の学校ファームの助成による肥料で補っている。連作を避け、学年の割り当てを、ローテーションし、今年度の作付け予定を提案し、進めた。

（２）　学校ファームの取り組み

各学年が栽培計画を立て、それに基づいて、埼玉県みどりの学校ファームと近隣の高校の農業科の農場に依頼して、野菜の種・苗を手配して野菜作りを進めた。

３年生の「野菜を育てよう（総合的な学習の時間）」では、校区内の農家に協力していただき、学校ファームの取り組みを進めている。今年度はこれに加えて、近隣の高校の農業科の農場から野菜の苗を取り寄せたため、高校の担当教官に直接、栽培方法を教えていただき、学校ファームの取り組みを充実させることができた。

４　具体的な取り組み

（１）　各学年ブロックの重点

・低学年…自然環境にふれ親しむこと
・中学年…環境問題への気づき
・高学年…循環型の栽培活動

（２）　各学年の取り組み

①１年生（生活科）

・アサガオ（種の植え付け）
・ひとり一鉢栽培活動を行い、毎日水やりの世話をすることにより、自然に親しむ機会となり、アサガオの成長を見届けることができた。
・種→ふたば→本葉→つぼみ→花→種という成長の変化を観察することができた。
アサガオの種を取ったあとは、つるを使ってリースを作り、教室に展示した。

②２年生（生活科、苗から栽培）

・ミニトマト、ナス、ピーマン、ズッキーニ、サツマイモ
・「やさいをそだてよう」
学校ファームで育てたサツマ

収穫の様子

イモを活用して、パーティーを行った。実の収穫とともに、つるも集めて、思い思いにリースを作り、展示準備を進めている。

サツマイモの
つるのリース

③３年生（総合的な学習の時間、苗から栽培）

・トマト、ナス、ピーマン、キュウリ

・「野菜を育てよう」
学校ファームに作付けし、観察、水やり等の世話をして、皆で収穫し、家庭に持ち帰り、それぞれ調理をして美味しくいただいた。

④４年生（総合的な学習の時間、理科）

・「お米を育てよう」については、今年度は、ボランティアの方の支援を受けられなくなり次年度のバケツ稲栽培の準備期間とした。

・理科の学習では、ヘチマ棚に種から育てた苗を植え付けて、植物の成長を継続して観察した。（理科）

ヘチマ棚

・収穫した昨年度のヘチマ種は、発芽率が低く、成長の観察には不向きであった。病気等を防ぐために、特別な加工がしてあるものもあり、１代限りの栽培に限定されているようである。追加で購入し直した。

⑤特別支援学級（苗・種の植え付け）

・トマト、ミニトマト、ナス、ピーマン、トウガラシ、キュウリ、カボチャ、スイカ、ズッキーニ、ニガウリ、ダイコン

・「自立活動」として、ジャガイモの栽培活動と収穫して校内でのジャガイモ販売も行った。ジャガイモを収穫後、校内の暗所に２週間保管し、乾燥させ、良い状態にし、品種ごとに袋分けした。また、計画的に、お店屋さん体験も進め、おつり計算やお店に来店するお客さんとのやりとりを通して、学習に生かすことができた。

⑥緑化・環境委員会（５・６年生）

・社会福祉協議会に寄付していただいたパンジーを校内に植えた。
毎年、人権の花として校内の正門入り口に看板表示して啓発活動を進めている。

・委員会活動として、曜日ごとに、水やり当番を決め、校内緑化を進めている。

人権の花（パンジー）

⑦高学年理科との関連
５年生の花のつくりや発芽条件、成長条件を観察実験する学習にも、学校ファームが生かされている。また、６年生の食物連鎖の学習でも、身近に、ダンゴムシが枯れ葉を食べることも学校ファームのコンポストで観察でき、よりよい土のもととなることの理解につながっている。

（３） 地域人材ボランティアとの連携について

①学校ファームの拡張整備
平成28年度に、学校ファームの敷地を整えた。整備するきっかけは、稲作ボランティアの方のアドバイスであった。本格的に野菜作りをするのであれば、耕運機で畑を耕せるように長方形の畑にするとよいというアドバイスのもと、学校ファームの一角にあった高木の撤去や地中に埋まっていたコンクリートガラも取り除き、学校ファームの野菜畑として拡張して整えることができた。その後、学校ファームの担当者を中心に、学校の耕運機を使い、時期時期に、耕し、学校ファームとして整備運用している。

②人材ボランティアの継承が課題
稲作のノウハウを質問・回答形式で教えていただき、作業に合わせた児童への説明等、外部人材の活用は、非常に効果的である。しかし、ボランティアという性格上、ご協力いただける人材には限りがあり、課題も残った。今後地域の方々への呼びかけ、対応を図りたい。

５ 成果と課題（◎成果、△課題）

◎学校ファームの栽培活動を継続し、季節により様々な植物の花や野菜の実がなることについて実感的理解ができた。

◎循環型の栽培活動の推進により、植物に虫も集まり、生き物の生態や多様な個体に触れ、枯れ葉を食べたダンゴムシの糞が役立つことも自然の摂理を理解するもととなっている。

◎生態系について体験的に理解できるようになり、加えて興味関心も高まってきた。

◎教員についても、栽培・飼育・観察の指導場面を通して、農家の方の協力のもと、様々対応して指導力向上を図ることができている。

△今後、教員への栽培の専門的な知識の継承と農家の方々の必要なアドバイスを得るための人材確保が課題である。さらに連携を進めたい。

ビオトープを活用した環境保全意識の醸成
～地域・家庭と連携した自然体験活動を通して～

三芳町立三芳小学校
校長　金　子　　睦

１　はじめに

本校は三芳町の中心に位置し、落ち葉堆肥農法で世界農業遺産に認定された豊かな農地とベッドタウンとしての住宅地が混在した環境の中にある。児童数は405名、16学級の中規模校である。創立135年を迎えた伝統校であり、保護者や地域との結びつきも強い。

循環型農業によって保全された豊かな自然、協力的な保護者や地域の方々といった地域性を生かし、学校目標である「ルールをまもる子、チームワークをつくる子、ベストをつくす子」の実現に向けて教育活動に取り組んでいる。

２　研究主題について

本校では、おおたかの森トラスト代表足立圭子様をアドバイザーに迎え、３年前に、全校児童、保護者、地域の方、教職員によるビオトープづくりを行った。

コロナ禍により豊かな自然体験が乏しくなっていたこと、温暖化等の環境問題が喫緊の課題となってきていることがあり、身近な自然体験を通して、環境について考えようとする児童の育成を図りたいと考えた。

三芳町には、地域固有の豊かな自然が残されているが、外来種によりその生態系の保全も危ぶまれている。ビオトープを用いた学習を通して、地域固有の自然を守ることにより、自然の循環や様々な生物が関わりながら生きていることを実感を伴って理解し、さらに地球規模の環境問題を考えることにもつながると考えている。

ビオトープによる豊かな自然体験活動を行うことで身近な自然を大切にする児童の育成を図り、生態系の循環という観点のもと、地球規模で物事を考え未来を切り拓く児童を育てたいと考え本主題を設定した。

３　実践の概要

（１）地域の方の指導のもと児童の手によるビオトープづくり

３年前からビオトープづくりに全校で取り組んでいる。年を追うごとに生物の様相は変化しており、未だ発展途上である。

ビオトープづくりは、本校の庭の整備から始まった。植木の伐採を行ったり、池の穴を掘ったりした。

池には、日本固有種であるクロメダカを放し、水草も植えた。地域の固有種である樹木も植樹した。これらの作業はすべて児童の手によるものである。

ビオトープづくりの過程で、児童は、スコップやのこぎりなどの道具を作業に生かしたり、土や生物に直接ふれたりする体験をしており、そのこと自体が貴重な学びとなっている。

３年目を迎えた今日のビオトープには、多様な生き物が集まりはじめ、豊かな循環が始まっている。しかも年を追うごとにその様相は変わってきており、児童は「今年はどんな生き物がやってくるのだろう」と楽しみにしているようである。

（２）ビオトープ学習

各学年の実態に応じてビオトープ学習を行っている。体験を通して生き物は関わり合いながら生きていることを学んでいる。

【落ち葉ケーキづくり】

落ち葉を集めミルフィーユ状に固め、落ち葉ケーキ

をつくっている。ここには、カブトムシやクワガタムシがやってきて卵を産み付け、今では、たくさんの幼虫が育っている。落ち葉と虫とのかかわりを通して、命の循環を学んでいる。

【外来種の除去】

ビオトープの目的の一つに地域固有の生態系を保全するということがある。強い外来種が育つとこの生態系を変えることになるため、外来種の除去を行っている。普段「雑草」とひとくくりにしていた子供たちもその一つ一つに名前があり、生態系を構成しているということを理解してきている。

【ヤゴ救出】

プールのヤゴを救出し、ビオトープの池に放した。池の中で、水草、ヤゴ、メダカなどの生き物どうしの関わりが生まれている。自分たちが救ったヤゴの命がビオトープに息づいているのを見て、命の大切さについて体験を通して学んでいる。

【生き物探し】

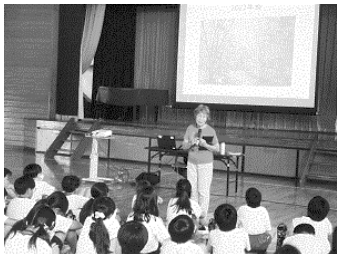
ビオトープは、年々、様相が変化しており、おとずれる生き物も多様になってきている。子供たちは、図鑑を片手に様々な生き物を発見している。しだいに外来種、固有種という観点で生き物を見つける目も育ってきた。

【環境問題探求学習】

５年生では、ビオトープ学習で体験したことをもとに、環境問題について個々の課題を追究している。身近な環境保全から自然の循環の大切さを学び、その循環を断ち切る環境問題について、どのように取り組めばよいか、自分たちにできることはないか、一人一人が考え、まとめ、発表している。

【ビオトープ講義】

ただ体験するだけでなく、ビオトープとは何か、環境問題は何が問題なのか、自分たちのビオトープ学習のねらいは何か等について学ぶ場を設けている。おおたかの森トラスト代表足立圭子様に講義をしていただき、今までの活動を振り返ったり、体験から生じた疑問について考えたりしている。この講義の時間は、ビオトープ体験を統合し、環境保全について深く考える場となっている。



（３）地域・家庭との協力

ビオトープ学習を成功させるには、継続的なビオトープの維持管理が不可欠である。そこで、定期的にその活動が行えるようにビオトープサポーターを組織した。

ビオトープサポーターは、地域や保護者の皆様で構成され、月に一度活動を行っている。現在では、30名ほどの皆様にご協力いただいている。

ビオトープの外来種の除去、樹木の剪定伐採、児童の学習補助などでご協力いただいている。

ビオトープを通して、学校、地域、保護者がつながり、地域ぐるみで環境保全に取り組む体制ができつつある。

４　成果と課題

（１）成果

○自然に親しみ、生態系の循環という視点から自然を守ろうとする豊かな感情と意欲が醸成された。

○地域、家庭、学校が連携し、地域全体で環境保全への意識を高めることができた。

（２）課題

○ビオトープの活用の仕方を児童自らが考えられるようにする。

○持続可能な活動を維持するため、各たよりやHP等で、さらにビオトープ学習の取り組みについて発信し、地域ぐるみの環境学習をより推進していく。

世界にはばたく人財が育つＳＤＧｓの実現に向けた教育の在り方
～未来像を予測して計画を立てる力の育成～
郷土の自然環境「荒川太郎右衛門地区自然再生地」における草花プロジェクト

川島町立つばさ北小学校
校長　大河原　早菜江

１　はじめに

本校は、旧小見野小学校と旧八ツ保小学校が統合し、平成30年度に開校された７年目となる学校である。また令和７年度には、町内のつばさ南小学校と統合し、川島中学校の敷地内に新設される小中一貫校としてスタートすることが予定されている。

児童数は130名、学級数は８学級（通常学級６学級、特別支援学級２学級）の小規模校である。

埼玉県の中央部に位置し、学校の北東部には、荒川が流れ、南部に圏央道が走り、広い田園地帯が続く自然豊かな環境である。学校教育目標「なかよく・かしこく・たくましく」のもと、「気づき、考え、実行する子」を目指す児童像として教育活動にあたっている。

２　児童の実態

本校の児童は、祖父母と共に暮らしている児童が多く、思いやりがあり、素直で真面目である。また、地域の協力により、学校・家庭・地域で児童を育てる基盤ができている。しかし、小規模校であるがゆえに、多くの人と関わって考えを広げる経験が少ない児童が多い。

前述したとおり、来年度にはつばさ南小学校との統合が予定され、児童数も今年度の倍近くになること、２学級で組織される学年が生じることが予想されており、統合における新しい友達との出会いを楽しみに思う反面、これから経験する大きな変化に不安を感じている児童も少なくない。

社会においても、これまでに経験したことのない災害が頻発し、予測困難な時代が到来している。このような時代を生き抜くためには、児童一人一人が様々な課題を自分事として捉え、向き合い、解決する力を備えることが求められる。

３　研究主題について

川島町教育委員会は、令和５年度から３年間「埼玉県教育委員会ＳＤＧｓの実現に向けた教育推進事業」の委嘱を受けており、研究主題を「世界にはばたく人財が育つＳＤＧｓの実現に向けた教育の在り方」とし、町内６校で「ＥＳＤを通して育成する能力・態度」の価値づけを統一し、小学校から中学校への学びの繋がりを意識した教育活動を推進している。

特に令和７年度に小中一貫校としてスタートする３校（本校、つばさ南小学校、川島中学校）は、モデル校として指定を受け、これまでの環境教育の成果を生かしながら、ＳＤＧｓの視点を取り入れた教育実践を積み重ねてきた。

２年目となる本年度は、「ＥＳＤを通して育成する能力・態度」の１つである「未来像を予測して計画を立てる力」の育成に焦点をあて、３校が小中９年間の継続した学びを意識しながら活動を深めている。

ESDを通して育成する能力や態度 系統表（R6川島統一）

		1・2年生	3・4年生	5・6年生	中学生
知識	①批判的に考える力	他の意見や考え方を自分なりによく考えている。	他の意見や考え、他からの情報をうのみにするのではなく、自分なりによく考え、理解することができる。	他の意見や考え、他からの情報をうのみにするのではなく、自分なりによく考え、理解することができる。	他の意見や考え、他からの情報をうのみにするのではなく、自分なりによく考え、理解、解釈することができる。
		よりよい解決策を考えている。	様々な情報をもとに、よりよい解決策を考えることができる。	様々な情報をもとに、情報収集によりよい解決策を考えることができる。	様々な情報をもとに、情報収、情報収集によりよい解決策を考えることができる。
技能	②未来像を予測して計画を立てる力	身近に対して目的や目標をもって計画をたてようと考えている。	身近に対して目的や目標をもって計画をたてることができる。	身近に対して、先の見通しや、目的や目標をもって計画を立てることができる。	
				相手を思いやりのある言葉づかいのあり方や考え方が身につけることができる。	相手を思いやりのある言葉づかいのあり方や考え方が身につけることができる。
	③多面的、総合的に考える力		自分は地域からものごとを考えることができる。		自分は地域からものごとを考えることができる。他の事象等と関連付けて考えることができる。
			不要物は廃棄になると考えることができる。	見方や考え方の対象を変えれば、不要物が廃棄になると考えることができる。	
	④コミュニケーションを行う力	自分の考えや思いを言葉にしようとしている。	自分の考えや思いを言葉に表現することができる。	自分の考えや思いを言葉にまとめて相手に表現することができる。	
		他者の話を聞こうとしている。	他者の話を聞き、考えや意見を受け入れることができる。	他者の話を聞き、考えや意見を理解に取り入れることができる。	他者の話を聞き、考えや意見を理解に取り入れ自分の考えを表現できる。
	⑤他者と協力する態度	相手と協力し合おうと活動しようとしている。	相手グループの仲間と協力し合おうと活動することができる。	相手グループの仲間と協力しあい、目標によりよい活動を活動することができる。	
			相手の状況を考えることができる。	相手の立場や状況を考えることができる。	相手の立場や状況を考え、相手を尊重活動することができる。
態度	⑥つながりを尊重する態度	人間や社会との関係を知っていることが理解しようとしている。	自己と他人とのつながりがあることを理解できる。		自己と他人とのつながりがあることを理解、共感できる。
			人間や社会との関係を知って生活していることが理解できる。	人間や社会との関係を知って生活していることが理解できる。	人間や社会との関係を知って生活していることが理解できる。
	⑦進んで参加する態度	進んで活動に参加しようとしている。	活動に活動に参加することができる。	自分の意見に責任をもち活動に活動に参加することができる。	
			進んで他者のために行動できる。	自分の役割を理解し、進んで他者のために行動できる。	

４　前年度までの取組

統合前の小見野小学校、八ツ保小学校では、児童が郷土の環境を生かして様々な体験活動を行ってきた。その過程において、自然の豊かさに気づくと共に、さまざまな要因からその豊かな環境を失いつつあることにも気づくことができた。

本校開校（平成31年度）後は、地域の環境を守るためにできることはないかという点に視野を広げ、「自然再生推進法」に基づく全国初の法定協議会である「荒川太郎右衛門地区自然再生協議会」の協力の下、在来種の保全活動、外来種の除去作業等の自然保護活動を始めた。現在もなお継続して取り組んでいるところである。

５　具体的な取組

本校の環境教育の軸は、４年生で行う「荒川太郎右衛門地区自然再生地」における草花プロジェクトである。

この活動は、開校時から継続して実施しているものであるが、近年は活動ありきで、児童の思いや願いが尊重されていないのではないかという課題も見えてきた。

そこで、本年度は、児童の思いや願いを活動の基盤とし、児童自身で活動計画を立てることができるよう、教育課程や展開の見直しを行った。

（1）「森のタンブラー」の有効活用

３年生では、自然環境を考えるきっかけとして、「森・山・川・海のつながり」を考えたワークショップを行った。

【森のタンブラーの絵付け作業】

児童は、廃プラスチック削減を目指して開発された「森のタンブラー」への絵付けを通して、海洋プラスチックゴミにおける問題や環境保全活動の大切さを学んだ。

４年生では、荒川の自然について知り、在来種であるカワラナデシコが減ってきていることを学んだ。この学習を通して、児童は自分たちでもカワラナデシコを増やすことができるのではないかと考え、発芽（水耕栽培）に挑戦した。このときに活用したのが「森のタンブラー」である。

【森のタンブラーを活用した水耕栽培・植え替え作業】

このように、児童の思いから、水耕栽培に使う容器を環境教育の視点で見直し、学習したことを活かして活動を考えることができた。

（2）現地での環境学習と事後活動

実際に「荒川太郎右衛門地区自然再生地」へ足を運び、関係諸団体の専門知識を有する方々をゲストティーチャーとして招き、現地での環境学習、環境保全活動を行った。

【ゲストティーチャーとの交流】

児童は、この体験を通して、荒川の自然の豊かさを実感するとともに、外来種が増えていることにも気づき、改めて課題意識をもつことができた。

活動後、児童は、「一人」「クラス」「地域・他団体との協力」の視点で荒川の自然を守るためにできることを考えた。「もっといろいろな人と協力したい」「今の自分にできることをしたい」という願いから、昆虫採集、外来種の駆除、川の流れの観察、在来植物の移植等を計画し、再び現地で環境学習、環境保全活動を実施した。

【自分たちにできることを計画する児童】

【在来植物の移植作業】

このように、未来像を予測して自分たちでできることを計画する活動を通して、児童一人一人が様々な課題を自分事として捉え、向き合い、解決する力を備えることに繋がった。

（3）荒川により繋がる他校等との交流

本校の活動は、荒川上流河川事務所をはじめ、日本生態系協会、埼玉県生態系保護協会、㈱アサヒユウアス、地元企業、荒川流域にある他市町村小・中学校や保育園との連携のもとで行われており、諸団体の協力が活動の充実につながっている。

【他校等とのオンライン交流会】

特に、荒川下流の小学校で栽培された在来植物の種や苗を譲り受け、育苗したり、苗の移植をしたりして活動に関連性をもたせており、その様子をオンライン交流会や報告会を通して共有している。交流先には、来年度統合して一緒に学習するつばさ南小学校も含まれており、統合後の学びにつなげるために２校の活動を繋ぐ貴重な機会となっている。

６　今後の活動

本校が閉校した後も、川島町の自然環境を活かした学習として継続実施をしていく予定である。そのために、統合後のつばさ小学校の教育課程には、本校とつばさ南小が行っている学習活動との関連を意識し、両校の児童それぞれの学びを継続することができるように本学習活動を位置付けていく。

また、川島中学校の学びに繋がるような教育課程の編成を計画し、郷土の自然環境と、持続可能な社会の担い手の育成にむけたＳＤＧｓを視点とした教育活動の実践を推進していく予定である。

７　成果と課題（○成果　●課題）

○児童の思いや願いを大切にした活動を積み重ねる中で、児童の活動意欲の高まりが見られた。

●児童が体験したことを今後の生活の場面で活かし、持続可能な社会の担い手としての資質・能力を養っていきたい。

持続可能な社会のための環境教育の実践
～学校・家庭・地域の連携による心豊かな青小っ子の育成を目指して～

神川町立青柳小学校
校長　澁　谷　光　男

１　はじめに

本校は、150年目を迎えた歴史と伝統のある学校である。学区は、群馬県との県境を流れる神流川や緑豊かな丘陵などに囲まれた自然に恵まれた地域である。かつて、養蚕の盛んな地域であり、養蚕改良家として日本の蚕糸業発展に尽くした木村九蔵氏の出身地でもある。このため、本校の校章は桑の葉をモチーフとしている。

本校では、これまでに、この地域の特色や伝統を生かして、養蚕や稲作、学校緑化に力をいれ、環境教育を推進してきている。

２　研究主題設定の理由

地域の伝統的な産業である養蚕について４年生を中心に取組を行っている。蚕から繭を育て、生糸とりまで行う年間を通した学習は、本校の特色ともなっており、これまでに、日本蚕糸学会の蚕糸絹文化学習教育奨励賞等も受賞（平成29年）している。

しかしながら、地域での養蚕業を営む農家は年々減少を続け、ついには養蚕業が途絶えるところまできている。養蚕業の衰退は、桑畑や里山等の環境にも密接に関係しており、さらには地域の伝統が消滅することも意味している。

このため、学校で児童が養蚕を学ぶだけでなく、環境との関わりについても視野を広げ、さらに、地域とともに環境を守り、伝統を守り継承していくことが重要だと考えた。

学校での取組だけではなく、家庭や地域との連携を強化し、環境教育が実践、継続できるよう研究主題を「持続可能な社会のための環境教育の実践～学校・家庭・地域の連携による心豊かな青小っ子の育成を目指して～」と設定した。

３　実施計画

国連サミットにおいて採択された2016年から2030年の15年間で達成すべきSDGs（持続可能な開発目標）は、本校の目指す環境教育と一致するものである。このため、各学年の取組でもこの目標を意識して環境教育を推進し、学校全体で研究を深化させる。特に５学年では、「地球に生きる　SDGs」をテーマに地球温暖化防止のために自分たちができること等の環境に関する学習を行う。

特別支援　通年での作物の育成・収穫、収穫した作物の調理、グリーンカーテン（ヘチマ）

１年　サツマイモの栽培、ひまわりの栽培、草花や虫を探そう

２年　企業と連携したミニトマト栽培、各種野菜栽培、地域の自然での生き物探し、サツマイモの栽培

３年　地域を学ぶ「青柳のひみつ発見」、地域を守る施設への訪問、エネルギーの学習

４年　命の学習、浄水場、ダム（水源地）の学習、ヘチマの栽培、蚕を飼ってみよう、生糸取り、米を使った繭玉作り、防災学習

５年　地球と生きるSDGs、土と友だち（田植え、稲刈り）繭人形作り、繭を使ったコサージュ作り

６年　ジャガイモの栽培、委員会活動（アルミ缶回収、花壇整備）環境整備作業

４　取組の内容

（１）家庭・地域と連携を強化した養蚕の取組

これまで地域の方に桑畑を借用していたが、養蚕業衰退とともに、桑畑も荒廃し消失してしまった。しかしながら、桑畑はないが、未だ地域には、家や畑の境界線として桑を残している場所が点在している。この桑を使えないかと考え、学校だより等や学校ホームページ等で広報したところ、多くの家庭や地域の方が快く協力してくださり、境界に残っている桑葉を学校に持参して提供していただけることになった。また、希望される方には、蚕の幼虫を分けて、家庭でも飼育に取り組んでいただいた。

＜地域の方が桑葉を持参＞

＜地域の方へ分蚕＞

＜蚕を飼育する児童＞

＜繭づくりの準備＞

令和３年度から飼育所の指導者に定期的に来校いただき、養蚕に適した環境や飼育方法について、本格的に学習を進めた。家庭でも養蚕に関心が高まっており、夏季休業中の自由研究でも多くの児童が蚕をテーマに研究を行っている。

＜生糸取りの授業＞

＜児童が取った生糸＞

養蚕についての学習は、年間を通じて行っている。４年生が収穫した繭を使い、地域の方に「生糸とり」の御指導をいただいている。また、小正月には、５年生が稲作体験で収穫した米を使い、４年生が、五穀豊穣を願った地域の伝統行事「繭玉づくり」なども実践している。

＜繭玉づくり＞

＜繭のコサージュ＞

４年生が地域で集められた桑葉を使って育てた繭は、５年生がコサージュへと加工していく。そのコサージュは６年生に贈られる。６年生はこのコサージュを胸につけて卒業式に臨む。養蚕は、家庭や地域と連携し地域の環境を維持し、さらに地域の伝統を継承していく循環型の環境教育とすることができている。

（２）企業や地域と連携した環境教育の取組

養蚕の他にも、各学年で、SDGs を意識した取組を実践している。全学年で取り組むサツマイモづくりには、地元の農家から牛糞の堆肥を分けてもらい、土づくりから収穫まで実践している。２年では、地元企業にミニトマトの苗と肥料をいただき、栽培方法の指導を受けて家庭での栽培にもつなげている。

＜地元企業指導トマト栽培＞

＜地域の方の指導＞

（３）特別活動と関連した SDGs の取組

５学年では総合的な学習の時間に、自分たちができる SDGs の取組の話合いを行い、節電やグリーンカーテンの取組を実践した。児童が主体的かつ具体的に SDGs に関わることで、より持続可能な社会が実現可能になる実感を持つことができた。

＜５年生の SDGs に関する内容＞

５　研究実践の成果と今後の取組

本校での環境教育は、家庭や地域、さらに地元企業の協力を得ることで効果的に実践できた。身近なことから環境問題や SDGs について考えることで、児童も新聞やニュースなどで環境問題に興味関心を持つようになった。今後も引き続き周囲の協力を得ながら、児童の主体的な取組を通して、地域の環境を維持し、地域の伝統を継承していきたい。また、未来に向けた持続可能で実現的な取組や地域社会に向けた啓発等を児童の学習を中心に行っていきたい。

地域とともに歩む杉戸町ふるさと学習
～地域の自然と人々の交流活動を通して～

杉戸町立高野台小学校
校長　稲　毛　保　典

１　はじめに

本校は、杉戸町北西に位置し、下野、下高野、高野台西１丁目から５丁目の地区からなる。学校の東側は、住宅地であり東武スカイツリーライン、国道４号線へと続く。西側は、田畑や屋敷森が広がり、御成街道、古利根川へと続く。東側には住宅地があり、地区全体が計画的に開発され、西近隣公園をはじめとする４つの公園がある。

毎年、その公園を利用して、「なかよしウォークラリー」を、地域の方々に協力していただき、開催している。この他にも家庭・地域と連携し、地域の教育力を活かした体験活動を推進し、児童の豊かな心を育んでいる。

２　研究を進めるうえで

今年度の研究を進めていくにあたって、下記の３点を踏まえて取組を推進した。

（１）昨年度の成果をもとに、コミュニティ・スクールの理念を意識し、これまで以上に「地域とともにある学校」を目指し、年間指導計画の見直し・作成を行う。その核として、ふるさと杉戸町を意識し、地域の自然や人々との交流活動を教育課程に位置付け、地域との連携をさらに深めていく。

地域の人との関りを深める「人と人とをつなぐ」という視点を教師がしっかり意識し取組を進めていく。

（２）学校応援団の協力を得て、農業体験・憩いの場としての花壇づくり・地域を知り、地域と関わる体験活動を進める。

農業体験では、一人一人が責任を持って苗の世話をする、収穫、収穫したものを食する体験を行う。農業に関わる体験を体験だけで終わらせることなく、児童一人一人の成長、深い学びにつなげていく取組とする。

花壇づくりでは、環境員会の活動をサポートしてもらい、「花いっぱいの花壇」をつくり、児童の情操教育につなげる。

地域と関わる体験活動では、全校で取り組む「なかよしウォークラリー」や学年ごとに取り組む学習の中で地域のよさを味わわせる。

（３）校内にある樹木や草生をいかし、子供たちの教育活動につなげたり、遊ぶ場にしたりする。

３　具体的な取り組み

（１）第１学年

「あそびにいこうよ」

春、夏、秋、冬と年間を通して、近くにある公園に行き、樹木や草花に親しんだり、遊具を使ったりして、友だちと交流を深めている。季節に応じた遊び方を考え、虫取りをしたり、どんぐり拾いをしたりしながら、友だちとのかかわりを築いていくことができた。

（２）第２学年

生活科「わたしたちのやさいばたけ」

学校農園と各自の鉢で野菜を育てることを通して、植物が命を持っていることや成長していることに気づき、命を大切にする心を育くんでいる。学校農園では、きゅうり、なす、ピーマン、おくらなど、夏野菜を中心に栽培し、児童一人一人が責任を持って、雑草を取り除き、土を耕すなど、畑作りから積極的に参加した。また、各自の植木鉢では、ミニトマトを育て、収穫まで行った。

ゲストティーチャー（地域の農家の方）に苗の植え方と育て方を教わった。

収穫した野菜は、家に持ち帰り、家族との団らんに役立てた。食を通して、家族との会話、話題づくりができた。ふりかえりカードにも、家族と一緒に楽しく食卓を囲んだことが書かれていた。

（３）第３学年

社会「農家の仕事」

杉戸町内でネギを育てている農家さんから話を聞き、農家の仕事の大変さ、喜びについて関心を高める。（今年度から教育課程に位置付け）

総合「高野台地区をＰＲしよう」

高野台地区の特色や、地域の働いている人たちや地域の安全と地域活性化のために町づくりに取り組む人々から話を聞き、学習したことを授業参観でお家の人たちに発信することを通して、自らが地域に参画しようとする態度を育んだ。

（４）第４学年

総合「杉戸町の福祉」

点字・手話・車いす・高齢者体験を通して、障がいを持つ人や高齢の方々への理解を深めるとともに、より良い補助の仕方を学ぶことができた。

（５）第５学年

総合「稲作体験」

日本の主食である米作りを体験し、杉戸町の米づくりについて理解するとともに、食べ物を大切にする気持ちを育んでいる。

地域の農家さん、ＪＡの方にご協力いただき、稲作体験を行った。田んぼに素足で入り、稲を植え、秋には、鎌を使って収穫体験をした。収穫したお米を精米していただき、それぞれの家に持ち帰り、家族と一緒に食べることで、社会科で学んだ田植えの流れや農家の苦労、喜びを意識しながらの体験活動は、子供たちにとって、貴重なものとなった。

（６）第６学年

総合「日本らしさをみつけよう」

杉戸・高野台の伝統文化と歴史、地域に暮らす人々が大切にしている伝統や文化などを理解し、これからのグローバリズムに対応できる力を育んでいる。

総合「しごとのこころ出張授業」

杉戸町にゆかりのある方からのお話を聞くことで、仕事のやりがいを聞や働く意義について学習する。（杉戸町男女共同参画推進課との連携事業）

（７）なかよしウォークラリー

小学校周辺の４つの公園を縦割り班（なかよし班）で巡り、それぞれの場所で、クイズやゲームなどに挑戦した。それぞれの公園では、地域の人たち（学校応援団）が、クイズやゲームを行ってくれ、交流を深めることができました。

高学年が中心となって活動を進め、高学年のリーダーとしての自覚や自信を高められるようにしている。低・中学年は、高学年へのあこがれや尊敬の気持ちをも持ち、フォロワーシップを育むことができた。

１学期の早い時期に行うことで、子供たちが、異なる学年や学級の児童と共に活動し、交流の仕方などを身につけ、この１年間を楽しく過ごすことができるようにしている。

４　成果と課題（○成果　●課題）

○学校教育目標の具現化の核となる体験活動をしっかりと教育課程に位置付け実施することで、本校の特色ある教育活動のひとつとなっている。

○農業体験では、農作物を育てることの大変さ、農家の方々の努力や苦労を子供たちなりに感じることができた。こうした体験は、子供たちの粘り強く物事に取り組む力の育成につながった

○様々な体験活動に取り組むことで、お世話になった方々へ感謝の気持ちを持つことができた。

○杉戸町や地域のよさを実感しながら、体験活動に取り組むことができた。

●学校における働き方改革の推進の観点から、引継ぎや打合わせといった時間の確保、調整について負担軽減を図る必要がある。

●教科横断的な視点やＳＤＧｓの視点から、体験の内容についての検討、見直しを行う必要がある。

●多様なアイデアや意見を生かせるように、柔軟な発想、体制を受け入れる余地を持っていたい。

地域と共にある学校
～学校・保護者・地域が手を携えて残す安行の自然～

川口市立安行中学校
校長　小　出　喜代子

１　はじめに

本校は、戦後の新制中学校として、昭和22年４月１日、「埼玉県北足立郡安行村立安行中学校」の名称で創設された学校である。旧陸軍の兵舎跡の建物を校舎として使用し、荒れ果てた土地を地域の人々と生徒たちが手作業で整地し、運動場を造った。開校当初からの地域と生徒との関わりは今も受け継がれている。

生徒数は725名、特別支援学級を含む23学級の大規模校である。学校教育目標を「主体的に学ぶ生徒」「心豊かな生徒」「心身ともに健康な生徒」とし、目指す学校像として「生徒・教職員一人一人の良さを大切にし、組織力のある学校」を掲げている。

生徒は、明るく素直であり、笑顔で接する生徒が多く、保護者や地域は学校に対して協力的である。新型コロナウイルス感染症の影響で制限されていた学校行事、地域交流も再開され、本年度も継続して時期や方法を工夫し、持続可能な地域連携教育への取組を模索しているところでもある。

２　研究のねらい

本校では、地域との絆を深めるボランティア活動を推進している。その中で、学校に隣接している「ふるさとの森」整備活動では、地域と協力し、安行の自然を維持している。この活動を通して、郷土愛と自然を愛する心が育つと考えられることから、本研究題目を設定した。

３　実践内容

（１）「ふるさとの森」整備活動

①毎月の活動

毎月第２日曜日に、部活動単位で生徒と顧問が、学校の裏にある森を管理している「安行みどりのまちづくり協議会」と連携し、整備活動を行う。季節により雑草抜きや落ち葉集めなどの活動を行うと同時に、地域の人々との交流の場にもなっている。カブトムシや蛍など、昆虫もたくさん生息し、近隣の小学校の授業でも見学に訪れるため、安全に散策できるように整備することを心がけている。地域貢献度の高い取組である。

②芋煮会

11月に、まちづくり協議会の方々が毎月の活動のお礼として、芋煮を作りごちそうしてくれている。地域で採れた野菜が使われており、地域理解や食への関心が高まる活動である。芋煮を食べながら、地域の方々と交流する場でもある。

③野菜栽培と販売

「ふるさとの森」の敷地内に学校ファームがあり、地域の方々の指導助言を受けながら、ジャガイモ、サツマイモ、大根の栽培を行っている。ジャガイモや大根は、特別支援学級の生徒が収穫し、学習を兼ねて販売まで行っている。事前にちらしやのぼり等を作成して、地域への周知をし、販売当日は、全て生徒の手で行う。生徒にとっても本校職員や地域住民との交流の機会や、販売体験を同時に行うことができている。

その他にも、大根はボランティアの生徒が、川口市の祭りで販売する。売上金は、安行みどりのまちづくり協議会を通して、ふるさとの森保全活動に充てられている。

多くの生徒の活躍の場や得意分野を活かせる場にもなり、自己有用感の向上にもつながる活動である。

（２）生徒・地域交流活動

①一輪草祭

ふるさとの森には、県の絶滅危惧種で市の文化財に指定されているイチリンソウが自生している。また、斜面林の下の泉の周りでは、ホタルが生息する環境作りに取り組んでいる。

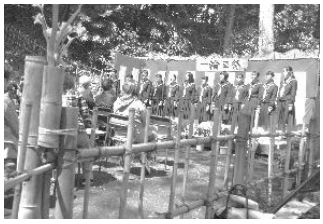
一輪草祭は、イチリンソウの開花を祝う祭であり、吹奏楽部と合唱部が参加し、地域の方々に演奏を披露する。

＜合唱部＞

生徒にとっても、自然の中で歌う機会は１年に１度この場所でしか味わうことができない。コンクールのホールでは体験できない自然に囲まれての歌声を、地域の方々も毎年楽しみにしている。

＜吹奏楽部＞

楽器の運搬など、地域の方のトラックを用いて、地域住民と協力して、演奏を成立させている。合唱部と同様に、自然の中で演奏する機会も、ここでしか味わうことができないので、生徒にとっても楽しみしている演奏会の一つとなっている。



②地域行事

毎年、地域の盆踊りの準備・片づけ、踊り手として参加をしている。町会のお祭りには、例年千人を超す来場者がある。やぐらや机など会場準備には人手がいるため、地域貢献の１つとして、安全に十分気を付けながら、手伝いをしている。

祭りの前には公民館で、踊りの練習会に参加する。昔ながらの盆踊りの他に若者向けの曲も取り入れ、盆踊りの盛り上げの一助となっている。

地域の高齢化に伴い、生徒が参加することに、地域からは非常に感謝され、生徒たちにとっても地域の方々との交流や、地域住民としての意識も芽生えている。今後は、地域への感謝の気持ちを表す方法を計画していく。

（３）校内緑化活動

校内の環境保全活動として、保護者のボランティアを募り、季節ごとに活動を行っている。生徒の様子を見守りながら、保護者間の交流にもなった。

学校の周辺の自然との調和を考え、花を植えたり、多くの木の世話をしたり、校内の環境整備と環境保全を行っている。

４　成果と課題（学校評価・生徒アンケートより）

【成果】

○地域活動・ボランティア活動を通し自己有用感が高まった。

○生徒の自然を愛する心の育成のきっかけとなった。

○地域との絆を深め、郷土愛が育った。

○環境整備活動を通して、保護者の学校への参画意識が高まった。

○地域から信頼される学校となるよう、地域の教育力を学校に取り込む土台づくりが進んだ。

【課題】

●部活動加入が任意となり、部活動単位での参加が難しくなるため、生徒の自主的参加を推進していく。

●ふるさとの森が急斜面で、怪我等が心配される。

【今後の見通し】

○地域の方々の環境整備活動を手伝う現状から、生徒が主体となって安行の自然を守る取組へと発展させていく。

○生徒会から環境保全活動に対しての提案を挙げ、生徒の自主的活動へと発展させていく。

○学校運営協議会委員からの意見を活用しながら、地域ボランティア活動を充実させる。

ＳＤＧｓの17の目標を理解し、学校生活に繋げて、生かしていこう
～生徒会活動を核とした、主体的な生徒の育成を目指して～

熊谷市立富士見中学校
校長　田　沼　良　宣

１　はじめに

本校は、昭和22年、熊谷東小学校全区を学区として設置され、今年度で78年目を迎える全校生徒693名の北部地区で最も大きい学校である。

学校教育目標は、「『知徳体』のバランスのとれた日本一の富士見中生　自ら学ぶ生徒（我らは学ぶ）心豊かな生徒（我らは進む）健康な生徒（我らは励む）」である。開校以来、長い歴史と伝統である「師弟同行」「文武両道」の精神がよく受け継がれ、26,755名にものぼる卒業生が各界で活躍している。

令和４、５年度には、熊谷市教育委員会から「心豊かな人づくり」研究学校に委嘱された。今年度は、学力向上はもとより、これまでの研究成果の更なる発展のために、①生徒が主体的に活動する場の設定（学級経営の充実）②「ありがとう」が溢れる心の育成（道徳教育の充実）③社会で通用する規範意識の醸成に取り組んでいる。また、熊谷市が推進する「総合的な学習の時間」を中核としたカリキュラム改善にも取り組んでいる。今年度は、その土台作りとして、テーマにあるように、ＳＤＧｓに着目し、生徒会を中心とした活動を行った。その一端を紹介したい。

２　研究主題設定理由

ＳＤＧｓは、決して特別なものではなく、私たちの生活の身近にある課題である。学校、家庭、地域など、あらゆる場面で簡単に始められる。まずは、学校生活の中でＳＤＧｓを意識し、学校ができるＳＤＧｓの目標を達成するため設定した。

３　研究仮説

仮説①　生徒主体のＳＤＧｓ集会等の取組を通して「自ら学ぶ生徒」の育成ができるであろう。

仮説②　ＳＤＧｓについて考えることで、日本はもとより、世界にも視野が広がり、「心豊かな生徒」を育成できるであろう。

４　研究内容（具体的な取組）

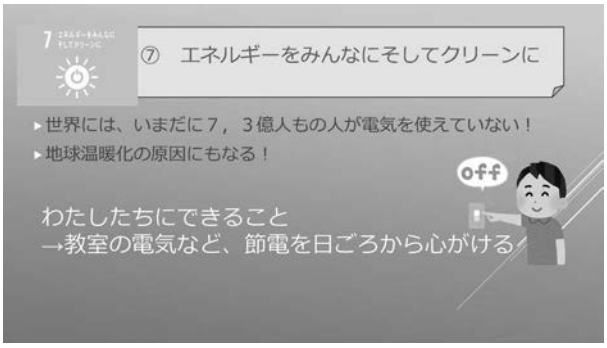
（１）ＳＤＧｓ集会

５月に生徒会本部主催のＳＤＧｓ集会を行った。目的は、「ＳＤＧｓの目標を知り、学校生活に生かす」とした。

以下の今までの取組と今後の取組を確認した。

① フードドライブ
② ペットボトルキャップ回収
③ グリーンカーテン
④ 公園のごみ拾い
⑤ 17の目標を調べ、新聞やパワーポイント等でまとめた。
⑥ 17の目標をカードゲームを通して学び、興味あるものをまとめた。

集会時のパワーポイントの一部と集会時の様子



（２）フードドライブ活動

本校では、余った食品を募る「フードドライブ」の活動に一昨年度から取り組んでおり、今年度で３年目になる。今年度は、全校に取組について周知するとともに、フリー参観や学級懇談会で来校した保護者にも協力をお願いした。食品を中心として、鉛筆やノートなどの学習用品も集まった。集まった食品などは本市にある子ども食堂「熊谷なないろ食堂」に贈呈した。

食堂のスタッフの方によると、中学校のフードドライブは珍しいということであるが、今後も「学校が地域とつながる拠点となれば」との考えから継続していきたい。

熊谷富士見中が
フードドライブ
子ども食堂に贈呈

右の記事が埼玉新聞に
取り上げられた

（3）ペットボトルキャップの回収

生徒会本部主体で行われたＳＤＧｓ集会で、ペットボトルキャップを集めて、回収業者に送ることにより、リサイクル資源となり、売られた際の売却益が寄付となり、UNICEF の活動に生かされることなどを全生徒、職員で共有した。その後、個人が自宅から持ってきたペットボトルキャップを回収ボックスに入れている。最終的には、回収したペットボトルキャップを年度末に生徒会本部等でまとめ、回収業者に渡す予定である。

設置場所の工夫

回収ボックス

（4）生徒会本部役員選挙に向けた立候補者によるオンライン討論会

「実際に学校でどう実現させるのか」を具体的に検討する目的で「ＳＤＧｓの目標：『つくる責任つかう責任』を達成するために富士見中学校でできることは？」というテーマでオンライン討論会を行った。主な話題としては、

① 給食の残飯を減らす。
② ペーパーレス化を進める。
③ 節電する。
④ 使わない文房具を使えるところへ。

などの話題で立候補者が討論を行った。投票者が立候補者の考え方を知る目的も達成することができた。学校のリーダーが主体的に真剣にＳＤＧｓについて全校生徒の前で討論することで、全体の意識も深まると考える。

（討論会の様子、投票者の教室）

５　成果と課題（○成果　●課題）

○生徒主体の取組により、生徒の自ら学ぼうとする姿勢を伸長できた。教師はファシリテーターとして、生徒を見守り、機会を捉えて支援できた。

○生徒一人一人のＳＤＧｓへの関心を高めることができた。本取組を通して、世界の状況についても学習できた。また、一人一人の思いやりが誰かのためになるということを学ぶことで、「心豊かな生徒」の育成につなげることができた。

○主体的に行動できるリーダーの育成が本取組によりできた。

●総合的な学習の時間でＳＤＧｓを扱うことで、教科等横断的な視点、例えば、社会や英語など他教科との関連についても考えていきたい。

●主体的な生徒の育成、リーダーの育成について、全職員で全生徒に対して行うことをさらに行っていきたい。

６　おわりに

来年度は、これまで以上に、各学年の総合的な学習の時間に効果的にＳＤＧｓを位置付け、系統的な学びを実現していく。

そして、熊谷市が推進する「新熊谷プロジェクト」で、「学力日本一」を目指すため、総合的な学習の時間を中核としたカリキュラム改善、教科横断的でオーセンティックな授業に取り組んでいきたい。

自然体験活動による豊かな心の育成
～福島県南会津町との３年間の継続した交流と様々な自然体験活動を通して～

松伏町立松伏中学校
校長　大　山　　亨

１　はじめに

本校は、松伏町の中央部に位置しており、周囲には田園風景が広がっている。創立78年目を迎える、生徒数236名の小規模校である。平成14年度に南会津にて宿泊体験学習を実施して以来、23年にわたって南会津との交流を続けている。

学校教育目標を「学び合い　支え合い　高め合う生徒」として、豊かな人間関係を基盤とした学び合い活動を推進し、知・徳・体のバランスのとれた生徒の育成に取り組んでいる。

２　研究題目の設定理由

新型コロナウイルスの感染拡大をきっかけに、本校においても行事等の精選、縮小が進められた。それに伴い、体験活動の機会は少なからずコロナ前に比べ減少している。こうした中、体験活動の質を高め、教育効果を最大限に発揮できるように、行事そのものや、系統的な行事の実施方法について研究を進め、生徒に豊かな心を育成する必要があると考える。

３　研究の方針

福島県南会津との３年間の継続した体験活動を通して、地域の環境や文化に触れるとともに、人々との交流が図ることで、豊かな心を育み、社会性や自然環境保護についての関心・意欲を高める。また、各学年で実施する体験活動を個別のものではなく、つながりを持たせ実施することで、教育効果が最大限に発揮されるようにする。

４　研究の構想（３年間のつながり）

行事	行事のつながり
１年 スキー教室	・地元のインストラクターと交流 ・伝統組踊「息吹」を鑑賞
２年 宿泊体験学習	・スキー教室でお世話になったインストラクターによる受け入れ ・伝統組踊「息吹」を教わる
３年 笹巻き作り	・南会津の方に作り方を教わる ・各種行事で「息吹」を披露

５　研究内容（具体的な取組）

（１）スキー教室【１年生】

１年生では、南会津たかつえスキー場で２泊３日のスキー教室を実施している。スキーが初めての生徒が大半であり、講習をはじめとする雪山における全ての体験が、生徒にとって実り多いものになっている。また、講習を担当してくださる南会津の地元インストラクターとの交流の時間を重視することで、豊かな心の育成にもつながっている。

夜は、南会津伝統の組踊である「息吹」を鑑賞し、南会津の文化に触れる時間としている。ここで鑑賞した「息吹」を２年生で習得し、３年生で活用することで、南会津との３年間の継続した交流の１つとしている。

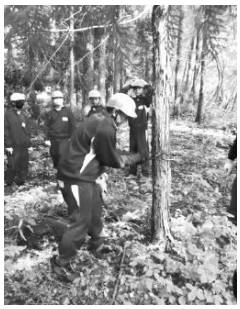
【インストラクターとの交流】

【組踊「息吹」の鑑賞】

（２）宿泊体験学習【２年生】

２年生では、会津高原で２泊３日の宿泊体験学習をペンションへの分泊という形で実施している。ペンションのオーナーは、１年生のスキー教室でお世話になったインストラクターにお願いすることで、１年生のスキー教室とのつながりを持たせている。また、各ペンションでは、オーナーとの語らいの時間を確保し、交流活動の充実を図っている。

自然体験学習は、林業、魚のつかみ取り、陶芸、箸づくりの４つのグループに分かれて実施している。また、宿泊体験学習が水芭蕉の時期にあわせて実施されていることから、尾瀬環境学習ハイキングを実施し、尾瀬の自然環境が十分に感じられるような工夫をしている。こうした様々な会津の自然に触れる活動を通して、生徒の自然環境に対する意識に高まりが見られている。



【林業体験】

【魚のつかみ取り体験】

宿泊体験学習の最終日には、ダンスワークショップとして、１年生で鑑賞した組踊「息吹」を地元のチームに披露していただくとともに、踊り方を指導していただいている。同年代の指導者もいることから、踊りを通して現地の方々との交流を深める機会になっている。

宿泊体験学習終了後には、まとめ新聞を作成し、南会津のお世話になった方々へ送付することで、行事のまとめとしている。

【組踊「息吹」のダンスワークショップ】

（３）笹巻き作り【３年生】

３年生では、南会津から講師の先生をお招きし、笹巻き作りを実施している。１年生のスキー教室、２年生の宿泊体験学習で、南会津との交流を深めてきた３年生にとっては、これまで交流を深めてきた南会津の方々とのまとめの活動でもある。

当日は、現地の方と笹巻き作りを通して交流を深めるとともに、感謝の気持ちを伝えることで、豊かな心の育成につながっている。

【笹巻き作り】

（４）学びのアウトプット

３年間の継続した南会津との交流を通して、人との関わり方、命や自然環境を大切にする心、現地の文化など生徒は多くのことを学んでいる。また、学んだことを日々の教育活動の中で生かすことで、より良い成長に繋げている。

なかでも、現地の文化である組踊「息吹」は、生徒にとって大切な学びとして位置づいており、学校行事をはじめとする様々な場面で披露している。これは、南会津において組踊「息吹」が郷土の歴史を語り継ぐもので、子供たちが自分の生まれ育った地域に誇りを持ち、ひいては郷土の活性化を願ったものであるということを学んだ生徒たちが、自分たちにできることは何かを考え、主体的に取り組んでいるものである。伝統を守り、地域を守ることが、地域の豊かな自然環境を守り、次世代へと引き継いでいくことにつながるということを組踊「息吹」を通して学んでいる。

【学校行事（体育祭）における組踊「息吹」の披露】

６　成果と課題（○成果　●課題）

○現地の方々との継続した交流活動や現地の文化に触れる活動を通して、生徒に豊かな心が醸成されている。

○南会津の自然や文化に触れることで、自然環境保護への意識を高めることができた。

●各地域において高齢化が進んでいる。地域資源の更なる活用のためにも、人材の確保が急務である。

７　おわりに

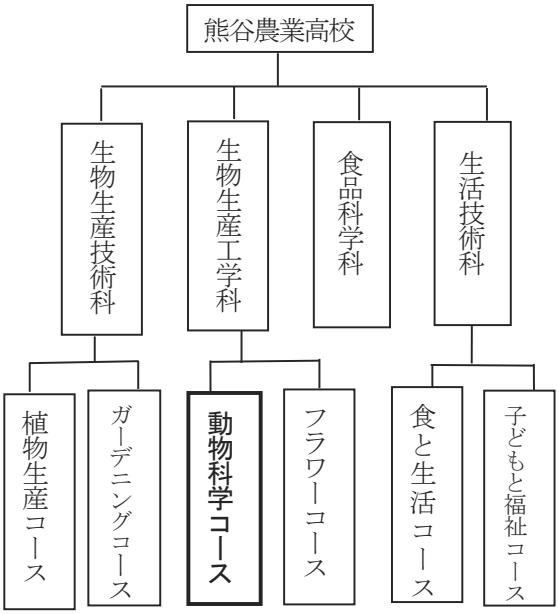
継続した実践により、環境の保全に寄与する態度の育成が図られている。今後も、地域の方々との交流を通して、心豊かな生徒の育成を目指すとともに、自然と人と学習と体験をつなげ、気付きや実感を伴った環境教育を推進していく。

「大地再生農業」の実践
～無農薬・無化学肥料・協生農法で土壌を修復し自然環境の回復を目指す～

埼玉県立熊谷農業高等学校
校長　上　田　毅　一

１　はじめに

本校は明治35年（1902)、「埼玉県立甲種熊谷農学校」として地域農業の振興発展の期待を背負って開校した。その後、埼玉県立熊谷農学校と改称し、昭和23年の学校改革により埼玉県立熊谷農業高等学校となり現在に至っている。本年度で創立123年目を迎え、本県の公立高校として最初に設立された歴史と伝統のある農業高校である。地域からは「熊農」の愛称で親しまれており、これまでに送り出した卒業生は22,000名を超え、地域産業界はもとより各方面で幅広く活躍している。現在、生物生産技術科（２クラス)、生物生産工学科（２クラス)、食品科学科（１クラス)、生活技術科（１クラス）の４学科を有し、６クラス、670名の生徒が勉学に励んでいる。



２　生物生産工学科の概要

本研究は、生物生産工学科・動物科学コースで実践した。生物生産工学科には、「動物科学コース」と「フラワーコース」の２つのコースが設置されている。動物科学コースでは、ウシ、ブタ、ニワトリなどの家畜やマウス、ラット、ハムスターなどの実験動物の飼育、管理をとおして、学習を行っている。平成７年度から実験動物二級技術者資格認定試験の特例認定校として、資格取得に向け取り組んでおり、毎年多くの合格者を出し、全国でも上位の成績を収めている。また、昭和39年より宮内庁へスズムシをお届けし、本年度で60回目を迎えた。

３　生徒の実態と研究仮説について

ウシ、ブタ、ニワトリなどの３大家畜を飼育し、搾乳を実施している高校は県内でも本校だけであり、その学習内容に強い興味関心を持った生徒が県内全域から入学している。一方、学力やコミュニケーションに不安を抱える生徒も多い。農業高校ならではの実習をとおした体験的な学びから、学習意欲、そして主体性や協調性などを高め、社会を生き抜く力を身につけることに取り組んでいる。今回、本研究をとおして、安心、安全な食料の持続的な生産、供給に向き合い、主体的な学習態度を醸成し、生徒の新たな成長につなげたいと考えた。

４　具体的な取り組み

本研究では、以下の３点に主眼をおいた。

●栽培技術の向上
- 無農薬、無化学肥料、不耕起栽培の実践
- 生物多様性向上の鍵となる混生、密生の実践
- 自然農法技術の向上

●家畜の放牧
- ニワトリの放牧や平飼い飼育の実践
- 家畜ふん尿等の堆肥化による土壌の修復、改善の実践
- 野生動物について理解し、被害対策の実践

●講演及び実技指導
- 協生農法士藪木氏による講演、実技指導の実施

（１）栽培技術の向上

放牧地の一角に土を耕さず、無農薬、無化学肥料での試験栽培区を設定した。その栽培方法は、三重県にて協生農法士として活動する藪木一輝氏に、昨年、今年と２回にわたり講演会を実施した際に指導を受け、研究活動を進めた。協生農法とは、三重県伊勢市の大

塚隆氏が始めた農法であり、土地を耕さず肥料や農薬も使用せず、多種多様な植物を混生、密生させ、植物本来の力で土壌と生態系を回復させる農法である。様々な植物を混生、密生させて豊かな生態系を構築することで、病害虫の被害を減らし、植物本来の生命力を引き出すことが可能となる。当初、生徒は無農薬や無化学肥料で栽培を行ったことがなく、「これで本当に作物が育つのか」と半信半疑で取組を始めた。しかし、栽培を継続した結果、予想を超える収穫物を得ることができた。この体験は、生徒の農業、栽培の概念を覆し、植物の奥深さを知る学びとなった。

（2）家畜の放牧飼育

ニワトリを研究材料に取り上げ、飼育方法の改善を実践した。現在の養鶏業の中心となる飼育方法は、ウィンドウレス鶏舎での身動きの取れないようなケージ飼育であり、ニワトリへのストレスは計り知れない。そのため、ニワトリのストレス、環境負荷を軽減する飼育方法を検討した。放牧地を選定し、電牧柵の設置、野鳥対策などを施して採卵鶏の平飼い飼育を実践した。また、その周辺にはヤギや乳牛を放牧できるよう環境整備を行った。草地を走り回るニワトリは非常に健康的であり、通常の飼育方法では見られない本能的な行動が多くみられ、ストレスが大きく軽減されていると考えられた。肝心の卵生産においても、自家配合飼料の栄養だけでなく、地面の土や草、野菜残渣などをついばみ、ミネラルなどを十分に補給し、産卵率が大きく低下することはなかった。卵の鮮度実験においても通常飼育のニワトリに比べ、割った卵の卵白、卵黄の張りが持続しやすいという結果が得られた。

また、多頭飼育や密飼い等では、生産効率を追いかけるあまり、排せつ物等の処理が追いつかず、飼育環境の汚染を引き起こすなどの環境問題となっている。しかし、このような放牧地での平飼い飼育でのふん尿処理を行うことにより、微生物の豊富な堆肥を生産することもでき、土壌の修復、改善にも大きな効果を得た。今後、その堆肥を活用して、栽培試験を行っていきたい。

また、伸び伸びと生きる動物たちから得られる癒し効果も大きく、放牧飼育される動物は多くの人の心を魅了する。その動物たちに触れる生徒もまた、生き生きと動物の飼育、管理に携わっている。そして、学習面だけでなく高校生活全般にも変化が見え始め、学校の中心となって自発的に活動する生徒が増えている。

（3）講演及び実技指導

昨年９月、本年５月の２回にわたり、三重県伊勢市の協生農法士藪木一輝氏による講演と実技指導を他学科にも声をかけて実施をした。講演内容は、協生農法にとどまらず、自然環境、自然農法、食や健康について多岐にわたる幅広いものであった。参加した生徒は、高い興味、関心を示し、実践の中でわからなかったことを質問できる良い機会となった。講演後には、本校農園での技術的な指導を受け、大地再生農業についての理解を深め、研究への意欲がさらに高まった。

５　成果と課題（○成果　●課題）

○「当たり前」と思っている事柄に対して疑問を持ち、科学的に考えて自ら学ぶ習慣が身についた。

○グループでの学びあいにより、協調性、主体性、仲間を思いやる心、そして、コミュニケーション能力が向上した。

●今後、農園の周辺における生物多様性の調査、保護に向けた取組を行っていきたい。

学校で栽培しているにんにくを使った「味噌にんにく」への加工に挑戦！
～規格外農産物の活用（食品ロスへの取組）～

埼玉県立特別支援学校羽生ふじ高等学園
校長　島　田　　泉

１　はじめに

2007年（平成19年）、埼玉県初の特別支援学校高等部として羽生市に開校し、今年で18年目、もう直ぐ20年目の節目の年を迎えることになります。

「協力・自立・明朗」を掲げ、「共に学び、考え、行動」「心豊かに、明るく、たくましく生きる生徒」「卒業後の就労と定着に向けて、職業教育を中心に学校行事や部活動、生徒会活動、地域に根ざした活動を積極的に行い、社会生活に必要な知識・技能・態度を育成する」教育を推進しています。

○求める生徒像として

（１）何事にもあきらめずに取り組む生徒
（２）自分の得意なことや苦手なことが分かり、自立に向けて努力する生徒
（３）決まりを守り、他人を思いやることができる生徒
（４）明るく元気に、他人を思いやることができる生徒
（５）自分の役割を理解し、責任をもって取り組む生徒

２　職業学科として

農業技術科（農業コース・園芸コース）、生活技術科（フードデザインコース・メンテナンスコース）２学科４コースを設置し、専門的な実習を重視し特色のある取り組みを実施しています。校外学習の一環として、地域の商業施設、公共施設等で野菜や草花・パンや菓子の販売実習、清掃作業などのサービスを行う実習を日頃の学習成果として実施しており、生徒たちは充実した毎日を過ごしています。

今年度は、新型コロナの規制も緩和され新たな学校生活がスタートしています。多くの体験や地域との交流、連携の機会も更に増え生徒の成長に欠かす事の出来ない貴重な時間となっています。

多くの卒業生が就職し社会で活躍しているのも、多様な学校行事に全校生徒・全教職員が積極的に取り組み、満足できる教育環境を提供できていると考えています。

○羽生ふじ高等学園では

「生徒一人一人の学びを大切にし、働く力を育てています」また入学後は生徒自身が就職に向け日々の努力を続け、精一杯活動しています。

３　地域の皆さんとともに

また、地域の皆さんをはじめ、広くのご理解とご協力をいただきながら、ご期待に添える特別支援学校として、更なる地域企業・法人と連携し様々な貢献も果たしたいと考えています。

４　主課題への設定

農業技術科農業コースでは、年間を通して栽培する作目を決め栽培管理・収穫・出荷調整・販売を行っています。品質の良い農産物は、地元住民や保護者、教職員からは喜ばれています。しかし、栽培する過程で形や大きさなど規格外の農産物については、販売することなく処分されています。

そこで、昨今の「食品ロス問題」や「持続可能な食料生産」には、付随した問題として「環境問題」もあり持続可能な開発目標（SDGs）に向けた行動など含む内容を生徒たちに経験させる良い機会と考え設定しています。また食品のロス等に取り組むことで、生産する側の（つくる）責任・つかう責任について、生徒一人一人が向き合えることを期待しています。

５　食品ロスと環境問題には深い関連性

食品ロスは、生産から消費までの過程で発生する食品の損失を指しています。これには、農作業中の損失、加工中の損失、そして消費者の家庭での損失が含まれます。

食品ロスが環境問題に与える影響は以下の通り

（１）温室効果ガスの排出：食品ロスは、温室効果ガスの排出に直接的な影響を与えます。例えば、食品の生産、輸送、冷蔵、保存などの過程でエネルギーが消費され、二酸化炭素などの温室効果ガスが発生する。

（２）水資源の浪費：食品ロスは水資源の浪費にもつながります。食品の生産には大量の水が必要であり、食品ロスが発生すると、その水も無駄になる。

（３）土地の過剰利用：食品ロスは土地の過剰利用を引き起こします。食品の生産には広大な農地が必要で、食品ロスが発生すると、それによって農地の過剰利用や森林伐採が進行する。

（４）廃棄物の増加：食品ロスは廃棄物の増加にもつながります。食品が廃棄されると、ゴミとして処理される必要があり、環境に悪影響を与える。

食品ロスを減らすための取り組みとして、効率的な農業技術の導入や、食品の保存方法の改善、消費者の意識向上などについて年間を通して学ぶことができた。

６　SDGs（持続可能な開発目標）から見た食品ロス

（１）目標２：飢餓ゼロ
食品ロスを減らすことで、多くの食料を効果的に利用し飢餓と栄養不良の解消に貢献。

（２）目標12：つくる責任　つかう責任
生産と消費のパターンを確保するため、食品の生産、消費、廃棄における効率を高めることが重要。

（３）目標13：気候変動に具体的な対策
食料廃棄物から発生する温室効果ガスの排出を抑制し、気候変動対策に貢献。

７　具体的な取組

取組としては、規格外農産物をある一定の量ストックしておいて、本校には加工する施設がないため地元・県内等加工業者と連携し商品化しています。

この取組は、令和５年度から年間を通して農業コースの３年生が商品の開発を行っています。

（１）令和５年度取組
学校で栽培した規格外トマト100kg を加工

・トマトジュース200本を製造・販売

（２）令和６年度取組
学校で栽培した規格外にんにくの加工
・味噌にんにく　200個を製造・販売

ラベル貼り

完 成 品

学園祭での販売
※３時間の販売で予定数量完売！

普段、本校では循環型農業を主に実施しており、規格外農産物を肥料として活用する以外の取組が出来てきていることは大きな取組となりました。

８　成果と課題

（１）成果

○食品ロスを削減し、加工を取り入れる事で環境に配慮した授業の取組を行うことができた。また廃棄する量の削減につながることを知ることができた。

○ SDGs の取組で主に３つの目標を生徒たちは知ることができた。

○食品の加工技術を活用することで、保存期間が伸ばせることを知ることができた。

○市役所・地元幼稚園などでの販売会でも食品ロスに関する取り組みを地域の皆様にも知ってもらう機会ができた。

（２）課題

○羽生ふじのオリジナルブランド品として、定期的に製造し羽生市のイベントでの販売や、ふるさと納税の返礼品に活用していくなど地域と連携した取組にすることが難しい。

3　国際理解教育支援

小学校

1　グローバル人材の育成を目指して

～近隣のインターナショナルスクールや海外のパートナースクール等との連携・協働学習～……新座市立新堀小学校……98

2　小学校外国語活動・外国語を通じたコミュニケーション能力の育成

～国際感覚の育成を図りながら～……加須市立志多見小学校… 100

中学校

1　生徒の国際感覚育成を目指した国際交流の推進

～ Culture Exchange Fair ～ ……飯能市立加治中学校… 102

2　グローバルな視点からの主体性・コミュニケーション能力の育成……富士見市立水谷中学校… 104

3　姉妹校との親善交流

～オーストラリア・オルドリッジ校との相互交流～……春日部市立春日部中学校… 106

高等学校

1　増加する外国にルーツのある生徒に対する日本語支援の総合的施策と、学校全体の多文化共生意識の向上に関する研究

～埼玉県全体への波及を目指して～……埼玉県立戸田翔陽高等学校… 108

2　学習の成果を試す機会及び学習意欲を引き出す機会としての一日国際交流プログラムの実施

～プログラムに向けた英語授業での取組を含めて～……埼玉県立久喜高等学校… 110

特別支援学校

1　地域の「内なる国際化」に対応できる人材育成

～ JICA の国際協力出前講座を活用した、グローバルな生徒の育成実践～ ……埼玉県立狭山特別支援学校狭山清陵分校… 112

グローバル人材の育成を目指して
～近隣のインターナショナルスクールや海外のパートナースクール等との連携・協働学習～

新座市立新堀小学校
校長　若　林　　寿

１　はじめに

本校は、新座市の南西部に位置し、校区が東京都東久留米市と清瀬市に隣接している。昨年度、開校50周年目を迎えた学校であり、「スマイル＆チャレンジ」を合言葉に、学校教育目標「学ぶ子ども　仲よくする子ども　健康な子ども　はたらく子ども」の具現化を目指している。

今年度は、めざす学校像を「未来の社会を生き抜く力の基礎を築く学校」とし、近隣のアメリカンスクールやコミュニティセンター等との連携、コミュニティスクールの効果的な活用等の推進により、グローバル人材の育成、情報化への対応に取り組んでいる。

２　テーマの設定について

目指す学校像「未来の社会を生き抜く力の基礎を築く学校」と学校のミッション「グローバル人材の育成・情報化への対応」を達成するため、パートナースクールであるCAJ（インターナショナルスクール）との年間を通した交流活動を行う。また、アートマイル（６年生が総合的な学習の時間に他国の児童とインターネットを活用し協働し学び合う活動）を行うことで、他国の文化や言語に触れる機会を通し、目指す学校の実現を図るため本テーマを設定した。

３　具体的な取組

（1）パートナースクールCAJ

①交換留学体験

地域にあるクリスチャンアカデミーインジャパン東久留米（CAJ）に長期休業を利用して本校児童が交換留学体験を行う。またCAJ児童の長期休暇期間中に本校での交換留学体験の受け入れを行う。各クラスに１～２名程度、２週間の体験留学を行い、バイリンガルの児童との交流により、グローバル人材の育成を図った。最終日には、別れを惜しみ、涙する児童もいるほど温かでより深い交流を行うことができた。

②CAJ　Come & Go

２年生の生活科見学ではCAJ訪問を行った。CAJ児童による校内案内や遊びを通したコミュニケーション活動に取り組んだ。また、４年生の総合的な学習の時間では、CAJクリスマスコンサートに合わせて訪問し、互いの文化を楽しむことができた。学んだ英語、学んだ日本語を活用して異文化に触れる機会を設けた。

６年生のCAJ児童の迎え入れでは、６年間の学びを生かし、自校の良さや特徴を英語で紹介するツアーを企画している。

低学年のCAJ　Goでは、保護者・地域から国際交流サポーターを募集した。児童の英語活用のサポートや行き来の安全見守りを通して、学校の特色ある教育活動の理解を深めることができた。

③教職員研修

インターナショナルスクールとの交流学習の推進（取組の広がり、直接交流、オンライン合同授業、交換留学体験の実施等）を図るため、相互に教職員が来校し合い、研修や打合せを行った。互いの教育活動を参観することでより理解を深め合い、児童の学びにつなげることができた。

（2）アートマイル協働学習

６年生の総合的な学習の時間では、インターネットを使って、台湾の学校と交流を図った。協働学習では、自分たちの身近にあるSDGsの課題を世界の課題とつなげて、対話的・協働的に年間を通して取り組む。

グローバル人材の育成だけでなく、コミュニケーションを軸に、協調性・課題発見・課題解決能力の育成と予測困難な時代を生き抜くための求められる力の育成を図る。

（3）イマージョン授業研究プログラム

①授業研究会の実施

授業研究イマージョンプログラム「東京学芸大学 授業研究ラボIMPULS」と「米国Lesson Study Alliance」との連携により、イマージョン授業研究会の開催校として、研究発表時に外国の教員を招いて、授業研究会を公開し、相互の研修の場とした。

外国から各国の教育委員会、教職員、学校関係者が来校、算数の授業公開および研究協議会の実施、公開を行った。同時に日本の授業研究及び学校文化をアメリカに広めることができた。

② 異文化交流

イマージョン授業研究会に合わせ、茶道クラブ児童がお茶で来校者をお迎えした。講師を中心にこの日までに準備をし、高学年を中心にその役割を果たすことを通してより自国の文化のよさに触れることができた。

（4）日常の教育活動の充実

①授業改善

年間を通して、外国語・外国語活動の授業改善を行った。特に３年目を迎える新座市教育委員会委嘱研究発表「外国語活動」では、市内外の多数の教職員を迎え、授業発表と研究協議を行い、研究を深めることができた。

②イングリッシュデー

通年で積極的に英語を使う日として毎週木曜日をイングリッシュデーと設定し、日常的に英語を使うことで外国語を身近なものとする。また、掲示物を増やし、児童が英語を自然に取り入れられるようにした。

③教育相談、児童理解

異文化交流により、自らを大切にし、他人の大切さを実感し、互いに尊重する態度を育成してきた。教職員の指導力向上のため、米国スクールサイコロジストによる教育相談・生徒指導の研修会を対面とオンラインで行うなど、年間を通して連携を進める。

４　成果と課題（○成果　●課題）

○各種学力調査において、すべての教科・学年で昨年度を上回ることができた。

○毎月行っている「いじめアンケート」の件数の減少（R6.11時点２件）

○不登校児童が大幅に減少した。

○教育活動の周知を学校だより、学校ホームページ、地域のコミュニティセンターへの掲示により行うことで保護者や地域への理解を図った。学校保護者アンケートにより肯定的評価90％達成した。

●児童可能な体制づくり。現在、校長、国際理解教育主任、国語主任が中心になっているものから本校研修主任と外部コーディネーターを軸にしていく。姉妹校としての取組の維持、発展をさせていく。

●教職員への共通理解。６年生の総合的な学習の時間に今年度から位置付けられたアートマイルについて、全職員がその内容と意義を理解し、各学年の探究学習の推進を図るとともに次年度以降も継続・発展ができるようにする。

小学校外国語活動・外国語を通じたコミュニケーション能力の育成
～国際感覚の育成を図りながら～

加須市立志多見小学校
校長　寺　井　次　郎

１　はじめに

本校は、明治25年に創立され、今年度で132年目を迎える。現在、通常学級６クラス、特別支援学級２クラス、合計８クラス、児童数108名の全学年単学級の小規模校である。

学校教育目標を「自他を大切にし、たくましく生きる児童の育成」とし、「前向きで、明るく、温かい学校～地域に誇れる、地域が誇れる志多見小学校～」を目指す学校像としている。「一つ、人をいたわります。二つ、『ありがとう。』『ごめんなさい。』を言います、三つ、がまんをします。やってはならぬ、やらねばならぬ。ならぬことは、ならぬものです。」の志多見っ子宣言を合言葉に、教職員一丸となり、すべては目の前の子どもたちのために、「何をしてもらうか」よりも、「自分は何ができるのか」を考えられる子の育成を目指して、教育活動の充実に努めている。

２　主題設定の理由

加須市には、2023年４月１日現在、3,026人の外国人が暮らしており、これは市民全体の約2.8％である。本校には、外国にルーツをもつ児童が、４か国・６名在籍しており、全校児童の約5.6％である。本校の児童にとって、諸外国は遠い存在であるとともに、「なぜ外国語を学ぶのか」という、児童が主体的に外国語学習を学ぶ目的意識が薄いのが現状である。

令和２年度より外国語が５・６年生で教科化されてから数年経ち、児童が英語に触れる機会が大幅に増えた。しかし、ベネッセ教育総合研究所の2021年の調査では、30％近くの児童が「英語が嫌い」と回答し、教科化する前より「英語嫌い」の児童が増えているという実態がある。昨年度、市内の小学３～６年生の児童・中学１年生の生徒に対し筆者が実施した「外国語活動・外国語の意識調査」でも、学年が上がるにつれて「英語嫌い」の児童生徒が増加していた。その中でも「話すこと」を苦手とする児童が多くいることが分かった。

そこで、単に英語の言語能力の習得にとどまらず、英語を通じて近隣や遠隔地との交流を進め、英語を通じた「コミュニケーション能力」を育成したい。英語をコミュニケーションツールとして活用することで、自分のことを伝えたり、相手のことを知ったりして、自分の世界が広がることを実感させたい。また、外国語活動・外国語の時間だけに留まらず、道徳や総合的な学習の時間に、いくつかの国の文化、生活などの国際事情やSDGs等について学ぶ機会を設け、国際感覚の育成につなげ真の国際人の育成を図りたい。さらに、小規模校の特性を生かして、３年生から６年生までの小学校外国語活動・小学校外国語の学習の系統性を高める指導の工夫も研究したいと考え、本研究主題を設定した。

３　具体的な取り組み

（１）専科教員の強みを生かした系統性を生かした外国語活動・外国語の指導

本校では令和元年度より教科担任制を取り入れ、専科教員が５・６年生の外国語を指導、令和２年度より３～６年生の外国語活動・外国語を指導してきた。

専科教員の強みを生かし、３・４年生の外国語活動では音声を中心に、絵本を活用しながら諸外国の文化に触れている。絵本には英語表現に触れるだけではなく、それぞれの国の文化が大きく描かれていることが多い。５・６年生の外国語では、音声で十分に慣れ親しんだ表現をもとに、読んだり書いたりする技能も高めている。また、本校では教科用図書として、東京書籍“New Horizon Elementary”を使用している。単元ごとに、Over the Horizonという諸外国の文化を単元と関連させて学べるページがある。教科書の内容から国際理解を深めるだけでなく、カナダに在住していたAFT（外国語支援助手）やイギリスやアメリカ・ボストンに長期で留学していた専科教員の実際の話を加えることで、児童は国際理解について知識を深めてきた。

（２）既習表現を生かしたオンライン交流

本校では、令和２年度より、中学校区３校の６年生をオンラインでつないで、英語で交流する機会を３学期に設けている。今年度は幅を広げ、12月に行田市立

見沼小学校の６年生とも、お互いの市の魅力を伝えるオンライン交流を実施した。

言語習得は、繰り返し使いながら学んでいくことで身につけられると捉えている。日本のようなEFL環境下では実際に学習した英語を、実生活の中で生かしていくことは難しい。そこで、日本人同士であっても学習した英語表現を使って、目的や相手意識をもって児童が活動できる機会を設けたいと考えている。相手の知らない部分を知ることも、大きく捉えれば国際交流である。また、本校は単学級のため、中学校に入学すると３～４クラスに分かれるので入学を不安に感じている児童も多い。入学前に同じ中学校に進学する他の２校の小学校の児童と交流を図っておくことで、少しでも不安を和らげることができるのではないかと考えた。以下、オンライン交流の内容を記す。

交流の方法としては、画面の前で、１対１で自己紹介等を行う。他の児童は大型モニターを通して他の児童が自己紹介をし合っている様子を見学する。

内容としては、「同じ中学校に進学する気の合う仲間を見つけよう。」を目的に、小学校生活での思い出や中学校で楽しみにしている部活動や学校行事等について意見交流した。修学旅行で訪れた場所が同じだったり、中学校で入りたい部活が同じだったりと、入学前に友達の顔を知ることが出来て、「中学校生活が楽しみになった。」という児童が多かった。

これらのオンライン交流は、既習表現を使って取り組んだものである。事前に児童は自分の伝えたいことを整理しておくが、やり取りは即興的にその場で対応するものである。昨今、事前に原稿を書き、その原稿を読む活動を「話すこと［発表］」としている授業も見受けられるが、このように本物のおしゃべりの中で児童は英語を使ってやり取りすることの意義を見出し、楽しさを発見していくのではないだろうか。伝わらないと感じた時には、言い方を変えたり、ジェスチャーを付け加えたり、繰り返したり、最後まであきらめずに主体的にコミュニケーションを図り、「伝わった。」という喜びを味わっていた。また、友達との英語でのやり取りを通して、回数を重ねるごとに自信をもち、楽しく活動することができた。このような機会を今後も多く設けていきたい。

（３）総合的な学習の時間と連携した国際交流

本校５年生は総合的な学習の時間に、「SDGs～私たちにできること～」をテーマに調べ学習を実施した。その一環として、JICA（国際協力機構）のオンライン出前講座を活用した。現職教員としてカンボジアのカン小学校に派遣されている神戸の小学校教諭渡部紘美先生の協力を得ることができた。

第１回目のオンライン交流では、渡部先生から渡部先生の仕事について、カンボジアの国や生活、学校等、SDGSに関連させながら、スライドを使って丁寧に教えていただいた。

第２回目のオンライン交流では、実際に現地の５年生と交流をする機会を設けた。交流内容は、お互いの好きなものを含めた自己紹介やそれぞれの国や地域・学校の魅力を伝え、最後にはお互いの国の歌を披露し合った。本校の児童は、“I like ～.”、“We have ～ in Japan.”等、既習表現を活用して英語でやり取りをすることができた。

カンボジアという国について詳しく知ることができ、児童は「日本の当たり前が世界では当たり前ではない」ことに気付いていた。また、英語を使ってコミュニケーションを図ることで、自分の伝えたいことが伝わったり、相手の伝えたいことが分かったり、目をキラキラ輝かせながら授業に参加していた。国は違っても、好きなものは同じということが分かり、喜んでいる児童が多かった。授業後の感想としては、「英語をもっと話せるようになりたい」や「他の国の友達とも交流してみたい」等、「なぜ外国語を学ぶのか」実感できていた児童が多かった。

４　おわりに

今後も学習の系統性を図り、他教科と連携しながら、外国語活動・外国語を通じたコミュニケーション能力を育成するとともに、児童の国際感覚の育成を目指す授業改善をしていき、児童の英語で「伝えたい」があふれる授業を目指していく所存である。

生徒の国際感覚育成を目指した国際交流の推進
～ Culture Exchange Fair ～

飯能市立加治中学校
校長　岡　野　民　嗣

１　はじめに

本校は、昭和54年４月に飯能市立飯能第一中学校から独立し、加治地区に開校した学校である。現在は、14学級（特別支援学級２学級を含む）、生徒404名の市内では比較的大きな学校である。本校は清流や森に囲まれ、非常にのどかな地域に位置しており、生徒たちものんびりとしており穏やかで素直である。

学校目標を「心を磨く　自ら動く～シン・加（進化・深化・新化・心＋）～」と掲げ、教職員たちは日々、生徒たちが前向きな気持ちで学校生活に活き活きと取り組むことが出来るように、地域や保護者と力を合わせながら、伝統を守りつつも新たなことにチャレンジをしている。

２　研究主題設定理由

先に述べたとおり、本校は都市部と異なり豊かな自然に恵まれている一方で、外国籍の生徒たちは少なく外国からの観光客に出会う機会には恵まれていない。また、外国へ旅行する生徒もほとんどいないため、外国の人たちとの交流や外国の文化や伝統に触れる機会は皆無に近い現状がある。

本校ではそのような現状を踏まえて、令和６年１月27日に全校生徒対象の国際交流プログラム（Culture Exchange Fair）を計画し、すべての生徒たちが体育館内に設置された様々な国を訪問する疑似体験プログラムを実施した。予測不可能な時代を生き抜く子どもたちには、豊かな国際感覚や外国語の習得意欲は必須であると考え、今年度も同様の国際交流プログラムを継続して行うことを計画した。

３　研究仮説

本研究では以下のような仮説を立て、実施を行った。

《仮説１》

教室以外の場所で外国人と交流する経験を通じて、外国語を使うことに怖さや不安を持つ生徒が減る。

《仮説２》

外国人との交流経験から、新たな学びの意義に気づく生徒が増える。

４　研究内容（具体的な取り組み）

≪交流相手となる外国人について≫

本市が派遣契約している英語指導助手派遣会社から４か国（アメリカ、オーストラリア、南アフリカ、フィリピン）の外国人英語指導助手を特別に派遣してもらった。派遣先の他校に迷惑が掛からないように、土曜授業日に開催日を設定した。外国人英語指導助手には、自国を説明するためのパワーポイントや動画、たくさんの写真や伝統的な衣装などを持参してもらった。県内の小・中学校で勤務しているためか、子どもたちに分かりやすい表現やスピードなどを心掛けながら、子どもたちの言いたいことを汲むことが出来る力量ある方ばかりであった。

≪生徒たちについて≫

前述のとおり、本校は400名を超える中規模校であるので、１時間に２クラスを（人数にすると60～70名前後）、６時間授業ですべての生徒たちが参加できるようにした。特別支援学級の生徒については、交流学級に入り出来る限り交流学級担当教諭がサポートに入る体制を整えた上で取り組んだ。

≪会場づくりについて≫

本校の体育館で実施であったが、英語指導助手派遣会社が前日から会場設営に入り、空港、カフェ、レストランの本格的なセットを作ってくれた。またそれぞれの国のブースを設けた。教職員も積極的にそれぞれの国のブースにテレビを運んだり、机や椅子などを運んだりしながら、外国人スタッフと協力しあいながら良い雰囲気の中で準備に取り組んだ。教職員にとっても良い経験となった。

≪事前準備について≫

国際交流プログラムとしては、英語の正確さや流暢さよりも外国人との交流や文化の理解、外国語への興味関心を高めるといった目的があるため、事前に英語の質問を作らせたり練習をさせたりするといった準備を特別に行うことはせず、即興でのやりとりを大切に

した。また、疑似体験としてのリアリティを持たせるために生徒たち一人一人にパスポートを渡し、それぞれの国のブースを訪問した際に入国の証として英語指導助手からスタンプを押してもらうようにした。

≪当日について≫

５つの外国のブースと２つのレストランブースが設けられた会場に、８名～10名程度のグループでそれぞれ訪問をする。複数の国のブースを訪れ、滞在時間は12、13分と限られた時間ではあったが、グループごとにたくさんの外国人と交流を行った。レストランブースでは既習の表現を駆使しながら英語で注文する経験をした。

また、この日は学校公開日だったので、体育館２階のギャラリーにはたくさんの保護者が参観した。保護者からも自分も体験してみたいという感想があった。

５　成果と課題

本校勤務の英語指導助手が実施した事後アンケートの結果は以下のとおりである。

≪体験を通じて英語を話すことをどう感じたか≫

「簡単であると感じた」	71.6％
「難しさを感じた」	26.0％
「意欲的に出来なかった」	2.4％

３学年では「意欲的に出来なかった」と回答した生徒は０％であったことから、語彙や表現の豊かさや英語での表現の経験値に影響を受けることが分かった。

≪体験を通じて新たな学びに気づけたか≫

「新たな学びがあった」	91.7％
「まあまああった」	7.6％
「新たな学びはない」	0.6％

学年があがるにつれ、新たな学びに気づく生徒が多くなる傾向があり、３年生では実に97％もの生徒が新たな学びに気づいたと回答したことが分かった。

先の設問と同じように、比較的どの学年も外国への興味関心は強いが、外国人とのコミュニケーションツールである言語習得の段階により、新たな学びや深い学びにおいては差異が見られることが分かった。

６　おわりに

本校は地域柄、外国人が多く居住しているエリアでない分、今回のように意図的に疑似体験をする機会を創出することが有効であると改めて感じた。また、学年を重ねるにつれ、コミュニケーションの取りやすさを感じる生徒が増えることや、文化や伝統といった内容について深く理解をすることが出来る生徒が増えるといった事実から、単発の行事でなく積み上げていく継続したものである必要性を強く感じている。

グローバルな視点からの主体性・コミュニケーション能力の育成

富士見市立水谷中学校
校長　齊　藤　　宏

研究理由

他者とのかかわりを大切にし、楽しみながら英語を学ぶことによって、英語に対する抵抗感がなくなり、生徒の主体性・コミュニケーション能力が育まれ、国際理解教育が推進していくものと考える。

１　実践活動計画

週４時間の英語の授業で、AET（英語指導助手）と連携しながら授業を行っている。今年度は、新たな取り組みとして、様々な国の人等とのかかわり合いを通した、学び合い活動を中心とした授業づくりを計画し、グローバルな視点からの生徒の主体性とコミュニケーション能力を育むことを目標とした。

また、その一つとして特に重要と考えている、「外国の文化と日本の文化の違い」を、普段の英語の授業だけでは知ることのできないこととして学ぶ機会を設定し、生徒自身が主体的に活動する場面を計画、実践していく。

２　実際の取り組み

①外国の異文化に触れる機会として、様々な国の人等とのかかわり合いの中で、生徒自身が主体的に学習に取り組ませたいと考え、様々な国の方々をゲストティチャーとして授業に招く計画を立てた。

ただ、後ほどにも述べるが、ゲストティーチャーとして授業に招く人材の確保に苦労し、11月現在、外国の方の招聘が難しい。そのため、市内勤務の AET（英語指導助手）の方をゲストティチャーとするか、あるいは外国に住んでいた経験のある方や、外国での勤務経験がある方に、外部指導者として講話のお願いをし、「外国の異文化に触れる機会としての授業」に計画変更して、実践していきたいと考え、企画調整中である。

②学び合う場や方法の工夫

AET と連携し、その授業時間ごとのキーセンテンスに合わせた、ペア学習（ペア活動）・グループ学習（グループ活動）・全体活動を、計画的におこなう。

グループ学習（グループ活動）の様子

ペア学習（ペア活動）の様子

全体活動（全体での学習）の様子

③支援と評価の工夫

授業での会話のやりとりや、スピーチ等について、パフォーマンステストを実施し、評価基準（４点）を示すことで、生徒に到達点を意識をさせ主体的に取り組ませる。

英語担当とのパフォーマンステスト

AET とのパフォーマンステスト

④「English Day」の実施

月に一日程度「English　Day」を設定し、英語での挨拶や English　Song を昼（給食時）放送することで、英語に触れる機会を意図的に増やす取り組みを、２学期より行った。しかし、毎月ごとの設定が難しく、２～３か月に１回の割合での実施となってしまい、次年度以降への課題となっている。

その原因（理由）としては、委員会活動の担当者が、前年度は英語担当教員であったが、今年度は変わってしまい、英語科の教員と放送委員会担当教員との連携が、あまりうまくできなかったためと思われる。また、English　Song を放送する際に、歌詞カードを準備して全校生徒に配布したが、その用意に時間がかかってしまったことも要因の一つではないかと考えられる。

Every Breath You Take

The Police

Every breath you take And every move you make Every bond you break, every step you take I'll be watching you	その呼吸のひとつひとつ しぐさのひとつひとつまで そしてその手で断ち切ったつながりや 歩みのひとつひとつまで 残らずずっと見てるから
Every single day And every word you say Every game you play, every night you stay I'll be watching you	一日も欠かさず 何を喋ったかも漏らさず聞いて どんな駆け引きをして どこで夜を過ごしても ちゃんとずっと見てるから
Chorus *Oh can't you see* *You belong to me* *How my poor heart aches* *With every step you take* *Every move you make* *And every vow you break* *Every smile you fake, every claim you stake* *I'll be watching you*	**Chorus** わかるだろ？ お互い「運命の人」なんだよ こうして離れていくのを見てるだけで それが辛くて仕方ないたとえこれから何をやっても 約束が守れなくても 心のこもらない作り笑顔を見せて どんなことを言ってきても ずっとここで見てるから
Since you've gone I been lost without a trace I dream at night I can only see your face I look around but it's you I can't replace I feel so cold and I long for your embrace	あの日最後に別れてから どうすればいいのかわからない 夢を見ても、その顔しか浮かんで来ない 他の人を探してみたけれど 代わりになんかならなかった 寒くてその温もりが懐かしい
I keep crying baby, baby, please	ずっと辛くて仕方ないだから頼むよ・・・
Chorus	**Chorus**
Every move you make, every step you take I'll be watching you I'll be watching you (Every breath you take, every move you make) (Every bond you break, every step you take)	たとえこれから何をやっても 約束が守れなくても 心のこもらない作り笑顔を見せて どんなことを言ってきても ずっとここで見てるから

配布した歌詞カード

放送した English Song は、「A Whole New World」「Don't stop believing」、「Every breath you take」など。

３　成果及び課題

上記の４点の取り組みにより、他者とのかかわりを大切にし、楽しみながら英語を学ぶことにより、以下のような変容を成果として期待し、実践に取り組んだ。

・１年生…英語に慣れ親しみ、楽しみながらコミュニケーションを図ろうとする生徒
・２年生…他者とのかかわりを大切にし、英語を使って、自信をもって表現できる生徒
・３年生…グローバルな視点から、英語で積極的にコミュニケーションを図ることができる生徒

今後１月中旬に行う予定のアンケート等（※授業中に行う生徒対象のアンケート、並びに生徒自身の自己評価）によって、それぞれの学年で生徒数の85パーセントの人数が上記の項目内容を肯定的に捉えられる、ことを目標指標としている。

また、課題としては、以下のことが挙げられる。
①ゲストティーチャーとして授業に招く人材の確保
②年間を通した授業の進捗
③上記の計画が１年間だけで終わらせることなく、英語担当の教師の異動があっても、学校としてスムーズな引き継ぎができるよう、教育課程を定着させること。

そして、学校全体での取り組みとして、教科担当と学級担任との連携をより一層丁寧に行う必要があると考えられた。

成果としては、外国の文化についてのプレゼンテーションをしてもらうことによって、普段気づかない、日本文化や日本の生活場面での違いを、実際に知り、学べることができると考える。

他にも、ハロウィンであったり、クリスマスであったりと、季節ごとのイベントに対する考え方の違いなどのプレゼンテーションを実施することで、生徒が積極的に学びに向かうことができるような工夫もできるのではないかと考えている。そして、生徒自身にも日本の正月についてのプレゼンテーションをするといった、受動的な活動ではない、能動的な活動も取り入れた実践を行い、生徒自身の変容に繋げていく取り組みであることを期待している。

姉妹校との親善交流
～オーストラリア・オルドリッジ校との相互交流～

春日部市立春日部中学校
校長　柳　田　敏　夫

１　はじめに

本校は、昭和22年４月に開校し、今年で創立78年目を迎える歴史と伝統のある学校である。学校教育目標『可能性に生きる』のもと、生徒のよさを認め、可能性を伸ばす教育を推し進めている。また、『一生懸命がかっこいい』を合い言葉に掲げ学習や行事、そして部活動に、生徒と職員共に全力で取り組んでいる。地域にはたくさんの卒業生がおり、学校行事をはじめとして様々な場面で本校を支えていただいており、地域の教育力を取り入れた地域とともにある学校である。

２　姉妹校交流のあゆみ

本校は、オーストラリア・クイーンズランド州立オルドリッジ高校と平成15年に姉妹校交流提携契約を結び、それ以降隔年相互訪問交流を行っている。企画・運営は、本校職員、ＰＴＡ、地域有志で組織された春日部中学校姉妹校交流推進委員会（略称：ＫＡＦＥ）が行い、学校同士で直接交流を図っている。平成28年度には、長年の交流の功績が称えられ、文部科学省より表彰を受けている。新型コロナの影響により、令和２年度よりオーストラリアへの訪問及び日本への受入を一時休止し、オンラインでの交流を図っていたが、令和５年度より通常の相互交流を再開させた。

姉妹校友好の木

本校独自の姉妹校交流を通して、本校の生徒が文化や価値観の異なる人々との交流を深め、自国や外国の歴史・文化の理解と尊重、多様なものの見方や考え方、表現力やコミュニケーション能力の向上につながる活動を目指している。

３　本校の姉妹校交流について

（１）一般的な姉妹校交流との違い

本校の姉妹校流は、学校間で独自の相互交流を行っているため、次に挙げる特徴がある。

・学校間で交流プログラムを企画・調整可能
・派遣の際は、学校関係者（ＰＴＡ・地域有志・教職員）が同行
・一家庭に生徒１人でのホームステイが可能
・受入による国際交流が可能
・参加者や経験者同士の情報交換がしやすい
・同じホストファミリーと連続して交流を持ち続けることも可能

（２）姉妹校について

姉妹校であるオルドリッジ高校は、ブリスベンから北に車で約３時間のフレーザーコースト市メリバラにあり、豊かな自然環境に囲まれた州立の学校である。学校の設立は1974年で、生徒数は約900名、日本では中学生と高校生にあたる７年生～12年生が在籍している。農業や演劇等の科目が履修できるほか、日本語教育にも力を入れており、選択教科の中に「日本語」がある。

（３）相互交流の概要

本校からオーストラリアへの派遣は、概ね７月末から８月の夏季休業中に実施し、約10日間オルドリッジ高生の家庭でホームステイしながら、学校の授業体験等を行っている。

オルドリッジ高校から日本への派遣は本校の２学期にあたる時期の約２週間で、そのうちの約１週間を本校生徒の家庭でホームステイしながら過ごし、滞在期間中は学校見学や授業体験、市長表敬訪問、日本文化を学ぶ活動を行っている。

相互交流にあたり、メールやオンラインにより事前に学校間で情報共有を行い、その年度の交流プログラムを決定している。

４　今年度の取り組み

（１）今年度の活動概要

今年度は本校より現地へ訪問する年である。派遣にあたり、全校生徒に国際交流参加募集を呼びかけ、校内選考を経て派遣生徒を決定した。８月16日から27日の12日間、生徒20名と引率者４名の計24名でオーストラリアを訪問し、ホームステイをしながらオルドリッジ校の生徒と交流を図った。

（２）具体的な活動

ア　ホームステイ

ホストスチューデントとともに登下校し、休日はホストファミリーと過

ホストファミリーと対面

ごした。翻訳アプリなどが普及しているが、そういったツールを使わずに自力解決していくことを重視している。最初こそ異文化に戸惑う場面はあったものの、温かく迎えてくれるホストファミリーに支えられ、積極的にジェスチャーを交えながら英語でコミュニケーションをとる姿が見られた。ホームステイ先の家庭で過ごすほか、スーパーマーケット等で買い物をする機会もある。自力解決する場面が多くあり、生徒にとって学びの多い時間となった。

イ　オルドリッジ高校との交流

理科や音楽、家庭科、演劇等の授業に参加した。アボリジナルアートの体験も行い、その文化に触れることもできた。本校の生徒は、大学のように興味関心のある科目を選択し、科目ごとに教室を移動して受講することや、授業スタイル等、日本の学校との違いを肌で感じていた。授業に参加するだけでなく、ソーラン節の披露や折り紙、書道の指南も行い、相互で交流を図ることができた。

授業参加の様子

ウ　市長表敬訪問・市内散策

フレーザーコースト市長への表敬訪問では、本校代表生徒が英語で挨拶し、交流への感謝の気持ちを伝えた。市役所内の見学や、映画等でも有名な「メリーポピンズ」ミュージアム、リテージマーケット等の見学を行い、姉妹校があるメリバラの文化や歴史に触れることができた。

市役所前で撮影

エ　サンブリー小学校訪問

オルドリッジ高校と同じメリバラ地区にあるサンブリー小学校の訪問では、現地の遊びやお菓子づくりを体験した。その他、好きな本のキャラクターの仮装をして登校し、パレードなどを行う、オーストラリアではポピュラーなイベント「Book　Week」の見学も行った。現地の小学生との交流を通して、異文化に触れることができ、貴重な経験となった。

Book Week の様子

オ　世界自然遺産 K'Gari 見学

フレーザーコースト市には、ユネスコ世界自然遺産にも登録されている世界最大の砂の島である K'Gari がある。生徒は、島内にある世界で最も透明度の高い淡水湖と呼ばれるマッケンジー湖をはじめ、美しい海岸や熱帯雨林など、春日部では味わうことのできない雄大な自然に触れることができた。

難破船マヘノ号の前で

（3）事後活動

本校には国際理解教室がある。ＡＬＴが作成する英語に興味を持たせる掲示物のほか、これまでの姉妹校交流の歴史が写真や資料で掲示され、生徒の国際交流への興味・関心を高めるきっかけとなっている。今回の姉妹校交流についても、派遣生徒の貴重な体験や異文化交流の良さを全校に発信し、生徒の多様なものの見方や考え方につなげられるよう、派遣生徒の振り返りに関する資料、交流プログラムの様子を伝える写真の掲示などを行った。

５　成果と今後の展望

（1）成果

姉妹校交流に参加した20名の生徒は、派遣先での貴重な体験を通して、グローバルな視点でものごとを思考する力を身に付け、逞しく成長できた。また、事後活動によりその経験を全校に発信することで、国際交流の良さに気付かせ、国際理解への意識向上につなげることができた。

（2）今後の展望

派遣生徒の活動の様子から、春日部中学校独自の姉妹校交流は大変有意義なプログラムであると感じる。しかし、物価高騰による派遣費用の高額化、地域有志人材の確保、ホストファミリーの確保、派遣職員の負担過多など、多くの課題もあり、持続可能な姉妹校交流の在り方を考える時期にきている。昨年度、両校校長間の話し合いのもと、相互交流の形の見直しを図り、来年度の受入れを行った後は、リモートによる交流に切り替えることを決定した。これまでの歴史や経験を大切にしながら、国際理解教育の質を確保し、生徒の興味・関心を膨らませるリモート交流の在り方を模索していく必要がある。

増加する外国にルーツのある生徒に対する日本語支援の総合的施策と、学校全体の多文化共生意識の向上に関する研究

～埼玉県全体への波及を目指して～

埼玉県立戸田翔陽高等学校
校長　鈴　木　　健

１．研究題目の設定理由

平成31年改正出入国管理法施行以来、在留外国人の数は増え、各学校における外国にルーツのある生徒数も増え続けている。そのような状況を受け、国は日本語教育の推進に関する法律を施行し、令和４年度末には学校教育法施行規則が改正され、高校段階における日本語支援として、科目「日本語」の設置や特別の教育課程の設置が可能となった。

本校には、約60名の外国籍の生徒が在籍し、県内で最も外国籍の生徒が多い県立高校の一つである。日本語支援が必要な生徒が多く在籍しており、進級・卒業や進路実現に向けての日本語支援は急務であり、学校全体をあげて取り組む必要がある。また、日本国籍の生徒に対し、多文化共生・異文化理解の教育活動を実施することで、学校全体の国際感覚や多文化共生意識を高める必要がある。

２．研究実践・取組内容

（１）多文化共生室の設置（年間実施）

本校では、空き教室を利用し、日本語支援が必要な生徒がいつでも日本語を学べる教室「多文化共生室」を設置している。運営は教務の担当者を中心に、各年次教諭と本校に配置されている日本語支援員で連携して行う。日本語の教材を用意し、日本語支援員から日本語指導を受けたり、自主的にも学べたりできるようにしている。また、外国ルーツの生徒が安心する居場所にするとともに、日本人の生徒との交流の場とし、日本語や各国の言語を教えあったりする場となっている。

今年度は毎日約20名の外国ルーツの生徒達が、多文化共生室を利用し、日本語学習はもちろんのこと、他の外国籍の生徒や日本人の生徒や先生方と交流を図ることができた。

（２）オンライン日本語教室の配信（年間実施）

県教委と協力し、希望する県内全ての県立高校にオンラインによる同時双方向の日本語補習「オンライン日本語教室」を配信した。全日制のグループは毎週火曜日16：00～16：50に、定時制のグループは毎週水曜日16：30～17：10に、「オンライン日本語教室」を実施した。講師は県教委より配置される日本語支援員とし、本校だけでなく、県内全ての日本語指導が必要な生徒に対して日本語支援を実施することができた。本校担当者が連絡・調整を行うことで、県内の日本語指導が必要な生徒はもちろんのこと、担当する各校の担当者もオンライン上でつながることができ、学校を超えた交流にもつながった。

（３）学校設定科目「日本語基礎」、「日本語発展」、「日本語論理・表現」の設置（年間実施）

上記（１）（２）の取組みは、教育課程表には位置づけられておらず、あくまで「補習」という扱いになるため、各生徒の進級や卒業に係る単位としては認められない。

そこで本校では、今年度より教育課程表に、日本語に係る学校設定科目（「日本語基礎」、「日本語発展」、「日本語論理・表現」）を設置し、入学から卒業まで、授業として継続して日本語を学ぶことで単位を認定できるようにした。授業担当者は教員免許に加え、日本語指導に関する資格等を有するものとした。

今年度入学した１年生から、「日本語基礎」の履修がスタートし、２単位の授業を２クラス展開することができた。新入生は入学許可候補者説明会の日に時間割作成があるため、その日に簡単なプレイスメントテストを実施し、今年度は合計10名の生徒が「日本語基礎」を履修することとなった。教材には国際交流基金の「まるごと」を利用し、無料で提供される音声等を積極的に活用した。

（４）多文化共生・異文化理解の促進を目指した取組み（学期末等）

多文化共生室の企画として、１学期末に「バドミントン大会」を実施した。外国にルーツのある生徒だけでなく、日本人の生徒も多く参加し、笑顔で楽しく交流を図ることができた。

また、文化祭（11月）では、外国籍にルーツのある生徒達が中心となって、多文化共生室を運営し、教室内の装飾や異文化理解につながる早押しゲーム大会などを実施した。

（５）海外留学・進学説明会の実施（学期末）

２学期末には母語が日本語以外の生徒も含めた全ての生徒に対し、海外留学・進学説明会を開催する予定である。「トビタテ！留学 JAPAN」のエヴァンジェリストから、海外での実際の経験や学びを話して頂くとともに、「JAOS（海外留学協議会）」や海外留学推進協会と連携し、生徒の視野を広げ、海外留学に関する知識を増やし、国際感覚を養うとともに海外留学や進学の意識を高めていきたいと考えている。

（６）翻訳機や通訳の活用について

生徒との面談や三者面談の際には、積極的に翻訳機（ポケトークやスマホアプリなど）を利用している。また、必要に応じて県や戸田市の国際交流協会に通訳者の派遣を依頼した。実際に進級や卒業に係る大切な面談の際には、通訳者が入っていただくことで、文化の違いなどにも配慮した会話ができるなど、非常に効果的であった。

３．成果と課題

日本語指導に係る（１）（２）（３）の取組みについては、特に学校設定科目で授業として日本語を学べることができるようにしたことで、明らかに生徒たちの日本語学習に対するモチベーションが変わってきている。また、授業で系統立てて日本語を学ぶことができるようになったことで、多文化共生室やオンライン日本語教室での学びの質の向上につながっている。

多文化共生に係る（４）（５）（６）の取組みについては、学校全体として、様々な機会を通じて多文化共生や異文化理解に係る取組みを実施することで、明らかに外国ルーツの生徒に対する誹謗中傷などは無くなった。特にバドミントン大会や文化祭での企画など、直接生徒同士が、活動を通してコミュニケーションを取ることで、相互理解が促進されている。また、海外留学に関する国際教育講話など、実際に海外生活を経験した人の話を聞くことで、それぞれの生徒の視野を広げ、国際感覚を高め、さらに多文化共生・異文化理解の意識が高まると考えている。

そして、本研究の一番の成果は、これらすべての取組みや活動を通じて、外国ルーツの生徒達の居場所が増え、彼らの笑顔が増えたことである。明らかに彼らのウェルビーイングが向上し、彼らの自己肯定感やチャレンジ精神が高まっている。

今後の課題としては、本取組みをいかに埼玉県全体へ波及させていくか、ということである。すでに学校ＨＰや学校通信、学校公開を通して、保護者や地域の方々には積極的に発信している。今後は県教委と更に連携を深め、県教委が実施する日本語支援員配置校連絡協議会等を利用し、本校の研究成果を他校へ発信し、県全体への普及を図っていきたいと考えている。

学習の成果を試す機会及び学習意欲を引き出す機会としての一日国際交流プログラムの実施

～プログラムに向けた英語授業での取組を含めて～

埼玉県立久喜高等学校
校長　鎌　田　勝　之

１　研究題目の設定理由

（１）課題

①生徒の実態

本校において、学校外の日常の場面で外国人と接したり、英語を使う経験をしたことがある、または、今後そのような経験をする可能性を念頭に置いて学習している生徒は少数である。英語の授業や諸活動への姿勢が後ろ向きであったり、英語学習の動機付けが外発的（「成績のため」等）であったりする者も多い。

また、海外留学や語学研修に興味はありながらも英語力への不安から躊躇している生徒が多数いる。*

＊　令和6年10月、本校１，２年生を対象に実施した調査「海外語学研修に関するアンケート」による。回答数491件。「高校在学中に短期の語学研修（英語）に参加することに興味があるか」という問いに対して「ある」は50.1%（248人）。「ある」と回答した者について「参加する上で問題や心配があるとすればどのようなものか」という問い（複数回答可）に対して「英語力」を選択したのは79.4%（200人）。

②英語授業の実態

１年次の必修科目「英語コミュニケーションⅠ」では、教科書の読解を基本とし、スピーキング活動（帯活動）やオンライン英会話（各学期に１～２回）、ALT による授業（定期考査毎に１回）を行っている。課題は、これらの活動を通して身につけた知識やスキルを試す機会が設けられていないことや、教科書や各活動の内容が互いに関連付けられておらず言わばスポット的な活動となっていることである。

（２）本研究（プログラム）の目的

研究題目である一日国際交流プログラムとそれに向けた英語授業での諸活動の目的は以下の通りである。

・日々の学習活動が実際の外国人との交流場面でも生かされるものであることを生徒に実感させる
・様々なバックグラウンドを持つ外国人との交流を通して、生徒の視野を広げ、異文化理解や外国語学習に対する意欲を高める

２　具体的な実践内容

（１）一日国際交流プログラム

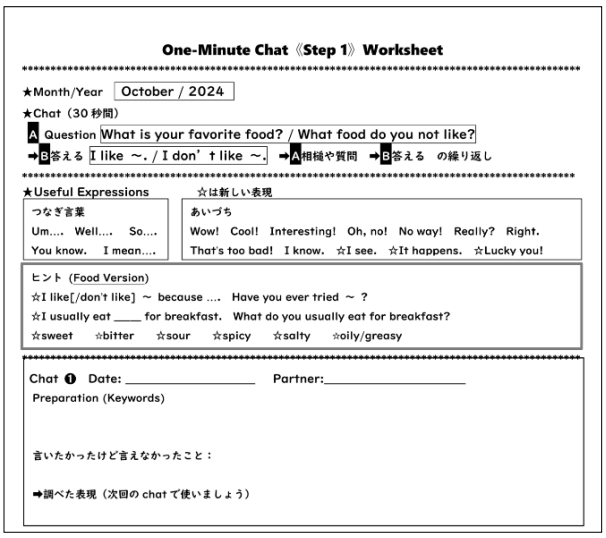
１学年全生徒を対象とし、３学期に国際交流プログラムを実践する（企画運営は本校国際理解教育委員会および１学年）。１時間目から６時間目まで通しての終日のプログラムとする。１班15名程度の生徒に対して２名の講師を配置し、生徒一人当たりの発話量や講師との交流時間を十分に確保する。使用言語を英語とし、これまでの学習の成果を試す機会とする。また、講師２名のうち１名を英語母語話者、もう１名を英語圏以外の国・地域出身者とすることで、多様な言語や文化、民族、宗教等に関する生徒の興味・関心を引き出す。英語やそれ以外の教科の学習に対する能動的姿勢を醸成する機会としたい。

活動内容は、英語による講義、討論、スピーチなどとし、英語運用能力を多面的に試し、伸ばすことができるようにする。プログラム終了後、学習内容をまとめ、校内掲示等により他学年の生徒に共有する。

（２）英語授業での取組

① One-Minute Chat（スピーキング活動）

授業の最初に帯活動として行う。月ごとに設けたテーマに沿って二人一組で英語で会話する。相槌や質問を交え、設定された時間（30秒～60秒）を通して、会話を継続する。ワークシートにはテーマに応じた語彙や文をヒントとして記載し、英語が苦手な生徒も取り組みやすいようにする。会話終了後、「言いたかったけど言えなかったこと」を各自で調べ、次の授業ではその表現を使うこととする。また、間違いの多い表現などをクラス全体で共有し、「使える」「使いたい」英語表現を蓄積させていく。



One-Minute Chat《Step 1》Worksheet

★Month/Year　October / 2024

★Chat（30 秒間）

A Question What is your favorite food? / What food do you not like?

➡B答える I like ～. / I don’t like ～.　➡A相槌や質問　➡B答える　の繰り返し

★Useful Expressions　☆は新しい表現

つなぎ言葉
Um….　Well….　So….
You know.　I mean….

あいづち
Wow!　Cool!　Interesting!　Oh, no!　No way!　Really?　Right.
That’s too bad!　I know.　☆I see.　☆It happens.　☆Lucky you!

ヒント（Food Version）
☆I like[/don’t like] ～ because ….　Have you ever tried ～ ?
☆I usually eat ____ for breakfast.　What do you usually eat for breakfast?
☆sweet　☆bitter　☆sour　☆spicy　☆salty　☆oily/greasy

Chat ❶　Date: _____　Partner:_____
Preparation (Keywords)

言いたかったけど言えなかったこと：

➡調べた表現（次回の chat で使いましょう）

【One-Minute Chat ワークシート】

② ALT によるオールイングリッシュ授業

各学期に２回実施する。教科書や One-Minute Chat で扱ったテーマと関連づけることで、日頃の学習がネイティブ教師による授業でも生きてくるという実感を生徒に持たせる。

【教科書の内容と関連付けた ALT の授業】

③オンライン英会話

２学期に２回、３学期に１回、実施する。タブレットを使用し、ネイティブ講師と１対１で30分間英語で会話する。会話のトピックは、One-Minute　Chat や ALT による授業の内容とリンクさせ、英会話の実戦練習の場とする。

【オンライン英会話】

④上記①～③の実践例

（ｉ）・One-Minute Chat：“What do you like to do in your free time?”

・オンライン英会話：“What’s your favorite?”

（ii）・One-Minute Chat：“What is your favorite food? /What food do you not like?”

・オンライン英会話：“Dinner with your host family.”

（iii）・教科書：制服

・ALT 授業：“Is it a good idea for students to wear school uniforms?”

（iv）・教科書：屋久島エコツアー

・One-Minute Chat：“Which season do you like the best?”

・ALT 授業：“What is the best season for foreign tourists to visit Japan?”

３　成果指標

一日国際交流プログラム（令和７年２月実施予定）の実施後、参加生徒を対象としたアンケートを行う。授業での取り組みの有益性や異文化交流に対する意識の変容、今後の学習や進路意識に対する意識の変容等を評価する。

４　今後の見通し及び課題

授業での取組や学習内容が実際の英語使用場面で活用できるという実感を持たせるために、教科書やその他の教材、各活動および取り組みの内容が互いに関連性のあるものになるよう、一年間ないしは三年間を見通した計画を立てる必要がある。また、ALT やオンライン英会話の委託業者等とも学習内容や指導方法について詳細に共有しなければならない。

また、生徒の学習到達度や実情を定期的に評価し、必要に応じて活動のレベルややり方をスモールステップで発展させていく必要もある。

（例）スピーキング活動

１年次：One-Minute Chat

２年次：One-Minute Speech

３年次：One-Minute Debate

今回の取り組みを発端とし、今後、授業や様々な取り組みを通して異文化理解や外国語学習に対する生徒の意欲・関心を高め、他の国際理解行事や語学研修等への参加に繋げていきたい。

地域の「内なる国際化」に対応できる人材育成
～ JICA の国際協力出前講座を活用した、グローバルな生徒の育成実践～

埼玉県立狭山特別支援学校狭山清陵分校
校長　田　中　理　子

１　はじめに

埼玉県には現在13校の高校内分校がある。埼玉県内の高校内分校は、知的障害特別支援学校高等部の普通科である。卒業後は療育手帳を使った企業就労を目指す教育課程を編成している。普通科として基礎基本となる教科学習と、企業就労に向けた職業教育のバランスの取れた教育課程が、高校内分校の特徴ともいえる。

本校は、令和５年４月に県内８校目の高校内分校として、県立狭山清陵高等学校内に開校し、現在２学年４学級、25名の生徒が在籍している。

分校教育目標を「ささえあう　やりとげる　学びあう～たくましく　自分らしさの　笑顔咲く～」とし、前半部分は分校生活３年間で学校で身に着けたい目標、後半部分は卒業後の自立と社会参加を目指した目標としている。

また、コミュニティースクールとして地域の人財を活用した教育活動にも力を入れ、地元奥富公民館を中心とした地域イベントへの参加や、市内の狭山工業高等学校を中心とした「狭紅茶」５校連携プロジェクトにも参加するなど、地域の教育力を活用した教育活動を行っている。

２　生徒の実態

本校は知的障害を有し、自力通学できる生徒が通う特別支援学校高等部分校である。中学校までは特別支援学級に在籍していた生徒である。自己肯定感が低く、消極的かつ自信がない生徒がいる一方、何事にも素直かつ積極的に物事に取り組む生徒もいるなど、実態幅がある。１クラス最大８名の少人数編成を生かし、きめ細やかな指導・支援を行っている。

３　研究主題設定の理由

現在、生徒の居住地域では、外国籍の方が増えており、卒業後、就労先や地域で外国につながりを持つ方々との交流が不可欠なると思われる。このような「内なる国際化」に対応するため、高等部卒業と同時に就労する生徒たちが地域社会で出会う外国につながりのある方々と交流したり、共生することができるようにする必要があると考えた。

また、同敷地内の狭山清陵高等学校は、学校の重点目標の一つに「視野を広げる国際理解教育の推進」を挙げており、国際理解教育を積極的に行っている。平成８年にオーストラリアのマッスルブルック高校と姉妹校提携を結んで以来、相互訪問等の国際交流事業を行っている。

このように国際理解教育を推進している高校内に設置された分校として、本分校でも国際理解教育を推進したいと考え、今回の研究に至った。

４　研究内容（具体的な取組）

（１）JICA 地球ひろばサテライトの学習展示品を活用した国際理解教育

今回は、主に総合的な探究の時間を活用し、まずは、国際社会で問題となっていることに関心を持たせるため、SDGs 教材を活用した国際理解教育から始めた。JICA 東京の学校教育アドバイザーと連携し、埼玉県総合教育センター内にある JICA サテライト展示の展示品を活用した、国際問題に関心を持たせる授業を実践した。

【SDGs 教材】

①「おかもち」

私たちの食生活が外国からの輸入に頼っていることを実感することで、グローバル化について関心を高めた。

②「貧困キューブ」

貧困による様々な問題が連鎖していることを実感することで、貧困問題を考えるきっかけとした。

③「識字ボックス」

言語や障害の有無などに関わらず、誰もが利用しやすいように工夫したユニバーサルデザインを考えさせた。

（2）JICA オンライン地球ひろばの活用

JICA 東京の協力のもと「JICA 地球ひろば」の職員によるオンライン出前講座を実施。この事業は JICA 東京でも始めたばかりの事業ということで、今後の活用の仕方を含めて、実験的な試みとなった。

具体的には、オンラインで市ヶ谷にある JICA 東京の「JICA 地球ひろば」の紹介を受け、世界が直面する様々な課題や、開発途上国と私たちとのつながりを体感できることを知った。

その後、現地の派遣隊員とオンラインでつなぎ、協力隊としての体験談や現地の生活や教育環境の様子などを伺い、分校生の質問に答えていただきながら、リアルタイムの世界情勢について学んだ。

（3）国際協力出前講座

現在、ALT などを活用した教育活動を実践できていないため、今回外国人講師（一部現地派遣隊員の経験のある日本人講師）をお迎えし、音楽・国語・外国語の授業を通し、教科横断的に国際理解教育を行った。

①音楽：世界の音楽を知り、演奏体験や生徒による演奏披露などを通じた国際交流を行う。

②国語：世界の物語を通して、世界に生きる人々を身近に感じたり、自分の住む世界（環境）について見つめなおすきっかけとする。

③外国語：「Let's see the world」をテーマに、世界の国々の紹介や実際に外国語を使ったコミュニケーションを行いながら、世界の国々を知るきっかけとする。

4　成果と課題（○成果　●課題）

○「最初は恥ずかしかったが、だんだんと大きな声であいさつなどをすることができるようになった。」等の感想から、積極的に交流する姿勢を育てることができた。

○ SDGs 教材などを通じ、国際的な諸問題にも関心を持たせることができた。

○狭山清陵分校の国際理解教育における新しい仕組みづくりの第一歩を踏み出すことができた。

●国際理解教育は単年度事業ではなく、在籍中の３年間で計画的に実践していくことが今後の課題である。

● JICA 出前授業の講師選定と日程調整にあたり、実施日の調整が難しかった。

●教科横断的に行うためには、年間指導計画との連携を図る必要がある。

5　おわりに

前述したように、狭山清陵高等学校が国際理解教育に力を入れているため、分校開校前から JICA との連携を中心とした国際理解教育を検討してきた。

今年度の取組を検証し、狭山清陵分校の国際理解教育の推進に努めていきたい。

4　キャリア教育支援

小学校

1　自ら考え、行動する「考動力」育成プロジェクト
～望ましい集団活動を通して～……戸田市立新曽北小学校… 116

2　学びを深め、自他のよさを認め合うことができる児童の育成
～児童一人ひとりを大切に、自己肯定感・自己有用感を高めるために～……草加市立青柳小学校… 118

3　地域の特性を生かしたキャリア教育の推進
～ SDGs の視点を通して学校教育活動の充実を図る～ ……秩父市立秩父第一小学校… 120

4　黒浜南小キャリア教育プラン
～夢を見つけ、夢を実現できる資質・能力の育成～……蓮田市立黒浜南小学校… 122

中学校

1　生徒が社会との協働をとおして主体的に未来を創造するキャリア教育の在り方
～災害ゼロの町づくりの創造をとおして～ ……さいたま市立与野西中学校… 124

2　いのちを大切にし、未来の創り手として夢と希望を持ち続ける生徒の育成
～生涯にわたり夢と希望を持ち続けるためのキャリア教育の充実～……さいたま市立植竹中学校… 126

3　一枚ポートフォリオ評価に基づいたキャリアパスポートの活用
～学校スローガン A：あいさつができ　G：時間を守り　O：思いやりがもてるよき社会人となるために～
……上尾市立瓦葺中学校… 128

4　保護者と地域と連携を図り、生徒一人一人が地域の一員として自覚・意識を高め、
より良い進路選択を実現することができるキャリア教育の実践……川越市立霞ケ関東中学校… 130

5　地域との連携によるキャリア教育
～伝統文化の学びを通して、課題発見、課題解決能力を育み、自己の生き方を考えていくことのできる生徒の育成～
……東秩父村立東秩父中学校… 132

高等学校

1　看護のスペシャリストの育成
～５年一貫看護師養成専門高校におけるキャリア形成の推進の取組～……埼玉県立常盤高等学校… 134

2　リアルな体験を重視した進路指導の実践
～「朝定仕事発見プログラム」の事前調査と実施計画～…… 埼玉県立朝霞高等学校（定時制）… 136

3　「カフェ実習」を主軸とした「通級指導（キャリアサポート）」
～コミュニケーションスキル向上を目指して～……埼玉県立鳩山高等学校… 138

特別支援学校

1　自分の表現方法を知る
～現代美術画家によるワークショップを通して～……埼玉県立越谷西特別支援学校松伏分校… 140

自ら考え、行動する「考動力」育成プロジェクト
～望ましい集団活動を通して～

戸田市立新曽北小学校
校長　星　野　正　義

１　はじめに

本校は、戸田市の中央部に位置し、本年度は、開校52周年を迎える学校である。全校児童数は、675名（令和６年12月１日現在）、学級数は25の中規模校である。学区にはJR戸田駅があり、さらに、図書館や博物館等、市の公共施設等も多く、学習に有効活用している。学校応援団活動も根付いており、地域の教育力を生かした教育活動を日々実践し、学校教育目標「かしこく　やさしく　たくましく　ひろい心で」のもと、保護者・地域・学校が一体となり「だれにも安心できる居場所があり、だれもが活き活きと主体的に学ぶ」学校づくりに努めている。

また、令和３年度から令和５年度まで戸田市教育委員会の研究委嘱を受け、「自分ゴト化し、挑戦する児童の育成」を主題に掲げ、PBL（課題解決型学習）の手法を基に全教科等の校内研究に取り組むとともに、中学校区においても、令和４・５年度の２年間にわたり、研究委嘱を受け、「新曽（地域）から世界へ－主体的に学ぶ児童生徒の育成－」を研究テーマとして、小中９年間を通した児童生徒の資質・能力の育成に取り組んだ。これらの研究を通して、身近なところから課題を発見し、探究し続ける「自分を高める力」、失敗を恐れず、粘り強く取り組む「自分と向き合う力」、友達との関わりを大切にし、楽しみながら学ぶ「他者とつながる力」の育成に努めてきた。

今年度からは、後述のとおり、これまでの研究を焦点化した研究に取り組んでいる。

２　児童の実態について

特別な支援を要する児童や経済的に困窮する家庭、外国人児童の増加など多様な背景をもつ児童が増加する中、本校では特に不登校や登校渋りなど集団での生活に上手に適応できない児童、集団での生活に苦しむ児童が増加しており、それらは人間関係や自己肯定感の欠如に起因することが多くなってきていることが課題である。

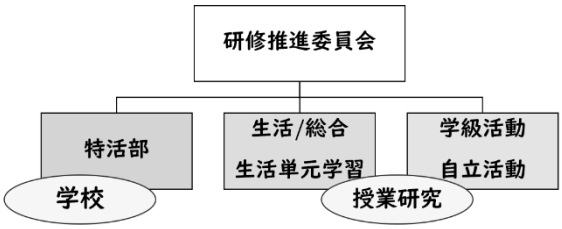
３　研究主題「考動力～課題発見力と協働力の育成を目指して」について

前述の本校児童の課題解決に向けて、物事を自分ゴトとして捉え、身近にある課題に気付く「課題発見力」と、多様な考えをもつ他者と折り合いをつけて共に課題に向き合う「協働力」の総体を「考動力」として定義し、全教育活動においてその育成を目指している。

特別活動を軸とし、望ましい集団活動を通した「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」というキャリア教育の要となる資質・能力の育成を行い、その実践の場として、委員会活動、クラブ活動や総合的な学習の時間における探究活動を位置づけている。

４　研究組織について

組織構成



５　具体的な取組

（１）教職員を対象にした校内研修

研修推進委員会に特別活動主任及び総合的な学習の時間主任を加え、校内研修と校務分掌の連携を図りながら、「考動力」育成に向け、特別活動とともに主体的・対話的で深い学びを実現する手法のひとつであるPBL（Project Based Learning）の共通理解を深めるなど以下の研修を実施した。

・PBL、特別活動理論研修、具現化研修。
・互いの個性を認め合える「居心地の良い、安心できる学級」を目指した学級経営に関する研修。
・学級満足度調査結果（WEBQU）を基にした、学級パワーアップ研修。
・児童への肯定的な関わり研修。

（２）学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事での実践

・PBL 型での取組により児童の主体性を育成する。
・児童の発意発想を生かした学校行事（運動会、集団宿泊）や異年齢集団活動、委員会活動、クラブ活動を通して、自己有用感や成就感を味わわせる。

【児童と共に創る全校運動会】

【異年齢集団活動～にじ色活動＆祭り～】

（３） 各学年の実践

理想の学校へと改革するための探究活動やよりよい学区域へと変革するための探究活動を通して、自ら課題を立ててその解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値の創造に挑み、未来を切り開いていく力を身につけていく。

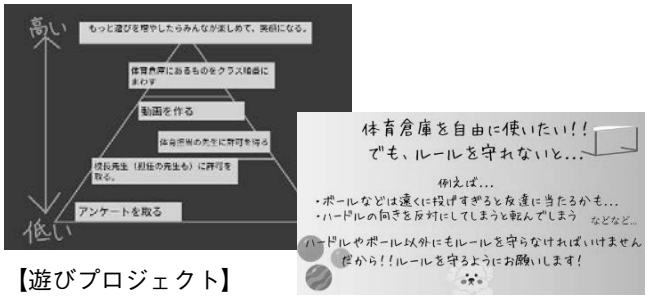
第５学年　総合的な学習の時間『新曽北小をつくるのは私たち！～学校の新リーダーへの道～』

サイクル①『学校をよりよくするにはどうすればよいか』（26時間）

・新曽北小について追究活動を通して、よさや改善点を明らかにする。
・自ら課題を立ててその解決を目指し、他者と協働しながら探究活動を行う。

サイクル②『さらに学校をよりよくするにはどうすればよいか』（26時間）

・サイクル①の活動からさらに、自分たちにできることを考え、実践し、解決に取り組む



【遊びプロジェクト】

第６学年　総合的な学習の時間『北小学区を、よりステキにするには』

サイクル①『北小学区のよさ、改善点を知ろう』（25時間）

・北小学区の施設とそれにかかわる人々やその仕事を知る。
・北小学区について追究活動を通して、よさや改善点を明らかにする。

サイクル②『北小学区をよりステキにしよう』（40時間）

・北小学区をステキにしようと活動している人々や団体を知る。
・サイクル①の活動からさらに、自分たちにできることを考え、実践し、解決に取り組む。

【朝のラジオ体操】

６　成果と課題　（○成果　●課題）

○児童の発意発想を生かした学校行事（運動会、にじ色祭り、集団宿泊）や委員会活動・クラブ活動を通して、児童の主体性を育成するとともに自己有能感や成就感を味わわせることができた。

○総合的な学習の時間での追究活動を通して、自分たちにできることを考え、実践し、解決に取り組むことができた。

●「考動力」の育成に向けた教育活動や行事等の充実を図る。

学びを深め、自他のよさを認め合うことができる児童の育成
～児童一人ひとりを大切に、自己肯定感・自己有用感を高めるために～

草加市立青柳小学校
校長　須　賀　由　美

１　はじめに

本校は、昭和57年４月１日に開校し、地域とともに43年の歴史を受け継ぎ、伝統を築いてきた学校である。東京外郭環状道路や国道三郷流山線も近く、自動車交通の便のよい立地にあり、住宅地が多い環境の中で、現在14学級361名の児童が学んでいる。

学校教育目標は、学校名の「あおやぎ」を頭文字として、「明るく元気な子、思いやりのある子、やりとげる子、きたえる子」としている。また、目指す学校像は、「笑顔で登校　明日を楽しみに下校する　青柳小学校【笑顔が一番】～地域と共に歩む、児童一人ひとりの笑顔を大切にした信頼される学校」とし、日々の教育活動に取り組んでいる。

令和４・５年度には、草加市教育委員会研究委嘱の幼保小中を一貫とした教育の研究発表会を開催し、「自己肯定感・自己有用感を育む授業づくり」を研究主題として、授業を公開し、学校内外に発信した。特に授業における「振り返り」を大切にして授業実践を重ね、研究成果を生かしながら取り組んできた。令和５・６年度には、埼玉県教育委員会より「『未来を生き抜く人材育成』学力保障スクラム事業」の指定を受けた。これは、高学年や中学校での学習の躓きを未然に防止するため、小学校４・５年生児童を対象に教育的支援の方法を研究・実践していくものである。そこで、本校では、ここまでの研究の成果とキャリア教育を一体化させ、自己肯定感を高めることにより、児童が生き生きとこれからの未来をたくましく生きることができるようにしていきたい。また、予測困難な社会を生き抜く力を育むため、仲間と協力し学びの挑戦の意味を体得することにより、学び続ける意欲や目標をもって生きる大切さを理解させ、自立した社会人になるための基盤を作りたい。自己肯定感を高めることにより、児童が生き生きとこれからの未来をたくましく生きることができるようにしていきたい。そこで、本研究に取り組むことにした。

２　児童の実態について

全国学力・学習状況調査、埼玉県学力・学習状況調査等の正答率において、全般的に全国や県、市平均を下回っており、基礎的・基本的な内容に習得が課題である。

しかし、県の調査において、学力を伸ばしている児童が増えてきているという結果も見られている。また、「自分にはよいところがある」と感じている児童も肯定的回答が高くなっており、「わかる・できる・楽しい」授業をとおして、学習意欲を高めることが不可欠である。

一方で、全欠のような不登校児童はいないものの、登校しぶり傾向の児童、集団での生活に上手に適応できない児童もおり、自己肯定感を高めることが課題であるととらえている。予測困難な社会を生き抜く力を育むため、仲間と協力し学びの挑戦の意味を体得することにより、学び続ける意欲や目標をもって生きる大切さを理解させ、自立した社会人になるための基盤を作りたい。本研究の推進は、本校児童に係る課題解決につながると考え、本研究テーマを設定した。

３　研究仮説

本研究では、学びを深め、自他のよさを認め合うことができる児童を育成するため、以下のような研究仮説を設定して実践に取り組んだ。

〇研究仮説１

教師が主体的・対話的で深い学びの授業改善を繰り返しながら、授業を行い、「わかる・できる・楽しい授業」を実現することで、児童の自己肯定感・自己有用感を高めることができるであろう。

〇研究仮説２

親和的で居心地のよい学級集団作りをすることで、児童の自己肯定感・自己有用感を高めることができるであろう。

４　研究内容（具体的な取組）

（１）授業研究会の開催

校内研修として、国語科の研究に取り組み、３学年で、授業研究会を開催した。授業公開後は参観者による研究協議を行うとともに、草加市教育委員会から指導者を招聘して、「わかる・できる・楽しい」授業について効果的な指導や手立てについて、共有化を図った。

（２）発達段階に応じた講義・体験活動の実施

①読み聞かせや読書タイム、よもよも親子読書の日

本校では、「キタミソウの会」による読み聞かせを月１回木曜日実施している。また、それ以外の木曜日は、読書タイムとし、読書活動を推進している。さらに、毎月第四金曜日に「よもよも親子読書の日」を設定し、親子で読書に親しむ機会を作った。

②川柳中学校吹奏楽部の演奏会

年間二回、川柳中学校の吹奏楽部の演奏を聴く機会を作っている。体育館で、中学生の演奏を生で聴くことで、中学生への憧れや音楽への興味を高めることができた。

（３）各教科、生活科、総合的な学習の時間等での地域の教育力を生かした学習及び夢を持たせる学習の実施

①１年生生活科「地域の公園での活動」の実施

地域の青柳東公園や八條親水公園へ行く活動を実施。季節に合わせた体験や遊びを通して、児童に自然体験をさせた。

②２年生生活科「地域の施設への町探検」の実施

校外学習で町探検へ出かけた。地域にある多くの施設、お店の方々の協力で、有意義な体験をすることができた。地域のよさにも触れることができた。

③３年生総合的な学習の時間「自然体験学習」の実施

「いきものはかせになろう」という題材で、葛西用水にある「キタミソウ」の観察をする学習を実施した。地域にある大切な植物を大切にしようという力を育むことができた。

④４年生総合的な学習の時間「福祉学習」の実施

草加市社会福祉協議会や草加市体育協会の方の協力で、白杖体験、高齢者体験、車椅子バスケットボールの体験等を行った。児童は、自分事として捉え、体が不自由になったときのことを考えながら、真剣に体験することができた。

⑤５年生道徳「夢の教室」の実施

夢に向かって取り組む姿勢について、実際にサッカー選手という夢を実現した飯尾選手の話を直接聞くことによって、児童は、夢を持つ大切さやあきらめない気持ち、努力することの大切さなどを感じることができた。

⑥６年生総合的な学習の時間「職業を知ろう」の実施

自分自身をふり返り、興味・関心のあることを考え、将来の進路の実現に向けて体験したり、調べたりすることをねらいとして、実施している。自分が就きたい職業を調べることで、将来への見通しを持つことができた。

（４）地域の施設の協力による校外学習及び社会科見学の実施

２年生は、川柳文化センターの見学、３年生は、学区内にある「草加煎餅　丸惣一福」、「ＡＢＳ卸売センター」、４年生は、学区外ではあるが徒歩で行くことのできる「東埼玉資源環境組合第二工場（リユース）」に社会科見学に出かけた。近い場所で、有意義な体験をすることができた。

（５）「わくわくやぎっ子活動」の実施

高学年は、異年齢集団での活動を通して、下級生を思いやる気持ちを醸成すると共に、異年齢集団で協働する事のよさや楽しさを味わうことをねらいとして実施している。低学年は、異年齢集団での活動を通して、上級生への尊敬の気持ちを醸成すると共に、異年齢集団で協働する事のよさや楽しさを味わうことをねらいとして実施している。６年生が主体となって考えた遊びを30分程度の時間、有意義に活動した。

（６）児童が元気になるあいさつ運動の実施

あいさつを重点課題として、９月、１月にあいさつ運動を実施している。また、あいさつ運動期間中だけにならないように、特活主任を中心に、あいさつを頑張っている児童を全校放送で紹介し、賞状を渡している。児童は、あいさつのよさや大切さを実感することができた。

５　成果と課題（○成果　●課題）

○様々な体験活動を通して、学び続ける意欲や目標をもって生きる大切さを理解させることができ、自己肯定感を向上させることができた。

○読書活動や様々な方との交流を通して、学び続ける楽しさや仲間と協働する喜びを実感させ、自分なりの考えを取捨選択できる力を育成することができた。

○異学年交流や地域の施設の利用等を通して、児童に夢や憧れを持たせ、自分自身を好きになることができた。

●年間指導計画への確実な位置づけとカリキュラムマネジメントの確実な実行。

●外部指導者から学んだことを自分事としてとらえる力の育成。

地域の特性を生かしたキャリア教育の推進
～ SDGs の視点を通して学校教育活動の充実を図る～

秩父市立秩父第一小学校
校長　浅　賀　俊　也

１　はじめに

本校は、開校151年目を迎え、９学級、全校児童147名が学んでいる。学区内には秩父市の中心である秩父神社や番場通り、消防本部や警察署などがあり、日頃から連携を図るなど、地域に根ざした学校である。一昨年度から交通安全こども自転車大会に参加し、昨年度および今年度は交通安全こども自転車埼玉県大会で優勝、８月に行われた交通安全こども自転車全国大会でも優勝をすることができ、普段から安全教育にも積極的に取り組んでいる。

学校教育目標を「あかるく　なかよく　かしこく」、目指す学校像を「心豊かに学び合い、一人一人が笑顔で輝く学校」、合い言葉を「TEAM・FIRST（TEAM ＝ Together・Everyone・Achievement・More）」として、日々の教育活動に取り組んでいる。

２　研究主題設定理由

本校の学校経営の重点に、「家庭、地域、学校の連携強化による、一小だからできる教育、一小でなければできない教育の推進」がある。秩父の中心地域にある本校は、地域とのつながりも強く、保護者が地域で活躍している児童も少なくない。その中で、自分の進む道を模索したり、成長を振り返りこれからを考えたりすることが、児童が秩父第一小を、ひいては秩父を好きになり、未来の自分や持続可能な秩父を創造できる人財になると考え、本研究主題を設定した。

３　研究仮説

以下の仮説を立てて、全教育活動に取り組んだ。

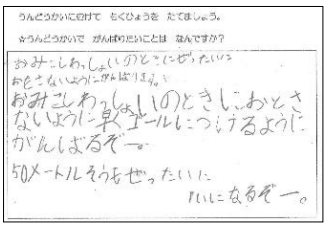
・研究仮説

「秩父の中心地域での体験的活動を充実させ、郷土のよさをより多く知ったり、児童中心の学習活動を展開させたりすることにより、郷土愛や自己肯定感が高まり、将来の夢や希望、目標を持って生活をすることができるであろう。」

４　研究内容（具体的な取組）

（１）行事ごとのめあてと振り返りの実施

特別活動主任が中心となって、各行事の際にめあてと振り返りをする機会を必ずとった。具体的には、生活科見学、社会科見学、運動会、一小チャレンジ大会（児童会活動）など、児童それぞれがめあてをもって取り組み、その振り返りを都度行うことができた。その都度振り返りを行うことで、自分のがんばりや成長に気づくことができるとともに、友達の成長にも気づくことができた。また、記入した用紙はキャリアパスポートにはさんで保存している。



【運動会振り返りカード】

（２）郷土を知る体験活動

本校は秩父の中心にあるという利点をいかし、特別活動や総合的な学習の時間を中心に、郷土のよさについて知る学習を実施している。

①全学年

ア　羊山たてわり遠足

たてわり班で歩いて羊山に遠足に行き、遊んで異学年の交流を深めた。

イ　秩父消防署救助工作車・はしご車見学

秩父消防本部に新たに配置された救助工作車とはしご車を見学し、その働きを知った。

ウ　秩父特別支援学校交流学習

学区内に特別支援学校がある利点を生かして、学年ごとの交流学習を実施している。１学期は特別支援学校へ行き、２学期は本校へ来校してもらい、体験活動や発表会などを行って交流をしている。

②１年生

ア　ミューズパーク遠足

令和７年度に植樹祭が行われるミューズパークに遠足に行き、秋探しを行った。

③２年生

ア　虚空蔵寺見学

十二支の丑寅の守り本尊である虚空蔵様に行って、思い思いの場所の絵を描いた。

イ　秩父市立図書館見学

生活科の学習で､図書館に見学に行き､本を借りたりお話しを聞いたりした。

④３年生

ア　荒川歴史民俗資料館見学

昔の道具の学習を社会科で行っているが、のこぎりや石臼などを実際に使ったり体験したりすることができた。

イ　地元企業見学

学区内に多くの企業があり、学校の近くの鍵の工場をもつ企業を見学した。

ウ　スーパーマーケット見学

スーパーマーケットの学習で、近くの店舗を見学した。店長の話や店の裏側を見せてもらうなどど貴重な体験となった。

エ　秩父消防本部見学

秩父消防本部の見学を行い、消防士の仕事や消防車、救急車の役割を教えていただいた。

オ　秩父警察署見学

秩父警察署の見学では日々のパトロールや不審者への対応、パトカーの役割などを学んだ。

⑤４年生

ア　新啓織物見学

秩父銘仙で有名な新啓織物を見学し、秩父絣のよさを学んだ。

⑥５年生

ア　秩父まつり会館見学

秩父の伝統行事である秩父夜祭りについて、深く学ぶことができた。

イ　埼玉自然の博物館・長瀞岩畳見学

長瀞の埼玉自然の博物館やライン下りを体験し秩父の自然を学んだ。

⑦６年生

ア　ようばけ(地層)見学

小鹿野町のようばけに行き、地層の様子や化石について学んだ。

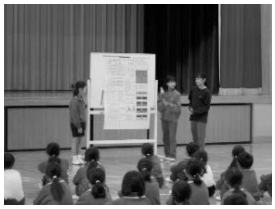
（３）児童中心の児童会活動

委員会・児童会の活動を通して、児童が中心となって運営することができる活動はできる限り児童が活躍できるように計画、実施をした。

①音楽集会

毎回の音楽集会で、児童が司会、進行を務めた。また、体を動かす歌や全校での合奏など、主体的に参加できる集会にした。

②体育集会



体育集会でも、運動委員の児童が司会や進行を務め全校で鬼ごっこをしたり、プール学習について説明をしたりした。

５　成果と課題（○成果　●課題）

○計画的な体験活動で児童の主体性が育まれた。

●意図的、体系的、継続的な指導が必要である。

６　おわりに

秩父のよさを感じ、持続可能な秩父創造に貢献できる児童を育成するため、教職員一同さらに団結して教育活動に邁進していきたい。

黒浜南小キャリア教育プラン
～夢を見つけ、夢を実現できる資質・能力の育成～

蓮田市立黒浜南小学校
校長　中　田　泰　広

１　主題設定の理由

本校は、昭和56年に開校した、開校44年となる、蓮田市郊外にある学校である。本校の特色は、多くの方々が学校教育を応援してくださる「心温かい地域の中にある学校」である。

令和４年度より、学校教育目標「かしこい子、たくましい子」の実現に向けて、学校スローガン「誇りある夢の創造」を掲げ、「全ての児童が夢をもち、夢を実現できる力」を育む教育を推進している。その中核となすのが、「キャリア教育」である。

さらに令和５年度より３年間、埼玉県より「ＳＤＧｓの実現に向けた教育推進事業」に関する研究委嘱を受けている。これからの予測困難な社会を生き抜いていくために必要な資質・能力の育成を目指した現行の学習指導要領では、これからの学校教育や教育課程の役割として「持続可能な社会の創り手」となることができるようにすることが前文と総則に掲げられている。そこで、令和５年度より本校は、次のようにとらえ、キャリア教育を本校の教育活動の要として取り組んで切る。

２　本研究で目指すキャリア教育

（１）目指す児童の姿

自分のよさを生かし、誰もが幸せになる社会を創る生き方を考え、行動できる児童

（２）児童に育成したい力

「誰もが幸せになる社会を創る自分の生き方」を考え、また、それを実現できる力

３　令和６年度キャリア教育プラン

年度当初、全教職員で共通理解を図った。

概要　**誇りある夢の創造～3章　夢現大～**

全ての児童が夢をもち、夢を実現できる力を大きく伸ばす

ワクワク感をもって「笑顔」と「感動」、誇りを創る

夢現大の思い

①全ての**児童の「可能性」は無限大**

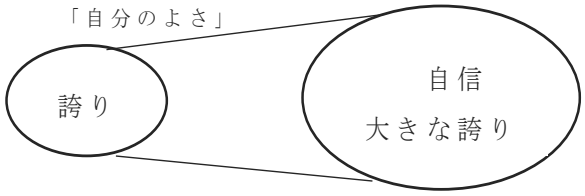
②全ての児童が**大きな夢をもち、夢を実現できる力**を**大きく伸ばす**

ワクワク感をもって目標に向かって取り組む

（あこがれ）→（目標の設定）→（取組）→（達成）　→（次への目標）

意欲　努力　達成感　自信　大きな誇り

「自分のよさ」



「誇り」を大きくすることで、夢をもたせ、夢を実現できる力を大きく伸ばす

令和６年度　大切にするのは「一人一人が大きく伸びる。成長する」

「学級が、学年が、学校が伸びる、成長する」

★他の人との比較ではなく、自分の成長を実感できる。大切なのは、伸びである。

（年度当初）自分のよさは、［　　］でそれを生かし、伸ばす。

それには、目標［　　］に取り組む。

（途中）振り返りで、よりできるようになった喜びを実感させる。

他の人との比較ではなく、以前の自分との比較。

「わかった」「できた」「創り出す喜び」を実感させる。目標の達成で、自信をつける。大きな誇りとなる。

共通目標

全ての児童に「誇りある夢の創造」の実現を目指す

①「誇りをもつ」⇒自分のよさに気づき、伸ばす一生懸命さに誇りをもつ

②「夢を創る」⇒ワクワク感をもつ

③「夢を実現できる力を培う」⇒目標に向かって粘り強く取り組む

4　SDG ｓの視点からのキャリア教育

地域や企業と目標を共有し連携した活動

①学校応援団と連携した農業等の体験

②地域や企業と連携した自然環境、国際理解、福祉等のＳＤＧ推進

③地域、企業と連携した「町づくりの提案書」を作成し、提案する。できることを実行する。

（例）（６学年）「20年後の蓮田をプロデュースしよう」

「知る」日本の課題、蓮田市の魅力や課題を知る。

「考える」小グループ毎にテーマを設定し、考える。

「行動する」提案発表会を行い、市長に提案する

（連携：市役所関係課、医療・福祉・農業・商工業の関係者、応援団等）

講義「課題を知る」

市役所訪問

提案発表会

【SDGs の視点からのキャリア教育】

～自分のよさをいかして､よりよい社会を創る生き方～

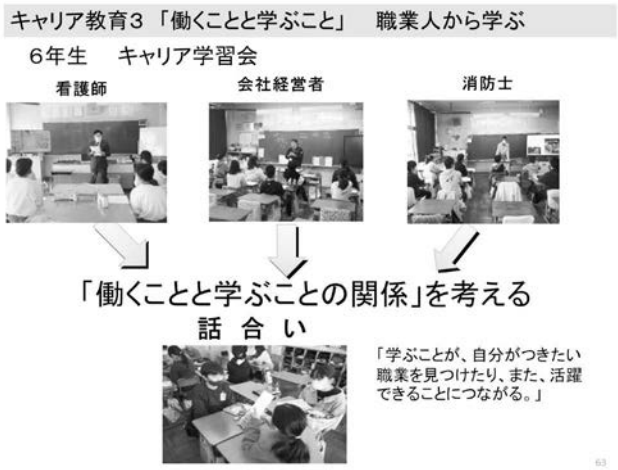
（１）校内研修「SDGs の視点からの特別活動」で共通理解

（２）自立的で自治的な力の育成

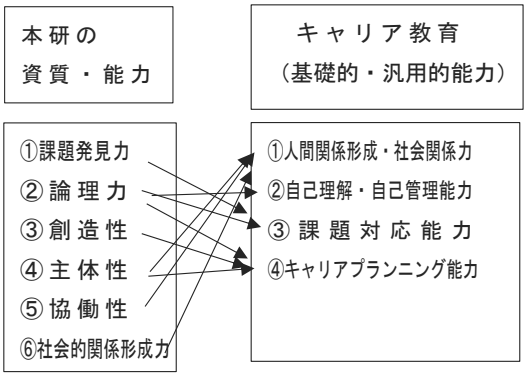
①「総合的な学習の時間」のキャリア教育

ア「職業へのあこがれ」

イ「働くことと学ぶこと」



（３）SDG ｓ探究活動とキャリア教育で育成する資質・能力



（４）「総合的な学習の時間」と「学級活動」のキャリア教育

①【生活科・総合的な学習の時間】の探究活動

「よりよい社会にするための課題の解決策を考え、実行する」

②学級活動（３）一人一人のキャリア形成と自己実現

・「社会参画意識の醸成や働くことへの意義の理解」

5　まとめ

年々キャリア教育は充実し、児童は夢をもち、夢を実現できる力を伸ばしている。これからも、「ワクワク感」を基盤に「誇りある夢の創造」の実現、夢と希望をもって未来を創造する子ども達の育成に全力で傾注する所存である。

生徒が社会との協働をとおして主体的に未来を創造する キャリア教育の在り方

～災害ゼロの町づくりの創造をとおして～

さいたま市立与野西中学校
校長　内　田　崇　史

１　はじめに

本校は、昭和29年４月に与野中学校分校として開校し、今年度創立70周年を迎えた歴史のある学校である。また、後援会や育成会など生徒を見守り応援してくれる組織も充実しており、環境が整っている地域でもある。その恵まれた環境の中で525名の生徒が在籍しており、あいさつ運動や学校行事等の取組を通して、学校教育目標である「心豊かな生徒」（ゆたかに）「自ら学ぶ生徒」（かしこく）「自己実現を目指す生徒」（たくましく）」を実践できる生徒の育成を目指している。さいたま市教育委員会より、令和３年より、学校課題研究の指定を受け、昨年までの３年間、学校安全教育の研究に取り組んできた。

２　研究主題設定理由

３年間研究してきた「学校安全教育」の中で「地域や社会と学校が積極的に交流を図ることが自分たちの安全を守る要素である」ことを学んできた。その考えに基づき、その発展形として、地域や社会と今後どのような関係を持ち、交流を深めながら自己実現（なりたい自分）を形成してくのかを考えさせたい。また、ほとんどの生徒が将来この地域で生活することが考えられ、「なりたい自分」を探求するだけでなく他の人（地域や社会）の幸せをも探求できる活動（Well being）を考えさせる中で主体的に自ら未来を創造できる力の育成していきたい。

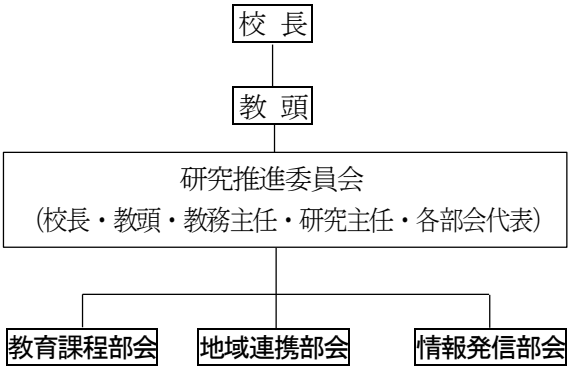
３　生徒の実態について

本校の生徒は、全般的に明るく素直な性格で物事にまじめに取り組む。３年生の校長面接では将来なりたい職業があると答えた生徒が８割ほどおり、将来に夢と希望を持っている生徒が多い。しかし、夢や志を持って生き方を設計し、その実現に向け粘り強く努力することがまだ十分に備わっていない。また、SNS等の普及によって、内向きで狭い世界に留まりがちな傾向がある。

４　研究仮説

３年間の研究の成果を礎に地域人材を活用するとともに、地域の一員として、他者との協働を図り、地域が抱える課題を主体的に考え解決するための探求的な活動を実践すれば、自他の未来を創造できる力を育成できるであろう。

５　研究組織



６　研究内容（具体的な取組）

（１）地域との協働

日頃から生徒が地域に目を向ける活動の推進

・校区美化活動（全校）
・夏祭りの神輿担ぎ（部活動有志）
・公民館ボランティア（自然科学部）
・祭り等の部活動参加（吹部・自然科学部）
・美術作品の展示（美術部）
・駅前安全マップ入りティッシュ配り（有志）
・各種募金活動（生徒会）
・小学校との交流
　あいさつ運動参加（生徒会）、土曜チャレンジ参加（陸上部）
・社会を明るくする運動参加（吹奏楽部）

（2）社会（企業・行政）との協働

＜企業＞

○安全・安心で、社会を豊かにする『もの』をつくり、学校・地域を盛り上げよう！

・商品開発から社会を知る

・商品開発の基礎基本を知る

・災害時に必要なもの開発計画を立てる

・防災グッズを開発し製品化する

＜行政＞

○「災害０の町づくり」に貢献するための具体案を考えよう！

・課題の設定「災害安全」「交通安全」「生活安全（防犯）

・情報収集「地域の問題点を調査」

・問題解決の手立てを発案、検討→企画・開発など

・区長への提言としてプレゼンを想定し、まとめる

（3）教科横断的な学習

・カリキュラム・マネジメントの推進
　総合的な学習の時間・特別活動・道徳の年間指導計画の見直し

・キャリアパスポートの活用

・各教科とキャリア教育の

（4）情報発信

・ホームページの活用・推進

・講師、マスコミ依頼等渉外活動

・ICT（タブレット等）の効果的な活用の推進

・本研究に関わる調査・検証

７　成果と課題（○成果　●課題）

○全教職員で共通意識をもって実践内容を設定し、全校で実践することができた。

○地域社会と協働する場面を仕込んだことにより生徒たちは多くの人と出会い、その方々の思いや考えに触れることができた。

○多種多様な人たちとの交流をとおして、自分の生き方を見つめ、将来にベクトルをのばすきっかけになっている。

●外部支援者が学校へ訪問する際のガイドライン（セキュリティー）の作成

●教員一人一人のキャリア教育に関する指導力の向上（研修会）

●外部支援者との打ち合わせ（趣旨説明など）の時間の捻出

●学習をすすめるにあたり思考ツールやチェックリストなど、生徒が主体的に学ぶための学習ツールの開発

●教科との横断的な運用を視野に入れたカリキュラムの作成

８　おわりに

社会が大きく変化する中、学校の学びだけでなく、地域住民や職業人など多様な人々と関りながら、生徒が地域住民の一人として地域の魅力や課題を知り、自分たちに何ができるのか、どう地域と関わり協働する中で幸せな生活を営んでいくのかを主体的に考え行動できる資質・能力を今後も育成していきたい。

いのちを大切にし、未来の創り手として
夢と希望を持ち続ける生徒の育成
～生涯にわたり夢と希望を持ち続けるためのキャリア教育の充実～

さいたま市立植竹中学校
校長　上　続　昌　司

１　はじめに

本校は、昭和28年４月に開校し、本年度で創立71年目を迎える学校である。生徒数は1034人、通常学級27学級、特別支援学級３学級の大規模校である。学区は、さいたま市北西部に位置する北区の市街地にあり、高層マンションの地域と住宅地域の両面を併せ持つ地域である。近隣の大砂土小学校、植竹小学校、東大成小学校から児童が本校へ進学している。

学校教育目標「ひと」とともに生きる生徒の育成＜具体目標＞確かな考え・深い思いやり・高い意欲を掲げ、「地域の学校として学校・家庭・地域が一体となり、「一生懸命をよりかっこよく」行動できる生徒の育成を目指す学校とし、全職員で連携を図りながら教育活動にあたっている。

２　研究主題設定理由

本校生徒の多くは、授業や行事等に対して意欲的である。一方で、学業の不振や人間関係のトラブル等により自信を喪失してしまう生徒も少なくない。そのため、生徒が主体的にいのちの大切さを考え、行動できる態度を育成し、未来の創り手として社会に貢献する意識を向上させ、生涯にわたり夢と希望を持ち続けるためのキャリア教育を充実させる必要がある。また、地域や保護者・関係機関との連携体制の構築・強化も重要な課題であると考える。

３　研究仮説

いのちの大切さを学ぶことで、生徒の人間関係に対する理解が深まり、他者を思いやる姿勢が育まれる。また、具体的なキャリア教育プログラムを通じて、生徒が自分の夢や目標を明確にし、それに向かって努力する意識が高まると考える。さらに、地域社会との連携を強化し、社会貢献活動に参加することで、生徒が自らの役割を実感し、自己肯定感の向上が期待できる。

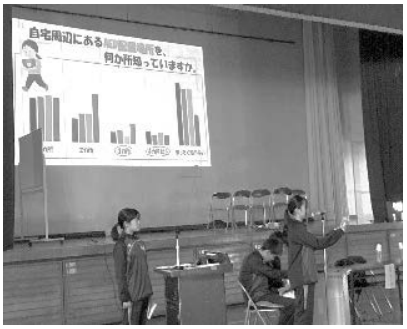
４　研究内容（具体的な取組）

（１）校内での取組

①進路指導主事を校務分掌に位置付け、校内で組織的にキャリア教育に取り組む体制を構築した。

②学校教育全体を通して行われる道徳教育を充実させ、キャリア教育に係る行事の前後に「社会参画、公共の精神」「勤労」「よりよく生きる喜び」の内容項目を取り上げて指導した。

③学校保健委員会を実施し、学校医やスポーツトレーニングコンサルタントの講義を通して、未来の作り手として活躍するための基盤となる健康について考える機会を持つ。さらに、学校保健委員会の内容を、保健委員が集会で発表し主体的に行動する態度を育成した。



【生徒による学校保健委員会発表】

④学校だより、学校ＨＰ、保健だより等を通して保健行事の様子を家庭や地域に発信した。

【養護教諭による人気コーナー「ほけんしつのつぶやき」】

⑤「いのちの支え合いを学ぶ授業」を通して相談することの大切さ、悩みやストレスの対処方法などを身に付けさせた。（３年生では進路の悩みに特化して実施する。）

⑥人間関係プログラムを通して「構成的グループエンカウンター」等のエクササイズを実施することによ

り良好な人間関係を構築できるようにした。

⑦小学校から高等学校を通じて活用する「キャリア・パスポート」を通して、自らのキャリア形成を見通し主体的に学びに向かう力をはぐくみ、自己実現につなげられるようにした。

⑧面接練習を通して、社会的・職業的自立に向け礼節を重んじる態度や姿勢を育成した。

（２）家庭と連携した取組

①ＰＴＡと連携し、高校見学会を開催する。保護者と共に上級学校について学ぶ意欲を高めさせる。今年度は近隣公立高校普通科３校、商業科１校、私立学校普通科２校にご協力いただいた。

②進路保護者会を通して、上級学校の教育方針やカリキュラム、進学実績等の特色を学び、進路選択に活用できるようにした。

（３）地域と連携した取組

①学校運営協議会を実施し、学校、家庭、地域が連携し、植竹中学区で育てたい生徒像について熟議を行った。

②地域と連携した探究学習プログラム「さいたまエンジン」や未来くるワーク体験（特別支援学級）を通して、人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力を育成した。

イノベーションシート①
どんなリソース（企業・地域）をどのように使いますか？

イノベーションシート②
イノベーションが実現するとどんな変化が起きますか？

イノベーションシート③
地域を良くするポイントを書こう。そのために企画をどのように磨き込みますか？

【さいたまエンジンのワークシート】

③「夢工房　未来くる先生　ふれ愛推進事業」を通して、好奇心や感動する心、望ましい勤労観や職業感を育成するため、ブラインドサッカー加藤健吾様を招聘し実施した。

④「赤ちゃん・幼児触れ合い体験」を通して自他のいのちを大切にできる生徒を育成した。授業を通して、命の大切さを感じ取り、子どもが育つ環境としての家庭の役割や赤ちゃん・幼児とのかかわり方を学ぶとともに、自己を振り返り成長に繋げようとする態度を養うことがねらいである。近隣のみちの子保育園、たんぽぽ保育園にご協力いただいた。

【園児との触れ合いの様子】

⑤避難所運営訓練で、生徒たちはボランティアとして参加し地域の方々とともに避難所の設営や運営方法を学んだ。避難者の受け入れや情報提供、生活支援の方法等の災害時の対応力を高めた。さらに、生徒が講師となって、ＡＥＤを活用した心肺蘇生法を地域の方に講習した。

【生徒による心肺蘇生法の講習】

５　成果と課題（○成果　●課題）

○本研究を推進することで、いのちを大切にし、未来の創り手として夢と希望を持ち続ける力を育成できたと考える。

○キャリア教育にかかわる実践を通して、「実際に体験することで、自分たちができることを知ることができた」と感想を述べており、体験を通じて地域社会に貢献できる生徒の育成ができたと考える。

●本校のキャリア教育についてご賛同いただけても、具体的な企業との連携・実施が難しい場合が考えられる。

６　おわりに

学校・家庭・地域今後は、本校の実践を通して、生徒がいのちを大切にし、夢と希望を持ち続ける力を育むための具体的なアプローチをさらに探究していく必要がある。

一枚ポートフォリオ評価に基づいたキャリアパスポートの活用

～学校スローガンＡ：あいさつができ　Ｇ：時間を守り　Ｏ：思いやりがもてるよき社会人となるために～

上尾市立瓦葺中学校
校長　加　藤　俊　一

１　はじめに

本校は、生徒数315名、12学級、教職員数25名の小規模な学校である。自然環境に恵まれ、開校48年目を迎え、学校教育目標の具現化を図るため、目指す学校像を「よき社会人になるための基礎を築く学校」、学校キーワードを「感謝があふれる学校」とし、生き生きとした学校、学力が身に付く学校、マナーが身に付く学校、和やかで温かな学校を目指している。

今年度の学校スローガンを「ＡＧＯの心」（あげおのこころ）とし、Ａ：自ら挨拶、Ｇ：時間厳守、Ｏ：思いやりの心を育み、一人一人の「理想とする学校生活」を実現させるための教育を実践している。

２　研究題目の設定理由

一枚ポートフォリオ評価の考え方に基づいて作成されたワークシートを活用し、１年間を通して、１枚のワークシートに毎月の振り返りを記入することや１年の初めと終わりに同じ問いに対しての自分の考えを記入させることで、１年間の成長や変容を教師が見取ることができ、生徒自身も実感することができるのではないか。また、学期ごとに保護者にワークシートを見てもらいコメントをもらうことで、生徒の自己肯定感を高めることができるのではないかと考えた。

３　研究仮説について

本校では、生徒の社会的・職業的自立に向けて必要な基盤である「基礎的・汎用的能力を育成するために、３年間を見通して発達段階に応じた取組を実施してきた。今年度は進路に関する取組をさらに深めるべく、実施時期や実施方法を再考し、「進路指導・キャリア教育」の充実に全教職員で一丸となって研究に取り組んでいる。

○本年度の主な取組

【第１学年】　進路探索を始めよう

１学期　キャリアパスポート、なぜ人は学ぶのか

２学期　自分を知る、職業について知る

３学期　職業を知る、働く人に学ぶ会、キャリアパスポート

【第２学年】　進路計画を立てよう

１学期　キャリアパスポート、働くことの目的を考える、社会体験チャレンジ

２学期　上級学校を知る、上級学校調べ

３学期　自分の個性を知る、進路計画検討のポイント確認、キャリアパスポート、三年生が語る会

【第３学年】　卒業後の進路選択をしよう

１学期　キャリアパスポート、将来の生き方を考える、進路講演会、上級学校説明会

２学期　進路計画の最終検討、自分に相応しい進路選択を考える

３学期　将来の生活への心構え、希望の実現に向けて、キャリアパスポート

４　具体的な取り組み

①一枚ポートフォリオ評価に基づいたキャリアパスポートを活用し、生徒の変容を見取る。また保護者のコメントにも細かく目を通す。

②キャリアパスポートを月１回実施することによる変化を検証する。

③学校スローガン実施の意識の向上や、それに対する達成率の自己評価を実施する。

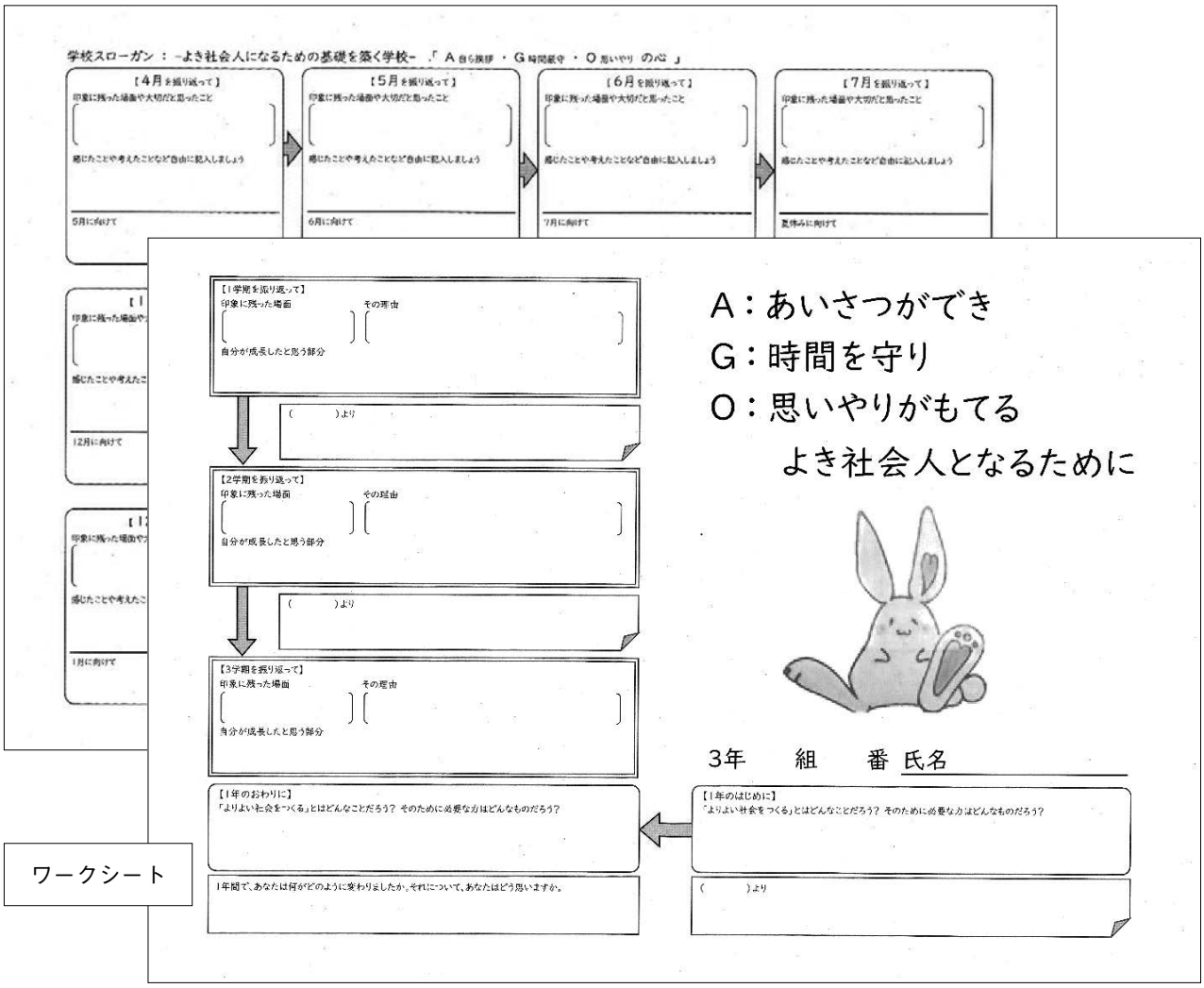
④本年度の研究を生かし、進路指導・キャリア教育の全体計画・年間指導計画・各教科における指導項目配列表等の質的向上を図り、より系統的な指導の実現を目指す。

⑤各教科における教育活動をキャリア教育の視点で見直し、指導内容の充実を図る。

⑥キャリアパスポートを実施することで、学校スローガンの達成率を検証する。

⑦１年のはじめには、「よりよい社会をつくる」とはどんなことか？そのために必要な力はどんなもの

か？を思考させて１年間が始まる。毎月の振り返りを通して自分自身が成長していく過程を実感させ、最終的に始めの問いにもどることで変容を客観的に確認させる。



ワークシート

５　成果と課題

・１年間を通して１枚のワークシートに記入することや１年の初めと終わりに同じ問いに対しての自分の考えを記入させることで、１年間の成長や変容を教師が見取ることができ、生徒自身も実感することができた。

・当初に「相手を思いやる力が必要」「相手を考えることが優しく平和なよりよい社会につながる」と記入していた生徒が、学校行事を通して「自分とは違うタイプの人にも自ら積極的に話そうと思えた。」という具体的な行動の変化があり、１枚のワークシート上で生徒自身が成長を実感していた。

・教師が定期的に生徒の感じていることなどを見取ることで生徒理解を深めることができ、個に応じた適切な支援につなげることができた。

・学期ごとに保護者にワークシートを見てもらいコメントをもらうことで、生徒の自己肯定感を高めることができた。

・「１年間を貫く本質的な問い」に関連させながら、毎月の振り返りを行うことで、全教育活動を通じてのキャリア教育の推進を教師も生徒も意識することができた。

・月ごとの振り返りは、学年通信でも取り上げ、同じ出来事に対しても様々な受け止め方、感じ方があることに気づかせ、多様な価値観があることを学ぶ機会となった。

【参考文献】

・堀哲夫（2019）「新訂一枚ポートフォリオ評価 OPPA 一枚用紙の可能性」東洋館出版社

・埼玉県中学校進路指導研究会編「学級活動を核とした中学校キャリア教育」実業之日本社

保護者と地域と連携を図り、生徒一人一人が地域の一員として自覚・意識を高め、より良い進路選択を実現することができるキャリア教育の実践

川越市立霞ケ関東中学校
校長　亀　森　智　子

１　はじめに

本校は、霞ケ関地区の人口増加を受け、昭和52年に開校し、今年度で創立48年を迎える。

現在は、生徒318名、11学級（特別支援学級２クラスを含む）と川越市内22の中学校の中では、中規模の学校である。

本校では、保護者や地域の方々の支援をいただき、「チーム霞東中」を合言葉に、生徒と教職員が一体となって様々な教育活動に取り組んでいる。

２　主題設定の理由

生徒一人一人が生きる力を身に付け、地域の一員としての自覚や意識を高め、地域に愛着を持った生徒を育成するためには、学校は、保護者や地域と連携した教育活動を展開することが重要であると考え、本主題を設定した。

３　研究の目的

情報化、グローバル化、少子高齢化など変化の激しい社会をたくましく生き抜く生徒を育成するために、地域の方を講師に招いた教育活動を展開し、生徒一人一人に「地域・社会の一員」としての意識を高める。

地域の人材や外部講師を活用し、「本物から学ぶこと」「体験すること」を通して、社会人としての自立のための進路選択、進路実現をより身近に考え、実現する生徒を育成する。

地域の人材や外部講師を活用した教育活動を展開することを通して、学校・家庭・地域がより連携を深めた教育活動を進める。

４　具体的な取組

（１）「地域ふれあい体験」の実施（第１学年）

○日時：令和６年10月３日（木）５・６校時

○目的：未来を担う子どもたちに、地域の方々とのふれあいを通して「生きる力」を育成する。地域に開かれた特色ある学校づくりを推進する。

○講座：浴衣の着付け、華道、マレットゴルフ、ミニ草履づくり、フォークダンス、よさこい、茶道の７講座

（ミニ草履づくり）

（華道）

（２）「社会体験事業」の実施（第１学年）

○日時：令和７年２月３日（月）～５日（水）

○目的：様々な職業について調べることや職場の方とのふれあいをとおして、将来に対する関心を高めるとともに、社会性や豊かな心を育む。

○内容：市内約30か所の施設、事業所等に協力をいただき、３日間の職場体験を行う。

（３）総合的な学習の時間での取組（全学年）

①「職業調べ」（第１学年）（８時間扱い）

○日時：令和６年11月19日（木）～12月12日（木）に実施

○目的：様々な職業について調べることや職場の方とのふれあいをとおして、将来に対する関心を高めるとともに、社会性や豊かな心を育む。

○内容：私たちが働く理由について考える。
：職業調べ、ガイダンス
：職業調べ、レポート作成
：職業調べ、報告会

②「上級学校調べ」（第２学年）（５時間扱い）

○日時：令和６年９月12日（木）～10月12日（土）に実施

○目的：進路決定に向けて、多くの高等学校等について知ることで、進路選択の一助とする。

○内容：高等学校等について調べる。
：調べたことを新聞にまとめる。
：学校公開日に発表する。

③「高校出前授業」（第３学年）

○日時：令和６年９月28日（木）５・６校時

○目的：県内公立・私立高等学校から５名の先生方を招き、高等学校の授業の体験や学校紹介を通して、進路選択の一助とする。

○内容：５校時は、生徒を５グループに分け、各高校の先生による授業を受講する。
６校時は、各学校の学校紹介を体育館で聞く。

（４）「保育実習」（第３学年）

○日時：令和６年12月３日（火）、16日（月）、17日（火）

○目的：幼児と直接ふれあう体験をとおして、幼児の心身の発達と生活の特徴について具体的に学ぶ。

○内容：学区内の幼稚園に行き、担当クラスに分かれて、自己紹介、ふれあい遊び等を行う。

（５）ソーシャルスキルトレーニングの定期的な実践

○日時：全学年毎月１回、合計10回行う。

○目的：生徒自身が、人との関係を築き上げるることや良好な関係を維持するための社会的なスキルを身に付けさせる。
生徒の不適応状態の解消及び諸問題を未然に防止するとともに、学級経営の一助とし、積極的（予防的）な生徒指導・教育相談を推進し、心豊かな生徒を育成する。

○内容：朝読書の時間または帰りの会の時間の10分間で行う。

１回	あいさつ	６回	仲間の入り方
２回	上手な聴き方	７回	あたたかい言葉かけ
３回	きっかけ言葉を上手に使おう	８回	やさしい頼み方
４回	質問	９回	上手な断り方
５回	仲間の誘い方	10回	自分を大切にする

（仲間の入り方）

（振り返りシート記入）

５　成果と課題

３年間を通して、系統的に「様々な人とのつながり」を体験していくことで、生徒は、地域の一員としての意識を高めることができた。また、「本物から学ぶ」、「体験すること」により、学ぶことの楽しさを味わうことができたとともに、生徒自身の進路選択の一助とすることができた。

引き続き、新たな人材の確保や予算の確保、さらなる地域や保護者との連携を深めていく必要がある。

６　まとめ

生徒は、授業でお世話になった地域の方や外部講師の方などに対し、新たな学びやこれからの自らの進路やキャリアについて、振り返りやお礼の手紙に記していた。

今後も保護者、地域と連携を図った教育活動を展開していくことで、地域の一員として自覚・意識を高め、より良い進路選択を実現することができる生徒を育成していく。

地域との連携によるキャリア教育
～伝統文化の学びを通して、課題発見、課題解決能力を育み、自己の生き方を考えていくことのできる生徒の育成～

東秩父村立東秩父中学校
校長　田　端　隆　二

１　はじめに

本校は、歴史と伝統のある和紙の里、東秩父村において昭和50年に旧大河原中学校の東中学校と旧槻川中学校の西中学校の統合により開校し、50年目を迎える県内唯一の村立中学校である。校庭は槻川に面し、四方を山に囲まれた豊かな水と緑に恵まれた環境で全校35名の生徒が学んでいる。

学校教育目標は

「明日を拓く活力ある生徒の育成」

一　心を育み（徳）　一　知性を磨き（知）

一　運動に親しむ（体）

目指す学校像を「村の宝（子ども）が輝く学校」とし、日々の教育活動を行っている。

前村長から「村の将来を担う子どもたちは村の宝である」と学校教育に力を注ぎ、学校に対する地域の関心は高く、学校教育に対する理解のある村である。本校も平成25年度から特色ある教育活動の一環として、総合的な学習の時間に郷土の伝統芸能や伝統産業の振興に力を入れている方々を指導者として招き、体験的な学習を行い、その充実を図ってきた。そして、文化祭においてその成果発表を行い、地域との交流も深めてきた。

近年は生徒数の減少により、その活動規模は縮小せざるを得ない状況となったが、時間数にゆとりが生まれ、探求的な活動により時間を割くことができるようになった。

そこで、本校では地域の伝統文化を学ぶことをきっかけに、「生徒たちに郷土の良さを再発見・再確認させ、愛着を持たせることで地域をよりよくするための課題発見、課題解決に取り組ませたい」、と同時に「伝統文化を守ってきた指導者の想いに触れることで、自己の生き方を考えさせる機会としたい」と考え、本研究に取り組むことにした。

２　生徒の実態について

本校は、３学年11名、２学年19名、１学年５名合計35名と極めて生徒数が少ない小規模校である。小学校も村内に１校で、生徒はほぼ全員そこから入学してくるので、９年間クラス替えがない。保育園も一つのため、村内の児童生徒は、幼少より約12年間共に過ごすことになる。

全国学テや県学調等の各教科の正答率の平均は、母数が少ないため、個人の結果に大きく左右されるが、３学年は県平均を大きく上回り、２学年は大きく下回る。

一方、質問紙やＱＵテスト等の結果によると、「自分の良さや能力、個性を理解しているか」の問いに対し、特に２学年は約半数が否定的な回答をしており、その多くは自分の将来の夢や職業、生き方などについては積極的に考えてはおらず、両者に相関関係が認められる。

しかし、どちらの学年も地域の歴史や自然に対する関心は県平均を大きく上回っている。

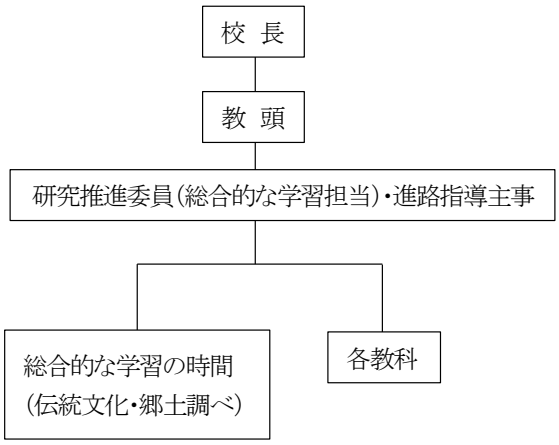
３　研究仮説について

本研究では、総合的な学習の時間の取組を通し、以下のような研究仮説を設定して実践に取り組んだ。

☆研究仮説１
村の伝統文化を学ぶことから、よりよい村への課題を発見し、課題解決を考えさせることで、探求見方・考え方を働かせる機会になるのではないか。

☆研究仮説２
伝統文化を守ってきた講師の人たちの技能や考え方、生き方に触れることで、自分のよりよい生き方について考える機会になるのではないか。

４　研究組織について



５　具体的な取組

（１）　総合的な学習の時間（伝統文化に触れる）

本校は「伝統文化の学び」を特色ある教育活動の一つと位置づけ、10年ほど前から地域から指導者を招き、体験活動を行ってきた。その流れとしては、初めにオリエンテーションとして地域の歴史や文化について有識者による講演会を行い、その後はいくつかのコースに分かれて活動を行い、文化祭において成果発表会を行った。また、１学年は古くからこの地域に伝わる竹縄（たかなわ）づくりを体験した。以下詳細を記す。

①　講演会（伝統文化に学ぶ）

講師として元本校校長の新井克彦氏を招き、「東秩父村の歴史」についてご講演いただいた。　その中で郷土の歴史を学ぶ意義、郷土の誇り、古来より伝統を絶やすことなく受け継いできた古人の想い、未来へ引き継いでいく自分たちの使命等について語っていただき、自分の生き方を考えさせる一場面とする。

②　選択コース

オリエンテーションの後、生徒は３つのコースに分かれそれぞれ制作活動や技能の習得活動に取り組んだ。各コースとその内容は次のとおりである。

○和紙コース

「和紙の里」工房にて、所属の職人の方々から手ほどきを受け、紙漉きの基本的な技術の習得を行う。また、漉いた和紙を思い思いに染めたものを用いて団扇などの和紙工芸品を制作し、成果発表会で披露する。

○版画コース

日本版画協会会長の高野勉氏を指導者として版画作成を行っている。作品については成果発表会で披露するとともに、版画協会主催の版画展へ出品し、優秀な成績を収めている。

○和太鼓コース

村内にはいくつか地域ごとのお囃子があり、そのうちの一つの大内沢太鼓保存会の方々を指導者として演奏技術の習得を行っている。成果発表会では「大内沢囃子」と「秩父音頭」を披露するほか、地域の「和紙の里文化フェスティバル」において協力し、演奏している。

○１学年による竹縄（たかなわ）づくり

本村の萩平地区には「竹縄（たかなわ）」と呼ばれる縄をつくる技術が保存会により受け継がれている。竹縄とは、竹をへいで（薄くはいで）より合わせてつくる日本の自然素材では最高の強度を持つ。かつて日本各地で使われていたが、その製作技術が残っているのは国内ではこの地域だけである。本校は１学年でこの竹縄づくり体験を行っている。

（２）　総合的な学習の時間（郷土調べ）：課題発見

それぞれが伝統文化を学んだ後は、それぞれ学年、班ごとに「村の魅力再発見」をテーマにマップ作りを行った。生物や産業などテーマを選ぶところから生徒たちに好ましい交流が見られた。学年によって実地調査を行うなど、情報収集の方法からまとめ方まで、それぞれの特色がでていた。魅力の再発見を今後の村の課題発見のきっかけとすることができた。

（３）　中学生議会：課題解決

本村は、以前から３年の社会科（公民）の授業の一環として中学生議会を行っている。中学生が村の議場へ出向き、役場の各課長が同席するなかで、代表生徒が議長となり、村長に対し村に関する質問を行う。本年度はまだ未実施であるが、本研究の地域を知ることから地域の課題発見、課題解決を通して自己の生き方を考えるという流れから、この事業をひとつの集大成としたい。

６　成果と課題　（○成果　●課題）

○郷土を題材に自分の課題を見つけさせる指導を行うことで課題解決に向けた当事者意識が高まった。

○理想を追求する指導者の方々の生き方に触れることで、自分の生き方を考える機会とすることができた。

●地域人材資源の開拓と小学校や行政との連携の強化

看護のスペシャリストの育成
～５年一貫看護師養成専門高校におけるキャリア形成の推進の取組～

埼玉県立常盤高等学校
校長　鴨志田　新　一

１　はじめに

埼玉県立常盤高等学校（以下「本校」）は埼玉県唯一の看護科を設置した５年一貫看護師養成専門高校である。看護科の３年間を終えた後、２年間の看護専攻科の課程を修了すると、看護師国家試験の受験資格を得ることができる。普通科高校を卒業後、専門学校や大学を経るよりも最短で資格を得ることができる。また、近年の本校の国家試験の合格率は、ほぼ100％であり、全国平均を大きく上回っている。

修了後は、埼玉県内の病院等に就職をする。およそ８割程度は病院実習でお世話になった病院である。近年では、進学する生徒も増え、大学３年生への編入や助産師、保健師の養成学校にも進んでいる。

しかしながら、本校の教育は、国家試験合格を目標としているわけではない。

本校では、以前に文部科学省より、スーパー・プロフェッショナル・ハイスクールの指定を受けたことを機に、プロジェクト学習や課題解決学習などの探究活動に積極的に取り組み、臨地判断能力やコミュニケーション能力等の育成に力を入れている。

２　研究主題設定理由

５年一貫教育の特性を活かし、５年間の系統的なキャリア教育を行っている。看護師として、一人一人の生徒が、自己の在り方、生き方に根ざし、幅広い視野を持って、将来を見据えた進路選択や人間形成ができるよう、進路指導の充実と改善を図るために、研究主題を設定した。

３　研究仮説

５年間の系統的なキャリア教育を通して、看護師国家試験の合格率100％と希望する病院への就職、希望する進学先への進学が実現できるであろう。

また、全ての生徒が、自己の在り方や生き方を考え、主体性や協調性を身に付けた社会人基礎力を身に付けることができるであろうと仮説を立てた。

４　研究内容（具体的な取組）

（１）看護科３年間のキャリア教育

看護科では、他校と異なり、上級学校への進学準備がない特性を生かし、各学年の指導目標の下、取組を行っている

（ア）看護科１年生

・指導目標：コミュニケーション基礎力を高め、基礎学力の充実を図る

・主な取組：実力テスト（年２回）、進路ガイダンス、進路講話（外部講師）進路意識調査、修了生からのメッセージ

（イ）看護科２年生

・指導目標：一般教科、看護教科の知識の充実を図り、目的意識を持続できる

・主な取組：実力テスト（年２回、看護を含む）、進路ガイダンス、進路講話（外部講師）進路意識調査、修了生からのメッセージ、日本薬科大学との連携、プロジェクト学習

（ウ）看護科３年生

・指導目標：看護観を深め、看護職としてのキャリアプランを考え、情報収集できる

・主な取組：実力テスト（年３回、看護を含む）、進路ガイダンス、進路講話（外部講師）進路意識調査、修了生からのメッセージ、日本薬科大学、女子栄養大学との連携、プロジェクト学習

看護科の３年間は、普通教科の学習が約２／３、看護科の学習が約１／３を占めている。高校での３年間は、基礎学力の定着とともに、看護の基礎的・基本的な内容である「基礎看護」を始めとして、「人体と看護」、「成人看護」など様々な科目を学ぶ。

１年生では「病院見学実習」、２年生では「高齢者施設・障害児施設実習」、３年生では３週間の「病院実習」を２クール行う。

ＩＣＴを活用した授業なども積極的に取り入れ、看護の科目では、電子教科書を取り入れている。また、

話し合いやグループ学習を通して、「主体的・対話的で深い学び」の実現を図っている。

このことは、「病院実習」の際に行われるカンファレンスの練習にもなる。

探究的な学びの一例としては、「プロジェクト学習」が挙げられる。１年生は個人で、2, 3年生はグループで、一つのテーマを決め、仮説を立て、実験等を行い、エビデンスに基づいて結論などを得るものである。発表会では、グループを学年縦割りにし、すべての学年の発表を見て、意見を述べる。今年度は、１年生が「災害が起きたときに安全を考えて帰宅する方法を提案します」、２年生が「私たちが確かめたエビデンスに基づいた看護技術を提案します」、３年生が「がん治療の生活における困りごとを最小限にする方法を提案します」をテーマに研究と発表が行われた。

このような取組から、プレゼンテーション能力の向上を始め、思考力、判断力、表現力等が育成されるものと考える。

（2）看護専攻科２年間のキャリア教育

（ア）看護専攻科１年

・指導目標：進路希望先の情報収集をし、自らの方向性を定めることができる

・主な取組：進路希望調査（年３回）、県立病院就職説明会、実習病院就職説明会、ピアエディケーション、進路講話（外部講師）、進路ガイダンス（年４回）、面接指導、修了生からのメッセージ

（イ）看護専攻科２年

・指導目標：希望する進路先に向けて、主体的に活動ができ、社会人基礎力を身に付ける

・主な取組：進路ガイダンス、就職試験指導、進学希望者指導、看護研究、進路講話（外部講師）、国家試験合格対策

看護専攻科では、看護科で学んだ内容を基礎として、一般教養を高める基礎分野科目、専門分野科目の学習を通して、看護実践・技術を習得し、高度化する医療に対応できる判断力や応用力、コミュニケーション能力などを身に付けていく。また、本校の教員の授業だけではなく、医師や大学の教員などの約90名の多彩な特別講師を迎え、教育を行っている。

２年間で２週間の「病院実習」を領域ごとに９クール行う。そのため、専攻科は高校と比べ、授業時間や実習時間が多い。

探究的な学びの一例としては、看護専攻科２年生で行う「看護研究発表会」が挙げられる。生徒が病院実習で受け持った患者さんについて、どのような支援や援助が有効かなど、仮説を立て、実際に患者さんに支援や援助をすることにより、どのような結果が出たか考察するものでる。「看護研究集録」という冊子に一人４ページで執筆する。「看護研究発表会」では、４グループに分かれ、専攻科生徒に発表や意見交換などを行う。

実際の患者さんを対象とした研究であり、実践的な看護能力の向上に直結するものと考える。

５　成果と課題（○成果　●課題）

○ここ数年、看護師国家試験の合格率はほぼ100％である。また、進路決定率もほぼ100％である。５年一貫教育の使命を十分に果たしているといえる。

○将来の予測が困難な時代において、必要とされる主体性、リーダーシップ、創造力、課題発見・解決力、チームワーク、論理的思考力、コミュニケーション能力などの資質、能力は、本校の「主体的・対話的で深い学び」の実践により、実現できている。社会に有為な人財を送り出しているといえる。

●５年間の学びを通して、看護師としてのキャリアを形成する過程で、看護科３年間を終え、看護専攻科に進級する際に、今後の自己の在り方や生き方など、一層丁寧に見詰め直す必要がある。５年一貫教育の弱点で在る「専１ショック」による進路変更を防ぐことができる。

●今後も引き続き、看護師としての知識や技能はもちろんのこと、思いやりの心や豊かな人間性を兼ね備えた看護師としての心を一層、育成していくことが求められている。

６　おわりに

世界中で猛威を奮った新型コロナウイルス感染症の拡大は、私たちの生活や活動に大きな影響を与えた。人々の命や安心・安全を守るために、さらなる医療体制の充実と高度な知識・技術を兼ね備え、豊かな人間性を持つ医療従事者の育成の必要性が高まっている。15歳の看護の道を志した生徒たちに「看護は人なり心なり」をしっかりと身に付けさせ、今後も地域や社会に貢献できる有為な人財を育成してまいりたい。

リアルな体験を重視した進路指導の実践
～「朝定仕事発見プログラム」の事前調査と実施計画～

埼玉県立朝霞高等学校（定時制）
校長　久　住　　毅
教諭　小　幡　佳太郎

１　はじめに

本稿では、朝霞高校定時制における「朝定仕事発見プログラム」の実践について述べる。「朝定仕事発見プログラム」は、短期集中型の工場見学プログラムである。令和６年度の助成事業の一環として行い、令和７年３月に実施予定である。

２　研究主題設定理由

朝霞高校定時制（以下、本校）は、朝霞市にある４年制の夜間定時制高校である。全校生徒は88名（令和６年５月１日時点）で、１学年１クラス編成となっている。卒業後の進路については、表１にまとめたとおり、就職と進学が同程度となっている。進路指導部では、進学指導と就職指導の双方に力を注いでいる。

表１　卒業生の進学・就職状況（単位：名）

	新規就職	専門学校	４年制大学	その他	計
３年度	5	0	0	2	7
４年度	5	2	2	2	11
５年度	5	2	4	3	14

本校ではこの数年間、進路指導の充実や体系化に力を入れてきた。「朝霞就職 EXPO」（学内合同企業説明会）や「朝定インターンシップ」は、就職分野における特徴的な取組である。「朝霞就職 EXPO」は就職活動の入り口として、「朝定インターンシップ」は就職を見据えた就業体験として機能している。一方で、この中間にあたる取組が不足していることが課題であった。つまり、複数の職業についてより深く知り、比較検討する機会が不足しているのである。また、卒業後、就職してから短期間の間に離職してしまう生徒が一定数存在している。特に４年生になってから職場見学に参加し、短期間で就職先を決めた生徒ほどその傾向は顕著である。

以上をふまえ、高校４年間のうちの早い段階から、生徒の進路に対する意識を向上させ、仕事についてより実践的に学ぶ機会を設ける必要があると考えた。

３　研究仮説

本研究における仮説は、「短期集中的な複数企業への訪問が、生徒の進路意識を向上させる」である。

企業への訪問は、職業について深く知るという観点から設定した。実際に企業で働く様子や工場内部を見学することは、学校に企業を招く以上の学習効果があると考えられる。「短期集中的な複数企業」という条件については、複数の職業の比較を意識したものである。短期集中的に実施することで、生徒がそれぞれの職業を比較検討しながら、自身の今後について考えることができる。また、生徒の進路に対する意識向上の重要性については、すでに述べた通りである。

本研究では、この短期集中的な企業への訪問計画を、「朝定仕事発見プログラム」として始動させた。実施については、３月17日（月）から19日（水）までの３日間である。年間行事予定の調整等が難航し、上記日程となった。対象は、２学年25名である。訪問企業の負担を軽減するため生徒数を限定しつつ、かつ早期の職業意識形成の重要性をふまえて決定した。訪問企業は、製造業を中心に多様な分野を予定している。製造業を中心としたのは、サービス業等と異なり生徒が普段接することが少ない点や、見学に際しての受け入れ態勢等を考慮したものである。

本稿では以下、生徒への事前調査と、訪問予定企業での下見状況について報告する。

４　研究内容（具体的な取組）

（１）生徒への事前調査

プログラム内容の検討に際して、生徒に対する事前アンケートを実施し、２学年の生徒19名から回答を得た。調査項目は、①進路の決定度、②進路意識の高さ、③関心のある分野の３点である。それぞれの項目に対して、表２に示した質問項目を尋ねた。

表２　質問項目

調査項目	質問項目
①	あなたが将来なりたい職業は、どの程度決まっていますか
②	自分の将来の仕事について、どのぐらいの頻度で考えますか
③	見学してみたい工場はどの分野ですか

①に対して「明確に決まっている」「ある程度決まっている」と回答したのは、57.9％であった。このことから約半数の生徒が、進路を一定程度決めていることがわかった。

②に対して「たまに（月に数回程度）考える」という回答が52.6％で多数を占めた、次いで「時々（週に数回程度）考える」という回答が31.6％を占め、多くの生徒が進路について定期的に考えていることが明らかとなった。

③の質問は複数回答可とした。最も回答が集まったのは「食品工場」で、９名が希望していた。次いで「ロボット工場」が７名、「電子機器工場」「化学工場」が６名、であった。全体の傾向としては、生徒に比較的身近な分野が指示される傾向が多く、「鉄鋼」や「エネルギー関連」などの希望者は少数であった。

（２）見学予定企業との打合せ

上記アンケートの結果をふまえ、近隣にある試作品製造業の企業Ａ社へ、工場見学を打診した。企業からは快く引き受けていただき、11月中旬に事前打合せを行った。

当該企業に依頼したのは、①本校近隣に工場があること、②生徒が普段接することのない分野であること、③すでにある程度の信頼関係を築いていること、の３点が主な理由である。

特に②は重要で、あえて生徒が希望していない分野、イメージしにくい分野を選ぶことで、生徒の視野を広げ、進路意識の向上につながると考えている。加えて、本校から約４キロの距離にあり、駅からのアクセスも良い。また、本校卒業生も就職しており、一定程度の関係性も構築されている。生徒が進路学習で工場を訪問するということは、本校において初めての取組であり、依頼するにあたり適切であると考えた。

11月下旬に当該企業を訪問し、事前の打合せを行った。打合せには、筆者と企業の担当者や責任者が参加し、見学プランや当日の流れについて協議を行った。「単なる見学にとどまらず、より体験的で、生徒の学びになる取組にしたい」という本校からの要望に対して、加工の仕上げで作業である「バリ取り」作業の体験活動をご提案いただいた。最終的に決定したプログラムは、表３に示した通りである。２時間半から３時間程度のプログラムを予定している。

打合せ終了後は、Ａ社の工場を見学させていただいた。Ａ社では、金属や樹脂などの素材を、多様な加工法を用いて、試作品の製造を行っている。工場内では、さまざまな大型機械が稼働しており、その製造過程には大変強い興味を惹かれた。目の前で形を変えていく素材と、機械を操作する真剣な表情の従業員の方々が印象的であった。今回の工場見学は生徒にも刺激的な体験になる、という確信を得ることができた。

表３　Ａ社見学プログラム（予定）

Ａグループ	Ｂグループ
企業の概要説明	
バリ取り体験	工場見学
工場見学	バリ取り体験

（３）謝礼の扱いと今後の計画

弘済会埼玉支部からいただいた助成金は、企業への謝礼としての支払いを予定していた。Ａ社からは、「ぜひ生徒の交通費に充ててほしい」という貴重な申し出をいただいている。経済的に困窮している生徒も多い本校においては、非常にありがたい申し出である。そのため、Ａ社の見学に際しては、助成金を生徒交通費に支出する予定である。

今後は、Ａ社と同様に工場見学を引き受けていただける企業を、引き続き検討し、訪問を依頼する予定である。特に生徒の関心の高い分野である食品工場への訪問は実現したい。

５　おわりに

本来であればこの場で、「朝定仕事発見プログラム」の成果について検討したいところであるが、プログラムの実施時期の都合上断念した。その成果の検討については、別の機会としたい。

本研究の実践は、弘済会埼玉支部様をはじめ、本校職員、訪問を予定している企業のみなさまのご協力があってはじめて成り立つものである。ご支援いただいているみなさまに、この場を借りて感謝申し上げたい。

「カフェ実習」を主軸とした「通級指導（キャリアサポート）」
～コミュニケーションスキル向上を目指して～

埼玉県立鳩山高等学校
校長　田　中　達　哉

１　はじめに

本校は埼玉県教育委員会から研究モデル４校のうちの１校として指定され、平成30年度・31年度の２年間、通級の研究に取り組んできた。本校は従来より「生徒一人一人を大切にする教育」を実践しており、加えてこの研究成果を生かし、令和２年度入学生から卒業認定の単位外として「自立活動（キャリアサポート）」を教育課程表に位置づけ、単位認定も含めた「通級」を実施している。現在、本校は高校再編成の対象校として、令和８年度より越生高校と再編整備・統合、新校として出発することが決まっている。在校生は２年生普通科54名・情報管理科24名、３年生普通科39名・情報管理科36名、総計153名である。

２　本校にける「通級」の概要と目的

小中での「通級」とは違い、「通級」を希望する生徒は通常の学級に在籍し、教育課程に定められた授業を受けながら、放課後の時間帯において、障害や特性に応じた個別の支援を受けている。対象生徒は、社会的自立やコミュニケーションスキルの向上を目指し、「カフェ実習」を主軸とした体験活動を行う。さまざまな場面、予期しない場面を通して、「自己理解」「他者理解」を深め、それぞれの特性や障害、学習上や生活上の困難を改善したり、克服したりすることが目的である。

３　校内での位置づけ（「特別支援教育」等の体制）

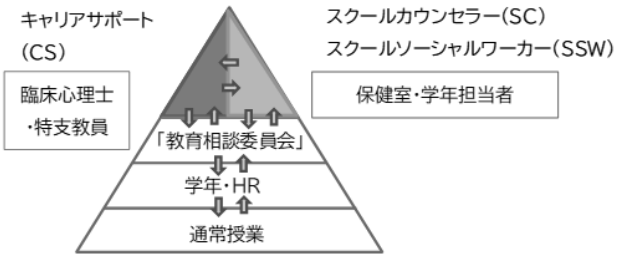
本校では、令和２年度から、特別支援教育校内委員会の機能を拡充して、「教育相談委員会」を設け、９名を担当者とした。本年度の内訳は、教頭・各学年から２名ずつ（４名）・教務（１名）・養護教諭（１名）・コーディネーター（１名）・生徒指導（１名）の計７名である。各学年の担当はキャリアサポートの運営に関わり、教育相談委員会は月１～２回程度実施している。キャリアサポートはコミュニケーションスキルを高める場であり、安心感が持てる居場所として機能している。

【段階的な指導】

まずは、「通常授業での全生徒への指導の工夫」を通して、生徒たちの底上げを図っていくことを大前提とする。

① 通常授業での全生徒への指導の工夫（タイマー・レーザーポインター、情報の整理・提示の工夫、ユニバーサルデザインなど）
② 学年・ＨＲで支援
③ 教育相談委員会で情報集約
④ キャリアサポート（CS）・スクールカウンセラー（SC）・スクールソーシャルワーカー（SSW）等で対応

<イメージ図>



【教育相談委員会】

情報共有は学年団を中心として随時行っている。また通常授業や HR などで生じた生徒の困り感や課題等について情報収集を行い、情報共有シートに入力を依頼し、年度を超えた継続的な指導が行えるようにしている。また、必要な生徒に必要な支援を行えるよう、支援の窓口を振り分けている。また CS や養護教諭、SSW や臨床心理士などによる巡回支援として授業時の生徒観察を行い、フィードバックするなど有機的な働きかけを担っている。

４　「通級」の教育課程表上の位置付け

令和２年度以降、「教育課程表」に卒業認定の枠外として「自立活動（キャリアサポート）」を設けた。単位認定の対象者は、令和２年度以降の入学生とし、単位数は、２年間（２～３年履修）で１単位とする。

（備考）「通級」を希望する生徒への特別な措置（入

学者選抜や高校卒業のための補充認定等）は行っていない。

５「通級（キャリアサポート）」の実施形態

（１）原則として、本校在籍の２・３年生のみを対象として自校で行う。定員は最大６名。

（２）授業は放課後の授業のない時間帯（金曜日７限目）に設定し、月２回程度、１日につき１単位時間分（50分）を実施し、２年間で合計35回である。

（３） 学習指導計画等について

①「個別の教育支援計画」（プラン A）「個別の指導計画」（プラン B）は４月中に担任と協力して作成し、６月の三者面談時に保護者に提示した。

②通知票は、学期ごとにキャリアサポート担当者が作成し担任から配布している。

③学習指導計画は年度当初にキャリアサポート担当者が作成する。指導案を作成し、補助に入る教員や専門家がねらいを共有し授業が活性化するように図った。

６　本年度の通級指導の実際

指導は、本校教諭（特別支援コーディネーター）を中心に通級指導専門員（臨床心理士）及び特別支援学校教諭の支援を受けながら実施している。本年度は教育相談委員の先生をはじめ多くの先生方に授業への参加協力をお願いした。

本年度は２年生男子女子各１名、３年生男子１名の３名でスタートした。生徒同士もキャリアサポート担当者もそれぞれが初対面であり、まず、教室の雰囲気作りから始めた。１学期、初回はパワーポイントでキャリアサポートの意味や目的を確認し、「ゲーム」を利用して安心できる居場所であることを確認した。２回目は自己紹介カードを記入し、担当者と面談して自分について語ることを課題とした。また同時並行でドリップパックのコーヒーを相互に淹れ合い、メンバー同士で名前を呼んで質問し合うことに挑戦した。補助の教員はスムーズな会話となるよう働きかけ、和やかな時間を共有した。「カフェ」をコミュニケーションのツールとし、「お互いを否定しないこと」、「自分もみんなも笑顔になる『カフェ鳩六堂』を運営すること」が目標である。

順次、個別ワークやグループワーク、カフェ実習に向けた知識や技術の習得などを行い、回数を重ねるにつれ、他者に助けを求められない・常に緊張と不安を持つ・周囲の状況把握が困難などの困り感を持つ生徒たちの表情も少しずつほぐれていき、互いを気遣う様子もみられるようになった。

２学期となり、11月の「カフェ実習」（本校職員限定公開授業）に先生方を客として招く準備として「笑顔になる」店の仕様のアイディアを出し合い、手動ミルの豆曳き練習や淹れ方の違いによる飲み比べなどの練習をした。言語化して協働で作業をするうちに、実習成功への期待も高まった。

模擬実習や本番でのカフェ実習では、準備・接客・片付けなど、互いの動きを見ながら必要な補助を生徒自ら考えて行うことができ、「自分もみんなも笑顔」になれた点で大いに成功したといえる。本人たちの感想も「楽しかった」「またやりたい」など、前向きなものであった。

３学期は「ラテアート」に挑戦するなどカフェ実習を主軸としながら、体のコントロール、呼吸法、会話の技術、場面に応じた自己紹介「伝えたい自分と他者から見た自分」などの内容を予定している。

７　成果と課題

通級指導の成果は、互いに互いを尊重し合い、関係性を築きながら学ぶことができた点にある。限定公開の実習後、生徒の「表情が明るくなった」「質問できるようになった」など、変化を指摘する声も寄せられた。通常授業でも困ったときに固まらず、助けを求められるようになってきている。

また、通常教室への巡回支援による生徒の困り感の発見と声がけや支援も順調であった。本校の指導体制が上記の図のように明示されていることによって、有機的に運用されたと考えられる。通級指導での合理的な配慮への意識がユニバーサルデザインの考え方をもとに浸透し安定的で継続的な支援につながった。

課題は、専門家からのアドバイスの活かし方が、担任等の個人にゆだねられるケースが多く、問題解決への姿勢の涵養が更に求められる。（２月に「生徒理解と声がけ」に関する研修会予定あり）

自分の表現方法を知る
～現代美術画家によるワークショップを通して～

埼玉県立越谷西特別支援学校松伏分校
校長　相　澤　靖　子

１　はじめに

本校は、令和３年４月に障害のある生徒とない生徒がともに学ぶ機会の拡大を期待され、知的障害特別支援学校高等部普通科として松伏高校内に設置された。埼玉県全域を学区としており、１学年16名（１学年２学級）で、知的障害があり自力通学が可能な方を対象としている。令和６年度入学許可候補は、1.81倍で地域からの理解を得ている。

分校教育目標『自ら学び、考え、行動し、「なりたい自分を創る。」』を掲げ、キャリア教育の視点からも自分の将来の姿を見据え、自分の表現方法を知り、自分らしく表現をすること、自分が価値ある存在として自信を持てることにつながる実践を進めている。

２　ワークショップの取組について

本校では、開校時から美術の時間に芸術家によるワークショップの実践を計画している。人とやり取りをしながら、自分らしい表現が周囲に認められ、自信をもって表現する力を養っていきたいと考えている。

そのような経験を早期から大切にしたいという思いから、このワークショップは１年時に実施している。

３　ワークショップ対象学年の実態

１学年は、男子13名、女子３名の計16名（令和６年５月１日現在）である。実態は、自閉的傾向がありこだわりが強い生徒や、衝動性や不注意の傾向が見られる生徒もいるが、自分の気持ちや考えを伝え、日常会話ができ、座学で落ち着いて授業に参加できる。美術においては、形の把握が苦手である、手先の不器用さから制作の不得意感がある、絵を描くことが得意で積極的に取り組める等、様々な実態である。

４　ワークショップの内容について

講師は、現代美術画家の内海聖史氏に依頼している。描画するモチーフや使用する画材、道具類をそれぞれ袋に入れ、見えない状態でランダムに配付する。

すべて指定を受けた条件や物で制作する絵画は、制限のある中で描く「不自由な絵画」である。その不自由さの中で判断し描くこと、与えられたことを駆使することは、本当に不自由なのか？ということがテーマである。

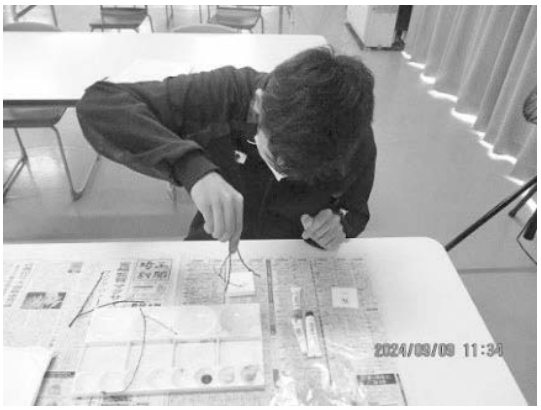
詳細は、次のとおりである。

① 絵画モチーフの指示
描くものが文字で書かれているカードが入っている。　　例：猫、犬、人、自分、雨　等

② 画材の指定
２、３色の絵の具が入っている。

③ 描く道具の指定
通常描く道具ではない品が入っている。
例：枝、菓子、おもちゃ、ヘアブラシ　等

④ 描画
５×５㎝のキャンバスに①～③を条件にして絵を描く。



⑤ 展示場所の指示
全員が制作終了後に提示し、カードに書かれた場所にそれぞれが展示する。

例：自分が思う「良い所」に展示してください。

⑥　内容の確認と講評

一人一人に描画の内容を問い、講評する。

例：「何というモチーフ」を「何という画材」で描き、「どこに展示」したか。

⑦　内海氏の作品鑑賞

生徒が鑑賞し、質疑応答を行う。

５　授業の様子と経過

生徒は、配付された絵画モチーフや画材類を手にすると、驚きの声を上げながらも、自分に与えられたものでどのように描こうかと、考える様子が見られた。５×５㎝のキャンバスに描いた後には、新たに絵画モチーフカードを２枚受け取り、描く画面を大きくして８つ切り用紙に描いた。この場合もそれぞれが指定された言葉に想像力を膨らませて、描く様子が見られた。日頃は取り組むまでに時間がかかる生徒も、モチーフが決まっていることでイメージが湧きやすかったことが予想される。また、通常描く道具ではない品を描く道具として使うことにも、それぞれが工夫しながら取り組むことができた。

全員の制作が終了したところで、展示場所のカードが配付されると、その意味を考えながら場所を見て回り、展示場所を決めてキャンバスを貼り付けていった。「一番高いと思う所」の指示では、値段が一番高いと思った暖房機に貼ったり、「一番悪いと思う所」では、警備機器に貼ったりと、大人では思いつかないような解釈をする生徒もいた。

講評の場面では、内海氏が一つ一つの作品について、モチーフや画材、展示場所について生徒から話を聞き、講評をした。生徒たちは、自分の考えを述べ、友達の話も熱心に聞いている様子が見られた。日頃は自信が持ちにくく発表が苦手な生徒も内海氏と会話するうちに自分の作品に対して自信を持ち、自分の意見を述べる時には誇らしい表情に変化する様子が見られた。

内海氏の作品鑑賞では、別室に何枚もの大きなキャンバスを設置した。本物の現代美術作品に触れる機会は貴重である。生徒は作品の迫力に驚き、熱心に見ていた。生徒が作品について自分から質問する様子が多く見られた。

以下は、生徒の感想である。

- 「痛み」という題で絵を描きました。不自由な中うまく描けたなと思いました。
- 黄色が無い中「光」を描きました。枝はいろいろな長さ、太さがあって筆とは違った描き方ができました。
- 筆が便利ってことがわかった。新たな描き方がわかった。
- 作品を見せる時に、みんなが「お～」と言っていたのが嬉しかった。
- 色が制限されると絵が変わって面白かった。
- （道具）不便でも益があると感じた。
- 自分の価値観て大事だなって思いました。
- 普段あまりめちゃめちゃほめられることがないので、とても嬉しかったです。

６　まとめ

生徒の活動の様子から、生徒は「不自由」を感じることなく、どの場面も生き生きと取り組めた。与えられた制限があるからこそ想像力を膨らませ、自由な発想で描くことができたのではないか。

将来、社会生活を送る中で、それぞれの状況により、制限と感じることもあるかもしれない。しかし、その捉え方については、本人の考え方や取り組み方次第であることを今回の実践から生徒に感じ取ってほしい。表現したことが周囲に認められ、自分らしく表現することの良さに気付く、自分が価値ある存在として何事にも自信を持つことにつながるのではないかと考える。

5　防災教育支援

小学校

1　児童が主体的に取り組む防災教育・安全教育の推進

～危機管理意識を高める教育活動を通して～……鴻巣市立鴻巣南小学校… 144

2　防災の意識を高める防災教育

～自らの命を守り抜くための「主体的に行動できる態度」の育成～……川越市立牛子小学校… 146

3　地域・保護者・中学校と一体化した防災教育……鶴ヶ島市立南小学校… 148

4　防災関係機関と連携した防災教育

～自助・共助・公助の指導を通して～……入間市立金子小学校… 150

5　万が一に備え、災害から生き抜く力を育む防災教育

～命の大切さを考え、地域との連携を深める～……羽生市立村君小学校… 152

6　主体的に行動し、自分の命を自分で守る児童の育成

～実践的な避難訓練及び地域との防災訓練の連携を通して～……吉川市立中曽根小学校… 154

中学校

1　生徒自らが命と安全を守るための意識を高める実践的な安全教育の推進……狭山市立堀兼中学校… 156

2　学校・家庭・地域が連携した防災教育の実践……白岡市立南中学校… 158

児童が主体的に取り組む防災教育・安全教育の推進
～危機管理意識を高める教育活動を通して～

鴻巣市立鴻巣南小学校
校長　森　　奈緒子

１　はじめに

本校は、昭和26年４月に開校して以来、地域に支えられ、地域に愛され、地域とともに歩んできた学校である。学区には、長い歴史と伝統をもつ人形のまち鴻巣の「人形町」がある。

学習規律を含む「規律ある態度」の育成を基盤とし、確かな学力や豊かな心をはぐくむ教育活動は本校の大きな特色である。今年度も「規律正しく、活力にあふれ、子どもの笑顔が輝く南校」を目指し、『南校チャレンジ７』①規律ある態度の育成、②ぬくもりのある学級づくり、③質の高い授業づくり、④道徳教育の推進、⑤自主的・実践的な態度を育てる特別活動の推進、⑥進んで体を動かして鍛える運動習慣の定着、⑦命を守る防災教育の推進、を重点として取り組んでいる。

２　研究題目の設定理由

令和６年１月に発生した石川県能登半島地震、８月に発生した宮崎県日向灘沖地震などにより、巨大地震への備えが迫られている。また、児童生徒の交通事故発生数が減少傾向にはないことから、学校現場においても防災教育・安全教育の推進が喫緊の課題となっている。これらのことから、児童の発達段階においては、自助のみならず、共助・公助を意識した行動が求められてくる。そこで、本校では、防災教育・安全教育をより一層充実させ、児童に様々な災害・事故に対して主体的に取り組むことができる資質・能力を育成したいと考え、本研究題目を設定した。

３　具体的な取組

（１）従来の避難訓練の見直しと効果的な訓練の実施

①　巨大地震を想定した避難訓練（引き渡し訓練）

②　緊急地震速報を活用したシェイクアウト訓練

③　不審者侵入を想定した避難訓練

（２）外部機関と連携した安全教室の実施

①　交通安全教室（鴻巣警察署・鴻巣市役所・交通指導員等との連携）

ア　１年生：安全な歩行

イ　４年生：安全な自転車乗り

②　防災体験（埼玉県防災学習センターとの連携）

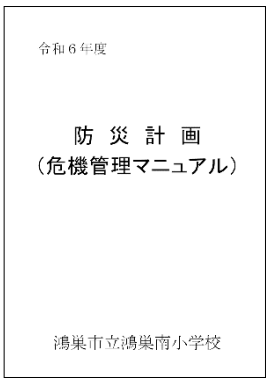
ア　４年生校外学習において実施

（３）教職員研修

①　心肺蘇生法研修会

②　不審者対応研修会

③　危機管理マニュアルの見直しと共有


令和６年度

防　災　計　画
（危機管理マニュアル）

鴻巣市立鴻巣南小学校

（４）校内環境整備

①　安全点検（管理職による毎日の日常点検と、毎月10日の定期点検）

②　転倒防止器具の設置

③　校内掲示の工夫

４　成果と課題

（１）成果

安心・安全な学校づくりを推進するために、教職員が共通理解・共通行動を図ることを徹底するとともに、常に最悪を想定しながら対応することを心掛けることで、教職員の危機管理意識を高めることができた。その教職員の姿勢が防災教育・安全教育のより一層の充実につながり、児童の主体性を高めることができた。

（２）課題

災害・事故対応については、児童に「自分ごと」として捉えさせることが重要である。「自分ごと」としてより捉えることができるよう、指導を工夫するとともに、地域や関係機関等と連携を強めていく。

防災の意識を高める防災教育
～自らの命を守り抜くための「主体的に行動できる態度」の育成～

川越市立牛子小学校
校長　笠　井　洋　佳

１　はじめに

本校は、新河岸川と九十川に挟まれたところに位置しており、地域は江戸時代には牛子河岸が近くにあることから舟運で栄えた。昭和52年に開校し、今年度で48年目を迎える。児童数417名（学級数15クラス）の小規模校である。学校教育目標「強く、正しく、美しく」のもと、「誰もが安心する牛子小学校」を目指して教育活動に取り組んでいる。

２　主題設定の理由

新河岸川と九十川の二つの河川に挟まれた地形にあることから、昔から水害に悩まされてきた地域である。市が作成したハザードマップによると本校は最大浸水4.7メートルが予想されている。そのため、体育館は３階にあり、避難所がいつでも開設できるようになっている。近年では令和元年10月の台風19号により学校１階が浸水し、学校周辺も広範囲に渡り浸水したことから、本校に避難所が開設された。本年度も幸い被害はなかったが、夏に避難所を開設した。

このようなことから、牛子地域は、水害等の防災意識は高く、子供たちにも同様の意識を育ててほしいという地域の願いは強い。そこで本校もグランドデザインの中に「地域と共にある学校の推進」を掲げ、その重点項目として地域合同防災訓練の実施を掲げている。

３　具体的な取組

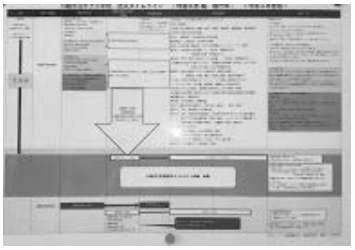
（１）年間指導計画の見直し

教育課程の中に防災に関することを入れていくことを進めている。例えば、本校周辺には水害を想定した盛り土をして建てた家を散見できるので、５年社会の「輪中」の学習で、このことを伝えるなど、授業の中に身近な防災知識を入れた授業に取り組んでいる。

授業と生活を結び付けることで、よりリアルな学習となり、防災に対する意識を育むものと考える。

（２）災害タイムラインの策定

市防災研修会の内容等を基に、防災タイムライン水害編、地震編を策定している。これにより、災害に見舞われた時、優先順位を考えた対応がしやすくなっている。また、毎年、本校の避難所運営班（川越市職員）と打合せを行い、非常時に備えており、学校としては心強いと考えている。



（３）避難訓練の実施の工夫

・第１回避難訓練（地震・火災想定）

地震が発生し、教室で避難行動をとり、そのまま教室に待機するという訓練を実施した。

また、同時に引き渡し訓練を行い、教室で保護者に引渡しを行った。川越市では慶応義塾大学　大木聖子教授のご指導により、教室で待機する避難形式を進めており、本校もそれに則り実施した。

・第２回避難訓練（地震）

今回は地震が発生し、教室で待機させたが、子供たちの心理的な動揺が大きいことから、校庭に避難することを選択したという訓練を実施した。

地震発生後、管理職が避難経路の安全を確認し、それを全校に放送してから、急がず、安全を第一に校庭へ避難した。

本校では東日本大震災の時、校舎の連結部分に亀裂が入ったという記録があることから、管理職による避難経路の確認が必要と考え、敢えてその時間を設けてから校庭への避難開始を指示した。

（４）ハザードマップを活用した授業の実施

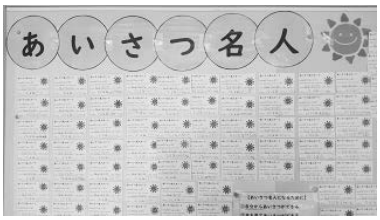
小学４年生で川越市のハザードマップを使い、本校地域の災害危険度、最大浸水予想などを確認し、牛子地域の災害想定を学んだ。また、実際の災害時にどのような行動を取ることが求められるか、より具体的に考えさせた。

地域がウニクス（川越市南古谷地区）やイオンタウ

ン（ふじみ野市）などの商業施設と連携協定を結び、水害予想時に自家用車の避難が可能なことを学ぶなど、将来活用する可能性のある情報についても学んだ。

（５）あいさつ運動の励行

顔の見える付き合いは、防災にもつながると考える。そのため、本年度はあいさつがしっかりできる児童を重点目標にし、地域や保護者にもあらゆる機会をとおして「大人があいさつの手本を見せる」ことをお願いしている。また、生徒指導部が中心となり、「あいさつ名人カード」を渡す取組を開始し、全児童があいさつ名人になることを目指している。



（６）家庭・地域と連携した防災教育

・<u>地域合同避難訓練の実施</u>

９月３日（月）、震度５強の地震が発生したことを想定して、地域の方々も本校の校庭へ避難するという訓練を実施した。

そして児童とともに校長講話を聴いたあと、避難所開設の場所となる校舎３階の体育館に移動した。

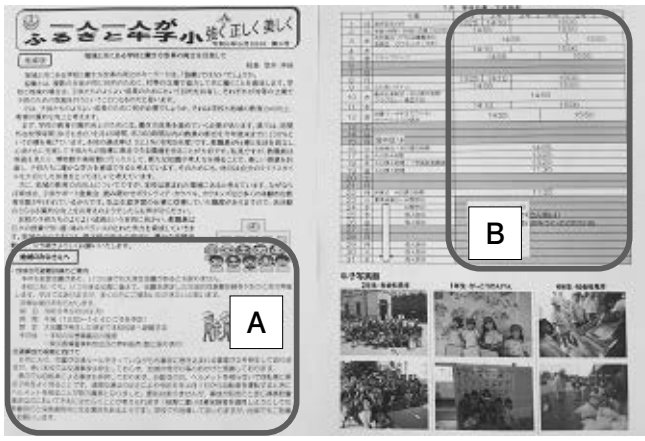
・避難所開設用に設置したエアコンの確認
・避難所運営のための備蓄倉庫の確認
・備蓄資材や食料の確認

以上のことを行い、「もしもの時に何がどこにあるかわかった」「トイレが足りない」「非常用飲料水が想定以上に少ない」などの意見をいただいた。

・<u>学校だより地域版の発行</u>

地震時の対応、水害時の対応、交通事故発生状況をお知らせしたり、夏季の水難事故の防止、自転車乗車時のヘルメット着用の呼びかけをしたりするなど、子供の命に係わる情報発信をしている（写真Ａ部分）。

また、毎日の下校時刻を掲載し、下校時の見守り活動に役立てるように工夫している（写真Ｂ部分）。



・<u>災害救助用備蓄食料の各家庭への配布</u>

家族で備蓄食を試食しながら、防災について話し合う機会として欲しいと考え、全家庭に「乾パン」を配布した。これは県が防災基地等に備蓄している食料の更新に伴い配布する取組に応募したものである。

併せて、各家庭で最低でも３日、出来れば１週間分程度の食料、飲料水等の備蓄を呼びかけた。

４　成果と課題

○毎回工夫を凝らした避難訓練を実施したり、救助用備蓄食料を配布したりして、防災意識がさらに高まり、児童が主体的に考える態度が育ってきた。

○避難訓練はもちろん授業、挨拶など学校教育全体をとおして防災教育を進めていくことの大切さを教職員が理解し、取り組むことができた。

○コロナ禍で実施できていなかった地域合同避難訓練を実施し、防災面での地域連携を進めることができた。

△防災に関して、さらに授業と生活を結び付けることをとおして生活に根差した防災教育に努めていく。

△児童、保護者、地域の方が交流の中で、防災について共に学ぶ機会を作っていく。

５　おわりに

子供たちを観察していると、防災意識の高さが見えることがある。例えば、授業中に地域の訓練のための防災無線が流れたときに子供がとっさに反応したり、避難訓練も地震発生の放送が流れた瞬間に机の下に身を隠したりするなど、行動が早くなった。これは、何度となく水害などの被害に遭っているという地域性の影響と、本校で日頃から取り組む防災教育と、地域と学校が両輪となっていることが大きいと考えている。

学校は何が起きようとも子供の命を守りぬく使命があり、「行ってきます」と家を出た子供を「ただいま」と家に帰すという、学校が家庭に対する最低限の約束がある。これを確実に実現し続けるには、危機に対する準備を継続的に行い、幾度となく見直し、あらゆる危機に強い学校を作らなければならない。

そのためにも、本校教職員が一丸となって取り組むとともに、家庭・地域と一体となって防災教育に努めていく。それに取り組む大人の姿をみせることが、子供が防災意識をさらに高め、主体的に行動できる態度につながると確信している。

地域・保護者・中学校と一体化した防災教育

鶴ヶ島市立南小学校
校長　小　川　潤　也

１　はじめに

本校は、昭和60年旧鶴ヶ島町に開校し、地域の変遷とともに40年の歴史を歩んでいる。人数は年々減少傾向にあるが、今年度は特別支援学級含め16学級、363人の児童が学んでいる。

学校教育目標は「きらきらと瞳輝く南の子」であり、目指す児童像を「考える子　認め合う子　たくましい子」とし、日々の教育活動にあたっている。

今年度、隣接する南中学校ともに40周年を迎え、PTA が主体となって40周年記念事業を執り行ったところである。本校の特色として、保護者や地域の方々から多大なるご協力をいただきながら、隣接し合う小中学校が支え合いながら教育活動ができるという点がある。そこで今年度は「地域・保護者・中学校と一体化した防災教育」をテーマとして、地域を包括した防災教育の取組を行っていくこととした。

２　児童の実態について

本校の児童は、明るく素直で毎日のびのびと学習や遊び、学校行事等に取り組んでいる。毎年数回の避難訓練を実施しており、緊急地震速報が聞こえたら大人が何も言わなくてもすぐに机の下にもぐったり、姿勢を低くして身の安全を守ったりすることができる。しかしながら、実際に大きな災害を経験したことはないので、いざという時、自分の頭で考えて行動できるかは定かではない。また、小学校と中学校が協力して避難するような大きな動きには慣れていないと思われる。

３　取組のねらい

大きな災害が起きた際は、学校が単独で動くのではなく、同じ校区で同じ動きになることが想定される。そのため、より一層家庭の協力を得ながら、中学校とも連携し、地域が一体となって児童生徒に使える生きた知識を身に付けさせる必要がある。災害時に危険を回避したり、軽減したりする実践力を身に付けさせ、地域の中で自分の役割を果たせる児童を育成したい。自助・共助の精神を育成することを目的とし、本テーマを設定した。

４　防災教育における目指す児童像

〇自らの命を守り抜くために主体的に行動する児童

・災害に関する知識理解が向上する。
・避難行動の知識理解が向上する。
・２分以内で避難終了ができる。
・中学生の兄弟間によるスムーズな引き取りができる。
・休み時間の避難の仕方について理解し、避難行動を行うことができる。

５　防災教育における目指す学校像

〇地域・保護者・中学校との強い連携体制（小中一貫体制）

・消防署との連携による体験活動が充実する。
・保護者への緊急連絡体制の強化が図れる。

６　具体的な取組

４月…不審者対応避難訓練
６月…地震からの火災対応避難訓練
※小中合同避難訓練を中学校と時間を合わせて行う。
※引き取り訓練を計画し、兄弟の中学生、保護者へ安全に引き渡す。
９月…地震対応避難訓練

※休み時間に訓練を計画し、主体的に動ける児童を育成する。

１月…火災対応避難訓練

※坂戸・鶴ヶ島消防署と連携し、職員の通報訓練のほか、消火器体験、煙中通過体験をする。

７　それぞれの取組の様子

（１）不審者対応避難訓練（４月）

保健室に不審者が侵入したという想定で、訓練を行った。それぞれの教室で、不審者に入ってこられないようにするとともに、気配を悟られないように物音を立てず、じっと我慢する児童の姿が見られた。

（２）地震対応避難訓練（６月）

震度５弱の大地震が起き、道路の寸断やインフラの破壊のために保護者に直接引き渡すという想定で訓練を行った。保護者が迎えに来られないケースも想定し、小学校に弟妹がいる中学生が引き取り者になれるようにした。事前に中学校と綿密な打ち合わせを行い、災害時の役割分担や引き取り者の確認等、スムーズな引き渡しができるようにした。

【地震後、火災が発生した想定で非難する様子】

【中学生が小学生の弟妹を引き取る様子】

【中学生が小学生の妹と合流し、保護者と一緒に帰る様子】

（３）地震対応避難訓練（９月）

児童には避難訓練の日時を周知しない状態で休み時間に緊急地震速報を流し、それぞれの場所で身の安全を確保する訓練を行った。教室で過ごしている児童、廊下を移動している児童、校庭で遊んでいる児童と様々な場所で、教員からの一斉指示ではなく、自らの判断で安全を確保させた。その後校庭に避難し振り返らせることで、より安全な行動はどんな行動か考えさせるきっかけになった。

（４）火災対応避難訓練（１月）

給湯室から火災が発生した想定での訓練を１月に行う予定である。消防署の方にも避難の様子を見ていただき、フィードバックをいただくことで、よりよい避難について考えさせたい。また、消火器体験、煙中通過体験を通して、災害時のイメージをよりリアルにもてるようにしていきたい。

８　成果と課題

・小中合同の避難訓練、引き渡し訓練を通して、避難訓練の意義や引き渡し方等について、児童生徒、保護者だけでなく教職員の理解も深めることができた。

・児童は今まで以上に自分の判断で自分の安全を守れるようになった。

・今後は中学生の力を借りるだけでなく、児童の防災意識をさらに高め、地域での役割を自分なりに果たせる実践力を育んでいきたい。

防災関係機関と連携した防災教育
～自助・共助・公助の指導を通して～

入間市立金子小学校
校長　川　口　文　子

１　はじめに

令和６年１月１日、能登半島沖でマグニチュード7.6の内陸地殻内地震が発生した。最大震度は７を観測し甚大な被害が発生した。学校においては「自分の身は自分で守る」実践力を児童生徒に身に付けさせることが重要である。地震・大雨・火事等の災害発生時に適切に避難できる心構えと準備を常にしておく必要がある。また、不審者対応等の防犯教育の実施、さらに、地域住民や公共機関と連携して災害・防犯対応にあたる人材を育成することは公教育の使命であると考える。

本校では、警察署、消防署と連携した避難訓練に加えて、令和４年度から、地域の消防団と連携した避難訓練も行っている。

２　研究主題設定理由

災害、犯罪被害の発生において、地域の住民や公共施設、消防団や消防署、警察署などの関係機関との連携を図り、教職員や児童生徒の防災意識を高め、防災・防犯に対する実践力を養う。

３　研究仮説

地域の住民や公共施設、消防団や消防署、警察署と連携を図ることで、教職員や児童生徒の防災・防犯意識が一層高まるであろう。

４　研究内容（具体的な取組）

（１）年間４回の避難訓練と保護者引き渡し訓練の実施

○第１回避難訓練　令和６年５月17日（金）

地震と火災に関する避難訓練を全校児童、教職員で行う。

○保護者引き渡し訓練　令和６年５月18日（土）

大地震を想定し、土曜公開授業後に児童の引き渡し訓練を実施する。緊急時引き渡しマニュアルを活用し、児童を保護者に速やかに引き渡す。

○第２回避難訓練　令和６年９月６日（金）

不審者の侵入関する避難訓練を実施する。

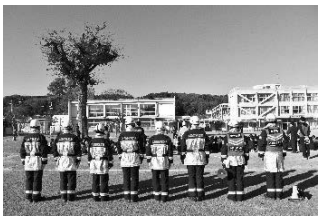
（警察官による職員・児童向け指導を実施）

○第３回避難訓練　令和６年12月10日（火）

地震と火災に関する避難訓練を全校児童、教職員で行う。避難の様子を消防士が見て評価する。その後、消火活動に関する説明を聞き、消火訓練を実施する。

○第４回避難訓練　令和７年１月18日（土）

地震と火災に関する避難訓練を全校児童、教職員で行う。避難の様子を地元の消防団が見て評価する。その後、消防団による放水訓練の演習を見学する。消防団員は地域住民であり、金子小中学校児童生徒の保護者でもある。学校公開日に訓練の様子を地域住民・保護者に公開する。



（２）月１回の安全点検日の設定と確実な実施

毎月１日を安全点検日とする。教職員が自身の担当する施設、設備を点検し、管理職に報告する。

日常の安全点検を行い、安心安全な教育環境を維持する。

（３）学校運営協議会において「児童生徒及び地域住民の安全確保についての実態と具体策」をテーマに地域の防災・防犯について熟議

金子小学校、金子中学校の取り組みを報告し、地域の代表、公共施設の代表と防災・防犯について協議する。

情報交換・協議の内容は以下の通り

［小学校の取り組み］

※上記（１）（２）の取り組み

［中学校の取り組み］

・毎学期避難訓練、社会教育課のマイタイムラインによる避難行動
・防災の初期動作シェイクアウトの導入
・暑さ指数を３か所で測定、熱中症警戒アラートをもとに運動制限
・平日の日中に地域で災害等が起こった際に動けるのは中学生であるという共通理解のもと、生徒にボランティア意識や災害に備えた心構えを育てている。

［地区センターより］

・放課後、小中学生がよくセンターを訪れる。気になる行動は声をかけている。それも「見守り」の１つになっていると思われる。

［保育所より］

・避難訓練を月１回実施している。
・水害の避難場所が、橋を渡った地区センターなので幼児の足で避難するのは現実的ではない。
・女性の職場なので不審者対応も心配である。
・警察の指導で不審者対応訓練を行っている。

［地域住民］

・防犯カメラは有効である、設置できるとよい。
・霞川河岸でアライグマやフェレットが野生化している。対応が必要になることも予想される。

［全体を通して］

・地域で防災意識を高めることが必要である。
・災害時に中学生をボランティア活用する。
・避難訓練を、消火活動などを取り入れ、より実践的に行う。
・地域のボランティアの方の力がとても大きい。感謝の気持ちを表す機会があるとよい。

５　成果と課題（○成果　●課題）

○毎回、緊張感の高い実践的な訓練を実施することで、児童・生徒の防災意識が高まった。
○児童の保護者である消防団と連携することで、地域・家庭における防災意識も高まった。
○職員の避難誘導・点呼確認が、素早く確実にできるようになった。
○安全点検により、安全な環境が保たれ、必要な箇所の整理整頓、修繕ができた。
●学校、地域施設の職員が変わっていく中で連携を継続していくこと。
●今後、確実に起きうる大地震を見据え、学校の安全対応策を見直し、職員で共通理解り常に備えを怠らないこと。

６　おわりに

災害に対する、意識・知識・技能、情報収集力等で消防団・消防署・警察、地域の施設それぞれの強みを十分に発揮した協働防災の取り組みであった。特に地域に密着している消防団との連携は防災教育だけでなく、学校運営においても非常に有効であった。協働の取り組みを保護者に理解してもらい、地域全体の防災意識が高まった。

万が一に備え、災害から生き抜く力を育む防災教育
～命の大切さを考え、地域との連携を深める～

羽生市立村君小学校
校長　今　成　　健

１　はじめに

本校は利根川のすぐ南に位置し、田畑や森に囲まれた自然豊かな環境の地域にある。明治６年に開校し、今年度で151周年を迎えた歴史と伝統のある学校である。今年度は学級数５（単式学級２、複式学級２、特別支援学級１）、47名の明るく素直な子どもたちが楽しく学んでいる。

学校教育目標は「知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな子どもの育成『進んで学ぶ子』『心豊かな子』『明るくたくましい子』」であり、目指す学校像を「笑顔いっぱい　夢いっぱい　楽しい学び舎　村君小」とし、日々の教育活動に11名の教職員で取り組んでいる。

本校は羽生市教育委員会より「羽生市立学校小規模特認校」として指定され、希望者は市内全域から通学することができる。そのため、自然豊かな教育環境を生かし、利根川でのボート体験や田植え・稲刈り、校内でのみかん狩りなどの自然体験活動を充実させている。また、「英語村地域推進事業指定校」として、少人数をいかしたきめ細かな外国語・外国語活動を展開している。

２　研究主題について

（１）主題設定の理由

防災教育とは「命を守る」ために、子どもたちが防災への知識を得て行動に移すことができるようにすることであると考える。そのため①災害発生の現状を学ぶこと②災害への備えを学ぶこと③災害発生時の対処の仕方を学ぶことが必要である。また、子どもたちが将来、地域の一員として災害時における危険を予測し備えを行うとともに、災害発生時には自他の命を守るための行動がとれるようにすることも重要であると考え、本主題を設定した。

（２）仮説

仮説１
　災害時に想定される危険を認識し、自らの安全を確保するための知識を深めることができれば、災害発生時に自ら対応することができるだろう。

仮説２
地域や学校、通学路に潜む危険が推測できれば、災害への備えをすることができるだろう。

３　研究の内容

発達段階に応じて、災害を自分事として捉え、仮説に迫れるよう、以下の取組を行う。

（１）避難訓練を通じた防災教育

本校では以下の避難訓練を計画した。

４月　避難訓練①　「火災」
　→火災発生時の避難の基本的な行動を理解し、安全な行動がとれるようにする。

６月　避難訓練②　「地震」
　→地震発生時の安全な避難方法を考え、安全な避難方法を考え話し合う。

９月　避難訓練③　「雷、竜巻などの自然災害」
　→竜巻発生に際して、自らの安全を確保するために必要な実践的な態度や能力を養う。

１月　避難訓練④　「不審者対応」
　→不審者が校内に侵入した際の行動や対応の仕方を理解する。

継続的に実施する避難訓練により、子どもたちは自らの命をどのように守るかを体得することができた。

【４月　火災を想定した避難訓練の様子】

【９月　竜巻を想定した避難訓練の様子】

（2）各教科における防災教育の実施

①４年総合「ぼうさいのまちづくり」

非常時の食事について調べ、実際に非常食を食べることで、災害が起きたときなどの非常時を疑似体験することができた。

②５年理科「流れる水の働き」

地域に流れている利根川の氾濫を予想し、避難場所や災害時の持ち出しについて学習した。児童は自分や家族の命をどう守るかを考えることができた。

③６年総合「東日本大震災を中心とした防災教育」

東日本大震災で甚大な被害を受けたいわき市を訪問し、被害の様子を知るとともに、体験者からの話を直接聞いてその思いに共感できた。また、海岸林再生のため、クロマツの植樹を行った。

【クロマツの植樹といわき震災伝承みらい館での見学】

（3）防災教育に関する職員研修

危機管理マニュアルについては、毎年度見直しを行い、本年度の児童の実態に即した内容にアップデートしている。また、消防署職員を招聘し、救急救命講習も全教職員が受講した。教職員の防災意識を高める一助となった。

【全教職員による救急救命講習】

（4）関係機関との連携

①防災学習センター見学

４・５年生が防災学習センターを見学し、防災についての知識と体験を通して災害に強い地域づくりを学ぶことができた。

【防災学習センターでの見学・体験】

②利根川の魅力を育む会による安全講座

河川に潜む危険を察知し、回避する方法を体験しながら学ぶことができた。

【河川に落ちたときの対処を学ぶ】

（5）家庭・地域との連携

①災害時の炊き出し練習

学校公開日に飯盒炊飯を行った。火のおこし方、炊事の仕方を親子で学ぶことができた。

【飯盒で米を炊く】

【レトルトカレーの配布】

②通学路点検の実施

年度初めに日頃登下校の見守りをしてくださる地域の方と児童との顔合わせを行った。顔合わせ後には通学路の安全点検を実施した。

【顔合わせと通学路点検】

③引渡訓練の実施

地震発生を想定した引渡訓練を実施した。

【引き渡しの様子】

４　成果と課題（○成果　●課題）

○体験をとおして知識と行動を学ぶことができ、災害を自分事として捉えることができた。

●防災教育の体系化と継続的な取組が必要である。

主体的に行動し、自分の命を自分で守る児童の育成
～実践的な避難訓練及び地域との防災訓練の連携を通して～

吉川市立中曽根小学校
校長　石　﨑　朋　史

１　はじめに

本校は、昭和56年に開校し、今年で44年目を迎える学校である。学校規模は、普通学級18、特別支援学級４の計22学級、児童数522名の中規模校である。

学校教育目標は、目指す児童像を「なかよく、かしこく、ねばりづよく」としており、地域との連携を深めながら、日々の教育活動にあたっている。

本市では、防災教育について、毎年市役所の職員を講師として各学校に派遣し、児童向けの演習を行う「減災学習」を実施している。児童が居住する地域の防災の取組や組織、避難場所などについて、地域の地図をもとにした「地域における実際の減災や避難の在り方」について学習を進めているところである。

２　児童の実態

全国学力調査、県学力調査の正答率において、全般的に国や県平均と同等のレベルを保ってはいるものの、特に読み取りの問題に関しては苦手意識が強く、正答率が下がっていたり無回答であったりしている傾向がみられる。また、記述式の解答形式においても、同様の苦手意識が見られ、正答率が低い傾向が見られる。

一方、体力に関しては、全学年の新体力テストにおける達成率は、家庭での継続した取組を推進していることもあり、非常に高いものとなっており、児童はみな、日々の運動に対する意識も高い。

全く学校に来ることができない不登校児童はそれほど多くないが、集団での生活に適応できない児童は、各学年に数名存在する状況である。ただし、どの児童も学校や外部組織等とのつながりをもつことはできており、登校することが多くなっている児童もいる。

防災に関しては、各種の避難訓練を定期的に実施していることにより、的確に避難行動をとることができる。ただし、与えられて行っている訓練がほとんどであるため、自分の居住する地域における防災や、日頃の自主的な防災意識についてはまだ低いと思われる。

３　研究の概要

これまで、学校内での避難訓練を計画立案し実施するだけでなく、地域との防災訓練あるいは中学校区内の小中学校での合同防災訓練などの実施、地域内における防災訓練への児童の積極的参加等が課題となってきていた。そこで本年度は、地域の自治会連合での「防災キャンプ」での車中泊体験実施に伴い、防災学習に地域の方にもご協力いただく計画を立案し、地域の防災への児童の意識を高めることを目的とした。

（１）避難訓練の立案・実施

これまで行ってきた避難訓練を継続して実施することで、避難行動に対する意識をより高めるようにする。

（２）減災学習の実施

例年実施している減災学習において、地域の方にも参加していただき、児童とともに避難場所や避難の方法などについて考えられるようにする。また、地域の防災に関する施設に触れるようにする。

（３）地域まちづくり協議会との連携

地域防災キャンプの実施に伴い、小学校の校庭において避難体験会を行うことで、児童の防災意識を高めるとともに、地域防災への積極的参加を促す。

４　具体的な取組

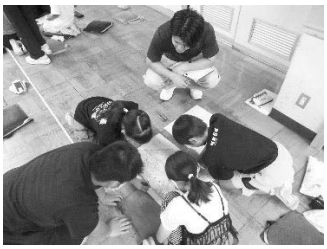
（１）校内での避難訓練の実施

校内での避難訓練は、通常下記のとおりの日程で行った（予定も含む）。

①校内放送で行うショート避難訓練　全５回
＜想定＞・水害・飛来物・地震・竜巻・火災

②全国一斉情報伝達試験と同時に行う訓練　全３回
＜想定＞・地震・火災
③緊急地震速報訓練と同時に行う訓練　全２回
　令和２年度よりこの形の取組を実施しているため、時間や日程を変更しての実施、予告なしでの実施に対しても児童は慣れていて、的確な行動がとれるようになっている。

（２）減災学習の実施
＜対象学年＞５学年
①校内での授業において（減災学習）
　総合的な学習の時間に災害について調べる活動を行い、減災学習として年間指導計画に位置付けている。今年度は、地域の方にも参観していただき、各自治会の地域での減災についてご意見をいただいたり質問をしたりすることができた。



②校外学習として（地域防災を知る）
　学習したことをもとに、地域での防災の実際を知るために、児童自身が居住する各地域の自治会の防災倉庫を見学する校外学習を行った。学校にも防災倉庫が存在するが、地域の防災倉庫については児童の関心が薄く、今回の見学で地域防災について児童があらためて考えるきっかけとすることができた。

③調べたことを広げる活動（発表会に向けたまとめ）
　学習したことを地域ごとにまとめ、それぞれの地域の防災についての知識の広がりをもたせる発表の場を設けた。保護者の参観時に実施したが、地域の方もお招きして見学して感じたことやわかったことなどを発表することができた。

（３）防災キャンプとの関連付け
　地域まちづくり協議会の方との連携を行い、学校内にも広く防災キャンプについて告知を行った。
①地域まちづくり協議会への参加

　中曽根小学校区の自治会長と市役所職員で構成される「地域まちづくり協議会」の会議に校長が参加している。会議の中で学校での減災学習に役立てることがある場合には協力をお願いしてきた。
②地域防災キャンプへの参加

　地域まちづくり協議会で実施する「地域防災キャンプ（車中泊体験）」に関して児童や保護者に周知を行い、積極的に参加することで地域防災への動機づけができるようにしてきた。当日は多くの親子連れの参加があり、児童だけでなく、保護者の防災や減災に関する意識の高まりを感じることができた。

５　今後の取組に向けて

　防災学習や地域の防災イベントへの参加や周知などを通して、児童の防災意識が高まっていると考えられるが、今後、学校評価等の具体的な数値や意見から客観的な成果を表し、次年度の計画に生かすことが大切である。また、懸案となっている小中合同避難訓練や防災訓練等の実現に向けても、中学校区内で検討していく必要がある。

生徒自らが命と安全を守るための意識を高める
実践的な安全教育の推進

狭山市立堀兼中学校
校長　和　田　雅　士

１　本校の概要

本校は開校78年目を迎える。昭和22年４月に開校し、平成元年９月に校舎改修工事が完成し、現在に至っている。

「生徒の知性、感性、品性、行動力を磨く学校づくり」を学校経営方針とし、良い校風、光輝ある伝統づくりに日々努めている。

伝統的な教育活動としては、青少年赤十字（ＪＲＣ）に全生徒が加盟しており、地区の清掃活動や募金活動等に積極的に取り組んでいる。

また、環境教育の一環として、花いっぱい運動や通学路のごみ拾い運動にも取り組んでいる。

２　研究の概要

（１）研究主題設定の理由

学校における安全教育は、生徒の命や安全確保を第一に考え、予想しうるすべての事態に対し、適切な措置ができる体制を確立する必要がある。

安全とは、心身や物品に危害をもたらす様々な危険や災害が防止され、万が一、事件や事故、災害等が発生した場合には、被害を最小限にするために適切に対処された状態のことであり、生徒が自らの安全を確保するためには、個人だけではなく社会全体として安全意識を高め、全ての人々が、安全な社会を築いていくために必要な取組を進めていかなければならない。

学校は生徒の「生きる力」を育む学校という場で、生徒等が生き生きと活動し、安全に学べるよう安全の確保が保障されることが不可欠である。

そこで、生徒に、学校教育活動全体を通じ、自らの安全を確保することのできる基礎的な資質・能力を継続的に育成し、自助・共助・公助の意識を備えた安全で安心な社会づくりに参加し貢献できるような資質・能力を育てることが学校教育の重要な目標の一つと考え、研究題目を設定した。

また、学校における防災計画は、生徒の命や安全確保を第一に考え、予想しうるすべての事態に対し、適切な措置ができる体制を確立する必要がある。また、防災計画の作成にあたっては、日常の学校安全管理、避難訓練の実施、計画的・継続的な防災教育の展開などについて、生徒や地域の実態に応じて作成するとともに、地域・関係機関と連携して作成する必要がある。

さらに、関係法規、通達、被害想定、ハザードマップ等に基づき再検討を加えることが大切である。

（２）研究の仮説

本校の学区は武蔵野の台地を江戸時代に開発された堀兼地区の農村地域と、新狭山地区の新興住宅地から成り、どちらの地区も風水害を受ける可能性は低い、

しかし近年の異常気象によるゲリラ豪雨や南海トラフ・東京直下型など大地震の発生確率が高まるなか、生徒の命と安全を守る取組や意識の醸成は急務である。

また、学区が広域にわたるため生徒の７割が自転車通学者であり、交通安全の意識を高める実践的な取組が必要となる。

そこで、以下のように仮説を立てた。

仮説：「生徒自らが命を守る」視点で実践的な安全教育を推進すれば、生徒の安全意識が高まる

３　研究の実践

（１）課題解決を図るための具体的方策について

①消防計画の形式を中規模用消防計画に合うよう見直しを図る。

②地震発生時の対応については、生徒自らが自立的に安全な行動ができる能力を身につけさせるよう避難訓練に位置づけ、消防計画中に避難計画を位置づける。

③避難訓練では火災、竜巻・ゲリラ豪雨、地震、不審者等色々な災害を想定し、緊張感を持って取り組めるように工夫する。また、火災においては、総合訓練となるように関係機関と連携して行う。

④本校は中学校区に２つ小学校が設置されておりその１つは隣接している。また、公民館も近くにあり、不審者への対応では中学生においても集団登下校や保護者の引き取りが必要な場合も想定されるので、小・中で連携した訓練や夏休み中に実施されている地域の防災訓練と連携するなど家庭や地域と一体化した防災計画にする必要がある。

⑤日常の安全管理では、毎月の安全点検を複数の目で行うなど見落としが無くなる工夫を取り入れる。

⑥地区の緊急避難場所として、緊急時の受け入れ態勢

を整備し、避難所としての活用と授業の早期再開の両面で学校の資産が有効に活用されるよう関係機関との調整を行い計画に位置づける。

（２）大地震発生時に対応した防災教育

平成23年３月11日に発生した東日本大震災は東北地方の太平洋側を中心に未曾有の被害をもたらした。本校の位置する埼玉県南西部には特に大きな被害はなかったものの、大地震の発生を予測することは困難である。

また、今年の８月には日向灘震源の地震を機に「南海トラフ地震臨時情報」が発令されるなど、大地震発生の確率は高まっている。そこで、まず、学校では、「生徒の命を守ること」と「安全確保」を第一に考え、予想されるすべての事態にそなえて、適切な対応がとれるよう体制づくりを確立しなければならない。

さらに、本校の学区は、前述したように、自然災害を受ける可能性は低い地域である。しかし、常に最悪の事態を想定して、安全学習と安全指導、学校としての安全管理に取り組まなくてはならない。

特に生徒については、以下①～⑤のような、

①「地震発生後、校庭が液状化現象になったら、どうするか。」実践的な防災教育の事例

②「避難所生活の中で自分に何ができるのだろうか。」地域と連携した安全学習の事例

③「避難所において何が必要とされ中学生として何ができるか。」防災リーダーを活用した事例

④「緊急地震速報を聞いたら、どうすればいいのだろうか。」体験を取り入れた学習の事例

⑤「避難所では、どのような共助ができるだろうか。」避難所体験による安全学習の事例

実践的な「危機管理・防災に関する教材」を学校安全年間計画の仲に位置づける。

（３）具体的な取組

①地震発生時の対応については、生徒自らが自立的に安全な行動ができる能力を身につけさせるよう避難訓練に位置づけ、消防計画中に避難計画を位置づける。

②避難訓練では火災、地震、不審者対応等色々な災害を想定し、緊張感を持って取り組めるように工夫する。また、火災においては、総合訓練となるように関係機関と連携して行う。

③日常の安全管理では、毎月の安全点検を複数の目で行うなど見落としが無くなる工夫を取り入れる。

④地区の緊急避難場所として、緊急時の受け入れ態勢を整備し、避難所としての活用と授業の早期再開の両面で学校の資産が有効に活用されるよう関係機関との調整を行い計画に位置づける。

⑤近年不審者による児童生徒が被害者となる事件・事故が多発している状況から、不審者に対する対応や事件・事故を未然に防ぐために不審者対応に特化した避難訓練を実施した。

＜不審者対応避難訓練のバリケード＞

（４）小中の連携協力の視点

災害発生時には、本校も地域の避難場所に指定されており、緊急時の鍵開けや、職員の招集、地域住民の受け入れ計画等、対応については隣接している小学校（新狭山小と堀兼小）との調整も必要である。そして、地域の緊急避難場所として緊急時の受け入れ体制を整備し避難所としての活用と授業の早期再開の両面で学校の施設や備品が活用されるよう関係機関との調整も計画に位置づける。

また、夏季休業中に行われた小中連携合同研修会で災害発生時における小学校（新狭山小と堀兼小）と合同での引き取り訓練を実施することとなり（令和７年２月実施予定）、安全教育の面で、更なる小中連携を深化させることができた。

４　期待される成果と課題

防災マニュアルの見直し作業をとおして、職員の地震等緊急時の学校としての対応が、再確認されるとともに、職員の危機管理に対する意識も高まっている。

また、地震発生時の小学校（新狭山小と堀兼小）との連携・協力についても、引き渡しカードの作成や、保護者等との緊急時の連絡方法などさまざまな課題を解決していかなければならない。

さらに、学校が避難所となった場合の小学校との連携について十分に協議を重ね、南海トラフや東京直下型地震等の発生の確率が高まっている現在、生徒の命を守るために、全力で防災教育の充実に努めていく。

学校・家庭・地域が連携した防災教育の実践

白岡市立南中学校
校長　大　山　美智子

１　はじめに

本校はJR白岡駅の南東約２㎞に位置し、地域一帯は東京方面に向かうサラリーマンのベットタウンとして、圏央道白岡菖蒲インターチェンジにも良好なアクセスが可能であることから、広域的な交通利便性に富んでいる。

本校は、白岡町内３番目の中学校として昭和57年４月１日に開校し、入学式では、新入生200名、生徒数合計544名でスタートでした。平成24年10月１日の市政施行に伴い、校名が白岡市立南中学校に変わり、今年で42年目となる。現在は生徒数合計343名である。

教育目標「よく考え　働く生徒」の実現に向けて、目指す学校像を「みんなでつくるみんなの南中学校」とし、主体的に考え行動できる生徒の育成に取り組んでいる。

２　研究の目的

本校は地震、洪水災害時の指定緊急避難場所になっており、指定避難所でもある。「自分で自分の身を守る」ことと「みんなで取り組む防災減災」の実現のために、中学生が助けられる側から助ける側になれるように自助、共助を念頭に置きながら防災教育を展開している。学校・家庭・地域が連携しながら、災害時の避難訓練や防災学習等の体験学習を通して気づき、考え、行動できる生徒の育成に取り組んでいる。

３　生徒の実態

令和６年度埼玉県学力・学習状況調査の生徒質問紙を分析すると、どの学年も「誰に対しても親切にするようにしている」「誰かが心を痛めていたり、落ち込んでいたり嫌な思いをしているときなど進んで助ける」「年下の子たちに対して優しくしている」「自分から進んで親・先生・友達のお手伝いをする」など公徳心が高く、自己肯定感が高い生徒である。

４　年間計画

４月	避難訓練（避難経路の確認）	全校
５月	小中合同引き渡し訓練	全校
６月	AED及び救急手当講習	２年保体
７月	福祉体験学習	１年総合
８月	避難訓練	全校
９月	地域防災活動の参加	希望者
	防災についての学習	１年総合
10月	防災についての学習成果発表	１年総合
11月	避難訓練（通報及び消火訓練）	全校
	不審者対応訓練（隔年）	全校
	職場体験学習	２年
３月	市職員による防災倉庫の説明	１年総合

５　具体的な取組

（１）教職員対象の救命講習会の実施

４月に全教職員が、いつでもエピペン注射が行えるように講習した。どこにエピペンがあるのか、エピペン持参の生徒バッグの目印を確認した。AED点検を定期的に実施しいつでも使える状況になっている。

（２）生徒対象の救命講習会の実施

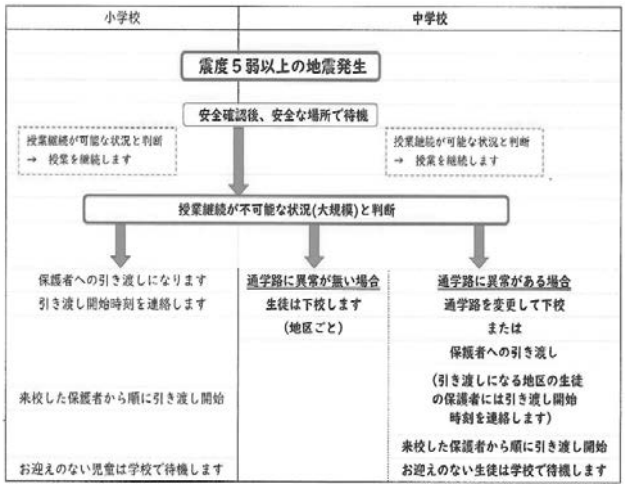
２年生の保健体育の授業で消防署の職員が指導し、心肺蘇生やAEDの使用ができるようにした。同時に養護教諭と保健体育科教員が三角巾を用いた体験を取り入れながら応急手当について指導した。

（３）福祉体験学習

１年生の総合的な学習の時間で、手話、点字、ガイドヘルプ、車いす体験を行う。生徒自身が体験することで障がいのある人が、普段の生活でどのような課題があるのかを知る。

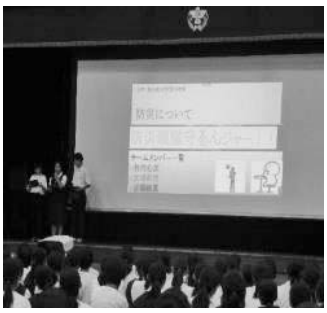
（4）小中合同引き渡し訓練

大規模地震対応として白岡市では、震度５弱以上の地震が発生した場合以下の対応になっている。



同じ校区内の白岡南小学校と合同で行い対応方法を周知するとともに、行政区長が訓練の様子を見守る。訓練では学校にきょうだいがいる中学生は小学校に向かい、きょうだいがいない中学生は、小学校時の通学班を使って、一斉下校を行っている。

（5）災害時の共助を学ぶ防災学習



１年生の総合的な学習の時間に福祉体験学習も行っており、車いすを利用する人がいた場合の配慮することや、視覚に障害がある人への配慮点などを踏まえながら、「中学校は災害時に避難所になるが中学生にできることは？」を学習班で話し合いながら、Google slide にまとめ発表した。

（6）自然災害を想定した避難訓練

白岡市では市の防災無線を使ってＪアラート訓練や緊急地震速報訓練を不定期に開催している。

訓練を繰り返すことで教師から指示しなくても身を守る安全な行動をとれるようになった。また毎学期初めは、休み時間に緊急地震速報訓練を行ったり、教師がいない場合の訓練や、実際にけが人や負傷者がでた場合の訓練も行っている。

（7）不審者対応訓練

久喜警察署員をお招きし、不審者が侵入してきた場合の安全確保、職員の対応、緊急の場合の校内放送を確認した。生徒指導部の職員が、さすまたの使い方の研修を行った。

（8）防災倉庫見学

市役所職員を招聘し、校地内に設置されている防災倉庫にどんなものが、どのくらい備蓄されているかを確認することで防災意識を高めている。また白岡市の防災マップを見たり、市の防災についての取組の説明を聞く。

６　成果と課題（○成果　●課題）

○学校・家庭・地域が連携した防災教育には、災害時の対応力を強化し、地域全体の防災意識を高められた。

○防災について生涯に渡って学んでいけるようにするために、自ら課題を発見し、調べ、結果をまとめ、発表する。

●防災教育において、中学生が身につけるべき防災知識は何か、どのような内容をどのような順番で教えるか、さらに研究を続ける必要がある。

6　ICT 活用教育支援

小学校

1　児童が学びあう活動を充実させるための ICT 活用の在り方
～主体的・対話的で深い学びの実現に向けて～……入間市立東町小学校… 162

2　互いに認め合い、高め合う楽しい学級づくり
～学級経営において、効果的なノートパソコン（タブレット）の活用～……本庄市立金屋小学校… 164

3　21世紀をたくましく生き抜く豊かな人間性と国際社会に貢献しうる実践力を身に付けた児童の育成
～ＩＣＴを活用した授業改善と働き方改革を通して～……加須市立北川辺西小学校… 166

4　「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実
～リーディング DX スクール事業の取組を通して～……幸手市立行幸小学校… 168

5　「わかった」「できた」を実感させる学習指導の充実
～ ICT のよさを生かし学び合う授業を通して～ ……三郷市立立花小学校… 170

中学校

1　デジタル技術を活用し、笑顔あふれる「VIVA スクール」構想の研究
～ＩＣＴ環境の充実を通して～……嵐山町立菅谷中学校… 172

特別支援学校

1　いわゆる「超重症児」への教材の個別最適化
～ＡＩを活用し、マイコンをプログラムすることでごくわずかな表出を
大きなアクションに変換する装置の開発と実践～……埼玉県立川島ひばりが丘特別支援学校… 174

2　生体電位信号を活用した重度重複障害生徒（訪問教育）への授業実践と日常生活への般化……埼玉県立宮代特別支援学校… 176

児童が学びあう活動を充実させるためのICT活用の在り方
～主体的・対話的で深い学びの実現に向けて～

入間市立東町小学校
校長　野　口　正　孝

１　はじめに

本校は、昭和56年に、近隣小学校の適正化のための新設校として開校し、現在まで44年の歴史と伝統を育んできた。近隣には入間彩の森公園があり、豊かな自然を感じられる環境で、現在17学級、456名の児童が学んでいる。

学校教育目標は、「自ら学ぶ子、心豊かな子、考える子」であり、学校長の目指す学校像、「子どももおとなも元気いっぱい東町小」と関連付けながら教職員一丸となって指導にあたっている。

２　主題設定の理由

本校は、令和４・５年と入間市教育委員会の委嘱を受け、体育科の授業改善に取り組んできた。令和６年度は、その研究を土台とし、学びあいを軸とした算数科の研究に取り組んできた。また、本市では１人１台iPadが配布され、ICT環境としては整っている反面、その活用方法については教員の力量によって差が生じたり、研修を重ねたりする必要があった。そのため、「児童が学びあう活用を充実させるためのICT活用の在り方」を研究主題とし、本研究を進めてきた。

３　研究の取り組みについて

（１）学校研究の取り組みとICT活用

本校では、今年度算数科の研究に取り組んでいる。研究主題を「主体的に学び、表現する児童の育成」とし、学びあいを軸とした授業改善に取り組んできた。その中でも自己表現の手段としてのICT活用、そして、意見交流のためのツールとしてICTを活用してきた。

令和６年度は、指導者を招聘し、研究授業を実施した。

①全体研修　２年生　三角形と四角形

タブレットを操作し、図形を仲間わけしたり、教室内で見つけた三角形や四角形を写真に記録したりして、クイズを作ったりした。

色板を三角形と四角形に仲間分けしよう！

教室の中で、たくさん三角形・四角形を見つけたよ！

②中学年ブロック研修　３年生　小数

２．８について多様な見方を考える。ベネッセのオクリンクプラスを活用し、数直線を児童のタブレットに送って見方を考えさせたり、自分の考えと似ているものにグッドマークを送ってリアクションしたりした。

２．８を色々な見方で考えよう。数直線を使ってね！

クラス全員の考えが一度に全て見られるね！

③高学年ブロック研修　５年生

授業の終末には、必ず振り返りをしている。その際、

オクリンクプラスを活用し、毎時間の振り返りを積み重ねていく。そうすることで、前回の授業と比較した振り返りをしたり、次時につながるような振り返りをしたりする児童が増えてきた。

うさぎ小屋の混み具合を調べよう。どちらが混んでいるのかな？

振り返りを毎時間積み重ね、評価しています。

（2）小中合同研修での ICT 活用研修

小学校教員と、中学校教員がそれぞれ得意な分野を担当し、本市で使っているミライシードプラスの使用について小中職員で情報を共有し、９年間を見通した ICT 教育の充実を図った。

小中の教員がお互いの ICT 情報を学びあう研修。

（3）定期的な ICT 活用研修

情報主任を中心とし、月に１，２回程度、放課後の短い時間を活用した計画的研修を実施した。時間が限られているからこそ、焦点化した研修を実施することができ、授業でも活用できる内容に絞ることができた。

様々な教科で、ICT 活用。教師の技術・児童の技術 UP！

（4）デジタル教科書の活用

本校では、すべての学年の教科書をタブレット端末で管理し、見られるようにしている。また、使用法についても短時間のショート研修を実施した。算数・国語・道徳でどのような場面で活用できるかを研修した。

（5）職員会議資料の電子化

今まで紙で印刷していた資料を全てタブレット端末で見られるように変更した。資料印刷の手間や、紙代、インク代を考えると大幅に業務改善をすることができ、ICT 活用という側面だけでなく、予算削減、働き方改革の面でも効果があった。

（6）日報システムの電子化

日報は、日々の連絡を毎日印刷し、職員に配布していたが、こちらもタブレット端末で見られるようにしたことで、業務効率改善だけでなく、職員の打ち合わせ時間を短縮できた。

４　成果と課題

○オクリンクを使い、自分の考えを学級全体で共有することができ、多様な意見交流をすることができた。

○デジタル教科書を活用することにより、児童にとって視覚的に分かりやすい授業展開を実施することができた。

○若手に ICT 研修を定期的に実施したことで、ベテラン教員の技術を若手へと継承し、授業改善につながった。

○職員会議資料を電子化し、タブレット端末でも見られるようにしたことで、働き方改革につながった。

●教科書、職員会議資料、日報といったすべての情報がタブレットに集約された反面、タブレットの取り扱いには以前よりも厳重に扱う必要がある。

●職員、児童の ICT 活用能力にはまだ個人差があり、研修を活用しながら今後も計画的研修を計画する必要がある。

●定期的なアップデートが必要だったり、インターネット環境にいつでも接続できなかったりするなど時折、弊害があることがある。

●情報モラル教育の充実

互いに認め合い、高め合う楽しい学級づくり
～学級経営において、効果的なノートパソコン（タブレット）の活用～

本庄市立金屋小学校
校長　中　田　　守

１　はじめに

本庄市では、学力の総合的な向上や不登校いじめなど生徒指導上の課題を根本的に解決するため、Web-QU を実施して、その結果をもとに学校生活の基盤となる学級づくりに力を入れている。

本校では、昨年４月より横浜国立大学の藤原寿幸准教授の指導の下、研究主題「『学びを深め、自ら課題に挑戦する児童の育成』～互いに認め合い、高め合う楽しい学級づくりを目指して～」という研究主題を設定し、学級力の向上を目指し、学級力向上プロジェクトという活動に全職員が取り組んできている。この取り組みの中で、学級力とは、「学び合う仲間としての学級をよりよくするために、子どもたちが常に支え合って目標にチャレンジし、友達との豊かな対話を創造して、規則を守り安心できる環境のもとで協調的な関係を作り出そうとする力」ということを全職員が共通認識して学級会活動を核に取り組んでいる。

また本校で取り組んでいる学級力向上プロジェクトとは、子どもたち自身が学級力を向上させるためのアンケートを実施してクラスの実態を客観的にとらえ、その診断結果を基にしてクラス全員で学級力向上のための取り組みを実践しようというプロジェクト活動である。具体的には①児童による学級力の自己評価アンケート（学級力アンケート）②アンケート結果（学級力レーダーチャート）を基にして話し合うスマイルタイム（スマイル会議＝学級会活動）、そして③学級力向上のために子どもたちが主体的に取り組む具体的な活動（スマイル・アクション）という３つの取り組みを PDCA サイクルに基づいて行っていく学級会活動である。

２　研究主題設定理由

本校の児童は、素直で明るく、活発である。４月の頃は、自分をうまく表現できない児童もいたが、当番活動や委員会活動、たてわり班のリーダー、そして学校行事を通して、自信がつき前に出て意見を発表したり、みんなを引っ張ったりできるようになってきている。しかし、自分の好きなことや、やりたいことが優先で、やるべきことや当番のしごと等後回しにしたり、常に学級の一員という意識をもって授業や活動に取り組んだりすることに課題がある。また、本校では、「一人一台端末の活用（GIGA スクール構想）」で、授業中における活用の習慣化は、ほぼ達成できたが、教育の根幹である「学級力」向上に向けた取組については、まだまだ不十分である。そこで今年度は「学級経営」を主軸に置き、効果的なＩＣＴの活用の研究を通して、職員・児童双方の情報活用能力の向上を目的に、研究主題「『互いに認め合い、高め合う楽しい学級づくり』～学級経営において、効果的なノートパソコン（タブレット）の活用～」を設定した。

３　研究仮説

本研究では○自分たちが１、２学期に取り組んできたことを振り返る→○アンケート結果から学級の現状を知る→○今後、個々に取り組むべき具体的な活動（アクション）を決める。この一連の流れの学級活動を通して、学びを深め、自ら課題に挑戦する児童の育成を目指していくことで、互いに認め合い、高め合う楽しい学級づくりに結び付き、ひいては、学級力の向上が達成できると考える。

４　研究内容（具体的な取組）

（１）研究組織

○授業部：誰がどこの部分の授業を行うか話し合う。可能な限り、授業を見合い、研究会で金屋小としてのスマイル会議のもち方を協議する

○環境部：職員室前に研究の流れがわかるような掲示物を作って掲示する。

（２）研究の経過

＜研究推進のための職員研修会＞

①４月５日：第１回職員研修会
　○研究主題の確認（職員で共通理解）
　○今年度の研究の進め方について
　○研究授業の実施（一人１回研究授業実施）
　　＊研修講師：藤原准教授

②５月23日：第２回職員研修会
　○研究の数値目標について

③７月25日：第３回職員研修会

○今後の学級での取り組みについてⅠ

④８月21日：第４回職員研修会

○１学期の取り組みの振り返り

○２学期以降の取り組み

＊研修講師：藤原准教授

⑤11月７日：第５回職員研修会

○これまでの取り組みの振り返り

○今後の取り組み確認

○各部の取り組み内容の確認

○今後の研修会の日程確認等

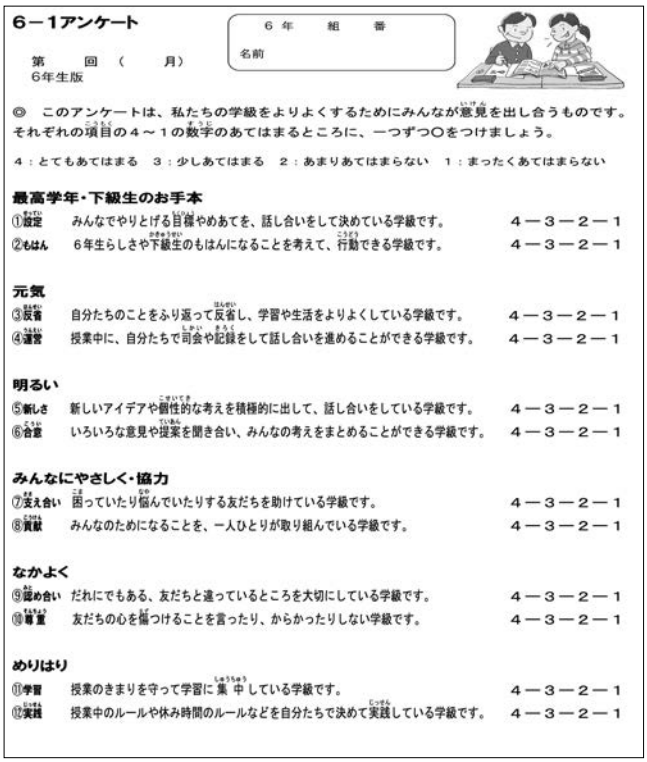
＜研究の具体的な取り組み＞

①学級目標の決定

○学級目標の設定（掲示）

例：６年生の学級目標

②児童アンケートの実施、レーダーチャートの作成



6－1アンケート

6年　組　番

名前

第　回（　月）

6年生版

◎　このアンケートは、私たちの学級をよりよくするためにみんなが意見を出し合うものです。それぞれの項目の４～１の数字のあてはまるところに、一つずつ○をつけましょう。

４：とてもあてはまる　３：少しあてはまる　２：あまりあてはまらない　１：まったくあてはまらない

最高学年・下級生のお手本

①設定　みんなでやりとげる目標やめあてを、話し合いをして決めている学級です。　４－３－２－１

②もはん　６年生らしさや下級生のもはんになることを考えて、行動できる学級です。　４－３－２－１

元気

③反省　自分たちのことをふり返って反省し、学習や生活をよりよくしている学級です。　４－３－２－１

④運営　授業中に、自分たちで司会や記録をして話し合いを進めることができる学級です。　４－３－２－１

明るい

⑤新しさ　新しいアイデアや個性的な考えを積極的に出して、話し合いをしている学級です。　４－３－２－１

⑥合意　いろいろな意見や提案を聞き合い、みんなの考えをまとめることができる学級です。　４－３－２－１

みんなにやさしく・協力

⑦支え合い　困っていたり悩んでいたりする友だちを助けている学級です。　４－３－２－１

⑧貢献　みんなのためになることを、一人ひとりが取り組んでいる学級です。　４－３－２－１

なかよく

⑨認め合い　だれにでもある、友だちと違っているところを大切にしている学級です。　４－３－２－１

⑩尊重　友だちの心を傷つけることを言ったり、からかったりしない学級です。　４－３－２－１

めりはり

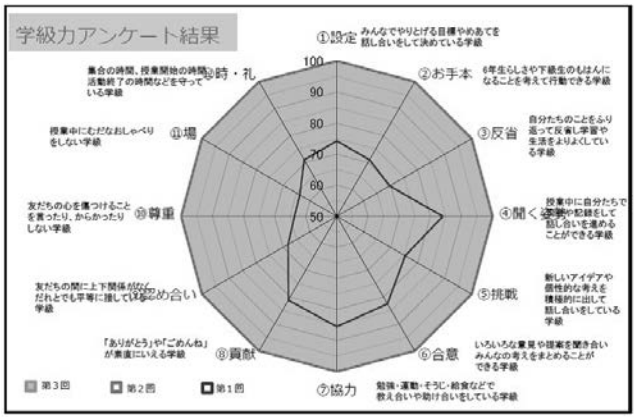
⑪学習　授業のきまりを守って学習に集中している学級です。　４－３－２－１

⑫実践　授業中のルールや休み時間のルールなどを自分たちで決めて実践している学級です。　４－３－２－１

③学級活動（スマイル会議・２時間）

学級会活動では、タブレットを活用して児童中心の活動を進めた。特に、高学年は、担任はファシリテーター役に努めた

○学級会活動（スマイル会議）の具体的内容



【１時間目】レーダーチャート分析

○個人で①よいところベスト２、②課題のあるところ２つを書く。

悪いところ探しにはしない。

理由もきちんと考えさせる。

○グループで交流する。

【２時間目】アクションをきめる。

○アクションカード６枚程度選び、印刷（グループ分）しておく（担任事前準備）。

パワポ版もあります。題名等変更してください。

オリジナルで作成した方いたら教えてください。

○グループでやりたいアクションを考える。

例：タブレットを活用しての学級会活動

５　成果と課題（○成果　●課題）

○それぞれのタブレットを活用したため、学級目標を常に意識して言動をとる姿がところどころに見られた。各クラスの目標として意味あるものとなった。

○学級会活動（スマイル会議）など、子ども自身がクラスの現状やこれからについて考える機会が増え、学級への所属意識が育まれつつある。

●特別支援学級での学級会活動（スマイル会議）への取り組み。

●授業の共有、担任外の先生方の関わり方。

（△アクションカードの効果的な取り組み方）

●研究推進に当たって、すべての学級会活動においてのタブレットの効果的な活用の方法

21世紀をたくましく生き抜く豊かな人間性と国際社会に貢献しうる実践力を身に付けた児童の育成
～ＩＣＴを活用した授業改善と働き方改革を通して～

加須市立北川辺西小学校
校長　加　藤　吉　彦

１　はじめに

本校は、明治６年「麦倉学校」として創立され、今年度で152年目となる長い歴史と伝統のある学校である。利根川と渡良瀬川に囲まれ田園地帯が広がり、学区の北部には渡良瀬遊水地がある自然豊かな環境で、地域や保護者の方々の温かいご協力、ご支援を受けながら、教育活動を進めている。

児童数は158名、通常学級６学級、特別支援学級２学級の小規模校である。学校教育目標「進んで学ぶ子」「思いやりのある子」「たくましい子」の育成と、地域の偉人田中正造翁の「教をは　おさな心におさむべし老て我身の罪に悔るな」を教育活動の指針として掲げ、「子供たちによりよく生きていける力を育成」することを目指している。

２　研究主題設定理由

ＧＩＧＡスクール構想に基づき、本校においても、一人一台端末が整備され５年目となる。その間、児童を取り巻くＩＣＴ環境は急速に普及・発展してきた。将来の予測が困難な時代を生きる子供達には、あふれる情報の中から必要な情報、何が重要かを主体的に考え、見出した情報を活用しながら新たな価値を創造していくことが求められている。そこで、児童に必要な力を育成するために、ＩＣＴを活用した授業改善と、ＩＣＴを活用した働き方改革の実践を進めていく。

３　具体的な取組

（1）ＩＣＴを活用した授業

①Ｂｅｎｅｓｓｅ「ミライシード」の活用

本市で一斉に導入されているミライシードのオクリンクを、様々な教科で活用している。児童は、カードに考えを表現し、担任に提出する手順に慣れてきた。また、自分の提出した意見と友達が提出した意見を比べることで学びを深めている。

○国語・物語文において場面ごとの登場人物の心情を表現する「心情メーター」

・自分の考えをボードに表現し、大型モニターに提示することで友達と考えを比べる

○図工で作った作品をカメラで撮影し、オクリンクでカードにして提出

・完成するまで毎時間撮影しておくと、時系列で児童の活動を見取ることができる

○振り返りの記録を書きため、個人内の考えの変化を追う。

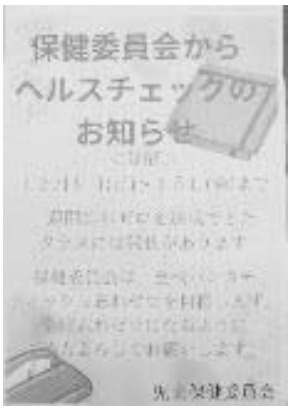
ミライシード内にあるＡＩドリル「ドリルパーク」を活用し、授業の終末における適用問題として配信したり、宿題として配信したりしている。教師用ページでは児童の進度や正答率等の状況が把握できるため、個に応じた指導に役立てることができ、励ます要因にもなる。また、単元のまとめの段階で習熟を図るために活用したり、基礎・基本の定着を図るために前学年の問題に戻って学び直しをしたりしている。

②「Ｃａｎｖａ」の活用

「ミライシード」同様、オンラインヴィジュアルツールキット「Ｃａｎｖａ」を市で導入し、活用している。社会科新聞や、児童委員会で全校に呼びか

けるポスター作成などに役立てている。

○社会・単元のまとめ新聞



○委員会活動で作成したポスター

③ Google スライドの活用

社会科や総合的な学習の時間に調べ学習を行い、プレゼンテーションとしてまとめたものを授業参観や加須市環境フォーラムで発表する際に活用した。

（２）校務効率化

校務において、Google アプリを活用しデジタル化を図る。また、データを共有し、共同編集ができるよさを利用して即時、データに残している。

・年間、月間、週行事予定と学校日誌、職員室内の連絡ボードを連動させデータ化

2024 / 11 / 7 (木)	日番：折原　ゆかり
朝の活動	チャレンジタイム
行事	BU３校時３年　国語 あいさつ運動１・６年生 委員会 第２回学校評議員　８：４０　正進さんの部屋 打ち合わせ　１５：２０ 研修　指導案検討　木村教諭
出張	令和７年度当初人事に係る意向調査 ９：２０　加須市役所　校長　加藤　直彦
年休など	育　休　事務主事　平　山　美　咲 産　休　教　諭　米　澤　敦　司（後３時間３０分）

2024 / 11 / 8 (金)	日番：木村　南
朝の活動	朝清掃
行事	BU３校時４年　国語 あいさつ運動３・４年生 安全点検日　市内一斉防災訓練　９：３０ ＩＣＴ支援員　小野原さん来校日
出張	
年休など	育　休　事務主事　平　山　美　咲

・職員打ち合わせ、職員会議資料を電子化し職員間で共有、リアルタイムで共同編集

・生徒指導記録、教育相談記録を Google ドキュメント化してクラウド保存

（３）幼保小中の連携

各校長・園長が月に１回、オンライン会議で情報共有を行い、各校の教育活動において連携を図っている。

（４）家庭との連携

保護者連絡アプリを活用し、家庭との連携を図っている。

・学校から送る手紙をデジタル配信

・アンケート、申込書類等を電子化し、フォームで集計

・出欠確認と児童の健康状況を把握する内容を電子化し、紙による出欠確認をなくし、電話対応時間を削減

・メッセージ機能を活用し、担任からの連絡や、保護者・児童の連絡・相談を確認

（５）ＩＣＴ支援員との連携

月２回の来校時に、児童・教職員のＩＣＴ活用支援、児童の学力向上のためのサイト紹介やソフト作成、校務効率化のためのデータ作成等を依頼し、支援していただいた。紹介していただいた中で、ＩＣＴスキルの基本となるタイピング練習サイトやかけ算九九練習用サイトは、児童は非常に意欲を持って取り組んでいる。

４　成果と課題（○成果　●課題）

○児童は入力や操作等、ＩＣＴ活用技能を身に付けてきている。特に中学年以上では、調べたり、まとめたりする力を高めてきている。

○様々なアプリやサイトを知り、表現方法が増えたことによって、児童自身が選択し多様な表現をすることができるようになった。

○校務系のデータは Google アプリで一元化されており、扱いやすく確認も容易である。

○家庭との連携面では、要する時間が削減され、在校時間削減につながっている。

●効率的・効果的な学習指導を行うため、教材の準備や資料作成についての研究を深め、どの単元で活用するか、授業のどの部分で活用するか等、検討を進め、年間指導計画に位置づける必要がある。

●児童個々のＩＣＴ活用技能の差を少なくしていく継続的な取組が必要である。

●情報モラル教育について保護者とも連携を図り、児童に継続的に指導していく必要がある。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実
～リーディングDXスクール事業の取組を通して～

幸手市立行幸小学校
校長　栗　城　敦　志

１　はじめに

本校は、明治６年に創立され、今年で151年目となる歴史と伝統のある学校である。

14学級・258名の児童が保護者や地域の皆様の温かい支援をいただきながら、日々の学習に取り組んでいる。学校教育目標は「自ら学ぶ子・明るくやさしい子・元気にやりぬく子」であり、今年度は「子ども一人一人のよさを見つけ伸ばす教育」の実現に向け、「ともに前へ」をキーワードにしながら、教職員・保護者・地域が一体となった教育を推進している。

教育活動全般においては、令和５年度に「全国健康づくり推進学校優秀校」を受賞した実践を踏まえ、食育・保健指導・安全教育・道徳・特別活動等の更なる推進を図るとともに、児童が自らの成長を実感しながら健康の保持増進と体力向上を図ることができるよう取組を進めている。

また、児童が自ら気づいたり発見したりする中で学ぶことの面白さを感じることができるよう、体験的な活動や外部（地域）人財等を活用した学習を展開するとともに、仲間とともに活動する楽しさや喜びを感じることができるよう、学級や学年・縦割り活動等を計画的に実施し、学びを広げ、深めている。

２　研究主題設定の理由

本校ではこれまで、１人１台端末を利活用したICT教育の推進や、ICT機器を活用した「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善や指導の個別化などを進めてきた。アプリケーションソフトの活用方法について教職員同士で共有したり、ICT教育支援員と連携したりすることにより、本校教職員が積極的にタブレット端末を活用できるようになってきた。また、「デジタルシティズンシップ教育」「PBL（課題解決型学習）」についても、幸手市教育委員会指導主事や幸手市ICT教育専門員と連携しながら積極的に進め、「インターネットの特性や仕組み」「メディアリテラシー」等を深く学ぶとともに、児童が自ら問題を見つけ、その問題を自ら解決する能力を一歩ずつ高めることができた。

しかし、「ICT機器の活用」や「デジタルシティズンシップ教育」「PBL」等の取組状況が学年によって差があることが本校の課題である。今後はICT機器を活用した授業について教職員同士で共有したり、具体的な内容を年間指導計画等に位置付けたりすることで、さらにICT教育を推進していかなければならないと捉えた。

そこで、昨年度まで行ってきた「デジタルシティズンシップ教育」や「PBL」等の取組を継続的に実施するとともに、今年度文部科学省から指定を受けた「リーディングDXスクール事業」の取組を推進していくことで、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を図ることができるよう本主題を設定した。

３　研究仮説について

本研究では、以下のような研究仮説を設定して、日々の授業実践に取り組んだ。

☆研究仮説１
タブレット端末の活用方法について情報教育部を中心に校内研修や授業公開等を行えば、教職員がタブレット端末をより積極的・効果的に活用することができるようになるであろう。

☆研究仮説２
業前活動である「タブレットタイム」や総合的な学習の時間の授業を中心としたPBLを実施すれば、児童のタイピング能力や情報活用能力、問題解決能力等を育成することができるであろう。

４　具体的な取組

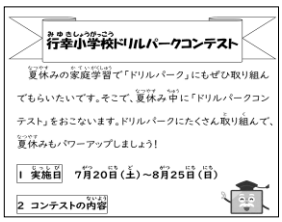
（１）タブレット端末の効果的な活用

今年度は、１年生活「ありがとうがいっぱい」、６年体育「目指せ！マットの達人～安定と美しさを極めよう～」（マット運動）等、様々な授業においてタブレット端末を効果的に活用してきた。また、端末の活用頻度がより高まるように「ICT活用記録表」を作成し、各月の使用状況を可視化できるようにした。

さらに、ICT 教育支援員と連携として、アプリケーションソフトの活用方法について教職員向けの配布資料を作成したり、Teams というメッセージアプリで実践事例の情報共有をしたりして、推進を図った。

（2）ドリルパークコンテストの実施

児童が自分の学習状況に応じた個別学習を意欲的に取り組むことができるように、アプリケーションソフトのドリル機能を活用したコンテストを実施した。この取組により、家庭学習に集中して取り組む児童が増加したとともに、学年ごとのランキングを作成したことで学習意欲の向上にもつなげることができた。



（3）タブレットタイムの実施

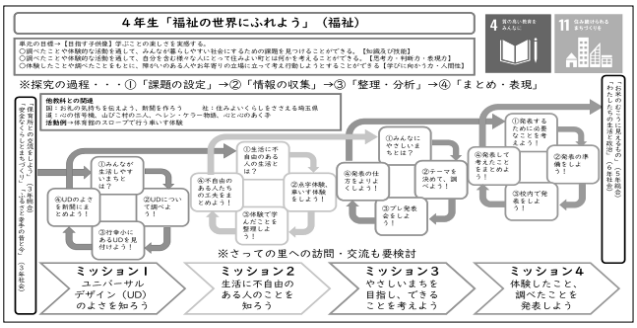
各種調査等のＣＢＴ化や今後、児童にとって必要なスキルの一つとなるタイピング能力を向上させるために、毎週火曜日の業前活動に「タブレットタイム」を実施した。タイピングソフトを活用した活動に取り組むことで、１年生からタイピング操作に慣れることができるよう年間を通して取り組んでいる。

また、本校では、３・４年生が「５分間で50文字入力」、５・６年生が「５分間で200文字入力」というタイピングの目標を設定しているため、今後も自宅への持ち帰りや校内コンテストの実施など、タイピングの力を高める取組を積極的に進めていきたい。

（4）PBL を取り入れた総合的な学習の時間の授業

幸手市 ICT 教育専門員による指導・支援のもと、個別最適な学びと協働的な学びの充実に向け、総合的な学習の時間を中心としてＰＢＬを意識した実践を行ってきた。総合的な学習の時間を探究的な学習とするためには、「①課題の設定」→「②情報の収集」→「③整理・分析」→「④まとめ・表現」の４つの学びのサイクルを進める学習過程が重要であると考えた。

そこで、本校の授業における学びのサイクルをどのように進めていけばよいのかを可視化するために、PBL の視点を踏まえた総合的な学習の時間の年間指導計画を作成した。その際、「単元の目標」「それぞれの探究の過程におけるミッション」「SDGs との関連」「他教科との関連」「他学年の学習との関連」も位置付けた。



また、「社会・総合　地域人材一覧表」を作成した。教職員が情報を共有することにより、地域等の教育力を活かした活動を推進することにつながった。

（5）ICT サロンの実施

５年児童が、「生成 AI の特徴」「危険な ID・パスワード」などのデジタルシティズンシップ教育について、探究的な学びの過程を意識した学習を進めている。「ICT の善き使い手」をテーマに、児童が市民に対して今まで学んできたことの成果を伝え、共有する「ICT サロン」を令和７年２月14日に実施予定である。

（6）教職員による生成ＡＩの活用

今年度は、生成ＡＩパイロット校としての取組も始めた。小学校段階の児童は、発達の段階上、自ら生成ＡＩを操作することは制限されている。そこで、教職員が授業等における資料や教材として活用を行っている。例えば、生成ＡＩが考えた資料と自分たち（児童）の考えを比較・分析したり、特別活動や修学旅行の計画に係る素案にしたりする等の活用をしている。また、行事等の反省や資料の整理等、校務等への活用も徐々に進めている。

５　成果と課題（○成果　●課題）

○タブレットタイムや PBL を意識した授業実践等を積み重ねる中で、児童のタイピング能力や情報活用能力等を高めることができた。

●ICT 機器の活用状況に差がある。「個別最適な学び」と「協働的な学び」の更なる充実を図るため、効果的な活用方法を検討していきたい。

「わかった」「できた」を実感させる学習指導の充実
～ICTのよさを生かし学び合う授業を通して～

三郷市立立花小学校
校長　沼宮内　美香子

１　はじめに

本校は、昭和49年に開校し、本年度に51年目を迎えた。本年度、学校経営方針として、「生命輝かせ、夢いっぱい、笑顔いっぱい、チャレンジ！立花小～本気・根気・元気・勇気・やる気でキラリ輝く立花小～」を掲げ、全職員で日々の教育活動にあたっている。

２　研究主題設定理由

情報化やグローバル化の加速度的な進展など変化の激しい時代において、自らの可能性を発揮し幸福な人生の創り手となるとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、共に協働しながら持続可能な社会の創り手となる人材の育成が一層求められている。このような状況の中で、これからの社会を自ら切り拓いていくことができる資質・能力を、義務教育課程の中でいかに子どもたちに培わせていくことができるかが今日の大きな教育課題となっている。

本校の児童は、教師の指導に一生懸命応え真面目に取り組み、色々なことに興味を持って生活している。その反面、基礎基本の確実な定着、低位層の学力の底上げを図ることが課題となっている。また、自分の考えを伝えたり、発表したりするなど、表現することを苦手と感じている児童が多い。

そこで本校では、「主体的、対話的で深い学び」の実現に向け、ICTを効果的に活用した授業改善を行うことで、児童に「わかった」「できた」を実感させていきたい。以上の理由から本主題を設定した。

３　研究仮説

（１）児童の問いや思いを引き出す導入を工夫し、課題を明確にした授業を展開すれば、自ら主体的に学ぶ子に育つだろう。

（２）自分の考えを友達の考えと比較しながら聞き、自分の考えを広げ深められるような学び合いができれば、意欲的に学ぶ子が育つだろう。

（３）自己肯定感や相手を思いやる気持ちを育成し、最後までやり抜くことができるような指導を継続すれば、目指す児童像の基盤を育てることができるだろう。

以上の３つの仮説を立て、その仮説を達成するための重要項目として、授業における効果的なICT活用とICT活用スキルの育成、プログラミング教育の実践を設定した。

４　研究内容（具体的な取組）

（１）授業における効果的なICT活用

①指導案にてICT活用を行う場面の明確化

指導案の本時の展開の中にICTを活用する場面を明記するように、全職員で共通理解を図った。各授業において、どの場面で、どのような意図でＩＣＴを活用するのか職員一人一人が考察することによって、効果的にＩＣＴ活用し、授業力の向上を図ることができた。

本校の研究発表会での指導案集のQRコード

②ICT実践事例集の作成

より効果的なICT活用を目指すために、各教師が行ってきた実践をＡ４一枚の報告書として作成し、事例を取りため、よりよいものになるようにブラッシュアップしている。

実践事例集のQRコード

③教職員のICT活用研修の充実

本校では、全教員がICT・タブレットを授業等で活用できるように校内研修で年度当初に各ソフトウェアの使い方について校内研修で研修主任を中心に職員が講師となり研修を行った。その後、授業、集会、校内の児童発表等に活かした。他にもデジタル教科書を校内研修で周知したことで、どのクラスも授業で積極的に活用している。また、本年度はICT支援員を講師として校内研修を行っていただき、ICT・タブレットの活用の幅を広げた。その他にも校外から指導者をお呼びし「Zoom」を使ったオンライン研修を行う等、外部研修も積極的に取り入れた。

（2）ＩＣＴ活用スキルの育成

①タブレット活用スキル年間計画の作成

ICTを活用する上で身に付けておきたい活用スキルを各学年で決め、系統的に学ぶことができるように全職員に周知している。

②立花小学校情報活用能力　チャレンジリストの作成

タブレット活用スキル年間計画でも計画していた力が身に付いているのか確認するためにも、立花小学校情報活用能力チャレンジリストのチェックを定期的に行っている。低・中・高学年で分けることによって、２年間で計画的に情報活能力が育成できるようにしている。

（3）プログラミング教育の充実

①段階的なプログラミング教育の実施

低学年では、ビスケットを扱い、感覚的にプログラミングに親しみ、中学年では、Mbotやマイクロビットを教材として扱い、具体物操作を通してプログラミングの基礎を学び、高学年では、スクラッチを教材として扱い、ゲーム作りを通して論理的思考力の育成を図った。

【Mbotを活用したロボットダンス】

②小高連携授業（プログラミング）

埼玉県立三郷工業技術高等学校と連携し、毎年５年生を対象に小高連携授業を行っている。小学生の学びの実態を踏まえ、児童に適した教材を高校生に作っていただき、授業では、その教材を使いながらプログラミングの仕方を高校生に教わり、専門的にプログラミングを学ぶことができている。

【高校生に作っていただいたロボットカー、設計から製作まで全て高校生が担当】

マイクロビットを教材として扱い、無線機能を活用し、高校生に教わりながら、プログラムすることでラジコン体験を行った。

５　成果と課題（○成果　●課題）

○ICT活用の日常化を図ることができた。

○児童がプログラミング体験を楽しみながら行い、物事を順序だてて考え、試行錯誤しながら物事を成し遂げる姿が見られた。

○ICT研修、ICTを有効に使える教科や単元を意識して教材研究することで、より課題に迫る授業を展開することができた。

●学力テストの結果から、個々に学力で伸び悩んでいる児童、基礎基本のより一層の定着を図っていくことが必要である。

●タブレットやICT活用が進むほど、情報モラル教育の充実が必要である。

●児童の発達段階、教科の特性を生かしたICT活用を進めていくために、今後一層の教師の学びや情報交換、共有、蓄積を進めていく必要がある。

６　おわりに

令和の日本型教育を推し進めていくために、効果的なICT活用は必要不可欠である。今後も本校の教職員一同で力を合わせ、研究を深めていきたい。

参考資料：本校の研究紀要

デジタル技術を活用し、笑顔あふれる「VIVA スクール」構想の研究
～ＩＣＴ環境の充実を通して～

嵐山町立菅谷中学校
校長　西　川　光　治

１　本校の概要

本校の学校教育目標は「自ら考え判断し、正しい行動のできる生徒」であり、生徒の主体性をさらに伸ばすための教育活動を心がけている。また、小学校が隣接しており、ほぼすべての児童がそのまま中学校に入学する。そのため、すでに人間関係等ができあがっている状態でもある。

全校生徒が約200人ということもあり、同級生のつながりだけでなく先輩や後輩などの異学年や先生たちと交流する機会も多い。

２　生徒や学校の実態

令和６年度の埼玉県学力学習状況調査の結果において、全学年を通じて学習方略における「作業方略」の割合が県平均を大きく上回っている。一方で「認知的方略」には課題があった。このことから、学習において与えられたものはしっかりとこなすが、さらに深めようとする姿勢は低いことがわかる。

一方で、生活アンケートによる「学校は楽しいですか」という質問に対して、毎月平均90％を超えており学校生活におおむね満足している様子もうかがえる。

しかし、長期欠席の生徒や教室で授業を受けられない生徒が多いことが喫緊の課題でもある。ただ、小学校からのつながりによって、行事等で集団の中に入っても受け入れる体制はあり、そういった生徒も学校とのつながりを求めている節がある。

このような学校の状況を鑑みて、ICT を活用した実践を通して生徒の特長を生かしつつ、人とのつながりを密にすることを目指した。

３　研究仮説

⑴得意なことを生かせる環境を整えることで自己有用感や自己肯定感を育めるだろう。
⑵学校での取組を積極的に発信することで生徒や保護者の肯定感を高められるだろう。

４　活動組織

（１）SugaTuber

・デジタル操作を得意とする生徒集団
・年度当初に募集をし、興味があれば随時参加可能
・YouTube のライブ配信を実施
・デジカメやビデオカメラによる撮影
・映像の編集

（２）生徒会

・本部をはじめとした各種委員会
・データのやり取りはタブレットを活用
・校則の見直しなども実施
・デジタル意見箱の活用

（３）職員

・各種便りのデジタル配信
・ホームページによる学校教育活動の紹介
・ＱＲコードによる意見受付

５　取組事例

（１）YouTube のライブ配信

文化祭や合唱祭などでは発表の様子を YouTube でライブ配信を行った。その際に SugaTuber が配線や機器の準備、当日の撮影、配信をすべて担った。

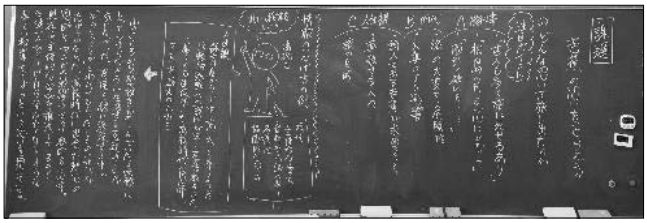
【行事での配信の様子】

（2）オンライン授業

欠席者や早退者のためにオンライン授業配信を行っている。これにより、長期欠席をしている生徒も授業を受けることができる。また、状況に応じて双方向のやり取りをすることで、学校と自宅という異なる場所においても意見交換をすることができる。

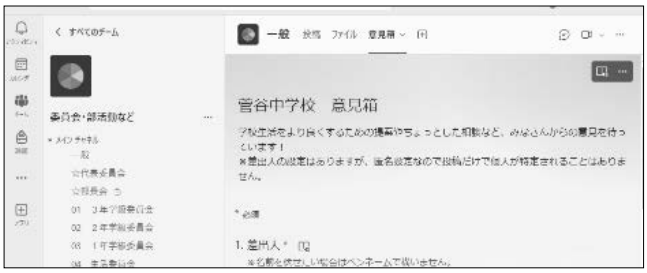
（3）板書撮影

一部の教科では授業おわりに板書を撮影し、生徒との共有アプリに画像を投稿している。それによって当日欠席した生徒もノートを作成することができたり、テスト前に見直すことができたりする。



（4）デジタル意見箱

学校生活に対する様々な意見を、いつでも思いついたときに登校できるようタブレット上に入力フォームを設置している。



（5）拡大代表委員会

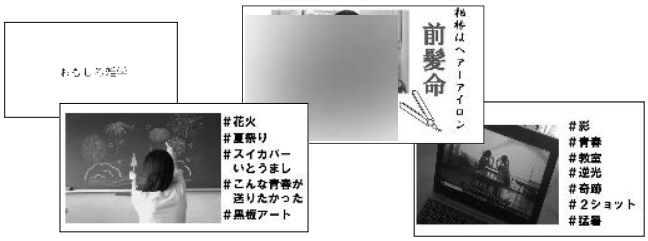
意見箱に登校された内容や生活アンケートで出た意見等をもとに、校則の見直しを図る拡大代表委員会を実施している。複数の意見をまとめたり共有したりするためにタブレットを活用している。OneNote の機能を使った。

（6）便りのバックナンバー

昨今のペーパーレス化に伴い、本校でも紙媒体による文書の配布が少なくなった。デジタル配信をすることによる手軽さはメリットであるが、過去のものをすぐには見られないという指摘もある。そこで、デジタル配布文書の中にリンクを埋め込み、そこをクリックすることで過去の関連する資料が見られるようにした。

（7）モニター映像

生徒が通る廊下にモニターを設置しており、日替わりで様々な映像や写真を流している。その内容を SugaTuber が編集したり授業で作成したりした。



6　成果と課題

○デジタル機器の操作に長けた生徒を「SugaTuber」として認知させることで、所属している生徒たちの自己肯定感が強くなった。

○デジタルが苦手な生徒にとっては同年代からのサポートがあることに心強さを感じていた。

○技能特化による存在感を学校として見いだすことで、イラストや文字などの他ジャンルにおける自らの価値に気づく生徒も増えた。

○教員と生徒、学校と家庭などのつながりをより強化することができた。

○11月の段階での生活アンケートにおいても「学校が楽しい」と回答した生徒は92％以上いた。

▲デジタル技術を使うことに意識が傾いてしまい、効果的な活用につながらなかったところもある。

▲全職員、全生徒が活動に関わっているわけではないので、取組の温度差が生まれてしまっている。

▲個人情報保護の観点から活動が制限されてしまうこともある。

いわゆる「超重症児※」への教材の個別最適化
～ AI を活用し、マイコンをプログラムすることでごくわずかな表出を大きなアクションに変換する装置の開発と実践～

※医療的ケアを必要とする等、身体面・認知面に重度の障害をもつ児童生徒を指す

埼玉県立川島ひばりが丘特別支援学校
校長　原　子　一　彦

1　はじめに

本校は埼玉県西部に位置し、開校25年目を迎える肢体不自由特別支援学校である。令和６年４月現在、小学部43名、中学部25名、高等部33名、訪問教育部32名の計133名の児童生徒が在籍しており、うち28名が学校での医療的ケアを必要としている（以下、「医ケア児」と表記）。

2　教育実践報告

本報告は、重度の障害のある児童生徒に対して、AI とマイコンを活用した教材の個別最適化を図り、わずかな意思表示や身体の動きを、より大きな活動へと展開させる実践について報告するものである。特に、児童生徒一人一人の実態に応じた入力インターフェースの工夫と、それを活用した具体的な実践事例を中心に述べる。近年、AI を活用したテクノロジーの活用は急速に進展しており、本実践は肢体不自由特別支援教育でのその具体的な展開例として位置付けられる。

2.1　学校全体での取り組み

2.1.1　PTA との連携による実践

文化祭における取り組みとして、重度障害のある児童生徒でも参加できる催し物の開発要請を PTA から受けた。この要請に応えるため、サーボモータ制御のくじ引きマシーンを開発することとした。開発にあたっては、多様な入力インターフェースに対応できるようジャック変換機能を実装し、ビッグスイッチや棒スイッチなど、児童生徒の身体状況に応じた操作方法を選択できるシステムとした。

特筆すべき点として、AI を活用して200回程度の試行で１等から４等までがほぼ均等に出現するアルゴリズムを実装したことが挙げられる。これにより、確率的な公平性を担保しながら、児童生徒が楽しめる仕組みを構築することができた。この取り組みは文化祭において大きな盛り上がりを見せ、重度障害のある児童生徒の積極的な参加を促すことができた。参加者からも「子どもが主体的に参加できる機会となった」という好評価を得ることができた。

2.1.2　支援籍学習における活用

開発した教材を小学部６年児童の支援籍学習での交流活動にも活用した。特に小学校高学年においては、身体能力差や生活経験の差が顕著になり、交流活動の選定が困難になる傾向がある。本教材は、偶然性を含んだ公平な活動機会を提供することで、児童間の自然な交流を促進する効果があった。また、教材を介した関わりが、児童間のコミュニケーションの架け橋となり、相互理解を深める機会となった。

2.1.3　地域との連携実践

学校と地域の連携活動として、近隣保育園との牛乳パック回収活動を展開した。本校の特別支援コーディネーターからの「子どもたちに楽しく回収活動に取り組んでほしい」という依頼を受け、AI を活用したインタラクティブな回収ボックスを開発した。システムの特徴として、レーダーセンサーによる接近検知機能、イルミネーションによる視覚的誘導、そして牛乳パック投入時の占い機能を実装した。占いの内容は約３週間で更新される仕組みとし、継続的な興味関心を維持できるよう工夫した。AI を活用することで、子どもの接近を正確に検知し、適切なタイミングでイルミネーションによる誘導を行うことが可能となった。この取り組みは保育園でも好評を博し、園長先生による体験や園児への紹介が行われた。また、学校体験や文化祭の一般来場者なども楽しむことができ、地域交流の架け橋として機能している。

2.1.4　全校研修

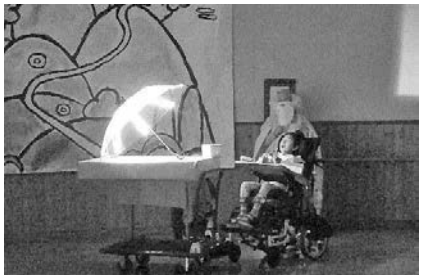
生成 AI の有料版を情報教育部長が３か月間試用し、その経験を基に10月初旬、教室や職員室での具体的な

活用事例を交えた全校研修を実施した。これにより、生成 AI の活用の可能性を全校へと発信した。

2.2　個別の実践事例

2.2.1　医ケア児の花火打ち上げ教材開発

脳性麻痺による四肢麻痺があり、腕から先の動きに限られ、特に中指の動きが自発的に出すことのできるA君に対し、３軸センサーを用いた教材を開発した。センサーは、x、y、z 軸の平均角度が10度変化した際に、放射状のシリアル LED による花火表現と「ドン」という音響効果を連動させる仕組みとした。この取り組みにより、A君は文化祭において小さな働きかけで花火を打ち上げることができ、多くの来場者から称賛を受けた。これは、A君の自己効力感を高める重要な機会となり、その後の学習意欲の向上にもつながった。



2.2.2　医ケア児レインスティック演奏の教材開発

Aさんの別の取り組みとして、同様のセンサーを使用し、入力ごとにレインスティックがサーボモータによって反転する教材を開発した。継続的な取り組みにより、Aさんは自身の働きかけとサーボモータ反転の因果関係を理解し、表情豊かに演奏することができるようになった。

2.2.3　進行性難病のある児童の移動支援教材開発

脊髄小脳変性症により、徐々に運動機能の制約が増えていくBさんに対し、電動車いすへの移行時期に合わせて教材開発を行った。Bさんの「１人で旅をしたい」という願いを実現するため、電動車いすにウィンカーシステムを実装した。システムは、右折・左折・バックの各動作に対して、シーケンシャル点灯とスピーカーによるアナウンスを連動させる仕組みとした。この取り組みにより、Bさんは休日も学校に来たいと言うほど学校生活を満喫し、廊下ですれ違う人々との自発的なコミュニケーションを重ねることができた。

2.2.4　医ケア児の体育活動支援

脳性麻痺による四肢麻痺があり、足の骨が折れやすいため固定具を付けているCさんに対し、全方向回転スクーターボードを開発した。目の動きや指先の動きで気持ちの変化を伝えることのできるCさんに対し、身体全体を使う体育活動の機会を提供することを目指した。開発した教材は、レーダーセンサーで児童の接近を感知すると大型扇風機が回転し、ライトが点灯する仕組みとした。特に、レーダーセンサーの感度調整には苦心し、AI を活用して１秒間に５回の計測を行い、その平均値で閾値を設定するプログラムを実装した。これにより、安定した動作検知が可能となった。

2.2.5　人工呼吸器使用児童の感覚複線化教材の開発

常時人工呼吸器を使用し、自発的な外界への働きかけを読み取りづらいDさんに対し、多感覚からのフィードバックを重視した教材を開発した。視覚・聴覚以外の感覚からも、自身の働きかけによる変化を感じられることをねらいとした。

具体的には、押しボタンスイッチを押すとリレーを経由して10秒間、コンセントに接続したブロアーが作動する仕組みを実装した。AI との対話を通じて安全性を確保しながら、Dさんの微細な動きを大きな環境変化へとつなげることができた。

３　まとめと展望

本実践を通じて、重度障害のある児童生徒の微細な意思表示や動きを、テクノロジーを活用して拡張することで、より豊かな教育活動への参加が可能となることが示された。特に AI の活用により、センサーの最適化やプログラムの効率化が実現し、より個別の児童生徒、個別の場面にマッチした教材開発が可能となった。今後も児童生徒一人一人の可能性を最大限に引き出す教育実践を継続的に展開していきたい。

生体電位信号を活用した重度重複障害生徒（訪問教育）への授業実践と日常生活への般化

埼玉県立宮代特別支援学校
校長　池　田　　宏

１　はじめに

昨今の肢体不自由児の世界で、子どもたちの実態と世に出回っている「スイッチ（入力装置とコンテンツ)」を照らし合わせてみると、子どもたちができることは格段に増えている。どんなに重度障害を抱えていても１つの入力装置で拾える「意思」があれば、様々な活動ができるのである。しかしどうしても、言語やボディランゲージでコミュニケーションをとれる子どもたちとそうでない子どもたちの間には大きな壁がある。授業を行う際にも同様に授業の内容に差が出る。これは特別支援学校では実態に応じた指導を行っているので、当然と言えば当然である。しかし、この差を埋めるまでいかないが後者の授業レベルを引き上げるものとして障害が重度であればあるほどＩＣＴ（スイッチ含む）の活用が有効であると考える。今回の実践で生徒が示してくれた反応は本人の意思として捉えるに足りるものであった。この実践例が広く認知され、表出に課題を抱えている生徒に少しでも活動の幅に希望がみえれば幸いと考える。

２　研究の目的

今年度より、私は情報専任として配置され、ＩＣＴを活用した授業・支援を教員の依頼を受けて実践することが多くなった。個人的な目標ではあるが、「重度の生徒ほど１人１スイッチ（入力装置)」を掲げ指導に当たっている。スイッチは10数種類の中から適切な形のものを提示している。スイッチが決まれば、後は何をフィードバックとして返すか、どんな活動に替えるかはコンテンツ次第である。これはアイディア次第では無限に存在する。スイッチ教材の多くを作成・改造する際に、乾電池やコンセントを扱う機器を改造することが多々ある。それらを扱うには接続に慣れた教員であれば難なく準備物を揃えることができるであろうが、多くの教員にとっては難しく感じる。それらの接続をより簡潔に（無線化等)、することで子どもたちの姿勢にあった場所へのフィードバックが可能になり、学習効果が高まる。学習内容によってコンテンツ作りをしていくことで、動きの少ない子どもたちでも多くの活動をすることができるということを発信したい。もう一つの目的として、コミュニケーションについて問題提起をしていきたい。一般人が言うコミュニケーションとはどのようなものか。身体に障害があり言語（手話やボディランゲージ含む）で行うことのできない意思発信はコミュニケーションとは言えないのか。というのも障害が重度の方のスイッチほど高価なものが多い。それらを意思伝達装置として機器の補助支給対象として認められることは自治体によっては難しい現実がある。未だ自治体により基準も様々で、質問に「はい」「いいえ」に答えられるといった言語化されたコミュニケーションの物差しで判断されることが多い。特別支援学校の中ではコミュニケーションとされてきたものが学校を出るとそうではなくなるのである。そうではなく新しい意思伝達のスタンダードの声を上げていきたい。意思を実生活の一事象として具現化することで意思伝達に課題があると思われていた方々も「できる」ことを実証し、スイッチの必要性を訴えていく必要がある。

３　研究の内容・方法・結果

高等部２年生の訪問教育での体育の授業の一場面である。本生徒（Ｎさん）は出生時に脳死状態にあると医師から言われ、その後17歳になる今も常時、様々な医療機器をつけ、家族や支援員の生活介護を受けながら生活をしている生徒である。家庭でＣｙｂｅｒＤｙｎｅ社の生体電位スイッチＣｉｙｎ®を関係機関から借りていて持っていた。身体の部位で初対面の私が明らかにここは動いていると自信を持って言える部位はなかったが、Ｃｉｙｎ®をつけることで生体電位を確認することができていた。母親からの助言を受けながら右腕前腕に電極を貼ると心拍や呼吸と連動していない不規則なタイミングで出る波を確認できた。またそれは呼びかけや問いかけのタイミングで出ることも多くあった。過去に呼びかけに対しての反応を端末のディスプレイ上で確認したことはあるが、コンテンツに接続して何か活動に替えたことはなかった。そこで太鼓叩き機に接続して教員の演奏に合わせてＣｙｉｎ®の

操作でタンブリンを叩いた。（図１）すると、サビに近づくと意図した波が多くなる反応が見られた。この信号を活かせれば多くの活動を設定できることに気づき、体育の授業で野球を設定した。自分の意図したタイミングで投球できるようにピッチングマシーンを改造した。（３．５mmモノラルボックスを装着）しかしＣｙｉｎ®の機能にラッチ＆タイマー機能はなくショットの信号のみであった。そこでＣｙｉｎ®から３．５mmのモノラル出力でＫＭＥ（KOSEN-Multidevice Endpoint）と接続をし、Ｍａｂｅｅｅモードのタイマー機能を活用し一信号で一球投げることのできる６秒で設定した。ピッチングマシーンにはＭａｂｅｅｅを挿入し接続をした。（図２）本人の姿勢・呼吸器等の機器の関係上マシーン本体や打者の方を見ることが難しいため、ノートＰＣにウェブカメラを接続しカメラ機能を使って画面が見られるように設定した。（図３）カメラにはマシーンと打者が一直線上に並ぶように配置をした。なるべく本人の頭上に球を打ち返すようにし、ピッチングマシーンの音と画面での出来事、飛んでくる打球（ピンポン玉）をフィードバックとして返した。初めはピッチングマシーンの音に驚く様子があり（異変を感じるとＳＰＯ$_2$アラームを鳴らす）信号も１分間に２、３回程度であった。それでもしばらく活動を続け、投げる→打つ（空振りでも反応を示す）を繰り返していくと１分間に10回以上信号を送ることができるようになった。投球モーションと次の信号が重なってしまうこともあったが、自分のタイミングで投球を開始しているように感じた。このことから徐々に因果関係を理解し、信号を送ることで外界に起こる変化を捉え、アクションを起こす頻度を上げた。また、この時の母親、担任、情報専任の歓声や壁に球が当たる音等が作り出す空気も本人に伝わったように感じた。

図１

図２

図３

ピッチングマシーンに限らずではあるがＣｙｉｎ®での活動の後は本人が意識しているからか、汗をかく様子が多くみられ、母親からは「疲れた様子が見られる」との意見もいただいた。このことから、今回の活動は本人が意図的に自分のタイミングでスイッチ操作を行って授業で活動することができたと捉えられる。

４　考察

子ども視点からすると単純にワイヤレスで動くものを見ること、聞くこと、動くことは面白い。自分のアクションで外界に変化が起こる様子は飽きるまで何度も見たいものである。特に、自発的に外界にアクションを起こす経験が少ない肢体不自由の子どもたちにとっては魅力的に映る。その「やりたい」気持ちを「できる」に変えていくために、簡単に失敗しない活動を与えていくことが必要である。まずはどんな小さな動きでも、この世の中にあるスイッチから実態に応じたスイッチを見つけ、わかりやすいフィードバックから因果関係をつかませる。そこからはじまるやりとりから、コミュニケーションが広がる。肢体不自由の程度が重度な方ほど映像や音で完結するのでなく、実世界に変化を起こすコンテンツが有効であると考える。今回の事例ではスイッチ操作で、野球アプリで完結させる方法も考えられるが、授業・意思伝達としてはもの足りない。実世界で担任、家族等を巻き込みピッチング・バッティングすることで歓声が起こり、ボールが飛び、場合によっては家具に当たるなどのハプニングも起こる。それらを踏まえた空気というのは何ものにも代え難いものがある。いままで自己発信的なものを表出することが難しいと思われてきた方々が、できる動作で反応や変化を具現化することで「見る目」が変わるのである。近い存在であればあるほどその瞬間は感動的であり、未来への希望が持てる瞬間でもある。１つのアクションにコンテンツを変えながら意味づけをしていくことが、子ども達のコミュニケーション能力を向上させていくとともに、周りの環境を変える力を養うために行うべき指導の一つであると考えている。また今回、熊本高専より開発途上のＫＭＥという機器を借りて実践を行った。ＩＣＴ環境の構築には資金面での課題もあるため、学校は研究機関と連携を図りながら、より質の高い教育を進めていく必要がある。このように社会を巻き込んでいくことが、いつか意思伝達やコミュニケーションのあり方への新たな理解へ繋がることを強く望む。

令和６年度
教育研究助成事業（学校対象）募集要項

１　令和６年度　学校課題研究助成事業について……180

２　令和６年度　環境教育支援事業について……182

３　令和６年度　国際理解教育支援事業について……183

４　令和６年度　キャリア教育支援事業について……184

５　令和６年度　防災教育支援事業について……185

６　令和６年度　ICT 活用教育支援事業について……186

令和６年度　学校課題研究助成事業

１　趣　　旨

本県の学校における教育実践を奨励するために、教育上有意義な研究・実践に取り組んでいる学校を対象に、申請に基づき審査・選考の上、助成金を贈呈します。

本事業は、教育の充実・発展に意欲的に取り組まれる学校を積極的に支援して、学校教育の振興に寄与することを目的とします。

２　申請要件

以下の**ア**、**イ**、**ウ**のいずれか１つに該当する学校を対象とします。

ア　上記１の趣旨に沿って、学校独自のテーマを設定し、研究・実践を行う学校

イ　文部科学省、県教育委員会、市町村教育委員会の研究委嘱を受けて、研究・実践を行う学校

ウ　当支部が発行した**「研究・実践成果報告集」**を参考にして研究テーマを設定し、研究・実践を行う学校（平成24年度～令和５年度までに刊行された**「研究・実践成果報告集１～12」**に掲載された学校の教育実践を活用して自校の課題等に応じた研究・実践に作り替えようとする学校）

なお、「環境教育支援事業」・「国際理解教育支援事業」・「キャリア教育支援事業」・「防災教育支援事業」・「ICT活用教育支援事業」への申請と重複することは可としますが、申請事業数は、２つまでとします。同一テーマ・内容での申請はできません。必ず別テーマ・内容で申請ください。

※令和５年度に「学校課題研究助成事業」で助成を受けた学校も申請を可とします。その場合は、前年度の実践をより充実・発展させた内容であることとします。

３　申請手続

別紙**「助成申請書」**に、**「活動計画書」**（所定様式）及び振込先金融機関通帳のコピーを添付して提出してください。**振込口座は、必ず学校名の口座を設定してください。ＰＴＡや後援会、個人名の口座は不可とします。なお、「助成金の使途」について、具体的な内容を報告していただきます。「助成申請書」、「活動計画書」は、当支部 HP に圧縮データ（zip ファイル）となっておりますので、デスクトップ等にダウンロードして作成ください。**

４　申請期間

令和６年４月５日（金）～ **令和６年５月31日（金）当支部必着（厳守）**

５　提出方法

郵送もしくは宅配便による。※当支部への持参はご遠慮ください。
（受領の問い合わせには対応できませんので、ご心配な場合は簡易書留もしくは特定記録郵便等をご利用ください。）

６　提 出 先

〒330-0063　さいたま市浦和区高砂３－12－24
公益財団法人　日本教育公務員弘済会埼玉支部　教育研究助成係
https://www.kyoko.or.jp/　　電話：048－822－7554（直通）

７　審査・選考及び助成

（１）提出された**「助成申請書」**及び**「活動計画書」**により、当支部の教育振興事業選考委員会が６月下旬に審査・選考を行います。**なお、「助成申請書」、「活動計画書」については、「記入例」（Ｐ32～33）を基に作成ください。**

（２）選考基準
「令和６年度　教育研究助成事業に関する選考基準・審査基準について」（Ｐ35）を基に審査・選考します。

（３）審査・選考の上、**10万円を５校程度、６万円を30校程度、４万円を600校程度、３万円を450校程度、計1085校程度に研究助成金**を10月下旬に助成します。

（４）助成が決定した学校には、参事及び当支部が指定した職員が７月中旬から決定通知書をお届けします。
（５）助成が決定した学校には、当支部の事業等について説明する機会を設定していただくようご協力をお願いします。

８　助成を受けた学校の義務（報告）

（１）助成を受けた学校は、研究・実践活動の成果を、**「活動成果報告書」**（所定様式）に研究・実践活動の集録等の資料を添えてご報告いただきます。**その際、「助成金の使途」についても具体的に報告していただきます。「活動成果報告書」は、当支部 HP に圧縮データ（zip ファイル）となっておりますので、デスクトップ等にダウンロードして作成してください。**
（２）**提出期日　令和７年２月28日（金）当支部必着（厳守）**
「活動成果報告書」の提出が無い場合には、令和７年度のすべての教育研究助成事業に申請できないこともあります。
（３）提出された**「活動計画書」**、**「活動成果報告書」**等は、当支部が公表できるものとします。

９　そ の 他

（１）個人情報の取扱いについて
①助成申請書等に記入された個人情報は、選考及び選考結果の通知のために使用します。
②助成が決定した場合は、助成申請書に記入された助成対象団体の団体名、助成対象テーマ及び助成金額や贈呈式等の模様を、ホームページ、広報紙等で公表することがあります。
（２）助成の対象とならない経費について
①講師への手土産、内部講師への謝金、スタッフの人件費等
ただし、外部講師への謝金は支出可とします。
②教師専用として利用するパソコン、プリンター、タブレット端末等汎用性のある機器の購入
ただし、助成額の範囲内で、教育研究活動の教材・教具に使用される場合に限り、汎用性のある機器等（パソコン、プリンター、タブレット端末等）は支出可とします。
③懇親会時の飲食費等
ただし、研究活動に直接関わる昼食時の飲食費並びに少額の物品購入費や消耗品費（用紙代や文房具等）は、必要最小限度として認めます。
④研究活動と直接関わりのない旅費・交通費
ただし、外部講師の交通費や当該学校（団体）の研究活動と直接関わる場合の旅費・交通費は支出可とします（全国大会への参加旅費も支出可）。
⑤研究活動との関連が希薄な講習会費・会議室使用料・物品購入費等
（３）領収書の保管のお願い
助成金を使用する際は、必ず領収書を取り、１年間保管してください。
（領収書の日付はその年度内とし、その翌年度末まで保管してください）
（４）その他注意事項
①提出された書類等は返却しません。
②助成申請書等の内容について、面談や問い合わせを行うことがあります。
③万一、故意の虚偽記載や研究倫理上の問題等が認められた場合は、当該申請は無効とし、以降の申請は受け付けられません。
④選考結果の情報及び採否の理由についての問い合わせには回答しません。
⑤助成が決定した事業については、研究活動の進捗を確認することがあります。
⑥助成後、対象外費用を使用した場合や、提出書類（助成申請書や助成後に提出する成果報告書等）に不備・不正等があった場合は、助成金を返金していただくことがあります。
⑦各学校等において、論文等により助成事業の成果を発表する場合には、当支部から助成を受けて行った研究の成果であることを、次の（例）のように記載していただくようお願いします。
（例）「本研究にあたり、公益財団法人　日本教育公務員弘済会埼玉支部から令和６年度教育研究助成事業の助成金の贈呈を受けました。」

令和６年度　環境教育支援事業

１　趣　　旨

近年、地球温暖化の中、自然環境汚染が進み、ゴミ問題や大気汚染、海洋汚染、プラスチックゴミによる海洋生物の被害、森林伐採・砂漠化などの多くの地球規模の環境問題が生じています。

そのような中、2015年（平成27年）９月、国連サミットにおいて、「SDGs（持続可能な開発目標）」が国際社会共通の目標として採択され、2030年までに達成すべき17の目標が示されました。地球の危機とも言える現実に直面して、限りある資源、失われていく自然、絶滅の危機にある動植物を守り、自然災害を引き起こす気候変動、失われる森林や海洋汚染などを防ぐため、全世界が協力して問題解決に取り組む行動を起こすことが求められています。

このことを踏まえ、学校教育においても、持続可能な社会の構築という視点からこれまでの環境教育を捉えなおし、SDGs の実現を目指し、持続可能な開発のための教育（ESD）が多くの学校で行われ、具体的な取組が見られるようになってきています。

そこで、SDGs の視点なども生かしながら、環境教育や自然体験活動等に関する研究・実践活動を、家庭・地域などの協力を得て、継続的かつ積極的に行っており、その活動が今後の教育の充実・発展に特に期待できる学校を支援し、更なる教育の振興に寄与することを目的とします。

２　申請要件

１の趣旨に沿って、環境教育に関する研究・実践を行っている学校を対象とします。

「学校課題研究助成事業」・「国際理解教育支援事業」・「キャリア教育支援事業」・「防災教育支援事業」・「ICT活用教育支援事業」への申請と重複することは可としますが、申請可能な事業数は２つまでとします。同一テーマ・内容での申請はできません。必ず別テーマ・内容で申請してください。

なお、令和５年度に「環境教育支援事業」で助成を受けた学校も申請を可とします。その場合は、前年度の実践をより充実・発展させた内容であることとします。

３　申請手続

別紙**「助成申請書」**に、**「活動計画書」**（所定様式）及び振込先金融機関通帳のコピー（P37参照）を添付して提出してください。**振込口座は、必ず学校名の口座を設定してください。ＰＴＡや後援会、個人名の口座は不可とします。なお、「助成金の使途」について、具体的な内容を報告していただきます。「助成申請書」、「活動計画書」は、当支部 HP に圧縮データ（zip ファイル）となっておりますので、デスクトップ等にダウンロードして作成ください。**

４　申請期間

令和６年４月５日（金）～ **令和６年５月31日（金）当支部必着（厳守）**

５　提出方法

郵送もしくは宅配便による。※当支部への持参はご遠慮ください。
（受領の問い合わせには対応できませんので、ご心配な場合は簡易書留もしくは特定記録郵便等をご利用ください。）

６　提 出 先

〒330-0063　さいたま市浦和区高砂３－12－24
公益財団法人　日本教育公務員弘済会埼玉支部　教育研究助成係
https://www.kyoko.or.jp/　　電話：048－822－7554（直通）

７　審査・選考及び助成

（１）提出された**「助成申請書」**及び**「活動計画書」**により、当支部の教育振興事業選考委員会が６月下旬に審査・選考を行います。**なお、「助成申請書」、「活動計画書」については、「記入例」（Ｐ32～33）を基に作成ください。**

（２）選考基準
「令和６年度　教育研究助成事業に関する選考基準・審査基準について」（Ｐ35）を基に審査・選考します。

（３）審査・選考の上、**10万円を３校程度、６万円を20校程度、４万円を232校程度、３万円を200校程度、計455校程度に研究助成金**を10月下旬に助成します。

（４）助成が決定した学校には、参事及び当支部が指定した職員が７月中旬から決定通知書をお届けします。

（５）助成が決定した学校には、当支部の事業等について説明する機会を設定していただくようご協力をお願いします。

「８　助成を受けた学校の義務（報告）」～「９　その他」については「学校課題研究助成事業」に同じ

令和６年度　国際理解教育支援事業

１　趣　　旨

今日、経済、社会、文化などあらゆる分野でグローバル化が進み、相互依存関係が一層深まる中、国際社会に生きるというグローバルな視野を持つとともに、相互理解・交流を図り、「多文化共生の理念」を育んでいくことは重要な課題の一つとなっています。

このような中にあって、新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、国際交流・国際理解教育の計画・実施等に大きな影響を与えました。その経験を踏まえ、多くの学校では、国際交流や国際理解教育に関してオンラインを活用するなど、工夫を凝らした新たな取組が積極的に行われるようになってきています。

今後、学校教育においては、国際社会の中で日本人としての自覚を持ち、主体的に生きていく上で必要な資質や能力を育成するための国際理解教育の必要性はますます高まることでしょう。

そこで、国際交流・国際理解教育の推進に関して、オンラインによる交流等も含めて、その研究・実践が、児童生徒の異文化理解、コミュニケーション能力の育成、グローバルな人材の育成などに成果を上げている学校を支援し、国際理解教育の更なる振興に寄与することを目的とします。

２　申請要件

１の趣旨に沿って、計画的に研究・実践している学校を対象とします。

「学校課題研究助成事業」・「環境教育支援事業」・「キャリア教育支援事業」・「防災教育支援事業」・「ICT 活用教育支援事業」の申請と重複することは可としますが、申請可能な事業数は２つまでとします。同一テーマ・内容での申請はできません。必ず別テーマ・内容で申請してください。

なお、令和５年度に「国際理解教育支援事業」で助成を受けた学校も申請を可とします。その場合は、前年度の実践をより充実・発展させた内容であることとします。

３　申請手続

別紙**「助成申請書」**に、**「活動計画書」**（所定様式）及び振込先金融機関通帳のコピー（P37参照）を添付して提出してください。**振込口座は、必ず学校名の口座を設定してください。ＰＴＡや後援会、個人名の口座は不可とします。なお、「助成金の使途」について、具体的な内容を報告していただきます。「助成申請書」、「活動計画書」は、当支部 HP に圧縮データ（zip ファイル）となっておりますので、デスクトップ等にダウンロードして作成ください。**

４　申請期間

令和６年４月５日（金）～ **令和６年５月31日（金）当支部必着（厳守）**

５　提出方法

郵送もしくは宅配便による。※当支部への持参はご遠慮ください。
（受領の問い合わせには対応できませんので、ご心配な場合は簡易書留もしくは特定記録郵便等をご利用ください。）

６　提 出 先

〒330-0063　さいたま市浦和区高砂３－12－24
公益財団法人　日本教育公務員弘済会埼玉支部　教育研究助成係
https://www.kyoko.or.jp/　　電話：048－822－7554（直通）

７　審査・選考及び助成

（１）提出された**「助成申請書」**及び**「活動計画書」**により、当支部の教育振興事業選考委員会が６月下旬に審査・選考を行います。**なお、「助成申請書」、「活動計画書」については、「記入例」（Ｐ32～33）を基に作成ください。**

（２）選考基準
「令和６年度　教育研究助成事業に関する選考基準・審査基準について」（Ｐ35）を基に審査・選考します。

（３）審査・選考の上、**10万円を１校程度、６万円を３校程度、４万円を25校程度、３万円を31校程度、計60校程度に研究助成金**を10月下旬に助成します。

（４）助成が決定した学校には、参事及び当支部が指定した職員が７月中旬から決定通知書をお届けします。

（５）助成が決定した学校には、当支部の事業等について説明する機会を設定していただくようご協力をお願いします。

「８　助成を受けた学校の義務（報告）」～「９　その他」については「学校課題研究助成事業」に同じ

令和６年度　キャリア教育支援事業

１　趣　　旨

近年、子どもたちの育つ社会環境の変化に加え、少子高齢化、産業・経済の構造的変化、雇用の多様化・流動化、グローバル化等を背景として、自らの将来を考えるのに役立つ理想とする大人のモデルが見つけにくく、将来に向けた夢が描きにくい時代を迎えているとも言われています。

このような状況を踏まえ、学校においては、児童生徒一人一人の社会的・職業的自立に向け必要な基盤となる能力や態度を育てることを通してキャリア発達を促す、いわゆるキャリア教育を推進する必要があります。

2020（令和２）年度から、「キャリア・パスポート」という、学年を超えて学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりする取組が始まりました。これにより、児童生徒が自身の変容や成長を自己評価できるとともに、教師には、記述内容をもとに対話を通じて児童生徒の成長を促すことが求められています。

そこで、児童生徒が意欲を持って日々の学校生活に取り組み、自己肯定感を高めるとともに、主体的に進路を選択・決定できる能力やしっかりとした勤労観、職業観を身に付け、社会的・職業的に自立していくことができるよう、キャリア教育の推進に積極的に取り組んでいる学校を支援することを目的とします。

２　申請要件

１の趣旨に沿って、計画的に研究・実践している学校を対象とします。

「学校課題研究助成事業」・「環境教育支援事業」・「国際理解教育支援事業」・「防災教育支援事業」・「ICT 活用教育支援事業」への申請と重複することは可としますが、申請可能な事業数は２つまでとします。同一テーマ・内容での申請はできません。必ず別テーマ・内容で申請ください。

なお、令和５年度に「キャリア教育支援事業」で助成を受けた学校も申請を可とします。その場合は、前年度の実践をより充実・発展させた内容であることとします。

３　申請手続

別紙「**助成申請書**」に、「**活動計画書**」（所定様式）及び振込先金融機関通帳のコピー（P37参照）を添付して提出してください。**振込口座は、必ず学校名の口座を設定してください。ＰＴＡや後援会、個人名の口座は不可とします。なお、「助成金の使途」について、具体的な内容を報告していただきます。「助成申請書」、「活動計画書」は、当支部 HP に圧縮データ（zip ファイル）となっておりますので、デスクトップ等にダウンロードして作成ください。**

４　申請期間

令和６年４月５日（金）～ **令和６年５月31日（金）当支部必着（厳守）**

５　提出方法

郵送もしくは宅配便による。※当支部への持参はご遠慮ください。
（受領の問い合わせには対応できませんので、ご心配な場合は簡易書留もしくは特定記録郵便等をご利用ください。）

６　提 出 先

〒330-0063　さいたま市浦和区高砂３－12－24
公益財団法人　日本教育公務員弘済会埼玉支部　教育研究助成係
https://www.kyoko.or.jp/　　電話：048－822－7554（直通）

７　審査・選考及び助成

（１）提出された「**助成申請書**」及び「**活動計画書**」により、当支部の教育振興事業選考委員会が６月下旬に審査・選考を行います。**なお、「助成申請書」、「活動計画書」については、「記入例」（Ｐ32～33）を基に作成ください。**

（２）選考基準
「令和６年度　教育研究助成事業に関する選考基準・審査基準について」（Ｐ35）を基に審査・選考します。

（３）審査・選考の上、**10万円を１校程度、６万円を５校程度、４万円を52校程度、３万円を47校程度、計105校程度に研究助成金**を10月下旬に助成します。

（４）助成が決定した学校には、参事及び当支部が指定した職員が７月中旬から決定通知書をお届けします。

（５）助成が決定した学校には、当支部の事業等について説明する機会を設定していただくようご協力をお願いします。

「８　助成を受けた学校の義務（報告）」～「９　その他」については「学校課題研究助成事業」に同じ

令和６年度　防災教育支援事業

１　趣　　旨

東日本大震災や熊本地震を経て、令和６年１月には能登半島地震も発生し、改めて防災について真剣に考えなければならない時代を迎えています。また、遠くない将来には首都直下型地震、南海トラフ地震などの大規模災害の発生も予測されています。さらに、気候変動等の影響により、豪雨、台風災害などの気象災害の頻発化・激甚化が見られるようになっています。

今日、このような大災害で得た教訓を忘れることなく、学校教育においては、自らの命は自らが守る意識、そのために必要な知識、災害時に率先して避難し、余力があれば周囲の人を助ける主体的な態度を身に付けることは極めて重要であり、防災教育の一層の充実を図る必要があります。

自然災害は、日頃から地域全体で備えをしておく必要があることから、学校、家庭、地域、関係機関等が連携・協働できるよう体制を構築し、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）を導入している場合は、地域と学校の連携・協働を図り、地元自治体との避難所指定の協定締結を進めるとともに、地元住民との合同防災訓練など、地域と一体となった取組を実施することが考えられます。

そこで、家庭や地域、関係機関等と連携して、実践的な防災教育の推進に積極的に取り組んでいる学校を支援することを目的とします。

２　申請要件

１の趣旨に沿って、防災教育に関して実践してきた、またはこれから実践しようとしている学校を対象とします。

「学校課題研究助成事業」・「環境教育支援事業」・「国際理解教育支援事業」・「キャリア教育支援事業」・「ICT活用教育支援事業」の申請と重複することは可としますが、申請可能な事業数は２つまでとします。同一テーマ・内容での申請はできません。必ず別テーマ・内容で申請ください。

なお、令和５年度「防災教育支援事業」で助成を受けた学校も申請を可とします。その場合は、前年度の実践をより充実・発展させた内容であることとします。

３　申請手続

別紙**「助成申請書」**に、**「活動計画書」**（所定様式）及び振込先金融機関通帳のコピー（P37参照）を添付して提出してください。**振込口座は、必ず学校名の口座を設定してください。ＰＴＡや後援会、個人名の口座は不可とします。なお、「助成金の使途」について、具体的な内容を報告していただきます。「助成申請書」、「活動計画書」は、当支部 HP に圧縮データ（zip ファイル）となっておりますので、デスクトップ等にダウンロードして作成ください。**

４　申請期間

令和６年４月５日（金）～ **令和６年５月31日（金）当支部必着（厳守）**

５　提出方法

郵送もしくは宅配便による。※当支部への持参はご遠慮ください。
（受領の問い合わせには対応できませんので、ご心配な場合は簡易書留もしくは特定記録郵便等をご利用ください。）

６　提 出 先

〒330-0063　さいたま市浦和区高砂３－12－24
公益財団法人　日本教育公務員弘済会埼玉支部　教育研究助成係
https://www.kyoko.or.jp/　　電話：048－822－7554（直通）

７　審査・選考及び助成

（１）提出された**「助成申請書」**及び**「活動計画書」**により、当支部の教育振興事業選考委員会が６月下旬に審査・選考を行います。**なお、「助成申請書」、「活動計画書」については、「記入例」（Ｐ32～33）を基に作成ください。**

（２）選考基準
「令和６年度　教育研究助成事業に関する選考基準・審査基準について」（Ｐ35）を基に審査・選考します。

（３）審査・選考の上、**10万円を２校程度、６万円を７校程度、４万円を76校程度、３万円を60校程度、計145校程度に研究助成金**を10月下旬に助成します。

（４）助成が決定した学校には、参事及び当支部が指定した職員が７月中旬から決定通知書をお届けします。

（５）助成が決定した学校には、当支部の事業等について説明する機会を設定していただくようご協力をお願いします。

「８　助成を受けた学校の義務（報告）」～「９　その他」については「学校課題研究助成事業」に同じ

令和６年度　ICT 活用教育支援事業

１　趣　　旨

今日、人工知能（AI）が飛躍的に進歩し続け、更なる情報通信技術（ICT）の発展が予想される時代を迎えています。Society5.0時代を生きる子どもたちにとって、PC 端末は必要不可欠なツールとなり、今や、学校、会社、家庭など、社会のあらゆる場所で ICT の活用が日常的なものとなっています。

そのような中、GIGA スクール構想のもと、学校においては、「１人１台端末」の活用によって、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善など、学習活動の一層の充実が図られています。また、オンライン授業、動画配信、Web 会議システムなど、新たな取組が多くの学校で行われるようになりました。

今後は、従前の対面でのコミュニケーションを通した学習活動に加え、一層 ICT を活用した学習活動によって新たな学びを創造し、子どもたちに「情報活用能力」を身に付けさせることが求められることでしょう。

そこで、ICT 活用教育に関する研究・実践活動に積極的に取り組んでおり、その活動が、今後の教育の充実・発展に向け期待できる学校を支援し、更なる教育の振興に寄与することを目的とします。

２　申請要件

１の趣旨に沿って、計画的に研究し、かつ継続的に実践している学校を対象とします。

「学校課題研究助成事業」・「環境教育支援事業」・「国際理解教育支援事業」・「キャリア教育支援事業」・「防災教育支援事業」の申請と重複することは可としますが、申請可能な事業数は２つまでとします。同一テーマ・内容での申請はできません。必ず別テーマ・内容で申請ください。

なお、令和５年度「ICT 活用教育支援事業」で助成を受けた学校も申請を可とします。その場合は、前年度の実践をより充実・発展させた内容であることとします。

３　申請手続

別紙**「助成申請書」**に、**「活動計画書」**（所定様式）及び振込先金融機関通帳のコピー（P37参照）を添付して提出してください。**振込口座は、必ず学校名の口座を設定してください。ＰＴＡや後援会、個人名の口座は不可とします。なお、「助成金の使途」について、具体的な内容を報告していただきます。「助成申請書」、「活動計画書」は、当支部 HP に圧縮データ（zip ファイル）となっておりますので、デスクトップ等にダウンロードして作成ください。**

４　申請期間

令和６年４月５日（金）～ **令和６年５月31日（金）当支部必着（厳守）**

５　提出方法

郵送もしくは宅配便による。※当支部への持参はご遠慮ください。
（受領の問い合わせには対応できませんので、ご心配な場合は簡易書留もしくは特定記録郵便等をご利用ください。）

６　提 出 先

〒330-0063　さいたま市浦和区高砂３－12－24
公益財団法人　日本教育公務員弘済会埼玉支部　教育研究助成係
https://www.kyoko.or.jp/　　電話：048－822－7554（直通）

７　審査・選考及び助成

（１）提出された**「助成申請書」**及び**「活動計画書」**により、当支部の教育振興事業選考委員会が６月下旬に審査・選考を行います。**なお、「助成申請書」、「活動計画書」については、「記入例」（Ｐ32～33）を基に作成ください。**

（２）選考基準
「令和６年度　教育研究助成事業に関する選考基準・審査基準について」（Ｐ35）を基に審査・選考します。

（３）審査・選考の上、**10万円を４校程度、６万円を18校程度、４万円を180校程度、３万円を168校程度、計370校程度に研究助成金**を10月下旬に助成します。

（４）助成が決定した学校には、参事及び当支部が指定した職員が７月中旬から決定通知書をお届けします。

（５）助成が決定した学校には、当支部の事業等について説明する機会を設定していただくようご協力をお願いします。

「８　助成を受けた学校の義務（報告）」～「９　その他」については「学校課題研究助成事業」に同じ

後　　記

埼玉県内の各学校は、教育活動の充実に向け日々努力を傾注され、多くの成果を上げています。

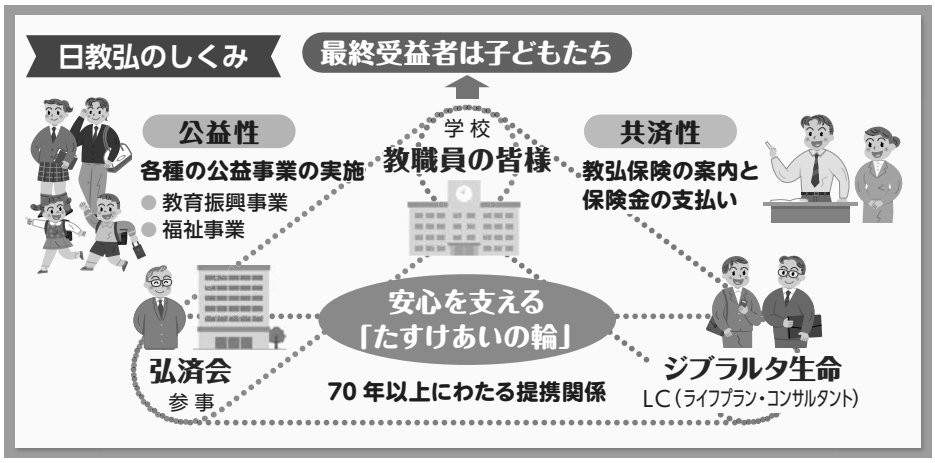
当支部は、永年にわたり学校の教育実践活動を側面から支援するために、教育研究助成事業の充実・拡充に努めてまいりました。近年の取組としては、平成27年度に、創立60周年記念事業として「ICT 活用教育支援事業」を新設し、平成28年度には自然体験活動支援事業を「環境教育支援事業」に統合しました。また、平成29年度からは、学校における優れた教育実践を共有することをねらいとして「学び合い・高め合い」支援事業を新設、令和４年度からは、この「学び合い・高め合い」支援事業を学校研究助成事業に再編・統合し「学校課題研究助成事業」として、教育研究助成事業全体を６つの支援事業にまとめ、一層の充実を図ってきました。

令和６年度も本県教育の振興への寄与を目的として、優れた研究・実践を行う81校の成果報告をまとめ、「研究・実践成果報告集13」として刊行いたします。

刊行にあたり、日々の教育実践でご多用の中、ご報告をまとめていただきました各学校の皆様に深く感謝申し上げます。

※　紙幅の都合上、各校の報告で使われている教育プログラム等の名称・略称については、特に解説を設けてありません。また、引用されている図表が鮮明でないことがあります。
ご容赦いただきますようお願いいたします。

プロモーションビデオを視聴できます。
ぜひアクセスしてみてください!!
二次元コードから埼玉支部の主な活動がご覧になれます。



※弘済会の各種公益事業は、教弘保険の契約者配当金を事業資金として運営されており、本県教育の振興に寄与しています。

研究・実践成果報告集13

令和７年３月１日発行

編集・発行
公益財団法人　日本教育公務員弘済会埼玉支部
さいたま市浦和区高砂３－12－24
電話　048－822－7551（代）

印刷　関東図書株式会社